
姓は篠ノ之 名は.....

御堂 光

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

姓は篠ノ之 名は……

【Nコード】

N9432T

【作者名】

御堂 光

【あらすじ】

見覚えのない女たち。

覚えもない顔立ち。

そしてひどく痩せ衰えた体躯。

そして何よりも小さくなっているとはどういうことか？

何もわからない。IS？ ああそんなものもあつたな、って！

それならばここは？ そして、……お前は誰だ？

というよくある転生もののはず。一応？ 原作知識あり。なのにまったくもって活用されない^^・正確に難がある少しずれた主人公

が織りなす物語とたんと召し上げれ

……え、腹下すって？ ……頑張ってください（笑）

諸注意

他にも連載を抱えているこの身です。更新は不定期になりそうです。

（何を間違ったのか毎日更新とかほざいて実行しています 201

1/06/28現在）

一話一話が短く設定してあります。

後いろいろいなくなったり不遇な扱いを受けているキャラが多数います。多分シャルロット党の皆様は回避推薦。

拙い文章ですが、楽しんでいただけたなら幸いです。

この小説に関して

内容が繰り返されていて読みづらい、という指摘を受けました。まあ、私自身多数の視点による考察というのが大好きなんですよ。同じシーンなのに見る人間によってこうまでも違ってくるのか、って気がしてこの小説でも取り入れているんですけど……。それがテンポの悪化につながっている、と言われて初めて気が付きました。

それでもこのスタイルは変えたくない。そう考えた私は思いつきませんでした。

同じシーンならば、何か印をつけておけばいいじゃないか、と。

それで、試験的にですが同じシーンには をタイトルの横に振らせていただきたいと思います。

私と同じように多人数による考察が好きな人はそのまま読んで。そうでなくテンポを大事にする人は読み飛ばすことができます。

これならばいいかもしれない、というわけで今回の改定です。このように皆様の意見をなるべく取り上げて、この小説をより良いものにしていきたいと思えますので、どうぞご協力のほうをよろしくお願いいたします。

御堂 光

追記！

話がダークすぎるという指摘を受けまして、？マークを装着。ダーク注意報です。

この注意報が発令された場合、苦手な方は読み飛ばしてもらってもかまいません。？注意報が終わった直後の話に、ダイジェストを挿

入します。

語り手はリクエストがあれば！　そうでなければ作者の気分で決定
します。

第一回語り手　KOG会員加入記念として織斑夏織

prologue (前書き)

警告

この小説は著しくキャラ崩壊・原作ブレイク等が見受けられます
それが耐えられない方は、お戻りください
それが良いと思う方だけ、お読みください
誤字脱字等の報告をお願いいたします
感想を頂けると、作者のやる気ゲージがたまります(笑)

2011/08/14 誤字訂正

prologue

始まりは、唐突に。

目の前には、知らない人間が涙をこらえていた。

天井。薄汚れているように見えたのはどうやら錯覚だったようだ。

その証拠に、意識がはっきりしてからはきちんと白く見えている。

此処は、どこだ？

清潔というのが相応しいその場所に、思い当たる節はない。むしろ

こういう場所とつくづく運のない人生だ。

映ったのは一人の女。ぼさぼさの髪の毛を振り乱して、俺に突撃をかましてきた。よけようと試みたが、身体が上手く反応せずによくけた。

おかしい。こんな動作一つでどうにかなるほど軟な体ではなかったはずだ。それに視界が狭い。そして何よりも筋肉量が圧倒的に減っている。

「良かった、良かったよおお！」

相変わらず、女は抱きついて離れない。暑苦しい人間の体温を直に感じながら、俺は呼吸を一つ。むせそうになるのを、必死でこらえた。女というものはなぜか、自分の身だしなみというものに酷くこだわりを見せるのだ。まったく持って理解できないのだが、重いやら暑苦しいやら汗臭いという狂乱し始める。面倒なことこの上なくなるので、一度それを経験してから口には出さないようにしている。

「お前は、誰だ？」

口ずさんだところで、女が硬直した。まるで信じられないといった

顔で、俺を見返している。

そんな顔をされる覚えはない。顔見知りならともかくとして、見覚えは全くもってないのだ、俺には。

垢だらけの手を俺の方に差し向けた。顔が引きつるのを抑えきれない。

「嘘、だよな？」

「全くもって理解できない。そもそもなぜこの場において虚偽申請をしなければならぬ。メリットがない」

その言葉言った瞬間に、首根っこを？まれた。抵抗しようとしたところで、全くもって腕が上がらない。

まるで筋肉がすべて抜け落ちてしまったかのように。

ふざけるな。どれだけ苦労して身体を維持してきたと思っっているんだ。それがなければ、俺は成立しないというのに。

そんな思考の間にも、掴んだ腕はますます力を帯びていく。女の細腕、それも明らかに鍛え上げられていないので大した力ではないのだが、それでも抵抗することが出来ない。

死ぬ。このままでは。

終わる？ 訳の分からぬまま。

もう一度言おう、ふざけるなと。

全くもって役に立たない腕を気合で振りぬく。普段のパーセントにも満たないつたない攻撃になった。

それでも不意を突かれたのか、女はいったん距離を置き身構える。全然なっていない。なっていないのだから、今の俺にとってそれですらも脅威の対象として成立する。

どう乗り切るか？ それを考え始めようとしたその時に、身を割っている人影があった。

「何するの！-」

「何しているんですか！ 落ち着いてください！」

助かった、とは安心できない。今は抑えられているが、いつ解き放たれるかわかったものではない。今にも狂乱した女は振りほどかんとしている。

猶予はない。チャンスは一度きり。

高く盛り上がった寝具と思しき物体から身を投げて、逃走を図るはずだった。

「……くっ」

受け身さえも取れなかった。本当にどれだけ筋力が落ちたのだろうか、一メートルもない落下の衝撃で息が詰まる。

逃げられない。そんな絶体絶命の状況は、一人の乱入者によって終わりを告げた。

「何をしている、束！」

「離してちーちゃん！ その偽物を壊さなきゃ！」

黒髪の、狂乱している女とは明らかに違う、鍛えられている人間。

重心のぶれ方、手にできているタコを見れば剣道か、あるいは剣術を嗜んでいると見て取れる。この騒動以前のおれならば勝つことに造作はないが、今の状態では絶望的状况だ。

そんなちーちゃんと呼ばれた黒髪の女は、狂乱している束と呼ばれた女の襟をつかみ、そのまま壁に押し付けた。見覚えなどないはずなのに、なぜかその女のことを知っているような気がした。

結果的に言えば、黒髪の女　織斑千冬が篠ノ之束と言う人物を鎮静化させた。その後で千冬は俺の身体を持ち上げて（いとも簡単に持ち上げられた。筋肉が落ちていているということはもう確定事項だ）寝台に下した。

「で、一体何があつたんだ？」

「それがね」

とって、束は先程までの経緯を説明している。

終わった途端、千冬表情がきつくなつた。引き締まって、鋭い眼光で俺を睨みつける。

殺気をまとつたその視線は、確かに一般人にとっては恐怖の対象だろう。だから、どうしたと言いたくなる。いくら身体がなまろうと、俺は俺だ。そんなこけおどしに屈する程、平易な人生を送つて来た訳じゃない。

「驚きもしない、か。以前これを見たときは泣き叫んだというのにな」

以前？ その言葉に僅かに引つ掛かりを覚える。面識があるような気はするが、それだけだ。親しい関係だったならば、忘れるはずはない。それが無いということは大した知り合いではなかったのだろう。にも拘らず、千冬その言葉には親しいものに込める、親愛ともいふべき雰囲気を感じた。何故だ？

「そのくらいのこけおどしで、どうして驚く必要がある？」

「……」

千冬は俺の言葉を聞いた途端、口を閉ざした。眼光は相変わらず鋭い。こちらのことを探ろうとしているのだろう。意図が分かっている。

るのに、それをさせてやる義理はない。俺は何の感情も込めずに、ただただ千冬の瞳を見つめ返した。

「駄目だ、さっぱりわからん」

結局、千冬は情報を抜き出すことを諦めたようだった。首を横に振り、隣の束に合図のようなものを送った。

その束は、この世の終わりだと言わんばかりの表情でうなだれた。そんな顔をされたところで、何の感慨ももたらさない。所詮見知らぬ他人でしかないのだ。特別な感情を持ってという方が無理だ。

瞳の奥の光が消えうせた束から目を離すと、千冬は口を真一文字に結び、目を閉ざしていた。

「落ち着いて聞いてほしい」

その口調は柔らかかなもの。登場直後の鋭さや、殺気と当たった時とは全く異なるものだ。以前、と口にしたときの感じた時と似ている。

一体何なんだ？

一代告白をするように、真面目くさった顔で千冬は言い切った。

「お前は、記憶喪失だ」

頭大丈夫か？　なんて思った俺を誰が責められようか？

prologue (後書き)

お疲れ様でした。

何かありましたら作者まで。

第一話（前書き）

中途半端なところで終わってます。

続きは早いうちに更新したい……ですな。

……そして短い……。

2011/08/14 誤字訂正

第一話

織斑千冬は、親友とも呼べる篠ノ之束の弟の法師と目が覚めたと聞いて、急ぎ病院へ駆けつけた。

あれは不幸な出来事だった。皆がそう言うが、あれ以上に仕組まれたものはないだろうと千冬自身は考えている。

そもそも。何故お金の匂いがするわけでもない普通の少年が、誘拐にあったりするのだろうか？ そこからしてまず疑問だ。そして、その少年がかのISなるものの製作者で大天才の篠ノ之束（これに関しては千冬も認めているところなのだが、なぜか納得することが出来ないのはどうしてだろうか？）の弟であったこと。

神のいたずらか、あるいは……。何の根拠もないのでこれ以上ははばかられるのだが、邪推せずにはいられない。法師は見つかつた時には既に心肺停止状態だったのだ。もし発見者に医療の心得がなかつたとしたら、もうこの世にはいなかったらう。そうなつたときの束の反応を考えただけで、千冬の背筋が寒くなる。

何はともあれ実行犯は捉えられて（社会的地位は既に束によってボロボロにされている。社会復帰は不可能なのではと千冬は考える）事件は解決を見た。束が本気になつても背後関係を探ることが出来なかつたのだからまず単独犯とみていいのだが、やはり疑問は募る。そんな考えごとをしていたら、いつの間にか病院に到達した。無意識だつたらしい。あまりの不用心さに呆れながら、病院の自動ドアをくぐつた。

「篠ノ之法師の面会をお願いしたいのだが」

結構すんなりと要求は通つた。ただし目覚めたばかりだからあまり刺激しないようにとくぎを刺されたが。

約半年、法師は目覚めなかつた。原因は全くもって不明。束が泣き

崩れてそれを伝えたのだから、彼女が一番悔しかったのだろう。それを抜きしても、残念だったと言わざるを得なかった。良くできた人間とは程遠いが、法師は活発で割と社交性のある人間だった。見ず知らずの人間に対しても普通に挨拶をこなせていたし、一つ屋根の下で暮らしてもその印象は崩れなかった。目上の人間に敬意を払い、誰とでも仲良くなれた彼は、束だけでなく両親にも愛されていた。

そんな中での、今回の出来事。束は紛らわすように研究に没頭し、両親は明らかに寡黙になった。ひと月前に彼女の母親が体調を崩して入院するなど、いかに彼が篠ノ之家の支えになっていたのかを如実に表した。

元気になっているだろうか。何気なく病棟のドアを開けた千冬の視界に、とんでもない光景が飛び込んできた。

髪を振り乱して暴れる女。判別がつきにくいのが、あれが篠ノ之束だと付き合いの長い千冬の感が告げていた。それを取り押さえるのはこの病院の女性の看護師。必死の形相だが、もう間もなく拘束にも限界だろう。その証拠に顔が紅潮していて、筋肉も痙攣を始めている。そしてその二人の視線をたどっていったところに、人が倒れていた。痩せ衰え、皮と骨しかうかがえなかったが、間違いなく法師だった。目が覚めているのか、うめき声をあげている。

これは一体どういうことだ？ 千冬は混乱した。とりあえず何をしたいのかわからなかったため、看護師を手伝い束を拘束することにした。

これは簡単だった。何せ日頃からほとんど鍛えていない束であるし、それにこここの所の不摂生な生活がそれに拍車をかける形で彼女の身体能力を奪っていった。何の抵抗もなく、千冬に拘束される。

わめき散らしたらないのか、さらに怒鳴り上げる。その光景も稀有名ものだったが、発した言葉が何よりも信じられなかった。

「何をしている？」

「離してちーちゃん！ その偽物を壊さなきゃ！」

偽物？ 壊す？ といったその視線の先には、何とか立ち上がるようにしている法師の姿が。

まさか、と思うが、目が本気である。本気で、法師を殺そうとしている。誰よりも法師を可愛がっていた束その人が。

正気じゃない。こんな状態の人間を解き放つわけにはいかなかった。

「落ち着け、束！」

「離せ！ はなせ！ ハナセ！ あれを、壊すんだ！」

その束を落ち着かせるのに、実に三十分の時間を要した。

「落ち着いたのか、本当に？ 襲い掛かったりしないか、本当に？

一体どうしたというんだ全く、意味が分からないぞ」

愚痴りたくもなる。何せ病院に入ったら親友が暴れていて最愛の弟を殺そうとしていたのだ。訳が分からない。出来の悪い三流ドラマかと本気で疑いたくなるほど、異常な状況だった。

「……大丈夫だよ、ちーちゃん。束さん落ち着いてるから。この通り、ほらね？ だから離して、お願いだから」

点に突き上げた拳はだらりと力なく萎えている。本気で不摂生がたたって筋肉が衰えているらしい。これならばもう一度暴れてもまた押さえつければいいと判断を下して、千冬は恐る恐る束を解放した。解放された束は、地面に崩れ落ちた。この世の終わりだと言わんばかりのその姿勢に、何があったのかを想像することは困難だ。加えて唯一事情を察しているはずの参考人にその事情を窺えないということは何よりの痛手だった。

……何か忘れてる。何だったかと言う前に、目の前の物体が暴れてどっぴりしたかと思っ出した。

法師、倒れたままではないか、と。

急ぎ床に伏せている法師を抱えあがる。軽い。力を碌に入れずとも、簡単に抱え上げることが出来てしまった。酷く痩せ衰えたその身体を見ると、千冬の目頭が熱くなった。

第一話 (後書き)

お疲れ様でした。

何かあれば、作者まで。

第二話（前書き）

千冬さんのターン後編

……そういえばこの人優遇されているなあ、と思う今日のこの頃。

……… パソコンが、不調を訴えています。次回は少し、遅くなる
かもしれません。

2011/06/14 誤字修正

第二話

「で、一体何があつたんだ？」

千冬としては、言動一つとってもブラコンである束がこのような行動をとつたということが信じられなかった。何故、と問いただしたくもなる。普段の彼女であれば絶対に取らない行動であるのは間違いないのだから。

「それがね」

そこから先の束の説明は、到底信じられるものではなかった。

法師が、束のことを忘れている？ そんな馬鹿な、と千冬は笑いだしたくなった。彼も姉と変わらない程のシスコンである。時折何やら束に対してやりにくそうな顔をしていることがあつたが、まず間違ひなくべつたりと彼女に張り付いていた。時折その法師の態度が研究の邪魔になることもあつたが、束もそれを責めることはしなかつた。どころかそんな時には研究を投げ出してまで団欒を過ごしていたはずだ。

冗談だろう？ という言葉は、首を縦に振られたことによつて言うこともできなくなつた。うつむいて暗い顔をしている束を見て、これは重傷だと事態の深刻さを悟る。

どうしたものか。千冬は悩んだ。とりあえず、束を知らないと言い張る法師の観察からすることにした。

浮き上がった肋骨、コケ落ちた頬等見てはいられない部分がたくさんあつた。以前とは比較にならないほどやせこけている。当然か、と一人納得した。何せこの半年の間、彼の命をつないでいたのは点滴のみである。痩せ衰えるのも仕方ないことだろう。

次に、千冬は彼の瞳に注目した。以前遊び半分というよりは少し苛立った時などに千冬が少しばかり殺気を込めてしまうということがよくあった。（主に束の責任）その時に彼はおびえて逃げ出した。そのたびに束に怒られたのだが、（理不尽な話である）今思えばこれは法師の一つの才能だったのではないかと考えられた。以前ならこのようなほんの少しの殺気も察知できたのだが、どうか？

全身に少しばかり、薄い膜のようなイメージの殺気を錬成する。法師の瞳の動向に特に注意を傾けながらも、顔全体にも目を離さない類はひきつっていないか？ 瞳の瞳孔に変化はないか？ 鼻の頭がヒクヒクと動いていないか？ 耳が反応していないか等々。

全く変化は見られなかった。少しも怯えることなく、感情のない瞳を千冬に差し向けるだけ。おかしい。その手ごたえを確かに千冬は感じ取った。

「驚きもしない、か。以前これを見たときには泣き叫んだというのにな」

これで食いついてくるか、と挑発を仕掛ける。彼はなんだかんだ言っつてプライドがそこそこ高かった。馬鹿にされると年相応に言い返すことの気骨くらいはあった。以前のように反応することを期待して、千冬は顔に壮絶な笑みを張りつかせ、殺気も先程とはくらべものにならないくらい張りつめさせた。

期待していたほどの変化はない。せいぜいが、一度大きく目を閉じたくらいか。

その瞳が開いた瞬間、形のよい唇から声が漏れるのを千冬は久しぶりに聞いた。

「それくらいのこけおどしで、どうして驚く必要がある？」

絶句した。言葉を重ねようにも、全くもって音にならなかった。

何を馬鹿なことを、と一蹴されたのだ。なるべく実践を行うように挑んだにもかかわらず。

なれば、と少しでもその考えを探ろうとしたのだが、全くもって上手いかない。相変わらず感情は表に出てこないし、それ以降何かを喋るわけでもない。まったく感情を羽化別に、ただただそこにいるだけ。無言の時が続く。

これは、想像以上に手ごわいぞ。

確信した。自分の拙い交渉術ではこの相手をするのは困難だと。

さて、と千冬は腕を組んで思考する。一体どうしたらいいのか？

この法師は、以前の法師とは別個の個体なのかもしれないという考えが、徐々に形になりつつある。しかしそれはあくまで物語上でよく見かける話であって、まず日常でお目見えする機会はない。本当にそんなことなど起こりうるのだろうか？ なんて考え始めたら、キリがない。

「駄目だ、さっぱりわからん」

情報を抜き出すことが出来ない。よくよく考えてみれば、隣で大人しく座っている人間が出来なかったのだ。何故自分ならできると思ったのだろうか？ なんてことを考えて、そつと溜息を零す。まったくもって話が進まない。ならばどうするか？

相変わらず透明な視線を熱心に向け続けている。ある種情熱的なアピールともいえるかもしれないが、今の千冬にとってはそれ以上に困惑を催すものがなかった。

ええい学校の授業の方がよっぽど平易ではないか！

ここで、難しく考えることを諦めた。何もそう気難しく考える必要はないと何度も自分を言い聞かせ、思いついたことを口にした。

「落ち着いて聞いてほしい」

そつだ。大丈夫だと何度も念押しして、とうとう言葉にした。

「お前は、記憶喪失だ」

返つてきたのは、訝しげな視線と、親友の心配する声だった。

「ちーちゃん。そこまで思い詰めていただなんて。束さん知らなかったよ。ごめんね、気が付いてあげられなくて。大丈夫だよ？ きっと病院に行つて検査してもらえばきちんとした結果がちゃんと出るから」

だから言いたくなかったのに。千冬は怖れていた自体が現実になったことに嘆息し、無言で親友の頭をつかむ。ゴリゴリとなつてはいけない音がするほどに、力を込めた。あと付け加えるのならば、すでに病院にはたどり着いているということくらいか。

「ちーちゃん！ ちーちゃんの愛が痛い！ でも束さんだから、そんなちーちゃんのバイオレンスな愛にも耐えられるのだよわはははは！ って本気で痛いよごめんなさい調子に乗っていましただから離してくださいっ！ 頭割れちゃう大天才篠ノ之束さんの脳みそはみ出しちゃうっ！」

暫くそうして時間をつぶした後、千冬は静かに病室を退出した。そのあとでこつてりと束と一緒に絞られたのは、言うまでもない。

第二話 (後書き)

お疲れ様でした。

アドバイス・感想等ありましたら是非是非気軽に書いていただけ
らと思います。

第三話（前書き）

オリキャラ、登場！

……とまあいつもながらに進みません。ええまったくもって進みません。

……原作いつ入れるのでしょうか……。

2011/06/14 誤字修正

2011/06/30 誤字修正

第三話

織斑夏織は、居候させてもらっている篠ノ之家の一人息子、篠ノ之法師が苦手だった。

苦手、で済んでいるのかどうかは正直に言っただけで自信がなかった。下手をすると嫌いとか、憎いといった方が当てはまってしまうからだ。ではなぜ法師のことをそうまでも厭うのか？

正直に言つと、容姿自体は悪くない。むしろ夏織の理想とする容姿に近いものを持っているのだから、造形では好印象にならないはずがない。

のにもかかわらず、夏織は篠の之法師が苦手である。何故か？ それは彼の根本的な問題が、両親から賜った造形ではなくその中身にあるからに他ならない。

問題はそう、中身である。

ガキ大将という表現がぴたりと合う彼は、同じ家に住んでいる夏織のことを快くは思っていなかったらしい。事あるごとにちよっかいを出された。そのちよっかいというのは初めは夕食のおかずが減っているとかそういうたわいのないものだ。それが一回、二回、三回……と続いていき、だんだん常日頃おこるようなことになった。

それがだんだんエスカレートしていったのは、夏織が小学校にあげるころだっただろうか？

学校で使うものがなくなる、家でお気に入りのものがなくなっている、部屋に置いてあるものの配置が変わっている等々も珍しいとは言えなかったのだ。

あれは性格が悪い。

その記憶はさかのぼること出会いのころ（剣道場で殴り合い。竹刀を使った法師にボロボロにされた）からなのだが、それは年を追うごとにどんどん酷くなっていった。

それでも、夏織は我慢しなくてはならない。そしてそれらの事項を、

篠ノ之家の人や姉である織斑千冬に知られてはならないのだ。

悪いのは篠ノ之家でも、ましてや千冬ですらないのだから。それらの責任はすべて篠ノ之法師一人の責任である。

織斑家の両親がいつの間にかに蒸発してしまったため、織斑家の稼ぎ頭は千冬だけ、ということとなった。当時まだ高校生。遊びたい盛りのはずの一人の高校生に家のことの全てがのしかかったのである。これは彼女がひとりで自分と、そして妹である夏織を養っていかなければいけない、ということを実に示していた。

それに無茶だ、そんなことはさせられない、と待ったをかけて協力を快く申し出てくれたのが篠ノ之家の人たちだ。彼らは織斑家に経済的な援助もさることながら、積極的に家事をこなすという貢献を図ってくれたのだ。夏織が家事を一人でもできるように、とつきつきりで指導してくれたのも彼らだ。夏織が今家事をたいていこなせるといふのは、篠ノ之夫妻のおかげに他ならない。

そんな彼らに、夏織は法師の狂態の実情を伝えるのを忍びな思っただのだ。

いや、それは嘘だ。夏織は自ら否定した。

ようは怖いのだ。否定されるのが。お前は何を言っているんだと家族同然の人たちに言われるという事実が。唯一の肉親として絶大な信頼を寄せてくれていた千冬が自分のことを何か別の生物でも見るような目で見るかもしれないという未来が。

だから、夏織はひたすらに耐えていた。これさえ耐えれば、何の不自由もないと知っていたから。

そんな時に、転機は突然訪れた。

不運な事故で、法師がけがをしたという。

その知らせを聞いて、夏織は不覚にも喜んでしまった。悲しんでいる篠ノ之家の人たちや、姉のいる目の前で。何とかこらえて気づかれるということとはなかったのだが、その事実が著しく夏織を傷つけた。

なんて嫌な人間なのだろう？

自己嫌悪以外、頭をよぎらなかつた。

いくら嫌な奴でも、どんなに最低な人間であろうと、同じ飯を食う以上家族同然の人間だ。そして残念ながら（本当は思いたくもないが）剣道の同門でもある。そんな人間を、ただ”嫌い”だからというだけでなじつたのだ。そしてあるうことか怪我としたという不運を見て、あざ笑つたのだ。

許されるべきことじゃない。夏織は醜い自分を直視していたくなくて閉じこもり、一週間程度体調を崩したということで学校を休んだ。

だが、その後何事もなかつたかのように復調して見せると、どうやら親しい人間がけがをして動揺しているだけらしいと判断されたようで、学校でも家でも特に何を言われる、ということとはなかつた。

夏織は、法師の症状が軽い怪我だと信じて疑わなかつた。せいぜいが一週間程度入院すればまた篠ノ之家に帰っているだろう、と。

一週間がたち、それから二週間、三週間一か月ひと月と時間が経過しても、法師は帰ってこない。

おかしい。よほどの大けがだつたのだろうか？ その事実に至つた夏織はその時点まで関心がなく、篠ノ之夫妻や姉の千冬にまったく病状を尋ねていなかったことに気が付き、慌てて千冬に説明を求めた。

「ん？ …… ああ、法師の病状か」

焦つて早口で訪ねてしまつたのだが、まったくもつて不自然に受け取られるということはなかつた。その事実にあ堵しつつ、夏織は千冬の言葉に耳を傾ける。

病院の医師によると、まったく問題ないくらい回復しているらしい。点滴を受けていることを除けば、健康体なのだからか。

その事実を聞き良かった、と安堵のため息をついた夏織を、千冬は複雑そうな眼で眺めていた。

「どうしたの？」

あまり穏やかでないその視線を感じ取って、夏織は千冬の顔を窺う。何かを決めかねているんだということはすぐに分かった。これでも長い付き合いだ。最近は千冬が忙しい故に会う機会はめっぽう減っているが、小さなころは良く遊んでいてもらっていた記憶が残っている。顔の表情からだいたい感情くらい察するのは訳ない。

「……いや、お前には言っておいたほうがいいか。その状態になつてから、もう三か月にもなる。が、いまだに法師は目を覚ます気配がない」

……え？ という疑問を投げかける夏織の声は掠れた。

その意味を理解して。耳を疑ってしまいたくなる残酷で信じられない事実、耳をふさぎたくなった。

「……最悪、このまま目覚めないなんてこともあるらしい。覚悟しておけ、といわれて束が泣き崩れていたな。本当に、どうしたらいいの……」

だれかウソだといってほしい。夏織はこの時ほど冗談というものを渴望したことはなかった。

第三話（後書き）

お疲れ様でした。

何かあれば、作者まで。

御感想・アドバイス等ありましたら是非！ 書き残していただけたらなと思います。

第四話（前書き）

ちよつとしたNGがついています。

……今更ですけど、この小説ってギャグまったくと言っていいほど見受けられませんよね……。

まあ、そんなわけで今日も更新です。さて、この記録はいつまで続けられるのでしょうか？

2011/07/01

誤字訂正

第四話

そこから、夏織は法師のことを考えずに生きようとした。

学校でもそんなに話題が上がる訳でもなかったし（意外だった。まあ流行り廃りで話題にならなくなったのだろうけれど）、病院に面会しに行くこともしなかった。

怖かったのだ。醜い自分を見せつけられそう。

そこからの夏織の生活は、お世辞にも順調とは言えなかった。

学校から帰ってきて、剣道の一通り型をこなす。夕食を取って風呂に入り、何も考えずに眠りに落ちていく。趣味も、何かを考えることもせず、ただひたすらに無為な時間を過ごした。

そんなある日、千冬が難しい顔で帰宅してきた。そばには古い雑巾のようにくたびれてボロボロになっている法師の姉、束の姿が。

一体何があったのだろうか。気になるけれども、聞かない方がいいと頭が警告の鳴らしている。

夏織はその警告を聞かなかったことにして、姉に尋ねた。

「どうしたの？」

「……いや、どういったものか……」

とりあえず夕食が終わってからということ、千冬たちと夏織はいったん別れた。今は篠ノ之家の大事な食を支える法師の母親が、倒れて緊急入院している。病状は過労らしい。どう見ても法師のことがかかわっていることが明白だった。夏織の胸にとげが刺さったように、ちくりと痛んだ。

その母親の代わりをこなすのが、夏織の役目である。法師の父は剣道に身をささげてきたような人で、家事は全くできない。どこか突き抜けている束も同様。一番戦力的に期待されている千冬は意外に細かいことが苦手、料理するたびに失敗してとうとう諦めてしま

った。夏織にその番が回ってくるのは、必然だったのだ。とりあえず四人分（前も四人分だった。束は母親の料理は口に入れようとしないのに、夏織の料理はなぜか好んで食べたがる。別に美味しいわけでもなんでもないのに、と夏織はその原因を訝しむ）の用意を優先させて、それまでこのことは考えないようにした。

「……」
「……」
「……」

夕食後。早々と姿を奥に消した父親を除き、三人がにらみ合っている。

千冬は威圧感を放って、周りを威圧している。

束は無感動なその瞳に激情を灯らせて。

夏織はその瞳に決意の色を窺わせて。

意味さえ違えど、その瞳は真剣そのもの。

一番先に口を割ったのは、束だった。

「説明してもらつよ、ちーちゃん。なんで邪魔したのかを」

その激情に支配された束を、夏織はいまだかつて見たことがなかった。いつもその瞳に無感動の色を重ねて。そしてときに好奇心でそれを上乗せして。

それが篠ノ之束。子供のような純粹さ・残酷さと常人が思いもよらないことを思いつくその頭脳が同時に存在している、稀代の大天才。そんな束の激しい剣幕に、全くもって千冬は動じていないのだ。夏織はすぐに震えあがったというのに。

「黙れ。夏織が事態を飲み込めていない。初めから説明をするから、

束、まずはその禍々しい剣幕をどうにかしろ。妹が震えている」

「そんなことはどうでもいいんだよ！ だからなんで邪魔をつ！」

風を割く音が、束の顎を捉えた。千冬の左の掌だ。どうしてそうなっているのかはわからないが、割と緩慢なモーションから繰り出された掌は、動作以上に鋭い一撃を生み出して束にぶつかった。案の定、部屋の隅まで飛んでいき（人間が空を飛んだ。これこそが本当のぶつ飛ばすではないだろうかと夏織は現実逃避）壁に激突。

「黙れ」

返ってきたのは、いつも以上に凄みを帯びている千冬。姉の姿であるはずなのに、夏織は戦慄を隠せない。

それ以上、ずるずると壁を這って落ちた束も、そして夏織も何も言えずに、ただ沈黙の時を重ねるだけ。

「私が思うに、だが」

千冬は言葉を区切った。何か言いにくそうにも見えるが、助け舟は出せない。先ほど注意されたばかりだからだ。

束も黙っている。というよりは、ぐったりしているので気絶しているという表現なのが正しい。最もそれくらいで取り乱したりしない。日常の範囲内だ。……誰も顔がにやついているのを注意しないのは、気が付いていないのかそれでいて無視しているのか。……にやついているのは言わずともがな。意外や意外、これが普段のコミュニケーションなのだ。……これって実はおかしいのでは？ と今更ながらに疑問に思わないでもない。

「あれは、法師は、記憶喪失というやつではないだろうか？」

この言葉に、夏織の思考回路が停止した。

記憶喪失。そんなことがありうるのだろうか？ 夏織は漫画やフィクションの世界で生活しているわけではない。きちんとした現実世界に留まっている。そうしつかりということが出来る。

そんな夏織に、ファンタジー用語のようなものを理解しろと言う方が無理だ。普通の人間ならば、まず正気を疑うだろう。

だが、夏織は姉がいきなりそんなに突発的な思考をするタイプではないのを知っている。やや直情的ではあるが、基本的にしつかりとした裏付けを参考に考える、それが織斑千冬という人間だ。

夏織はただ何も言わずに、千冬の目をじつとつかう。千冬は目を逸らさなかった。

「勿論、突飛な思考だということを理解していないわけではない。だが、状況をよく考慮してみると、これが一番しつくりくる考え方だった」

「東さんもかな！ 最初は信じられなかったけど、ちーちゃんが言うことだし！」

「……初めに病院で『病院へいこう』といった奴のセリフとは思えないな。そうは思わないか？ なあ？」

「……ああ！ 東さん、そんな眼力で見つめられるとちーちゃんの子を妊娠しちゃうぞ しちゃうぞ」

その言葉を受けて、

「夏織、くぎバットと縄、それから轡を持ってこい」

千冬の口が、手が無言で物を要求している。だがそんなものが都合よくあるわけがない。そしてそれはむしろ篠ノ之束という人間を喜ばせるだけだ。逆効果にしかない。

「千冬お姉ちゃん」

ただそれだけで意思の疎通は取れたらしい。千冬は束から離れて、一人玄関に向かった。

「あれ？ お仕置きは？ お仕置きは？」

夏織もそのあとを追いかけたので、その場には結局束しか残されていなかった。

「これがホントの放置プレイ！ 寂しい悔しいでも感じちゃう！」

と言っていたかどうかは、定かではない。

今日のNG集

「千冬お姉ちゃん、流石にそれはないから手錠と真剣、それに×××しかない」

スイッチを入れるとくねくねと妙な動きをするその物体をみて、千冬が嘆息した。恥じらいどころか面白がる妹にもう何も言つまいと諦めたのだろう。

「一応聞いておくが、何故×××がある」

「夫婦の寝室のそばに転がってた」

「使用済みかつ！」

慌てて突っ込んだ千冬は、そのまま慌てたふりをして×××を束の口の中に突っ込んだ。突っ込みどころが間違っているという夏織のつぶやきは当然のようにスルーされる。

「ふごー。ふごーふごーふごー！」

「……なんて言っているのかわからないな」

「何この混沌。自分で始めておいていうのもなんだけど」

「そんなものだ。所詮展開が阿呆過ぎてNGにされたのだからな」

「バラしちゃダメでしょ、千冬お姉ちゃん」

「……口調にいつも以上の含みを感じるのは、私だけか？」

第四話（後書き）

お疲れ様でした。

何かありましたら作者まで。

第五話（前書き）

今日もまた頑張って投稿。そして昨日のPV（2011/06/15）が五千を超えていたことに驚愕。……意外に、見ている方多いのですね？

そんな期待を胸に、拙いながらに精いっぱいやらせていただきたいと思っておりますので、どうか生ぬるい目で見てやってください。感想・アドバイス等をお待ちしています！
以上、作者からでした。ではどうぞ。

2011/07/01 誤字訂正

第五話

全生活史健忘。それは自分に関わることを忘却するという。自分の名前さえもわからず、「ここはどこ？私は誰？」という一般的に記憶喪失と呼ばれる状態。障害されるのは主に自分に関する記憶であり、社会的なエピソードは覚えておくこともある。

記憶喪失とは異なるのだけれど、どうやらそういう病気らしい。

「で、ほーくんがその病気にかかっているって言いたいの、ちーちゃんはやんは？」

「……これを見ると、どうやら心理的なものの他に、頭部の外傷等をきっかけにして発症することもあるという」

「そして、治療法は不明、ね。自然治療に任せるしかないってのが束さんは気に食わないね！」

千冬は持っていた医学書を閉じて、口を閉ざした。束は束で端末のキーボードを高速でたたき検索をして、そして何をやっても駄目だということのため息をついて沈んだ。珍しく意気消沈している束をそばで見ながら、夏織はふと思う。

本当に、記憶喪失なのだろうか？ 単なる一時的な混乱ではないのだろうか？ と。

実物を見たわけではないので何とも言えないが、そう決めつけるのはあまりにも時期尚早ではないか？ その疑問を姉に直接ぶつけてみた。

「そうだな。そういう考えもある。あるんだが……、な」

口をすぼめて何か言いたそうにしてから、結局閉口した。濁した。本当にどうしたのだろうか？ 今日の姉は言葉を濁して曖昧にしてと

いう様子が非常に目立つ。いつもはもつと自信を持った喋り方だったはずだ。本当にどうしたのだろうか？

「これはあまり口にしたくなかったのだが」

とうとう。しびしびといった形で、千冬は口を割った。

「法師は、本当に法師なのだろうか？」

「馬鹿なこと言わないで！ ほーくんはほーくん！ いくらちーちやんでも……」

そこで、眠っていた獅子が動き出した。獅子というのにはあまりに稀有な装いではあるが。(うさ耳・エプロンドレス標準装備。どこかの童話から飛び出てきたような格好だ)

「だから言いたくなかったんだ。私自身、これが正解など思っていない。可能性の一つとして挙げただけだ。

それにしても東、先ほどから五月蠅いぞ」

「あいだだだっ！ ちーちゃんごめんなさい！ 東さん調子に乗りましたごめんね ってギブギブ頭壊れちゃう！ 目覚めちゃううううううう！」

けたたましい叫び声をあげた瞬間、地面に向かって投げおろした。遠慮一切なく。

そして平然とした表情で、そのまま続けて見せた。

「さて、法師のことだが」

「潰れている人はいいの？」

どこ、とは言えない。人として潰れてはいけなるところがつぶれて

いるのに、いまだに痙攣を繰り返しているその生物を指差す。
千冬の表情は変わらなかった。

「まあ、どうでもいい。すぐに復活する。

でだ、夏織。お前、法師が苦手だろう?」

「え?」

夏織は、目の前の人物の言ったその事実をその瞬間で咀嚼することが出来なかった。外国語が使われた訳でも、暗号が隠れた会話でもなく、だ。

見破られているなどとは思ってもいなかった。事実、何も言っていなかったからまったく見ていないかと思ったのだ。これでも部活、バイトと休むことなく働いている姉だ。自分のことを顧みる余裕がないとばかり考えていた。それに自分はまったくもってばれておらず、見事に隠しきれているとばかり思っていたのだ。一番近くにいた法師その人にだって見破られていない自信があった。

それなのに、ともにいる時間が一番短い姉は気が付いていたという。驚かないほうが無理だ。

「驚いているな。まあ仕方ないな。会話するのも久し振りだしな」

「そういえば、そうね」

「今気が付いたようだな。私としてはお前が順調以上に成長していることに喜べばいいのか、悲しめばいいのか」

困ったような顔をする姉の姿に、夏織はくすりと笑みを漏らした。そういえば、最近随分笑っていない気がした。笑おうとして、顔の筋肉に引っかかりを覚えたのだ。

「本当に、お前は何でも我慢するんだな。困った妹だ」

呆れられた。溜息をつかれた。普通ならがっかりするはずなのに、そのやり取りが、何故か嬉しかった。

こんな風に普通にコミュニケーションとったというのはもちろんある。何せほとんど顔を合わせることもさえないのだ。会話などここ最近した記憶がない。こんな少しのやり取りでも、昔のように話し合える。その事実が一番うれしいのだろうと夏織は自己分析した。

ただ、それがとても気に食わなかったのだろう。千冬の顔色が曇った。

「私は、そんなに頼りないか？ 最近お前が悩んでいたのを知っていた。まったく無心で剣道に打ち込み、文句ひとつ言わずに家事をしていた。自慢の妹だ。だがな、我儘ひとつ言わないのは、こちらとしても辛いんだぞ？ 私はそんなにお前の目には頼りなく映るのか？」

「そんなこと……っ！」

そんなことない、あなたは自慢の姉だ。そう言おうとしたのだが、口はうまく動かなかった。予想外のことを言われて、動揺したのだ、

「分かっているんだ。おかしいことを言っているのは。

それはいい。あとに置いておこう。法師は確かに、私の目から見ても少々余るところがあったのだが、それは子供故の可愛いものだろう。どこがいけないんだ？ お前の目からでいい、それを教えてくれ」

「うん……」

真剣な瞳に押されて、夏織はそれまでであったことを話した。動揺したのが聞いているというところもあって口は普段なら絶対に言わないことまでもペラペラと喋り出した。

「そうか」

千冬はそれだけ言うと、腕を組んで目を閉じ沈黙した。そんなに大したものだったのだろうか、と夏織が考えていると、千冬が瞳を開けた。

「辛かったか？」

「ううん。最初はそうだったけど、慣れちゃったから」
「……」

千冬は、夏織の頭を撫でた。くすぐりたいように、夏織は目を細めた。

「今度、法師の見舞いに行こうか。あれはもう別物と言ってもいい。昔の面影は全くもって残っていないから、案外うまくいくかもしれない。」

そうはいつても、夏織は一抹の不安を拭い切れなかった。もしも、ということがよぎるのだ。もしも昔と変わらなかつたり、前よりもひどくなっていたらどうしよう、と。

あれはなかなか猫かぶりがうまいのだ。千冬たちの前では見事に態度を豹変させて、ちよつとやんちゃな少年に成り下がるのだ。

夏織は意識することなく、つばを飲み込んだ。

第五話（後書き）

お疲れ様でした。

何かあれば、作者まで。

第六話（前書き）

…… 大好評です。作者もびっくりで気が付いたら総合評価が早くも百を超えてました……。

続編でがっかりされないように力を込めてやっているつもりです。

…… 至らない点があれば、ご指導いただきたいと思います。

作者からでした。

第六話

とりあえず、現状の把握がきちんできていない。少なくとも、此処は何処かということが上手く呑み込めてはいない。病院であるというのわかるが、いったいなぜ入院しているのかがまったくもってわからないのだ。

織斑千冬・篠ノ之束。これらの人物に聞き覚えがある。

ISと呼ばれた、本のタイトルだったと思う。あまり良くは覚えていないが、パワードスーツに似た物で世界の軍事を一掃する、という眉唾物だったはずだ。

だったらなんだ？ この世界は虚構なのか？ なんて思考はしない。俺がおかしくなっているという可能性は捨てきれないが、それを考慮したらこの思考をしていること自体が無駄ということになる。それにただ織斑千冬・篠ノ之束という人物がいた、という理由でそれと判断するのはあまりにもお粗末すぎる。同姓同名など世の中にたくさんいるだろう。いったいどれほど目が曇っているのだろうか？ まあそれは一旦置いておく。

それに、身体である。顔を傾けて見下ろしてうかがうことのできる貧弱な体は、俺の持ち物ではない。鏡を持ってきてもらったところ、顔つきはまるで別人のものだった。

まず、顔全体のつくりが繊細だ。目鼻口耳、それに輪郭が細い。何よりも、身体全体が小さいのだ。痩せているところ考慮して軽く見積もっても、六か七くらい。成長が遅いのだとしても、十は超えてはいないだろう。どう考えても自分の身体ではない。

それなのに、この身体に宿る俺は俺だということを知っている。おかしい。精神はほとんど脳による部分が大きい。精神と言ってもその正体は所詮脳の中にあるということを知った事がある。

俺は、本当に俺なのか？ 全く別人の脳をもっていて、なぜ俺だと言いつけることが出来る？

混乱の極み度ということは分かっている。答えが出ないということも分かっている。それでも、この無限の悩みが尽きることはない。そんな時だった。ノックの音が響き渡ったのは。

「……」

「私だ。織斑だ」

織斑……千冬だろう。以前病室を音連れた時にそう名乗っていた声と特徴が一致する。ではいったい何をしに来たのだろうか？ 俺の姉だと名乗っていた人物と一緒にだったということは面識があったのだろうということは分かったが、いかんせんまたわざわざ時間を取って面会に来るといことが理解できない。現に、姉と名乗った人物はあれ以来音沙汰がない。両親と関した人物も、俺の口ぶりを聞く限り信じられないと言う表情で急ぎ退出していった時から見えない。多分、以前と今のおれの違いに困惑したのだろう。無理もない。見た目小学生の人間が、年寄臭い喋り方をしているのだから。そんなこんなでまったく人間とかかわっていない（正確には看護師以外）。

許可を出していないのにもかかわらず、織斑千冬は勝手に入ってきた。

連れているのは、小さな子供。青と黒の間をさまよっている髪の毛は、外に出ればひとえに輝くのだろうということは簡単に想像が出来た。体つきから見るにこの体と同年代前後だろう。

本当に何をしに来たのだろうか？ 全くもって想像できない。

「……」

織斑千冬は、連れていた子供を前に押し出した。

瞳は揺れている。怖がっているのだろうか？ 人の機敏については全く詳しくない俺ではあるが、身体が震えていることに気が付けば

少なくとも恐怖心を感じているのは分かる。

前の身体を持ち主に。だろう。少なくとも俺とこの少女とは面識はない。特に威圧している、というわけでもないからきつとそうなのだろう。

さて、どうするか。

そんな思考の間に、少女が動いた。

「あ、あの……」

やはり恐ろしいのだろう。勇気を出し眼前に一步、歩み出たのはいとしても、その後に縮こまってしまふ。よほど恐ろしい目にあわされたのだろう。その反応は見覚えがありすぎる。

俺はこういう場面に慣れていない。慣れていないというわけではないが、慰めるとか落ち着けるといふことは少なくともそれにあたる織斑千冬からの鋭い視線は相変わらず続いている。いや、さらに鋭くなっている。少女の身に何かあったらタダでは置かないぞ、といった無言の圧力だ。

俺にいったいどうしろというのだろうか？何もしていないのにもかわらず怯えられるのは、完全に俺の責任ではない。

「その、あの……」

「落ち着いてほしい。何も暴行を加えようというわけではない」

目の前の少女が落ち着かないと、面倒な眼光にさらされ続ける。以前ならまだしも、この身体では少しきつい。何せ筋肉零なのだから勝てる見込みがない。襲われでもしたら、それこそ一撃だろう。

俺の言葉に少し冷静さを取り戻したのか、少女の身体の震えは止まった。

この隙に、俺は言葉を重ねる。実感ではあるが、早口になった。プレッシャーがここまでの威力を發揮するとは、初めて気が付いた。

一つ勉強になった。

「残念なことに、俺は今までの俺ではない。名前も分からなければ、織斑千冬、篠ノ之一家、そしてお前も、何もわからない。そして自分が篠ノ之法師だという実感すらない。戸惑われても、俺にはどうすることもできない」

「……そっか」

その言葉に、どこか安心したように張っていた肩を下ろした。

良く目てみると、その少女は隣にいる織斑千冬との共通点がいくつも見受けられた。まずは勝気な瞳。なにものにも屈さないという意志を奥に灯したそれは、間違いない千冬と瓜二つだ。

次に顔のパーツの配分。数々の女を見てきたが、此処まで共通なのは珍しい。そして、雰囲気だろうか。

あいまいだが、元々の雰囲気は織斑千冬に似てとげとげしている。そんな気がする。今の感じからすると気のせいのように思えるが、多分本質は同じなのではないかと推測できる。

身内か。それならばこの護るような態度も納得がいく。いいところが妹、だろうか？ 子供を持っているようには思えない。若すぎる、というよりは一児の母親としては落ち着きがなさすぎるのだ。あまりにも物騒すぎる、と言い換えるとちょうどいいか。

こんな評価をしている間に、状況は進行した。

「初めまして、かな。織斑夏織です」

夏織、と名乗った少女は出来るだけ目を合わせないようにして、頭を垂れた。

第六話（後書き）

お疲れ様でした。

何かありましたら、作者まで。

第七話（前書き）

法師と織斑一家の面会后編！ ……となるはずが収まりきららずに中編に……。 ……どうしてこうなったんでしょ^^^；

……三日連続でPV五千超えて、喜ばしい反面、反動がすごく怖いんですけど…。

第七話

織斑夏織。同じ苗字。身内であるのは間違いないとみていいだろう。

「夏織は前のお前が苦手だったらしくてな。どうもこうなってしまうらしい。その辺は容赦してやってくれ」

すかさず、その身内の千冬がフォローに入る。激昂するとも思っているのだろうか？　そこまで癩癩持ちでも、度量が狭いわけでもない。よって、普通に答える。というよりも、このくらいのことです自制心を超えて怒りだすというのは人間として三流以下だ。生きている価値がない。

「気にしていない。誰しも苦手な人間なんているものだ。固い態度になるのは仕方がない。それが昔の俺であつても、今の俺であつても名。意識というものは簡単には払しょくされたりなんてしないしな」

「そう言ってもらえると助かるな、こつちとしては。……というかお前は本当に夏織と同年代なのか？　雰囲気といいしゃべり方といまったくもってそうは思えないんだが」

「うん、ありがとう篠ノ之君」

篠ノ之君、と呼ばれると違和感がある。というよりも、他人という感触か。今の今まで、篠ノ之法師という人間ではなかったのだから当然ともいえる。

が、この世界では多分俺はこう呼ばれ続けるのだろう。この身体を持ち主は、篠ノ之法師には間違いないのだから。

ぐだぐだ悩むのは性に合わない。俺は俺だ。身体が違おうと、脳が今までとは違ってても、そこは変わらないと認識している。それでい

いではないか。どうせ答えなどでないのだから。答えのない疑問に悩んでいられるほど時間を使える身ではなかったためか、そんな考え方の癖が染みついている。諦めにも似た、何か。……俺が 年生きたと言ったら織斑千冬はどんな顔をするだろうか？ なんてくだらないことを浮かんだが、きつと頭に障害を抱えているで済まされるだろう。時間の無駄以外の何物でもない。そんなくたらないと無駄の中間を彷徨っている、肩の力が抜けたらしい。重りのようなものが身体からすつ、と抜け落ちた気がした。我ながら単純なつくりだ、とあきれてしまう。

「篠ノ之、か。どちらかというとまだ法師の方が違和感は少ないな」
「それは、またどうしてだ？」

その問いかけに、俺は目をつぶって考える、までもない。そんな答えはなど、初めからわかっている。

「篠ノ之。これが差すのは家名。法師が差すのは自分の名前。ただそれだけだ。苗字なんて所詮借り物にすぎん」
「……。そうか。お前がそう言うならば、気を付けよう。
そういえば、篠ノ之夫妻にあったそうだな」

挨拶、といってもほとんどが織斑千冬が話をしている。一体何のために織斑夏織を連れてきたのだろうか？ さっぱり持って理解できない。これでは顔見せ、といったほうがしっくりくるかもしれない。しかし顔見せにしては長すぎはしないか？

「あつた。と言つても、あれをあつたと言えは、だがな」
「……？」

「俺の変貌ぶりに開いた口がふさがらなかったようだ。急いで病室を飛び出していったよ。医師にでも病状を確認しにいったんじゃないな

いか？ 法師は一体どうなっているんですか、とか」

俺のその答えが意外だったのか、織斑千冬は目をひん剥いた。

「……そのあとは？」

「それからは全くと言って良いほど、顔を見ていないな。大方俺を見るということが耐えられんのだろう。よほどかわいがっていたのだろうな、前の俺を」

「……」

かける言葉も見つからないのか、痛ましげな表情で織斑千冬は沈黙した。何か言いたそうに口を動かそうとしていたが、結局言葉になり切らずに消えていったのか、そのまま押し黙って腕を組んだ。

「……酷い」

それまで積極的に発言してこなかった織斑夏織が、ここに来てようやく自ら口を開いた。先程とは違い力がこもっているのか、蚊の泣くようだった声は今やしっかりとしたソプラノの音へと変わっている。

「そんなことって、酷いよ。家族なんだよ？ たった四人の」

少なくとも、織斑夏織にとってはそうなのだろう。篠ノ之法師にとってもそうだったのかもしれない。だが、残念なことにそれは俺には該当しない。

「そう考えるとそうかもしれない。……がしかしな、逆に言うと、俺と篠ノ之一家は本当の意味では家族ではない。確かに血縁的に見たらそうなのかもしれないが、時間の共有というものが全くもって

ないからだ」

「時間の、共有？」

不思議そうに首をかしげた。酷く落ち着いていたからすっかり忘れていたが、目の前にいるのはまだ幼い子供だった。小難しい説明をかみ砕けるはずもない。簡潔にわかりやすい説明に切り替える必要があった。

「少し難しかったかもしれない。要はどれだけ同じ時間を過ごしたか、ということだ。一緒に食事をしたり、会話をしたり。そういう時間をどれだけ作ったかということによって、家族のきずなというものには生まれると聞いたことがある。決して血が繋がっているだけで家族、というわけではない。古い時代では親戚同士で殺し合いなんて話は山とある」

「…………だからって…………」

涙ぐんで、声を詰まらせた。…………面倒な。お前の身内の視線がきつくなるんだが。…………というより、織斑夏織が泣いているのはおれの責任なのか？

取り繕うのは趣味じゃない。趣味じゃないが、やらざるを得ない時というのは必ず存在する。本当に、面倒な。

「家族なんてものは、所詮血が繋がっただけの他人の集まりだ。何もかも理解してもらえ、何もかも理解できるなんてものはただの驕りだ。他人の考えなんてわかるわけがない。

それとも、お前はそうではないというのか？ お前は隣に座っている織斑千冬の考えていることがすべてわかるのか？」

「…………うっん」

「だが、全部考えが分からなくても、まったく分かり合えないというわけではもちろんない。

家族というくりだからこそ、分かり合えるというものもあるだろう。ただの他人、ではもちろんないのだから。俺と篠ノ之夫妻は出来なかった、というだけだ」

何を言っているのやら、自分でもわかるくらい支離滅裂でなっていない説明だった。慣れないことは言うものではないな、と改めて感じた。

ため息をついてその事実を忘却しようと試みているところに、夏織が真っ直ぐ見つめてきた。

「私、お母さんとお父さんいないんだ」

……なぜこうなった？　といきなり振られた話題に困惑してしまうのを、許してほしい。変化球というやつではないか、これは？　限りなく重くなりそうな話題の登場に、ため息を付かずにはいられなかった。

第七話（後書き）

お疲れ様でした。

何かあれば、作者まで。

第八話（前書き）

今日二回目の更新。

今回はいつもよりも短いです。

ではどうぞ。

第八話

「……そうか」

突然、身の上話になった。この先の話の転がりかたが予想もできないため、しばらく相槌を打って経過を見守る。

「居なくなっっちゃんだ、突然」

俺に、何を言っしてほしいのだろうか？ 意図が全くもって読めない。空気が読めていない俺を放置して、織斑夏織の一人語りは続く。

「私とお姉ちゃんだけになっちゃってね。お姉ちゃんは頑張ったんだけど……。それでもお金の面だけは何ともならなかった。

そんな時に手を差し伸べてくれたのが篠ノ之の人たちだったんだ。よくご飯とかを今でも食べられてもらってるの」

早熟している。いや、し過ぎているといった方が正しい。基本的に子どもというものは思い通りにいかない現実に歯噛みし、癩癩を起こしたり周りの人間を困らせるのが普通らしい。それを考えると、この少女は気味が悪いほどに聞き分けが良い。

取り繕っている。一目見ただけで分かる、脆くて薄い、いい子の仮面、といったところか。周りで頑張っている身内を困らせないように、と自分をひた隠しにして、一人でさみしいと泣いている子供。誰か助けてと叫びたいのに、不器用でそれも言い出せない。

それにしてもなぜ隣にいる人間はこんなにも近くにいるというのにその事実が気が付かないのだろうか？ ……いくら忙しいと言ってもたった一人の肉親ならば気に掛けるのが普通というものではないか？ ……俺が普通を語るのはあまりにもおこがましいかもしれない

いが。

言いたいことはたくさんある。あるのだが、言ったところで理解できるとは限らないし、そもそもまだまだ子供なのだ、夏織は。我儘の一つや二つくらいは言うべきではないだろうか？

こういう時にストレスをためておくと、将来ろくなことにはならないのだ。たとえばそう、この、俺のように。

「夏織、といったか？」

「うん」

気が付けば、無責任に口走ろうとしていた。許されるべきじゃない。いくら年が離れていようと目の前にいる保護者はまだいいとこ高校生くらいだ。織斑千冬に己を含めて二人を養えるだけの力があるようには到底思えない。それをどうにかやりくりしているということ、は、相当な無理を重ねているのだろう。

それでも、俺は止めようとは思わなかった。他人のことなんか知ったことではない。俺はやりたいようにやるというのももちろんあるが、今ここで潰れようとしている少女を見逃しておくのはなぜかやるせない。それが大人の面をしている人間をつぶすことになっても、だ。

きまぐれ？ 勝手に言え。それが俺だ。誰にも理解されたいとも思わんし、理解できないだろう。

「辛かったらどう？ 誰にも理解されなくて。誰も構ってくれなくて。苦しかったらどうだろう？」

「……………私は……………」

こんな言葉をかけられても。目に涙を精一杯溜めるだけ。甘え方を知らない、歪な子供というほかない。重症すぎる。何故こんなになるまでほおっておいたのか。本当に。本来ならばこうなる前に手を

打っておかなければならぬだろうに。いまさら言っても仕方がないのだが。

本当に、今更嘆いても仕方がない。俺が出来るのはせいぜい荒療治。しかも人を選ぶ、かなり危ない方法。

それでも、これが間違いだとは思わなかった。

「辛い時には泣け。堪えるな、笑うな、ごまかすな。自分に嘘をついたところで、現実なんか変わらないし、誰も助けてはくれない。助けを求めなければ、救われない」

求めたところで救われないケースなど山とあるがな。その言葉をつばとともにぐつと飲み込んで、俺は口を閉ざした。

腹部に衝撃。目の前に閃光が奔る。いったいなにがおこったのか？

疑問ばかりがよぎる俺の視界には、蒼い塊が動いていた。

「……………」

声はない。だが、泣いているということは顔を見ずともわかった。ちらりと隣を窺うと、本気で睨み付けられた。…………今の行為が不味いのであれば、一体何が許されるというのか？ 呼吸するなど言いたいのか？ 織斑千冬の行為は全くもって理解できるものではない。意味不明、故に放置に決定。…………心臓に悪すぎる。たとえ大した脅威ではなかったとしても、目の前で爆発が何度も起きていたら不快になる、そんな感じ。

暫くは、誰一人として喋らなかつた。

第八話（後書き）

お疲れ様でした。

何かありましたら、作者まで。

第九話（前書き）

ご指摘を受けましたので、少し改訂したいと思います。

まあそれはすみに置いといて、九話です。

……ちんたらちんたらしか進んでいきませんね、本当にこれ……。
作品をより良いものにするために、どうぞご協力のほうをよろしく
お願いします！

2011/07/01

誤字修正

第九話

「……いや、済まなかった」

「冗談なら早めにやめてほしかった。寿命が縮んだぞ？」

事実だ。途中で真剣を持ち出した時には本当にびっくりした。冗談だと分かっていてもだ。

どうやら織斑千冬は夏織に対して異常ともいえるほどの保護意識が働いているらしい。やはり唯一の身内、というのが大きいのだろう？　こういうのを一般的に何と言っただろうか？　シスターコンプレックス？　いや親代わりとして考えているのならばこれは適当ではないのかもしれない。ならば単に親ばか？　……ううむ。とくだらない思考は隅に置いておく。

「……冗談だろう？　それくらいのことと驚くほど肝が小さいわけではないだろう？　冗談も休み休み言わないと、誰にも信用されなくなるぞ？　現に顔色一つ動かしていなかったじゃないか。まったく、嘘ならもつとつまいものにして見せる。誰も騙されはしないぞ？」

そういつて織斑千冬は鼻で笑った。……ただの事実なのだが。まあ、初対面でやらかしたことがここまで効いているのだろう。その事実があるからこそ、まったくもって俺の言動が信用できないだろう。不服ではあるが、自業自得というほかない。仕方なしに、出しかけた言葉を飲み込んだ。

「……あの」

やりにくそうに、夏織が身じろいだ。このやり取りの後に喋りかけ

辛いのか、それともやはりあのやり取りの後では辛いのだろうか？
どちらにしてもおどおどとおっかなびっくりな態度をしている夏
織に、出来るだけ温和な態度を心がける。

「何だ？」

「えと……その、ありがとう。ちよつと、楽になれた」

「子供が遠慮などするものではない、とだれだったかが言っていたぞ。幼少期などの動物でも親に依存するものだ。能力がないなら養ってもらうしかない。当然の権利だ。俺はそれを教えただけで、特に何かをしたというわけではないぞ？ 感謝するならば俺はなくて織斑千冬にすべきだな」

「……それでも……ちゃんと、向き合ってくれたからっ」

人間不信のものの言葉である。小さな子供からそんな言葉が出るとはな。いい加減鬱陶しいと思うが、何故というしかない。

よほど相手にされてなかったのだろう。その元凶を視線を差し向けると、慌てて視線を逸らした。どうやら自覚はあったらしい。……自覚があつて放置するのはさらに悪いという意識はあるのだろうか？ いや、ないのだろうな。出なかつたら、こんなことでは済まない。

暗にそれを悟らせようとそのまま見つめていると、織斑千冬は自己擁護を始めるように言葉を重ねた。

「……仕方ないだろう。昼間は学校。よると休日はバイトで少しでも金を稼がなければならぬのだから。一杯一杯だったんだ。それが分からないお前ではないのだろうか？」

「知っているさ。きつと身を粉にして働いていただろうとも思う。が、それとこれとは話が違ふ。そもそも忙しいから、といって一日たったに一分でも会話する時間なり団らんする時間が取れないという証明にはならない。違ふか？ そしてその自覚があるからこそ、

言い訳をするのだろうか?」

「……その通りだが。……お前は本当に夏織と同じ年か?」

まるで珍獣でも見るような視線を浴びせられた。まあ、分からんでもない。何せ中身は全くの別物だ。口調も違っし、考え方も前の身体の持ち主と全く違うのだろう。

少なくとも幼児には見えないだろう。だからこそ篠ノ之夫妻や篠ノ之束は嫌悪し、一回顔見世してから一度も会いに来ないのだろう。

「気にするな」

「……まあいい。お前の言うとおりで。自分の日々のことに精いっぱい、全くもって夏織や周りが見えていなかった。焦っていたのだろう。それを気付かされた。お前にな」

そう言って、織斑千冬は手を差し出してきた。友好を証である握手というものである。

俺はそれに手を合わせて握ろうとした。が、あいにくの握力不足。手を握ったはいいものの、そこから先はいくら力を入れても閉じなかった。筋力不足の弊害が、此処にも出た。

織斑千冬は普通に握手をしているのだろう。が、それは今のおれにとっては一トンの重りを載せられているようなのだ。痛いなんてものではない。痛覚が仕事するのをやめて、すでに意識は勝手に飛び立とうという気が満載だ。

……いかん。言動までおかしくなってきた。激痛という事実を前に俺はたまらず声を上げる。一瞬仕返しかもしれないという考えが浮かんだが、それは置いておく。

「流石に、これはしんどいのだが」

「お姉ちゃんばっかりずるいよ!」

丁度俺の声に被せる形で、夏織が握手の事実を発見して指をさす。抗議の声を上げて非難する声が、俺の悲鳴をかき消した。そうして夏織が再び突撃。見慣れた閃光が、視界にはじけた。……一体いつ終わるのやら。法師はさっさとこの現実が終わるところを望みながら、静かに天に祈りをささげた。

第九話（後書き）

お疲れ様でした。

何かあれば、作者まで。

第十話 (前書き)

今日もまた更新です。

……そして批判を受けた繰り返し別視点の回。苦手な人はバック推
奨。

いいという方だけお進みください。

……本編には、いつ入れるんだろう……？

第十話

織斑夏織は、目の前の人物を凝視した。

篠ノ之法師その人である。

以前の彼とは一口も二口も違っていたのだ。以前の傲慢さはすつかりなりを潜め、代わりに落ち着きが全面に押し出されている。確かに姉の言う通り、別人だ。

少なくとも雰囲気は。

だが夏織は油断はしない。落ち着きを装っている可能性も捨て切れないからだ。

何せ相手はしたたかさで有名（篠ノ之束と織斑千冬を騙すほど）な法師であるのだから。

そうなると一体何を話していいのか？ 夏織には全く以って分からなかった。

姉の千冬の話では、記憶喪失なのだとか。それならば無難に自己紹介から始めるべき、と結論を見出だし、口を縦に開けた。

そこに、千冬の注釈が入らなければ、そのまま夏織の挨拶になっていただろう。

それがいいのかどうかは夏織には判断が付かない。確かに挨拶できたのかもしれないが、緊張のため相手に聞き取られない可能性が高い。そんなことを漠然と考えながら、姉の口上を聞いていた。

「こっちは夏織だ」

考え事、聞き取り、そして篠ノ之法師の観察と、夏織の脳はフル回転。休む間もなく働き続けて堪えず新しい情報を処理する。

本当に別人なのかも知れない。その考えが徐々にではあるが夏織の中に浸透しつつある。千冬の話を知っている横顔は肉はこけているためか凜々しく、また呼吸の乱れはうかがえず、立ち居振る舞いは

まさに完璧という出来だ。取り繕っているにしては、あまりにもその動作は完成されすぎています。

あまりにもじつと見つめていたせいか、いつの間にか見つめられていることに気がついた。というよりは、穴が開くほど凝視されて初めて気がついたというべきか。そこで夏織は自分の失態を悟った。

凝視されていて、気分を害さない訳はない。無遠慮な視線はときとして、下手な嫌みよりも不快に感じることもあるということは経験上理解していた。

そのはずなのに失態を犯した自分を、夏織は恥じた。見ていられなくなつて、視線を地面へと落とす。

……。文句は言われなかった。そのことに安堵しつつ、法師の観察に向けていた集中力を耳に集中させて、聞き漏らしがないよう情報収集。

法師は千冬と話している。それが気楽でもあり、同時に淋しさを感じていた。

まるでのけ者のようだ。

夏織にとってその言葉とは、多分一生付いて回るものなのだろう。

何せ姉は高校生からだいぶ年下の妹を養う出来た姉である。いや、出来過ぎた、といつても過言ではない。やっかみが付いて回るのは想像にたやすい。

相手にされない淋しさは、堪えてきたはずだった。

いい子にしていなければいけない。これは夏織にとってなりよりも尊ぶべき最優先事項である。姉は学校とバイトの二重生活で家のことと考えている余裕がないのだ。もちろん、夏織のことも同様。

その状態でわがままなどいえば、それは千冬を困らせることに相違ない。自分のために身を粉にして働いてくれる最愛の姉を。

そんなことは当然、夏織に出来るはずもなかった。

だから決めたのだ。私は人に迷惑をかけないいい子であろう、と。

例え何があろうとも文句一つ言わず、家のために働いてくれる姉を少しでもサポート出来るように努力を重ねよう。

それまでは苦手だった家事にも果敢に挑戦し、手ほどきも受けながら必死になって習得した。学校ではよく学び、手間をかけさせないように常に最優秀の成績をとり続けた。個人面談などは篠ノ之夫妻の協力を要請し、千冬に話が回らないように尽力した。法師の旅重ねる嫌がらせにも文句を言わず堪えて見せた。

「……」

なのに、どうしてそんな瞳で見つめるのだろうか？ せっかく堪えてきたのに、これでは耐え切れなくなってしまいそうだ。夏織は睨むようにして目を吊り上げて、こぼれ落ちそうな雫を堪えた。

甘えはいけないのだ。いい子でなければ、手間をかけさせない子供でなければ、存在は許されないのだ。その脅迫観念が、今の夏織を動かしている。

「
「

話しているのだろうか？と予想することは出来ても、ないようを聞き取ることが出来ない。自身の溢れ出してはいけない感情を堪えるので精一杯なのだ。

ながら。だから、そんな目では見ないで欲しい。お前はよく頑張ったぞ、もう堪えなくていいんだぞと口の代わりに語るそれに見つめられるのは今の夏織にとっては何よりも苦痛だった。

「何を我慢している、子供だろう、お前は？」

そういうあなただって子供じゃないか。偉そうなことを言わないで

欲しい。そう口にだしたい。だけれども今は千冬の前ののだ。

考えと建前が交差して、複雑に絡み合っただけで乱れる。こんがらがって解けない糸のように、夏織の頭は混乱状態に陥った。

どうして甘えてはいけないの？

どうして甘えていいの？

矛盾するその思考が平行で存在を果たし、夏織の頭をさらに混乱の極みへと誘う。

限界だった。

「泣けばいい。それは子供故に許される特権だ」

きつく睨みつけているその目からじわりと、涙が滲んだ。それを自覚すると次から次へとまるで満員で乗り切れなかったのに乗車していた通勤電車のように、せきを切った川のようにあつという間に浸透じ、溢れ出した。目から飛び出た心の傷の象徴は柔らかい頬を経由し顎へと伝い、静かに音もなく首筋の布へと吸収された。

こんな姿を、見られたくはない。瞬時に我に帰った夏織は病人であるということは一切忘れて法師の胸へと飛び込んだ。

もう、無理だよ。こんなの知ったら戻れないよ。

飛び込んだ先は薄く頼りない。それでも確かに人の温もりを感じさせるものだった。

声を上げようとしたけれども、上げ方なんて忘れてしまった。というよりも記憶に残っているものを振り返ってみても、ないた記憶など何一つなかった。

泣き方さえも忘れていた。悲しいという思いが溢れ出して暴走し、ただただ涙だけがこぼれ落ちている。

声もあげること忘れ、考えることも忘れ、取り繕ういい子の仮面さえも忘れ。

夏織はしばらく涙に暮れていた。

冷静に思い返してみると恥ずかしいものだ、今でも夏織は思う。子供ながらに無理して視界に入る世界さえも拒絶し、ただひたすらに自分の世界だけで完結する、悟った様子を見せるマセガキ。本当に子供の頃は擦れていたのだ、夏織は。

「……………落ち着いたか？」

法師は夏織が泣き止むまで、一言も語らずにただじつと堪えていた。突撃したさいにも呻き声一つ漏らさずに、不快な顔一つさえせずに入院生活で衰えて相当に辛かったに違いないはずなのに。それに比べると自分はどうか？ ただ甘受されたその振る舞いに甘え、涙枯れ果てるまで彼を苦しめていた。消えてしまいたい、初めて思った。

恐る恐る、夏織は法師顔色を伺う。

「……………どうした？」

変わっていない。余裕な態度のまま、彼は答えている。

……………本当に自分と同じ年なのだろうか、この日何度目か分からない自問は、やはりこれといった答えを引っ提げては来ない。

「……………うん。ありがとう」

「……………どう致しまして、とおけばいいのか、この場合」

変なやり取りだ。どこと無くズレたこのやり取りが、何故か夏織に

は楽しいことのように感じられた。
胸に宿る小さな炎にはまだ、夏織は気が付いていない。

第十話 (後書き)

お疲れ様でした。

何かありましたら、作者まで。

第十一話（前書き）

PV60000、ユニーク10000、お気に入り100件突破！

ありがとうございます。……感無量です。

そして今日も更新！……ホントに毎日更新は……

第十一話

人生ままならない。つくづく、実感させられている。

死んだという記憶はないが、ないのだが気が付いたら別人になっているという事実。それはもはや奇跡などという次元を跳躍した、超常現象というべきはずの事項。それらを体験したのだが、はて、いかんともうまくいくようにはできていなかった。

まず、この新しい身体。筋肉がついていない、というよりも完全に抜け落ちたというべきその身体は、不便以上の何物でもない。何せつい最近までまったくもって動いていなかったのだ。仕方ないというほかないのだが、やはり思った通りに身体が動かないというのは違和感を感じずにはいられない。スプーンを握るほどの握力もなく、床に落としたときはさすがに頭が真っ白になった。力なさすぎるだろう、と。

だが、それにもようやく慣れてきた。……あきらめてきたともいうが。

日々の歩行訓練という地獄（看護師つき。しかもこれがまったくもって役に立たない）を行いつつも、自分が普段こなしてきた筋トレを実行。それがまったくもってうまくいかないとわかってからは量はメニューを調節し、筋力の復元に励んだ。その甲斐あってか、異常なまでの速さで筋肉が再生しているらしい。……何？ 筋肉筋肉うるさいって？ 安心しろ。流石に脳筋といわれるまでこつているわけでも、筋肉のことしか考えられないというわけでもない。これがあつて、初めて俺という存在になりあがる。要は必要不可欠なパーツなのだ。……こうしてみると筋肉バカと同一視されるのだから、言語というものは不思議に満ちている。

まあ何はともあれようやくまともに歩けるようになったおれはこの日の消灯後も病室を抜け出す。廊下には当然。誰もいない。気配を消すわけでもなく普通に歩き回れるのだ。気を付ければ全力疾走だ

った可能である。リハビリにはちょうどいいと。この間から走り込みを始めた。

その走り込みを終えてふと廊下の窓から玄関をのぞいてみると、何やらいろいろ荷物を抱えた人影がうかがえた。

……何をしに来たのか？ 口を動かさずに、警戒心だけ引き上げる。両手に抱えきれないほどの多くの荷物は、どうやら大して重い荷物を積んでおらず、かさばっているだけの様子。

人影の体つきを確認。光が少なく見えにくいのだが、何とかうかがうことができる。

大きく張り出された胸部。肉がついている印象がない細い足元。女性だ。ただしこの病院の制服ではない。

その女性は何事もなかったようにドアに手をかけて侵入。するりと身をもぐりこませてきた。

カギを使ったようには見えない。さらに警戒度が上昇。おまけに脳裏には危険信号がともっている。俺の感はだてではない。自慢のように聞こえるが、実際読み違えることは今までに一度さえなかった。今回もそうだという確信はないが、やはり警戒するに越したことはない。

女の正体はなんであろう？ 盗人には思えない。あまりにもこの病院に精通しすぎているというのものもあるし、たぶんだが個々の力ギはオートロックだからピッキングも考えられない。すると外部からのクラッキングが有力な説になる。この病院にはとても貴重なものがあるというようには思えない。よほど最新技術に精通している、盗人ではない何か。

するとなんだ、殺し屋か？ いったい誰を？ 何の目的で？

考えがまとまるのを待たずに、事態は悪化していく。無断で侵入を果たした女は受付を普通に素通りし、まっすぐ病棟のほうへと通じている通路を進路に定めた。

こっちにくる！ その考えに至った俺は素早く相手の荷物の中身を探り当てるために先ほどよりも注意深く観察。

キャリアケースの中は大したものが入っていない。つまりこれはブラフか、またはナイフなどの直接相手に触れなくても相手を殺傷することのできる化学兵器か。そんなところだろう。

それならばこちらにも考えがある。俺は身に着けていた服をすべて破り捨て、用意していたあるものを取り出す。

備えあれば憂いなし、とはよく言ったものだ。人生とは無駄の積み重ねではあるが、その無駄が実を結ぶことがあるというのがこの事例になった。……なるとはまったくもって思っていなかったが。そもそも、どうして全身を覆う特殊繊維が必要となる場面があるんだ？

なんて考えは今置いておく。

引っ掛かりを覚えるそれらを素早く身に着けて、とりあえずは全身は完了。あとは呼吸器系と視界、それに顔面が残っている。

呼吸器系は病院内に設置されている呼吸器用のマスクがあるから問題は無い。あと二つだが……。

背に腹は代えられない。目元のみがかるうじて開いている凶悪犯罪者さながらの覆面を装着し、残る視界に関しては眼球を保護するために閉じておいてから先ほど破った服の一部を代用して目隠し。その上からさらにしっかりと花粉症対策用メガネと書かれているゴーグルを装着する。……なぜ花粉対策用であるはずなのに黒くなっているかは言及するまい。

視界は当然ゼロ。耳も覆っているため普段よりは張力も落ちている。その状態で、俺は侵入者を向かい入れる。

扉の前で気配を隠すわけでもなく、ただ突っ立って周りの状況把握に専念する。

足音が響いている。いや、殺すように努力しているのだが、音と何よりも知れに対応する形で振動する床のせいでごまかせていない。その狭路は推定十メートルほど。

いよいよか。その決意を固めると、殺していると思われる足音がさらに大きくなってきた。そしてかなり接近した、というところで突然。足音は途絶えた。

嵐の前の静けさ。

それを破るように、一呼吸置く間の直後、部屋をけ破ってきた、姿がたとえ見えずとも。音がたとえ聞こえずとも。五感はまだ三つも残っている。相手の位置情報を知るには十分すぎる。

部屋に常備してあった医療用メスを飛び込んできた人影に振り払う。えぐったような感覚はない。せいぜいいいところ、少々曲線を描くように削った程度。その軌道から、かすったのは頭部と判断。腕の振るい方と廊下で見た人影の情報を組み合わせて大体の大きさを把握し、首と思われる部分にメスを突き立てる。

息をのむ音が、はつきりと確認できた身度と名までの不意打ちだったらしい。

しばし無言の時間が続き。カランカラン、と何かが落ちた音がした。

「……完敗だよ。降参。惨敗惨敗」

信用に値しない言葉を吐いた襲撃者の脇腹（首元にメスを突き立てている間に大まかなボディチェックを行い、危険物と思しき瓶を回収しておいた。そのついでに身体のパターンも大体分かった）に一撃入れる。接着した状態で、さらに切り切っていない筋力で繰り出す一撃故に大した威力にはならないが、一瞬の隙位には作れるだろうと見込んで実行。ゴーグルと布を乱暴にとってマスクも外し、目で直接襲撃者の姿を近距離で確認。

襲撃者は見たことのある顔だった。それもついこの間。

俺は気が抜けてしまい、これくらいしかいうことができなかった。いったい何のためにこんな芝居を打ったんだと虚しくなった俺はどうすればいい？

「……何をしているんだ、篠ノ之束……」

第十一話（後書き）

お疲れ様でした。

何かありましたら、作者まで。

第十二話 ？（前書き）

ようやくターンのなかったあの人の出番。

そして自分の中の勝手な目標、総合得点が300をとうとう超えま
した！ 皆さんののおかげです！ これからも見ていただいただけ
ば幸いです。

作者からでした。

……反省は、してないのかもしれない。

だから好きなんですってば、多人数視点で同一状況を描くのが！
（どうしようもない）

第十二話 ？

篠ノ之束は、準備を終わらせて端末の電源を落とす。そして携帯で
きるもの改造済みの端末を持ち、静かに家を出た。

まるで、死んでいる。自分のことを。束はそう評価した。

篠ノ之法師という唯一の生きる意味を失い、ただ何をするでもなく
流されるままに惰性で続ける生活。取り繕ってかろうじて生きてい
る現状。それに終止符を打つことを、束は決めたのだ。

篠ノ之法師を殺す。それだけを胸に、束は今日まで生きてきたのだ。
現在の篠ノ之法師は、もう正確には法師とは言えない。それを理解
してしまったのだ、束は。

外見だけが同じでも、中身は別物。それならばもう興味の対象など
にはなりえない。そしてその事実を理解しているにもかかわらず、
いまだに幻影にすがろうとしている自分がいるの束は知っている。
いつか思い出すのではないか？ いつかまた自分のことをお姉ちゃ
んと呼んでくれるのではないかというありもしない現実を想定して
いるのだ。そんなことは絶対にはないと知っているはずであるのに。
いい加減、けじめをつける。

この日のために用意した物で仕留めると。今は亡き法師に、束は誓
った。

携帯端末を片手に、家を出発。誰も起こさないようするには神経
をすり減らした。ただでさえ法師の問題で自分で可でなく織斑千冬・
夏織姉妹や両親と名乗る物体が神経質になっているのだ。少しでも
何か起こそうとすれば爆発かねない危うさを孕んでいることを、束
は理解している。

誰にも気づかれることなく家を出て、病院の前までついた。あらか
じめ設定しておいたプログラムを展開し、最新式のオートロックを

解除。本来ならば正式な端末を持ってクラッキングを仕掛けなければならなかったのだが、前に一度来た時に特徴を見破ったのが大きい。そのおかげで、簡単に侵入することができたのだ。ドアが開く。音をたてないように静かに侵入。

中は当然ながらに真っ暗。今は月明かりが存在するが、中に入れば時折ある廊下の小窓からしか光を得られなくなるだろう。そうなれば視界を確保できないし、それでは成功率はぐんと下がる。あくまでも抹殺対象に近づく必要があるのだ、今回の場合。視界の確保は必然となる。

束はあらかじめ用意していたアタッシューケースから暗視用ゴーグルと此処の制服である白衣を取り出して装着。明かりもつけずに視界を確保して、進路を篠ノ之法師の名を騙る抹殺対象者の部屋に定めて、廊下を歩く。

靴の音が響かないように細工をしてあるブーツもこの時のために開発した。不備はない。必ず成功するはずだと束は確信していた。

偽物を殺す準備が整う今日のこの日まで。この演技を親友とその妹の前で続けなければならなかったのだ。苦痛で苦痛で仕方がなかった。なん憲明にもならない行動をとり、打ちたくもない相槌を打たされ、聞きたくもない話を延々と聞かされた。限界すれすれだった。一歩間違えれば織斑千冬に感づかれてしまい、今日のこの日を迎えることはできなかつただろう。親友は特に聡い。今まで隠せていたのは法師の豹変に驚愕して動転していたのは何も束だけ、というわけではなかつたからにすぎない。もしもう少し千冬が動揺していなければ、たちどころに感づかれてしまつていただろうということも思うと、信じてもない神様とやらを信仰してやりたくもなかった。鼻で笑ってやる程度には、といういらぬおまけがついているが。やっと終わらすことができる。それを考えると束はまるで絶頂を催したように体が熱く燃え上がった。

やっとやっとやっと。もうすぐで偽物を破壊できる。周りの状況を察知できないほどに、束は集中力を欠いていた。

ガタン、と音がして、ようやく束は我に返った。暗視ゴーグルで確認すると、数メートル先にトイレに向かう老人の姿が映った。

危なかった。あのまま法師の部屋に突入すれば、まず計画は成就しなかっただろう。聞きたくもなかった千冬の話だが、今回の計画に役立ったことも数多くあった。

未だに篠ノ之法師の謹直は戻り切っておらず、ようやく歩けるようになったばかりだということ。以外にも胆力があり、ちょっとはそつとでは動じないこと。そして気配察知に関しては千冬も認められているくらいに優れているのだという。浮かれたままではまず感づかれているだろう。今になって親友が貢献していたことに、束は笑みを漏らした。

もう引き返せない。此処まで来てしまつたら、あとはどうなろうと知つたことではない。なすべきことをなすだけだ。

無言で、廊下を突き進む。先ほどの老人はどうやら耳が遠かつたらしく、束が真後ろを普通に通過しても何の反応も示さなかった。人がいないという思い込みもあるのだろうが、それ自体はどうでもよかった。

着いた。

ネームプレートに憎々しくも『篠ノ之法師』と書かれている部屋を見て、束は笑みを深くした。

これで終わらすとができる。その考えに至つた束は体が浮いたような感覚のまま、ドアノブに手をかけた。

そう。この時点でまさか篠ノ之法師がすでに察知しているとは、夢にも思つていなかったのだ。

演出のために、というよりは考えもなしに束はドアを蹴った。夢が現実になろうとしているその状況では、かの大天才もただの人に成り下がっていた。

それこそが、この戦いの勝敗を分けたものであった。

暗視ゴーグルが、自身に迫りくる何かを捉えた。

「…………え？」

特に訓練をしているわけでも、体を鍛えているわけでもない束はもまともな反応をすることもできずに、硬直。それを好機とみてか、それは迫ってきた。

医療用メス？

その考えにいたつと時には、すでに暗視ゴーグルの紐は断ち切れて、本体は自由落下を開始していた。

最後にまとも映った視界では、黒装束というほかないでたちの人型が映っていた。

人と判断は、できなかつた。なぜならばその物体には目も、鼻も口も耳も存在しなかつたからだ。

いったい何が起きたの？

束は混乱の極みに陥った。状況をまとめるところである。

篠ノ之法師の名を騙るものの部屋に行つたらなぜか人間には思えない何かがあった。

確かに、これでは全く訳が分からないだろう。そう、篠ノ之法師は一体どこに消えたのだと問い詰めたくもなる。

まさかその黒装束が篠ノ之法師だとは。束は夢にも思わなかつたのである。束はとうとう何かに呪われたのか、と普段は嘲笑してその存在を否定する死神か何かと勘違いするほどにパニック状態だった。その致命的な隙を、逃してくれるほど世界は優しくくない。

「…………完敗だよ。降参。惨敗惨敗」

そう言った束の視界は、目の前ということもあって暗がりの中でも

何とか黒装束の姿を確認することができた。もちろんやつと暗がり
に慣れてきたのが主な理由だが。

背丈は自分よりも低い位は分かった。立ち居振る舞い等に関しては、
束は認証の外である。そういうことで以って確認することができる
のは、千冬のほうだ。

すると黒装束はゴーグルのような何かと布を乱暴にとって覆面も外
した。その姿を確認して、束の頭は真っ白になった。

「……………何をしているんだ、篠ノ之束……………」

呆れたような法師のつぶやきも、この時ばかりは耳に入ってこなか
った。

篠ノ之束が最も消したい人間の顔が、そこには存在した。

第十二話 ？（後書き）

お疲れ様でした。

何かありましたら、作者まで。

第十三話？（前書き）

更新です（忙しいことを予測して予約掲載なのです！）
相変わらず進まないですね、この作品。

……見捨てないくださいね？（うざい）笑（）

2011/06/24 誤字訂正

2011/07/01 誤字訂正

第十三話？

何かの間違いだと思いたかった。そこで俺は、細部の確認作業に移る。のだが、現実はやはり非情だった。

どんなに照合を重ねても、一致してしまふのだ。篠ノ之束という人物に。声の特徴、呼吸の仕方、重心の位置、眼球の動き、呼吸方法等々。どれをとっても、だ。

これは本格的に、目の前の女が篠ノ之束だと認めなければならなかった。

では、こいつは一体何のためにここに来たのか？ そのことについて俺は考えを馳せる。

長く入院していた弟のことが心配だったから？ これは早急に却下。時々面会に来た唯一の保護者のような人間曰く、彼のものは常識でくくれる人間ではないらしい。そもそもの話として、病室で一度会って以来顔も見せていない人間が夜中に見舞いというのは怪しすぎる。面会ならば普通の時間に来ればいいのだ。消灯時間はとくに過ぎており、施錠もきちんとなされているのだ。どこをどう見てもおかしい、と言わざるを得ない。

ではこの病院になにか目的の物でもあったのか？ ということ仮定しても、何も思い付かない。金目のものがある病院ではない、とみている。そもそも病院なのだから研究用の高価なものではなく、実験に耐えられる安価なもの好まれるからだ。そしてこの病院に有名人がいる、といったわけでもない。

ではいったいこの人物は何をしに来たのだろうか？

「ふふふ。それはね……」

俺の問いかけにもつたいぶるようにして、口を閉じた。危険性がな
いとは言えないので、一応警戒している。篠ノ之束の腰元について

いた小さな小瓶はすでに回収してある。何やら危険な感じのするものだったし、何よりもふとボディチェックをしていた時に一番目についたのだ。小さいということ侮るなかれ。人間殺そうと思えば小瓶ほどの毒で殺すことも不可能じゃない。その毒が薄い場合追加で何かをしなければならぬという点で手間が増えるが。篠ノ之束は腰元に手を伸ばして、不敵な笑みを濃くする。

「……偽物をね、殺しに来たんだよ？」

偽物。つまりこの篠ノ之法師の体に潜む別人、俺のことだろう。暗殺、とみていいだろう。ではいったいどのようにしてこの女はそれを殺すつもりだったのだろうか？
力があるようには思えない。初めて会った時の小競り合いでもわかつた通りに篠ノ之束に尋常なる力なるものは存在しない。ゆえに素手での犯行、というのは却下。筋力などついてないに等しいこの女では、どんなに頑張ったところで最近ようやく少しはまともに動けるようになってきたこの体になうはずはない。毎日鍛えているということとは、伊達ではないつもりだ。そこに付加条件として慢心などしなければ、だが。そしてもっとも言えることが、それほどの不確定要素に頼らなければならぬ作戦に身を投じるほど、篠ノ之束は愚かではないだろう。

では近接兵器を使えばどうか？ たとえばナイフや包丁、はたまた拳銃といった飛び道具まである。が、これも却下。まったくもってそのような準備をしているようには思えないし、そもそもにして多大なる痕跡が残ってしまう。証拠が残ればいずれ犯行は発覚する。わざわざ夜の病棟のカギをこじ開けて忍び込んで来たこの女がそんな愚は犯すまい。

残ったひとつが多分ビンゴなのだろう。そしてそれは天才という人間が証拠も残さないように作った特製品。……本格的に嫌な予感がある。

よもやあれではあるまいな？ 史上最低の暗殺兵器として開発された瞬間に世間に公表することはおろか、闇の中へと葬り去り、さらに当時の関係者たちを丸々始末せざるを得なかった、魔性の薬。想像を絶する最悪の未来に、一度生唾をのむ。

篠ノ之束は腰のものを探している。が、その顔がゆがんだ。どうやら物が無いのによろやく気が付いたようだった。やはり遅い。普通ならばもっと早く気に掛けるはずだ。用意周到な性格のこの女のことを考慮すれば。

「……ねえ、ビン知らない？」

「……知らないな。その中に入っているであろう毒薬もな」

「……」

未恐ろしい、凶器が充満した瞳が俺を刺し貫く。欲望にまみれ、憎悪におぼれ、ただひたすらに狂ったものが辿る末路状態の瞳。それらからは嫌悪以外しか感じられない。……恐怖？ なぜ感じる必要があるのか理解できない。もはや攻撃手段は奪われているのだ。いや、とそこで考え直す。確かに簡易検査は行ったが、それだけだ。服の中ぐらいならわかるが、さすがに眼球などに隠されたら見つかるわけがない。殺すのであれば替えなどいくらでも用意しておくのが常だろう。

……… いったい俺は何を油断していたのだろうか？ 平和すぎる空間で生活することによって、肉体面だけでなく精神面まで汚染され始めている。考えらるる子脳性を考慮せずに事に臨む愚か者の愚を誰であろうこの俺が犯した。

……… このままではまずい。深呼吸ののち、俺はその瞳を真っ向から睨みつける。

「……」

「……殺すよ？」

「できるならばやってみろ」

その言葉に反応したのか。篠ノ之束は急激に立ち上がりアタツシユケースを開いた。

勝負は一瞬で決まる。篠ノ之束がアタツシユケースから取り出したものを拡散させなければ、俺の勝ちだ。細心の注意を払いながら、俺は篠ノ之束に襲い掛かった。

第十三話？（後書き）

お疲れ様でした。

何かありましたら、作者まで。

第十四話？（前書き）

今日も更新です。

そしてまだ終わらなかった篠ノ之束編。

……というか、話が進んでおりません。

覚悟してお読みください！

総合得点300を超えた！ と思っただけで400を突破している
という…… 本当になんさんありがとうございます。

第十四話？

遅い。

開いたその手を使い、ひねり上げる。が、その努力の甲斐もむなしく、威力が圧倒的に足りない。篠ノ之束の腕にねじ切るところか、少々顔をゆがませるのがやっとだ。やはりまだまだ力が戻り切っていない。鍛えていない素人に耐えられるとは、相当の屈辱だ。

今はそんなことを言っている場合ではない。篠ノ之束から繰り出されるやる気のない蹴りを躲す。蹴り上げに使用されたその足を持ち上げてバランスを悪くさせる。

案の定体勢を崩した束を押しして転倒させ、そのから空きのみぞおちにかかとを落とす。

現状で最も威力のありそうな攻撃だ。それも人間の弱点になりそうな部分に妨害なしに入れたのだ、今繰り出せる本気の一撃を。これで効果がなければあきらめるしかないだろう。予想通りに効いたらしく、篠ノ之束は呻いた。

外道？ だからどうした？ そんなちんけな称号を恐れるがために殺されていたのではただの笑い話だ。いや、それすらにもならないか。

篠ノ之束は本気で俺を殺しにかかっている。何やら怪しい薬と思しき物まで使って、である。加減してやらない理由など、どこに存在するのだろうか？ もしそれでも女性は云々と語るやつがいるならば言うておく。死んでしまえ、と。

「……っ！」

うめき声さえあげられず、ただ篠ノ之束は悶える。苦しがつている束に今度はつま先蹴りを脇腹にもう一度お見舞いする。その口から

とんだつばなど気にしてはいられない。無視して、そのまま頭をつかんで強引に先ほど掏ったビンを見せる。

「これは一体なんだ？ もちろんただの毒薬ではないのだろうか？」
「……」

俺の問いかけも聞こえなかったのか、それとも聞かなかったことにしたのか、篠ノ之束は何も言わない。
まあ当然の反応といってもいいだろう。わざわざ自分が用意した切り札の正体を進んでばらそうというバカはいないだろう。

「……」

相変わらず、篠ノ之束は沈黙を保っている。まあ通常のやり方でのこのものの正体を簡単に答える、などという甘い見通しなど持っていない。自白など論外だ。

ではどうするのか？ 至極簡単な話だ。喋らないのであれば、喋りたいという状態にさせればいいのだ。

本当にあきれるほど単純な話。女なんてものは、大抵が恫喝でか拷問で何とかなる。訓練されたものでも落とせないということはない。……のだったのだが。この非力・未成熟な体ではそうもいくまい。そんな行動を簡単にとらせてもらえずもない。人間、必死の力には目を見張るものがあるのは飽きるほど見てきた。いったいどうしたらいいものか……。

「これはまさか、俺の細胞が入っていたりはしないだろうか？」

ただの謙かけだ。引つかかるとは到底思えない誘導尋問。むろん、目的はそこにあるのではなく、相手の反応を見ることにある。殺気を出して、相手の身体、その中でも特に瞳孔に注視。わずかな揺ら

めきさえも逃してやるわけにはならない。

「……………」

と、意気込んだはいいものの、明らかな反応を示した。……あんな下手な鎌かけが通用するとは思わなかった。というよりも、通用すると思いたくはない。意気込んだ自分を問いただしたくなる。

「……………反応ありか。お前作ったのか？」

下手な三文芝居。正直な話やっていて虚しくなる。が、追求するためには続けねばならないだろう、まことに遺憾ながら。俺のできる限り絞り出した低音（明らかにソプラノの音域だった）を作り、俺が導き、たどり着いた最悪の予想を宣言する。

「世界でたった一人だけに有効な、最低最悪の暗殺兵器を」

それに名前はない。正確にはないのでなく、つける前に葬られた。あまりに危険すぎたために。

細胞と特定の材料さえ手に入れば簡単に作れてしまう。故に気に入らないものをいとも簡単に葬ることができた。周りの人間を一人も巻き込むことなく、である。

その効果の決め手は、本人の細胞にある。その細胞にだけ反応するように合わせて毒素を持たせることで、世界でただ一人に有効な暗殺兵器が完成したのである。ただ大量に散布すればそれだけで事足りる。周りの人間には何の影響を及ぼさないため、大気中にどれだけでも撒こうとも、まったくもって問題ない。周りのプロの護衛でさえも何の役にも立たない、特別な方法も必要ないので暗殺者も何も必要ない。文字通り最強の暗殺兵器だ。

故に葬られたともいえる。たとえどんなに大量の人間を葬っても、

世に出すわけにはいかなかったのだ。これが世に出ると、もはや要人は死に絶えるだろう。

たくさんの研究者がしのぎを削って作り上げたそれらを、この女は一人で完成させたというのか？

反応は、顕著だった。

瞳孔が揺れて、顔をそらした。腕を後ろに回して、床を使って暴れ始めた。

この薬を開発したこの女を、世の中に出すわけにはならなくなった。扱いの難しさは想像を絶する。……本当に、頭が痛い。

やはり、か。当たってしまった結果に戦慄しながら、この女をどうするべきかを思考を開始した。

第十四話？（後書き）

お疲れ様でした。

何かありましたら、作者まで。

第十五話？（前書き）

今日もこうして更新です！

そしてなんとPV十萬突破！ 皆さんののおかげでここまで来れました！ 本当にありがとうございます！

……まだ終わらない篠ノ之束のターン。皆さん、もうしばらくおつきあいください……。

第十五話？

篠ノ之束は冷静でいられなくなったのか、急所に入れられたにもかかわらず暴れている。が、影響があるらしく、俺でも押さえられない程度のものではない。……というか、これを狙ったのだがな。

「……………」

やがて抵抗も無意味だと悟ったのか、力を抜いて脱力した。瞳に諦めをともして、渋々といった形で語り始めた。

「……………そうだよ。束さん特性。ほかの研究もあつたから片手間作業だから一週間もかかっちゃったけど、間違いなく束さん一人の功績だよ……………。いったい何を危惧しているのか知らないけれど」

「……………そうか。そしてこれの存在を知っているものは？」

「……………いないって。束さんが作って、束さんが自ら管理して、束さんがわざわざ手間をかけて此処にじさんした。……………今君の元にあるそれが、まさに君の細胞、ううん。本物の篠ノ之法師の細胞が入った、君を殺すだけの兵器だよ。証拠も何一つ残らずに君はこの世からいなくなるはずだった。……………計画は失敗だけだ」

どうやらその点においては信用してもよさそうだ。目の前にいる篠ノ之束という人間性は、あらかじめ織斑千冬から耳に入れている。一人の意見をすべて信用するのは危険極まりないが、こいつが他人を人として見ないという話を聞いているから問題ない。今も俺に対してとげとげしい、というのも信用する一つの理由になっている。さて、次はこの女の始末である。まさかここで始末する、などというわけにはいかない。どう頑張っても証拠が残りそうだ。そもそも遺体を引き摺っていけるほどの力は残っていない。この時点で論外

だ。

だがこのまま放っておく、なにもしないという選択肢はない。今の時点では何も害がないが、これからもこうだという保障はどこにもない。何らかの対応をしなければならぬのだが……。

この始末をどうやってけじめをつけようか、と考えていると、篠ノ之束が呻いた。

「どうして」

感情のこもった声だ。少なくとも今までのような投げやりな感じではない。どちらかというと憎悪に近いものに感じる。

「どうして、どうしてどうしてどうして！ どうして奪ったんだよ！ 束さんの大事な、世界でたった一人の大事な弟を、ほーくんを！」

組み敷かれたまま、篠ノ之束が絶叫する。どうやらまったくもって周りのことなどお構いなしらしい。これだけ大声を上げればほかの病室で寝ている人間に気づかれるのは時間の問題だというのにもかわらず。

完全に憎しみに支配された束には、もう何を言っても聞こえないだろう。それこそ価値観を崩壊させることではない限り。

……惨めで、哀れな女だとは思う。世界で唯一といっていいほど愛していた弟が事故にあつて、それでももう目覚めないかと思つた矢先目覚めの知らせを聞いた。そして実際にあつてみたら全くの別人だつた、という何とも創作がかつた悲劇の物語だ。同情をしてもいいが、間違つても情に流されはしない。そもそもこうなつたのは少なくとも俺の責任ではない。まったくもってこちらも混乱しているのだから、こちらが一方的に悪いと当たつてくるのは筋違いだ。

それにこっちは命までかかっている。相手の事情なんて考慮してや

「黙れ黙れ黙れ！」

「人の話は最後まで聞くことだ。」

貴様の様な人格破綻者に、なぜまともに付き合える？ 無理だな。

お前は利用されていたんだよ、篠ノ之束。誰でもない、本当の貴様の弟によつてな。せいぜいが便利な道具程度にしか思っていないかつたんだよ。残念だな、片思いが破れて！ ははは、ははははははははは！

最大限の侮蔑と、嘲笑を送りつけてやろう。これで答えないのであれば大したものだが、ふつうは信じられない事実にはシヨックを隠せないものだ。

「……嘘だ！ ほーくんが、本物のほーくんがそんなこと言うはずがない！ 黙れ偽物が！」

黙れ！ といった時点ですでに聞き入れている証拠だ。なぜならその言葉は事実を聞き入れたくなくて口を封じるといったことなのだから。

思った通りに篠ノ之束は混乱し始めている。自分の根幹だった支柱が揺らいでいるのだ。

不安定で、崩れやすい。付け込まない理由が存在しなかった。たとえ鬼と思われようと、な。

「思い当たる節があるのだろうか？ お前の研究したものを見た法師の目をきちんと見ていたか？ お前の話を聞いている奴の顔は確認したか？ お前の話に相槌を打つ奴は本当に楽しそうにしていたか？ どうなんだよ、篠ノ之束？ さあ思い出してみろ！」

「違う！ ほー君はいつも束さんに優しくかった！ お前とは違う！ 偽物なんかと！ 贋作なんかとは違うんだ！」

あと一押し、といったところだ。だんだん押しが弱くなってきてい

る。根幹の揺らぎが大きくなって倒壊の心配が出てきたからである。人が支えを失って壊れる時の典型的パターンだ。それに持っていきさえすれば、俺の勝ちだ。あとはこの女が自殺するなり、壊れて使い物にならなくなったり、治ったりしても一切俺には実害はない。そうなればようやくこの面倒事から解放されるのだ。さつさと寝たい。子供の体であるからか、先ほどから視界がかすむのだ。こんな時に、子供の体は不便に感じる。

「お前は所詮、その程度なんだよ。一番大切なものにも利用価値があるとしたか思われぬほどの、その程度の価値しか付属していないんだよ」

心がきしむ音を、俺は確かに聞いた。本当に簡単な作業だった。まどろっこしいことをせず、初めからやればよかつたかもしれない……後の祭りだが。やはりどこか突き出している人間というもの、非常にもろさというものを抱えていることが多い。この女の場合は、身内への異常なまでの執着心だった、というところか。

「は、ははははは……あははははははー！」

壊れた。任務完了、ともいうべきか？ 誰に依頼されたというわけでもないが。

篠ノ之束は虚ろな視線を俺に向けた。その眼は濁りがなく、ただ透き通っている。虚しいほどに、からっぽだった。

第十五話？（後書き）

お疲れ様でした。

何かありましたら、作者まで。

第十六話？（前書き）

…… 終わりません。まだ続きます。引つ張ります。

…… そして短い……。

スランプ、かもしれませんが。

…… 思ったよりも筆の進と書いてもキーボードですけどみが悪いんです。済みません。

第十六話？

「無様だな。理解しただろう？ 本当に守りたいものだとしても、本当に愛しているものだとしても自分の味方であるとは限らない。むしろお前はそうやって利用されるしかないんだよ。理解されない、理解できない。そうやって思われつつも便利だからというその理由だけで、甘い顔をして近づいて利用される。能力だけを愛されるんだ。」

本当に哀れな女だよ、お前は」

「ねえ、聞いていい？」

まったく高低差がない、単調な声で訪ねてくる。こうしたのは俺なのだが、この声を聞くのは妙に気味が悪い。

反省？ するとも思っているのか？ 別に間違ったことはしていないし、法に触れているわけでもない。人をバラバラにしたわけでも、拷問のような肉体的苦痛を与えたわけでもない。かわいいものだ、人の考え方を変えたというだけなのだからな。

「私は、間違っていたのかなあ？」

篠ノ之束は疲れ切った、老母のような表情で漏らした。

間違っていたか。この世界に、本当に間違いなどあるのだろうか？ 確かにこの社会においては過ちという定義は細かく設定されている。しかしその効果というものは人間社会という限定的な範囲でくくられたもの物でしか作用しない。言ってしまうえばその範囲を飛び越えてしまえば、その公約は何の意味もなさない。そのような事実が存在する、ということをお前は理解している。

「間違いも何もない。」

そもそもお前は勘違いをしている。お前が愛していたのは、本当に篠ノ之法師なのか？ 誓って言えるのか？」

「……」

呆れているのか、反応を返す気力さえないのか、沈黙を守り続ける。たぶん後者なのだろう。まあ、黙っていたの方が都合がいいのであえて気が付かなかったふりをするのだが。いちいち面倒な文句を言われたところで時間の浪費にしかならない。

「そもそも、お前はなぜ篠ノ之法師に執着する？ ああ、答えなど初めから聞いてしないのだから返答をするな。ただの確認事項。返答などすれば圧倒的に手間が増える。面倒をかけさせてくれるな煩わしい。」

それはな。お前がそれを愛するということで自分という他人との違うものとの比較にしたかったからだ。他人に興味のないお前は、自分との比較にそれを使おうとはしない。そもそも他人は人とは認識できないのではないか、お前は？ その中でどうして自分なんてものを見つけ出せるんだ？ なあ、どうなんだ？

考えてみれば簡単なものだった。人間は他者なしでは生きてはいけない。個人というものは必ずしも他の対象というものがあるからこそ成り立つものだからだ。他と、私は違う。私は周りとは違う存在なのだ、ということ。それを証明するために他人と自分を比べる。意識的なこともあれば、無意識のこともある。人間というものは比較なしでは存在なし得ないんだよ。そしてお前はたまたまその相手に、篠ノ之法師という人間を選んだだけだ。そうすることで自分という自我を確立していったんだ。お前に幼少期を過ごしたという記憶はあるのか？ きつとないはずだ。それが証明。お前も結局は、篠ノ之法師という存在を利用してただけだ。

……はっ！ よかったな、お似合いだぞ、お前ら？」

……喋り過ぎた。口が乾燥するくらい、開けていたのだ。らしくない、本当に。
まあこの抜け殻がどうなるかと、俺には関係ない。そろそろ本格的に睡魔が差し迫ってきたので。ベッドに向かうことにする。ふらふらとしているのは、ご愛嬌だ。

「ねえ」

「手短にしてくれ。いい加減に仮眠でもなんでも睡眠を摂取したいのだ」

「じゃ、一つだけ」

何個も聞く気が合ったらしい。とりあえず、先ほどよりは感情がこもっている。最低限の起動を果たしているらしい。

「どうして、君はそんなに達観しているの？」

復活して初めての篠ノ之束の発言は、何やら哲学的な問いかけだった。

どうやらそれほどまでに追いつめられているらしい。何度も服用した溜息ひとつ、俺は解答を導き出した。

第十六話？（後書き）

お疲れ様でした。

何かありましたら、作者まで。

第十七話？（前書き）

……長かった篠ノ之束編も、ようやく終了です。
終了なんですが……。本編を見れば、たぶん言いたいことは分かる
と思います。
覚悟して、お読みください。

第十七話？

達観、か。俺のそれは達観というよりはむしろ……。

「諦めだ」

「え？」

「達観しているように見えるのかもしれんが、結局はあきらめてい
るだけだ。どんなに取り繕っても、弾丸一発脳を直撃すれば死ぬた
だの人間でしかない。それを理解しているというだけだ。俺にはな
せることとなせないことがある、ただそれだけだ」

「そっかあ……束さんもなれるかな、そんな風に？」

「知らん。勝手にやってくれ。俺には関係ない」

くすくす、と弱弱しいが、確かな笑い声。どうやらもう復活してき
たらしい。それとも価値観が壊れて再構築されたのかもしれない。
まあ、どちらにしても関係ない。勝手にやってくれ、知らん。

「そっか」

「……」

何もいうところはない。無言で布団にもぐりこんで、目を閉じる。気
配がだんだん近くなってきたので仕方なく、俺は目を開く。その作
業さえ、億劫だ。本格的に体が睡眠を必要としている。

「明日にしてくれ。稼働限界時間だ」

「うん。直ぐ済むから。一緒に寝よ」

「……」

今この女は、なんといった？ 聞き間違え出なければ、一緒に寝な

いかと誘われたように感じた。

あまりに罵倒して、とうとう壊れたか？ 自分から害した相手に近づきに行くなど、マゾヒストではないだろうか？ ここまで崩壊している、さすがに罪悪感を感じるかもしれない。……いや、ありえないが。

そして何より忘れているかもしれんが、この女は入院患者でも病院関係者でもない。招かれざる不法侵入者だ。そんな人間がここにいるとなれば、身内俺にまで飛び火するのは想像にたやすい。

やはり頭の回線がショートしてしまっただらう。

その女は、なぜか不服そうにほほを膨らませた。……意味が分からない。

「変なこと考えているでしょ？ 束さんにはわかるよ？ 少なくとも頭がおかしいんじゃないかこいつ、って考えているってくらいには」

「理解が早くて助かる。就寝するからどけ。そして消えろ」

「……。やあんツンデレさん！ だから、一緒に寝よって言ったんだよ？ 束さんの言っていることわからない？」

わからないのではなく、わかりたくない。それを込めて冷めた目で見ても、態度は一向に変わらなかった。罵倒して身もだえされるのは、正直怖気が走る。

だがそれだけにはとどまらず、むしろヒートアップしたのかその視線を受けて体を近づけてきた。人の体温を感じて、暑苦しい。眠気があるというのにもかかわらず異常に熱い物体が横に存在する。これは、はつきり言って拷問に等しい所業だ。

このような嫌がらせを断行するのは、まだ折れていなかったらしい。今までの演技、か？ するとなんだ、俺はそれにてつきり乗せられた道化じゃないか っ！

その考えにたどり着いた瞬間、血の気が引いた。この女は危険すぎ

る。俺が想像もしなかった形で、俺を破って見せたのだ。驚愕を禁じ得ない。

「どうしたの？ 顔色が悪いよほー君？」

この女、できる。確信した。これだけの嫌がらせ耐えて置きながら精神崩壊したふりをして欺き、なおかつ顔に満面の笑みを浮かべて俺を”法師”と呼ぶほど、気力が余っているのだ。眠気が先行して尋問を行うには心もとない。体術も眠気のせいであつたくもって役に立たないだろう。そして筋力もつてのほか。

状況は、これ以上ないほど最悪だった。

未だかつてこれほどまでに絶望的な戦いを強いられたことは、ない。仲間と依頼人に裏切られてはめられ、殺さんと囲まれた時も取れほどではなかった。それは確かプロの暗殺者が三十人いたはずだから、この女はそれにひつてきする、だと……！

混乱の極みにある俺をあざ笑うかのように、くすくすと微笑。……
終わったかもしれない。俺は初めて、絶望という感情を味わされた。

「……くすくす。あはははは！ 混乱しすぎだよ、ほー君！ 束さんがそんな物騒なこと考えるわけじゃないか じゃないか

私はいつだってほーくんの味方だよ？ これだけは、束さん自信を持って言えるよ！」

「……」

いかん。混乱しているせいか考えがきちんと整理されない。今の混乱という感情は戦場においてもっとも禁忌とされる感情であるはずなのにまつたくもって消える気配がない。どうなっているんだ。いたい整理してみよう。

篠ノ之束（以降束とする）、俺を葬りにやってくる 襲撃を察知し、部屋の前で待機 襲撃、束を拘束 身体検査を実施し、史上最悪の

薬品を回収 束、発狂 この隙を利用し、ゆさぶりをかける 束、
価値観崩壊 実はフェイクで、俺が追いつめられている……。
……。本当に、混乱している。どうしようもないことを自覚した俺
は、その考えを放棄した。まったくもって政界に行きつくとは思え
なかったのだ。悩んでいても仕方がない。情報収集しなければとい
う思いに駆られ、口を開く。

「どうしたんだお前は？ なあ篠ノ之束？」
「なあに、簡単だよ？」

篠ノ之束は妖艶に、まるで男を落とす熟練の娼婦のように笑って見
せた。

実際は拙い無理をした笑顔に見えなくもないが、言葉にはしない。

「ほーくんの子供がほしいんだよ？ 結婚しよ？ XXXXしよ？」

……。言葉が出なかった。とりあえず、篠ノ之束という人間が吹っ
飛んでいるということだけは再認識した。弟に婚約を申し入れるな
んて行為を平然として見せるとか、正気の沙汰ではない。

そして寝ようというのが睡眠のほかの意味をはらんでいたことに、
呆れの感情も混ざった。幼児相手にいったい何を期待しているんだ
お前、と。

第十七話？（後書き）

お疲れ様でした。

何かありましたら、作者まで。

第十八話 ？（前書き）

わけわからないうちに始まった束編の解説編（笑）

十五話あたりから。……ダイジエスト機能？ そんな便利なものありませんがな（笑）

……そして反省しない作者で申し訳ありません……。

総合得点なんと500超え！ ……この作品は、いったいどこに向かっているの？（混乱中）

嬉しい悲鳴ですが^^；

感想やアドバイス等いただければ、作者は狂喜乱舞しますんで！

是非是非！ ……ねだっているわけでは、ありませんよ？ ホントですよ！

大変失礼しました。本文をどうぞ。

第十八話 ？

篠ノ之束は、天涯孤独であった。

文字どおりも意味ではない。少なくとも束には両親と認識する物体はいた。最愛の弟も存在したし、親友の千冬も、その妹の夏織もいた。

だが、それだけだった。

理解できない。

それらの人々は必ず、そういう顔を作っていた。無意識だったり、意識してだったりと違いはあるけれども、誰もかれもみな同じ。誰一人として篠ノ之束というものを理解してはくれえなかったのだ。しかし、束はそれに気が付いていなかった。

面倒ながらにいろいろなことに最後まで付き合ってくれる友人。困った顔を作りながらも懸命に答えてくれた親友の妹。そしてよくべたべたと甘えてきた最愛の弟。それらに囲まれているだけで、彼女は寂しさも、孤独感も感じることはなかった。そういう風に、自分をごまかしていた。

精神的な孤独に囚われて、泥沼に嵌っていく。深く深く誘われ、やがて無限の螺旋に到達した。永遠に繰り返す、地獄と化す空間に縫い付けられて、陥った。

抜け出せない。抜け出そうにも

あまりにも深くはまり過ぎた。

自力では到底脱出不可能なそれを打ち砕いたのは、殺そうとした、最愛の弟そっくりの人物。”篠ノ之法師”だった。

わざわざ準備して用意したたった一人だけを殺す薬品をうばわれて、

組み伏せられた。

殺せない。

殺したい殺したい殺したい殺さなければ！ 殺さなければ、永遠に弟は帰ってこない！ そんな考えに取りつかれた束はもがく。

手足に全力の力を振り絞り、汗がにじみ出るのも気にせず。拘束をほどこうと必死の抵抗。

それでも、拘束がほどけるわけではなかった。前に急所に二つほど、重い攻撃をもらったことが影響していたのだ。

そのせいで、うまく動くことができない。暴れば暴れるほど呼吸は苦しくなり、腹部を中心とした各部の痛みは膨れ上がる。拘束する力はますます強まるばかりで、一向にゆるくなる気配すらない。

いったいどこにそんな力を隠し持っていた！

束は絶叫しなくなった。ついこの間までは、まともに歩くことすらできない人間にすぎなかったのだ。それもそのはず、彼の体は半年間眠りについたままだったのだ。筋肉は衰え、間接は固まる。動けるはずもない。

それが今ではどうだ。大人といっても過言ではない束の体を、苦も無く押さえつけていられるのだ。束が怒るのも無理はない。それだけ必死に彼がトレーニングを積み重ねて運動能力を確保したということなのだが、当然のことながら篠ノ之束の知るところではない。なぜならばあの日から一度も彼に会っていないのだから。

そんな束をあざ笑うがごとく、彼は冷酷な視線で見下ろしていた。

「知らんよ。死んだものを返せと言われても。それに何を勘違いしている。貴様が俺に命令だと？ 冗談も大概にしておけ。なんでお前なんかにつきあつてやらなければならぬ。大切なものを奪われた？ お前の管理不足だろうに」

脳が沸騰した。なんとという無責任な言葉だろう。人の、最愛の命を奪っておいで関係がないと言い張る。なんとという厚顔無恥。何たる暴虐。ふつふつとわいて出る思いに逆らうことなく従って、束は声を張り上げる。

「殺す！ 殺す殺す殺す！ 絶対に殺してやる！」

「無理だな。貴様では殺せんよ。」

それにな、本当に篠ノ之法師は貴様のことを全面的に信用して付き合っていたと思うか？」

「黙れ黙れ黙れ！」

その言葉に、一瞬だけ脳が制止した。思考の空白が生まれたのを機にすることなく、束は罵声を浴びせ続けた

その場性にもまったく堪えることはない。飄々と涼しい顔して受け流している。唇の端を釣り上げて、なおそれは言葉をぶつけてくる。

「人の話は最後まで聞くことだ。」

貴様の様な人格破綻者に、なぜまともに付き合える？ 無理だな。

お前は利用されていたんだよ、篠ノ之束。誰でもない、本当の貴様の弟によってな。せいぜいが便利な道具程度にしか思っていないかったんだよ。残念だな、片思いが破れて！ ははは、はははははははははは！

……思考が停止した。思いもよらない言葉を浴びせられて、それを翻訳することを脳が拒絶した。訳せば何かが崩れ落ちてしまう。そんなことさえよぎった。

「思い当たる節があるのだろうか？ お前の研究したのを見た法師の目をきちんと見ていたか？ お前の話を聞いている奴の顔は確認したか？ お前の話に相槌を打つ奴は本当に楽しそうにしていたか

？ どうなんだよ、篠ノ之束？ さあ思い出してみろ！」

一瞬の沈黙ののち、束はそれを否定した。なんとしてでも否定しなければ、付け込まれるとわかっていたからだ。

「……嘘だ！ ほーくんがそんなこと言うはずない！ 黙れ偽物が！」

それを言い切るのが精いっぱい。思考はそんなはずがないと断言しているが、それでない考えがなぜか頭をよぎって離れない。ぐるぐると徘徊し、混ざり合い、溶け合って束の冷静な思考を打ち砕こうとしていた。

それに勝機を見出したのか。彼は追撃の手をさらに激しくして、束を追い詰めていった。

「思い当たる節があるのだろうか？ お前の研究したのを見た法師の目をきちんと見ていたか？ お前の話を聞いている奴の顔は確認したか？ お前の話に相槌を打つ奴は本当に楽しそうにしていたか？ どうなんだよ、篠ノ之束？」

ぐるぐる。床が抜けてしまい、自分が立っている場所さえも分からない。浮いているのか地面に足をつけているのかさえも分からないまま、ただ否定の言葉を吐き続ける。

「違う！ ほー君はいつも束さんに優しくかった！ お前とは違う！ 偽物なんかと！ 贋作なんかとは違うんだ！」

彼の言葉を理解しなくて。その裏に隠されている事実を否定しなくて。彼の言葉をどんな手を使っても受け付けないように、束はとうとう世界を閉ざした。

それでも魔物は、束のはるか先を言っていた。世界を拒絶した束の意識を急激に引き戻し。耳に唇を近づけて宣告した。それは、断罪以外の何物でもなかった。

「お前は所詮、その程度なんだよ。一番大切なものにも利用価値があると思われないほどの、その程度の価値しか付属していないんだよ」

束の世界が、音もなく崩れた瞬間だった。支えを失い、信じていたものに裏切られ、何もかもが消えていった。

「は、ははははは……あはははははは！」

漏れ出たのは、乾いた笑いだけだった。

第十八話 ？（後書き）

お疲れ様でした。

何かありましたら、作者まで。

第十九話 ？（前書き）

普段の三倍以上の謎テイストな仕上がり。……急いで書いたからですはい。

まあ意識してやったというのもあるのですが、ね。

一日に二話アップって本当にきついですね^^； できる皆さんすごすぎですから……^^；

いつもよりも長め。そして篠ノ之シリーズ最長。

2011/06/30 誤字訂正

第十九話 ？

「無様だな。理解しただろう？ 本当に守りたいものだとしても、本当に愛しているものだとしても自分の味方であるとは限らない。むしろお前はそうやって利用されるしかないんだよ。理解されない、理解できない。そうやって思われつつも便利だからというその理由だけで、甘い顔をして近づいて利用される。能力だけを愛されるんだ。」

本当に哀れな女だよ、お前は」

否定する言葉など、どこにもない。抗うすべまなく、ただそれを受け入れる。

苦痛ではなかった。すべてがどうでもいいことのように感じられた。世界すべてが、欺瞞だった。思い込むことだけで完結し、それを是とし、生きてきた過去は破られた。

何もない、抜け殻にすぎない。生きているとは到底思えない残骸が、まるで目の前に存在するかのようだった。

嘲笑さえ生ぬるい。侮蔑では足りない。言葉で表すにはあまりにも過ぎた感情が到来し。

それを、無視した。

あの瞬間で、篠ノ之束という人間は死んだのだ。たとえいま生きていようとそれは同じ。命があるからといって生きているわけではないし、命がないから死んでいるとも言わない。人間が生きていると認識すればそれは無機物であろうと生存し、死んでいると認識すればたとえ目の前で呼吸しようともそれは生きているという対象にはならない。世界とは、結局のところ各々一人一人なのだ。一人一人に見えている世界があり、認識がある。

ただそれだけのこと。何でもない。死んだというのさえも錯覚。気が付かないふりをしていただけで、篠ノ之束はとっくの昔に死んで

いたのだ。生きていることに興味を失い、そしてやることもなく思考におぼれ、ただただ時間を浪費しているうちに感覚さえあいまいになって。最後はとけるようにして消失した。なんとばかりかしい結末。この場所にいるのは、篠ノ之束という人間が残していった残留物にすぎなかったのだ。

「ねえ、聞いていい？」

自分の声ながら、抑揚のない奇妙なものだった。

自分。その考えに、笑った。まだ篠ノ之束だと思っっているらしい。おかしすぎて、これ以上笑う気にすらなれなかった。

視線の先に映った彼に、反省の色はうかがえない。するとも思っているのか？ とでも思っているかのように両腕を組み不敵に笑みを浮かべている。確かに、彼は法を犯しているわけではない。束をただ罵倒したというだけなのだから。そして彼の体の年齢からして、罪に問われることもない。たとえそれが精神的な殺人であろうと。まあ束の場合は殺害というよりは自殺という方が正しいのだが。

「私は、間違っていたのかなあ？」

疲れた。そう、束は生きていると錯覚することにつかれたのだ。自分の人生でない。その幕引きなど、何をためらうことがあるのか。こういう時に限っていらぬ生存本能が仕事をやる。死にたいと思つたところで、それは許可したりはしない。人間というものに生まれてきたゆえの宿命を背負わされているのだ。

間違っていた。此処にいることすべてが間違っている。篠ノ之束として生きてきた日々も。つながりも、思考も何もかもすべて。

そんな”篠ノ之束”の考えとは全く別に事態は進んでいく。思考の時間を現実が待ってくれるほど、甘くない。

「間違いも何もない。

そもそもお前は勘違いをしている。お前が愛していたのは、本当に篠ノ之法師なのか？ 誓って言えるのか？」

「……」

いまさら過ぎる質問だった。”篠ノ之束”は篠ノ之法師という人間を愛していた。それは彼女が生前につながりを持った唯一の人間だったからだ。それ以外に理由など考えられない。

織斑千冬やその妹の夏織も同様。すると彼女が入れ替わったのは、あまり時間をおいていないということだ。

この思考をする”篠ノ之束”は元の篠ノ之束ではない。思想も記憶も情報も継承した、人格の一つと考えるのが妥当だった。いったいいつ本物といて変わったのかはまったくもって認知していないが、その事実が気が付いてしまったのだ。

私は、篠ノ之束ではない。ということに。

一度落ちてしまえば簡単。泥馬まで陥るのはたやすい。あつという間に蜘蛛の巣にとらわれ、死期を待つ蝶と化した。

「そもそも、お前はなぜ篠ノ之法師に執着する？ ああ、答えなど初めから聞いて shouldn't のだから返答をするな。ただの確認事項。返答などすれば圧倒的に手間が増える。面倒をかせさせてくれるな煩わしい。

それはな。お前がそれを愛するということと自分という他人との違うものとの比較にしたかったからだ。他人に興味のないお前は、自分との比較にそれを使おうとはしない。そもそも他人は人とは認識できないのではないか、お前は？ その中でどうして自分なんてものを見つけ出せるんだ？ なあ、どうなんだ？

考えてみれば簡単なものだった。人間は他者なしでは生きてはいけ

ない。個人というものは必ずしも他の対象というものがあるからこそ成り立つものだからだ。他と、私は違う。私は周りとは違う存在なのだ、ということ。それを証明するために他人と自分を比べる。意識的なこともあれば、無意識のこともある。人間というものは比較なしでは存在なし得ないんだよ。そしてお前はたまたまその相手に、篠ノ之法師という人間を選んだだけだ。そうすることで自分という自我を確立していったんだ。お前に幼少期を過ごしたという記憶はあるのか？ きつとないはずだ。それが証明。お前も結局は、篠ノ之法師という存在を利用してただけだ。

……はっ！ よかったな、お似合いだぞ、お前ら？」

……なぜこの人間は話しかけてくるのだろうか？ もはや抜け殻になっ
てしまったものに興味の対象を見出すタイプではないとみていたの
に。そして激昂していたにもかかわらず冷静に相手のことを分析し
ている脳に改めて違和感を感じた。

まさか、抜け殻だと理解しているのか？

その考えに至った時に、”篠ノ之束”ひらめいた。

「お前が愛していたのは、本当に篠ノ之法師だったのか？」

これこそが確信をついていた法師の心情を代弁した言葉ではなかつたのだろうか？ そのうえで激昂させようとしたうえで話しかけてきている。これの意味とはいったい何なのだ。

思考する。篠ノ之束という最高の脳を使用して物事の解決を図る。メリット、なし。彼を殺そうとしていた人物を復活させようとしてどうするのだ？

……復活？ 徐々に考えがまとまりつつあるが、イマイチ想像の域を出ない。

「ねえ」

きがつけば、自ら口を動かしていた。死のうとしていたはずなのに、絶望にとらわれていたはずだったのに。それでもあがこうとしている自分を理解しながらも、その手をやめようとはしなかった。

眼をしょぼしょぼとさせている。子供ゆえの限界時間だろう。身体が睡眠を早急に必要としているので、長くは語れないだろうことは一目瞭然だった。

「手短にしてくれ。いい加減に仮眠でもなんでも睡眠を摂取したいのだ」

「じゃ、一つだけ」

何個も聞きたいことがあったのだ。が、どうも彼の限界近いのだ。とりあえず、咳きに感情がこもっている。もしかしたら何も無い”篠ノ之束”という人間の価値が分かるかもしれないのだ。

「どうして、君はそんなに達観しているの？」

これだけは、何が何でも問いたださなくてはならなかった。立場が同じであるうはずであるのに彼は冷静そのもの。至って平然としている。

いったい何が違うのか。残留物と人間では何が違っているのか？それを理解する手掛かりを、篠ノ之法師の名を騙る人間に探し求めたのだ。

それは、救いの手を求める赤子にも似ていた。

第十九話 ? (後書き)

お疲れ様でした。

何かありましたら、作者まで。

あとがきらしいことを一つだけ。いつも定型文だけでは味気ないですし。

タイトルは、一人の人間に充てられるわけではないんですよ？

…まあ、当然ですが……。

第二十話 ？（前書き）

七月に入って初更新です！

そしてようやく次から話が進む……いや、長かった……。

そしてIS インフィニットストラトスタグで三百作品おめでとう記念誰得番外編をひそかに執筆中。完成したらアップ、するかもしれません。

2011/07/01 誤字訂正

第二十話 ？

「諦めだ」

聞こえてきた単語を、初めは完読できなかった。いや、解読していたのにもかかわらず認めたくなかっただけののだが。なぜならそれは篠ノ之束が求めていたものと全くかけ離れたものだったからだ。

だから、思わず聞き返したくなつたのは責めるべきではないだろう。

「え？」

「達観しているように見えるのかもしれないが、結局はあきらめているだけだ。どんなに取り繕っても、弾丸一発脳を直撃すれば死ぬただの人間でしかない。それを理解しているというだけだ。俺にはなせることとなせないことがある、ただそれだけだ」

人間だと、彼は言う。あきらめているだけとも言った。いったい何に？ 簡単だ。世界というものに諦めをつけているだけだ。

人間は自分の目、脳を通じて世界をみる癖に、実現不可能なことが多い。それは単に世界を認識していると錯覚しているからだ。人間にとつての世界とは言葉であり、自分にとつての都合のいいモノの集合体でしかない。だから、個々によつてそれらは違うのだ。

世界など見えていない。そうありますようにと願って曇つたメガネで俯瞰しているだけにすぎないのだ。それを彼はやめて、あきらめるといった。その斬新すぎる考えはおそらく、篠ノ之束にとっては容認すべきものではないだろう。彼女は世界というものがこんなに思ひ通りになつてしまつてつまらない、と言つてみることをやめてしまつたのだから。

「そっかあ……束さんもなれるかな、そんな風に？」
「知らん。勝手にやってくれ。俺には関係ない」

そっぽを向いて面倒な様子だ。その様子さえ作っているように見え
てしまうのだから重症だ。

だがそれでいい。”篠ノ之法師”を憎んでいた”篠ノ之束”にはど
うしてもなれないのだから。

束は束で、自分は自分。違うものになどなれはしないのだ。

そこまで考えてようやく、笑顔を作ることができた。いや、作った
つもりもなかった。ずいぶんと笑っていなかったのが、久しぶりに
笑ったのだ。いや、初めてというべきか。

篠ノ之法師の表情に変わりは見られない。勝手にやってくれとで
も思っているのである。そして気合で押さえているようだが、ど
うもそろそろ限界らしい。律儀に待ってくれているというもがまた
何ともいじらしかった。

「そっか」

「……」

もうお前に言うことなんぞ何もいうとこはない、といった無然とし
た表情のまま無言で布団にもぐりこんで、動かなくなった。睡眠を
とるのだろう。それを知っておきながら、束は音を立てて接近した。
かぶっていた毛布を頭だけだした。目を開いた状態でしっかりとホ
ールドされていた。目元が先ほどとは比べ物にならないくらいにシ
ョボショボしている。開いている状態をキープし続けなければ今に
でも閉じてしまいそうだ。

「明日にしてくれ。稼働限界時間だ」

もごもごと口を少しだけ動かして言う。本当のところは半分も音を

まともらせていない。それが聞き取れるのは、東の身体故か。かなりのスペックを誇る体に苦笑を漏らす。

「うん。直ぐ済むから。一緒に寝よ」

「……」

シヨボシヨボしていた眼が、一気にひん剥かれた。彼のいまの心境を充てるのならば、この女は、なんといった？ というところだろうか。

その顔が物思いにふける。観察していて気が付いたのだが、彼は物思いにふけるときには必ず唇を少し動かす。おそらくは歯に合わせ、動いているのだらう。無意識に行っているであろう癖を発見でき、東は内心で喜びをあらわにした。

まともなところ考えていないことだろうというのは流石にわかってしまった。だからこそ喜びを大げさに表したりしなかったともいえるが。

次の瞬間、あまりにも失礼すぎる発言を聞くまでは、東の機嫌は非常によいものだった。

そう、「やはり頭の回線がショートしてしまったらしい」というその言葉を聞く瞬間までは。

これはさすがに失礼すぎる。不満を口にする代わりに意識して子供のようにほほを膨らませた。

法師はまったくもって意味が分からない、というように眉をひそめていた。……どうやら、今の一言を口にしたという自覚が存在しないらしい。そのことについての追求は残念なことにあきらざるを得なかった。

「変なこと考えているでしょ？ 東さんにはわかるよ？ 少なくとも頭がおかしいんじゃないかこいつ、って考えているってくらいには」

「理解が早くて助かる。就寝するからどけ。そして消える」

まったくもってにべもなく切り捨てられた。そのはずなのに、なぜか束の心は薪を追加された蒸気機関車のごとく燃え上がった。

「……。やあんツンデレさん！ だから、一緒に寝よって言ったんだよ？ 束さんの言っていることわからない？」

わからないのではなく、わかりたくない。お前は一体なんなんだという冷たい視線が、束を突き刺す。それだけ冷たい態度をとられれば、態度を変える？ 何をバカな、と束は一蹴した。そんなことで諦めるのは早すぎる。織斑千冬の態度だってこれとさほど変わりがないのだ。つまりそれは親愛のあかしとも言えなくもない。そう信じ込んでいくら罵倒を浴びせされても関係なかった。後ろそれらが照れ隠しのような言葉に聞こえてきて、思わず体を震わせた。珍しく法師の顔が引きつっている。というようも始めてみる表情だった。急いで端末で撮影して、永久保存フォルダに保存するのを忘れなかった。

そしてその作業の後で、法師に抱き着くのも忘れない。ぬくぬくとした子供特有の体温な高さは、されどとても心地のいいもののように感じられた。暑苦しいとは思わないのだが、どうやら隣の人物は違うらしい。不快そうに顔をして目ている。暑苦しいのか抱きつかれて苦しいのかは判断できなかった。

ため息をついてから、法師は顔色をがらりと変えた。何かとんでもない考えにたどり着いたのか、一瞬で血色がよかった顔から血の気が引き、青くなった。まるで信じられないものを見ているかのように目で、束を直視している。いや、それともその背後にある物体か。

そんな様子の法師が心配になり、束はあわてて声をかけた。背後のことは全く気にならなかった。

「どうしたの？ 顔色が悪いよほー君？」

顔色はかつてないほどに悪い。先ほどまでまったく書いていなかった汗を出し始めて、あの干冬に脅されても全く平然と保っていた呼吸まで乱れ始めている。何が起こったのかはまったくもって知るところではないが、この変化は異常すぎた。

何かの病気かもしれない、という考えを、束は打ち切った。信用なるかどうかは微妙な話だが、一応この病院の院長は名医として名をさせている人間である。それがいきなり発作を起こすような病気を見逃すとはさすがに考えにくかった。ではなぜこのように事態になっているか、といえば、勘違いの可能性が一番高い。

もしかして壊れたふりをして今までだましていた、なんて考えているのかなあ？

そこまで考えて、ありえそうな話だった。彼はどこか普通に見えて他人を過大評価する節がある。身体のこともあるのだろうが。

笑わずにはいられなかった。そう、隣でまるですべてが終わったなどという顔をされていたら。

「……くすくす。あはははは！ 混乱しすぎだよ、ほーくん！ 束さんがそんな物騒なこと考えるわけじゃないじゃないか じゃないか

私はいつだってほーくんの味方だよ？ これだけは、束さん自

信を持つて言えるよ！」

「……」

きよとん、という擬音が合致する表情になった。混乱して考えがきちんと整理されないのか、頭を何度か振っている。

しばらくはああでもないこうでもない時々呟き、また時々無言で

考えていた。

「……………」

結局のところ、いくら待っても回答が出る気配はなかった。そしてやがて考えるのをやめたかのようにため息をついて両手を挙げた。降参らしい。そして口を開いた。

「どうしたんだお前は？　なあ篠ノ之束？」

「なあに、簡単だよ？」

まったくもってわからないと首を振っている法師を観察。……普段の雰囲気格格差からか、また抱きしめなくなるほどかわいらしかった。

束は妖艶に、まるで男を落とす熟練の娼婦のように笑って見せた。此処が見せ場である。一大決心の集大成ともいえる。

顔がひきつったようになってしまったのを気付きませんようにと祈りながら、その言葉を口にした。

「ほーくんの子供がほしいんだよ？　結婚しよ？　XXXしよ？」

ある種の禁忌。現代社会において許されざる大罪、近親相姦。それをしたいのだと、明確に意思表示をしたのだ。

後悔はない。もともと彼以外に興味の持てる人間などこの世にはわけがない。才能か、または容姿だけを愛する人間しかこの世にはいないのだとおぼるげながら理解していた。

「……………」

法師は言葉を出せないようだった。

そして寝ようというのが睡眠のほかの意味をはらんでいたことに、
呆れの感情も混ざったようだった。別に今現在で行為を強要するほ
ど飢えてはいない。将来に向けての保険なのだ。

「だから、勝手に女の子に惚れたりしちやったら駄目だよ、ほーく
ん？」

第二十話 ? (後書き)

お疲れ様でした。

何かありましたら、作者まで。

ぼろつと解説しますと、この篠ノ之束は転生者というわけではありません。

あくまで束の中に眠っていた第二人格のようなもの、と解釈していただければ。

……あれ、解説になってない^^；

第二十一話(前書き)

今日も更新。

……それにしても、暑いですね……。

2011/07/02 誤字訂正

第二十一話

前回までのダイジェスト。

夜いきなり法師君のものにやってきた怪しい影、それはなんと法師君の暗殺をたくらぬ束さんだった！ 最新型の化学兵器を生産してまで挑んだのだけれど、失敗。法師君の罵倒劇が始まって、束さんのそれまでの考えと人格を打ち壊してしまった。それだけならよかつたんだけど、何を間違えたか法師君が投げやりに言った言葉が束さんの琴線を刺激して新しい束さんを構築させた。そしたらなぜか束さんは法師君に対してただならぬ愛情を持っていた……。ちよつと、どういうことか説明してほしいかな？（困惑中。何度も唸っている、語り手 夏織）

織斑千冬は首をかしげた。朝起きたらなぜか篠ノ之束が外出していたからである。

いったい何の冗談かと、初めは笑った。まあ夏織の朝食を取りに来るだろうとまったくもって心配していなかった。だが、一向に現れない。さすがにこれはおかしい。

まさか、篠ノ之法師のところに行っているのではないだろうか？

そんな考えが頭を掠めた。まさかそんなことは、と思いつつも、嫌な想像が離れない。

大体、ある一定の時期から、彼を見る束の目がおかしかった。ごまかしてはいたようだが、一瞬さっきのようなものが混じることがあったのだ。

まさか、と思つてその時は否定したが、実際に考えてみるとありえ

ない話ではない。何せ彼は篠ノ之東にとって世界で唯一守るべき存在である。それが奪われた、と知った時の東のことことを思うと、それが現実味を帯びてきた。こうなつては居ても立っても居られない。早々に朝食を片づけると、急いで身支度を整えた。

「あれ、千冬お姉ちゃん、制服じゃあないの？」

「急用ができた。下手をすると人の命に係わる。学校に度にかけている暇などない」

「……。そつか。いつてらっしゃい」

意外なほどあっさり送り出した夏織を見ながら、千冬は足を急がせた。何もありませんように、という願いを込めて。

急いだ結果か、ずいぶん早くいきつくことができた。というよりもまだ面会時間にはなっていない。病棟へと続く門も閉ざされている。

「何もなかった、のか？ いや、あいつのことだ」

独り言をつぶやいてから、扉に手をかけた。

「やはり、開いているな」

手をかけた瞬間、今まで閉ざしているとばかり思っていた扉はあっさりと千冬を向かい入れた。

その扉をくぐって、千冬は周りの気配を探る。人の気配がいくつもあるが、個々の近くには感じられない。病棟とは別の奥の部屋から気配が漏れている。

……関係ないとそれらを頭から排除して、法師のいるであろう病室へと急ぐ。

早く、少しでも早くと足を急がせる。病棟の前に到着。深呼吸を一

つ置いて、千冬は扉に手をかけた。
そして、硬直した。その光景を見た瞬間に幻だと思い込みたくなっ
たのだ。

「……すう……」

「……」

人間が二人、より添った形で寝ていた。その様子からはかなり仲睦
ましい様子が見て取れる。これだけならば千冬は早々に部屋を後に
舌だろつ。その人間が束と法師姉弟でなければ。

いったい何をしている？ いったいこれはどういうことだ？ そし
ていったいなぜおまえがここにいる？ 言いたいことは山ほどあっ
たが、とりあえず束を引きはがすことに決めた。

「……ううん、いったい何？」

「暢気なものだな。いったいそれをいつまで継続できるのか見物だ
な」

一度目をぱちりと開いた。寝ぼけているらしい。そして千冬の姿を
確認して、束は何か信じられないものを見るような様子でつぶやい
た。

「……ちーちゃん？ あれ、おかしいなあ？ わたし幻覚がみえる
ようになっちゃったのかなあ？ 目の前になんかおこった様子のち
ーちゃんがいますあはははは」

「人の顔を見て何を言い出すかと思えば……。どうやら矯正が必要
なようだな。いいだろう、その腐りきった根性を今日こそ叩きなお
してやる」

「ほーくん起きちゃうよ……。っ！ 痛い痛い痛い！ いつもよりも
容赦がないよ！」

「やかましい。人が寝ているのをいいことに……」

そこで初めて。法師が身動きした。目を覚ましたらしい。それにしてもまったくもって眠そうな様子がないというのは、本当に今起きたのかと疑いたくなるものだった。

「まあ、だれか来るのは分かっていたがな。それが織斑千冬と分かったから警戒心など一切持たず気を抜いていた」

「やはりばれていたか……。というか気を付けていたはずなのだがな」

「……え？ いったい何の話をしているの？ 東さんにもわかりやすい解説してくれるとうれしいな？」

状況説明を求めてきよきよと視線を回らせる束を無視して、千冬は法師の目を見た。

嘘を付かれてもそれを逃さないように。千冬は唇を動かした。

「けがは本当にはないか？ 昨日何かあったのは分かるが」

「問題ない。けがはなかったさ。危うく殺されそうにはなったが」

「……！ 裏切り者！ よりにもよってちーちゃんにはらすなんて

！ ほーくんがそんなに冷たい人だったなんて！」

「……。束、自分をよく見てみる。どうして自分を殺そうとした相手になぜ笑顔を持つて答えることができる？」

「ああ！」

納得した、という顔をする束。というか理解が遅すぎる。普通なら簡単に気が付くことなのだが、やはりこの人間にはそれに適応しないらしい。

「ちょっと昨日のことがあって束さんのことを意識しちやっってい

るんだね？ ほーくんの照れ屋さん！」

前言撤回。まったくもってわかっていなかった。嬉しそうにほほを染めていやいやと首を動かしている。何もわかっていない。諦めるしかなかった。手の施しようがない。

それをわかっているが、教え込まなければならない。一般常識というものを。

「持っていくぞ」

「構わん」

それにこのままでは通報されかねない。東も千冬も不法侵入者であるのだから。

「やだやだ〜ほーくんと一緒にいる！」

とりあえずこのやかましい生物をどうしてやるうか？ 運搬をしなから、そのことに思いを馳せた。

第二十一話（後書き）

お疲れ様でした。

何かありましたら、作者まで。

第二十二話（前書き）

本日も更新……。

暑さのせいで体調不良……。話が思いつかないわけではないのに更新が辛いです^^；

2011/07/03

誤字訂正

第二十二話

いよいよ退院の運びとなった。だが、この後に関してはまったく保障されていないのだ。先行きの見えない明日をどうするべきか？ 篠ノ一家に頼る？ 論外だ。あれらはおれを決して篠ノ之法師とは認めないだろう。それが分かっているながら資金面だけ援助をし、居候させろというのは愚か過ぎる。絶対に認めないだろうとは明白だ。

だが残念なことに、この体ではたぶんろくな仕事には就けないだろう。義務教育なる制度の話を織斑千冬から聞いていたため、この案も残念ながら却下である。何でも十五歳以下の年齢は教育に専念し、働くなという法律らしい。……まことに意味不明かつ今の俺にとつて理不尽な法律ではあるが、従わざるを得ない。世間の人間はおれではなく、『篠ノ之法師』という人間でしか確認しない。だからいかに俺がごまかそうとしても、簡単に実年齢など知れてしまうのだ。……一番効率のいい稼ぎ方でもあったのだが、仕方ない。ルールは守らねばならない。俺だけでなく、人間というものはすべからず。社会という箱庭を破綻させないために。

ではどうするか？ 身近なところで行くと身を寄せられる知り合いは織斑千冬と篠ノ之束であるが、どちらも却下だ。織斑千冬はすでに養うべき人間を背負っていて一杯一杯であるし、人格破綻者であるあの篠ノ之束にそれを求めるのは筋違いだろう。……まともは方法で金を稼ぐところは不可能であろう。

こうなると手詰まりだ。打開策が存在しない。これが入院中から俺を悩ましていた問題だった。いつそのこと女をひっかけて懇ろにでもなるか？ とろくでもないことといわれそんなことを考えていたところを妨害された。

ノックもせずに入ってきたのはわが姉（実感がないが、どうもそうらしい。というよりもそう思えと強要された。意味が分からない）

篠ノ之束と織斑千冬、それになぜか来ている、織斑夏織。いつたい何が始まるというのか？ この連中に関して礼儀という言葉は死語なのだよ。あきらめた方が早い。……非常識人ばかりだ。（織斑夏織を除く）

「邪魔するぞ？」

「お邪魔します」

一応断るのはこの姉妹のいいところ、としておこう。篠ノ之束に関してはまったく常識なんて通用しない。世界の規格外みたいなものだから、な。

「どうした？」

「……いや、なんとかな……」

歯切れが悪い織斑千冬の後を、篠ノ之束が引き継いだ。

「ほーくんの、これからの話だよ。この病院を退院してからの、ね」
やはり来たか、と言わざるを得ない。決して避けては通ることができない道だ。例え退院が長引いたとしても、いずれ降ってくる類の回避不可能な問題だ。

篠ノ之束がその言葉を口にしてから、織斑千冬表情が険しくなった。当然だろう。この女は厳しくみえるが、意外に身内や知り合いに対しては過剰ともいえるほどに情け深い。それらの人間を簡単に見捨てるということが出来る種類の人間ではないのだ。しかし、織斑千冬にも生活がある。いま俺の現状の打破という問題に踏み込もうとすればたちまち今まで守ってきたものが破綻するのは目に見えている。だがしかし身内は見捨てられない、という矛盾らせんに陥っている。一番大事なものをしっかりと見据えてそれ以外を見捨て

ればいいものを、なんて俺は考えてしまうのだが、どうやらそれを良しとしないらしい。まったく、とんでもなくお人よしだ。理解できない。

「それで結局、どうすればいいのかを思いついてきたのか？」

「…………それは…………」

と、救援に入ったはずの篠ノ之束まで沈黙。

手立てはこれとってないらしい。まあ、予想通りだが。

人ひとり養育するというのは簡単なことではない。それも子供ならばなおさら。資金面の話はもちろんのこと、子供というのは非常に不安定で、常時トラブルがつきものだ。そのトラブルに巻き込まれながら金を稼ぐ。尋常な苦労ではなしえないことだ。

それを一介の高校生がしようというのは、非常識を通り越して滑稽な話、と言わざるを得ない。…………常識外の織斑千冬とて、篠ノ之家という援助があるからこそ成り立っているのだ。それがなければ、おそらくここにはおるまい。

周りの人間達に頼れない状況。こうなれば自分の身は自分で守らねばならない。…………まともな仕事にありつけないのなら…………。その考えに至った時に、ほほに痛みが走った。いや痛みといっても大したものではないのだが、いかんせん唐突だったためにこういう表現になったのだが。

「お前、ろくなこと考えていないだろう。わかるぞ、お前のような人間を何人も見てきたというのだからな」

織斑千冬が、何かを非難するように俺のほほを右手で抓っていた。力はほとんど込められていないにもかかわらず、その手は小刻みに震えている。

「いったい普通の高校生が何をほざく、と言おうとしてやめた。メリ

ツトがない。そして何よりも目が真剣だった。幾度も見てきた、覚悟の宿っている坐った眼。この織斑千冬という人間は決して平淡な道を歩んできたわけではないということを感じ知らされた。そうではないれば、そんな目にはならない。

きつと想像を絶する苦勞してきたのだろう。それを口にする、といったことはしないが。

「……」

そしてもう一人、常人とはかけ離れた人間がいたのを忘れていた。

「ほーくん。ろくなこと考えていないのは分かっているんだよ！
確かにお金の問題はあるよ。でもそれとこれとは違うんじゃないかな？」

「何が違う？ 俺が金のかかるものだという事実には偽りはないだろう？」

それを言うとその場にいた人間は顔を伏せた。

「……だけど、それっておかしいよ……。ほーくんはまだ子供なんだよ？ まだ夏織ちゃんと変わらないんだよ？ そんなことって、さみしすぎるよ……」

顔を伏せたまま、篠ノ之束が呻くように言った。なぜこつもかまいたくなるのか？ 俺には不思議でならなかった。

一度ため息を肺に戻し、俺は手元に視線を落とす。小さな、きめ細かい手。それはおれのものではない。そうだ。もともとのこの体の持ち主は俺ではなく篠ノ之法師だ。

簡単な話だ。彼女らはおれを見ているのではなく、その中にいる篠ノ之法師を見ている、というだけだ。残念ながらも押ししない幻

想を信じて猛進する、悲しい人間。いや、これについて俺が意見を言うことは許されない。何しろ彼女たちから篠ノ之法師を奪ったのは誰でもなく、この俺だ。そう考えることは許されないのだ。

何とも難儀な話だ。とりあえず、巻き込んでしまったか彼女らについては幻想から解き放ってやる責任がある。意図的でないにしても、巻き込んでしまったのは間違いなく俺である。形だけでも謝罪を入れることは決して間違いではない。それに真実を知れば決して俺に近づくことはないだろう。打算とともに、俺は決心した。

幻想をぶち壊す、といったところか。何とも格好をつけたくさいセリフではあるが、その言葉自体は非常にこの状況に適している。最終宣告、という判決がふさわしいこの状況では。

夢はいずれ醒めるもの。それをこの場にいる夢見がちな人間たちに理解させるために、ただ作業のように口を開く。

「残念ながら、勘違いをしているようだな」

第二十二話（後書き）

お疲れ様でした。

何かありましたら、作者まで。

第二十三話（前書き）

なんと総合得点700を突破。そしてお気に入りの数だけでイタリ
アを抜く……。何が起こったのでしょうか、本当に？
とまあそんな混乱中の中、今日も更新。

……この夏の暑さには十分にお気を付けを……。

第二十三話

「……………なにが？」

俺の言葉に何とか答えられたのは、今まで一度も発言をしなかった夏織だった。彼女が一番篠ノ之法師に近かったのではないかと考えている。確かに彼女の話では好印象ではなかった『篠ノ之法師』ではあるが、離れてみてやはりしっくりこないのではないのだろうかと思う。意外と身近にあるというものは気が付きにくい。しつこく思っていたものがいきなりなくなるとさみしく感じるというものはよくあることだ。

目を瞑る。視界に移す必要はない。一度でも視線を移すと情を訴えてくるから厄介なのだ、女というものは。中途半端にそれを与えるというのが一番残酷なことだ。やるならば徹底的に。徹頭徹尾、最後まで貫く。

「所詮は偽物だ。もしくは本物にはなれなかった別物。異分子。これらの言葉でわかるだろう。それはお前らが認証しているものとは完全なる別個体だ。俺の知り合いでも身内でもなんでもない」

「……………そんなことない……………」

俺の恫喝にも似た発言に反応したのは、消え入りそうな声だった。それくらい小さかったのだ、初めは。

「そんなことない」

聞き違いでなければ。俺の耳がおかしくなければ。俺の脳味噌が正しく機能しているのだったら。今の言葉は否定ではなかったか？ そんな半信半疑の俺の耳に、最終宣告がはっきりと告げられた。

「そんなことない！ 酷い！ 酷いよ！ 法師君は、今までのあい
つとは違うよ！ 嫌がらせもしなければ、こんな私にだって優しい、
ただの誰でもない法師君だよ。なんでそんなこと言うの？ 私のこ
と、嫌いになっちゃったの？ 嫌だよ、離れたくないよ……」

強い言葉だった。どんな女にも言われたことのない、裏のない純粹
な言葉だった。

どうやら彼女は、夏織は俺のことを篠ノ之法師と認識したのだろう。
今までの『篠ノ之法師』のことをあいつ呼びわりしたのはどうかと
思うが、だれでもない俺を認識したのだ。結構、衝撃だった。俺と
いう人間がつぶされたという気、というよりも人間として存在を認
められたのだ。

化け物！ お前のせいだ！

昔、誰だったかが言った言葉だ。その顔も言葉も何一つ覚えていな
いが耳にだけは残っている。その言う通り、俺は化け物だ。

この人でなし！

まったくもって違う。俺は人でなしだ。いつ他の人間を し
てきた。

死んでしまえ！ お前なんて！

何度も言われたきた。そのうち俺のことをだれも人間扱いをしなく
なった。当然だ。俺は化け物で人でなしの死を請われるほどの生き
物なのだから。

だがどうやらこの織斑夏織という二次性徴前の少女はどうやら、今

まで出会ってきた人間とは一味もふた味も違った人間らしい。こういう人間の対処はしたことはない。故にどうすればいいのかが分からない。拒絶すればいいのか？ 無視すればいいのか？ 受け入れてしまえばいいのか？ 見たこともない生物を前にして対応に困っている俺に、追い打ちがかけられる。

「……ふざけるな。ふざけるなよ法師！ お前の苦労など知ったことではない。だがな、なぜ私に頼らないんだ！ そんなに私は頼りないか！ 夏織とおまえくらい養えないほどのなよなよしく見えるのか！ どうなんだ！」

ふざけるな、か。その言葉はよく聞いた。だがその怒りの矛先が向いている対象が違う。彼女は自分の情けなさを怒り、そして何も話さない俺に対してやきもきしているのだろう。おせっかいだと、本当に思う。普通ならば放っておけばいい。見捨てれば死のうが生きようが二度と視界に入ることではなく、頭を悩ませることもないのだから。織斑千冬がなぜこうまでして助けようとするのか？ 理解できる常識の幅を超越している。

そして何よりもこの女が一番わからない。この間まで殺そうとしていたはずなのに、いったい何の心変わりがあったのだ？ というくらいに態度を改めている。

篠ノ之束は俺の目をまっすぐ見て、逸らさない捉えたままはつきりと告げる。

「ほーくんは誰が何と言おうとも、ほーくんだよ？ 私が知っているの。ほかの誰にも文句は言わせない」

……本当に、お節介ばかりだな。

悪いか悪くないかで言えば、もちろん悪くない。だがまあ別に感想

といえはそのくらい。

俺のしたいことは俺が決める。ほかの誰にも文句は言わせない。

「もう、頑固だなあ」

まったくもって応じようとしない俺に業を煮やしたのか、そういうと篠ノ之束がいきなり顔を近づけてきた。なんなのだろうか？

疑問は、一瞬で解消された。

「……………んうつ……………」

「……………」

「……………」

「……………」

唇にあたる生暖かい感触。接吻だ。それくらい、俺にだって理解できる。

落ち着いているように思えるかもしれんが、驚きはある。まあ姉と称する人間に接吻を受けていること自体はどうでもいい。大体血がつながっているという感覚が存在しないから近親相姦とか身内ゆえの背徳感とかがまったくもってわからない。むしろ驚きは別のところで発生している。

とうとうこいつ、頭おかしくなつたのか？

俺の考えに同調するかのように、隣で声なき悲鳴が上がった。

第二十三話（後書き）

お疲れ様でした。

何かありましたら、作者まで。

番外編（前書き）

このお話はまったくもって本編と関係がありません。しょうがないから付き合ってやるといふ心優しい暇を持って余している御方のみ推奨。

そしてすみません、本編はまた明日から更新します。

……こいつ誰だよ、ってキャラが出てきたら、たぶんもう一つのほうをお読みになると自然とわかるはずです（宣伝）

番外編

「篠ノ之法師だ。なぜかはまったくもって知らんが、どうやらこの小説大ヒット記念とIS インフィニットストラトス検索三百突破の記念としてこの企画が立ち上がったそうだ」

「……いまさらね、本当に。何をしていたのよ？ というか大ヒット？」

「名を名乗れ。出ないと誰だかわからんだろうが。筆者が台本形式を嫌って会話だけになのに横に発言者の名前を付けないらしいからな。……あとは作者の発言だ。俺に突っ込まれたところで何も言えんぞ？」

「……はあ。本当にどうしようもない作者ね。まあ、いいわ。イタリアの主人公だかヒロインだかポジションがあいまいな、エマヌエーラ・モスカよ。形式的に一応、よろしくとっておくわ」

「面倒なしゃべり方だなお前。そしてなんでこっちに出てくるんだ。関係ないだろう」

「……作者の陰謀よ……」

「……。ご苦労なことだ」

「そうね。そして二人しかいないのになかなか区別しにくい気がするの。は気のせいかしら？ どっちの発言だか本当にわかってる？」

「心配ないだろう。何も面倒なしゃべり方はお前だけの特権ではない。……もう一人追加されると苦しいが」

「……グダグダね」

「本編以上かもしれんな。所詮番外編の舞台裏、メタ発言も可らしいぞ？」

「……。やめておくわ。キャラが崩壊しそうだから。主人公としてはあつてはならないことでしょう？」

「そうだな。」

いい加減話を進めるか。今日こうしてわざわざ出てきたのはなんて

ことはない。初めに言った記念だ」

「ちなみに作者が『はっ、俺の作品で総合得点500なんて行くわけないだろ？ 1000？ 何とちってんだ？ イタリアと競合がいいところだろ？ 所詮気休め作だし』と喋って言ったことから今回のこの流れになっているの」

「まあ、1000に届けば何か奇跡が起こるかもしれないな。というか700を突破して焦ってこの番外編を出したらしい。何でもこのままだと1000に届いてしまいそうだからだとか。……夢見がちだな。」

まあ、それ自体は至極どうでもいい。エマ又エーラ、お前がここにいる意味も、もうじき明らかになるのだろう？」

「ネタばらし？ 感心しないわね？」

「ふん。どうせ明らかになることだ、構わんだろう。それはそうと、……化け物風情が、ずいぶんと生意気な口を利くな？」

「……。あら、怪物が何か言ったかしら？」

「くつくつく」

「ふふふふふ」

強制終了されました。

それではおまけ扱いの本編とは全く関係ない番外編、本編では活躍の見込まれないであろう五反田弾君の特に語るまでもない短い物語をご鑑賞ください。

「かわいそうな配役だな、奴も」

「……それについては同意するわ」

五反田弾は、その事実をよく覚えている。

いや、忘れることなど出来ないのだ。人間が生きているのをやめら

れないように、地球が自転しているように、時間が巻き戻せないように。

それは当たり前のことだ。なぜなら五反田弾の価値観は彼女の出会いによって変わったのだから。

いや、変えられたというほうが正しいか。それほどまでに彼女との出会いは鮮烈的なものだった。

小学校の頃は特にこれといって特に印象に残る思い出というものがないのもそのせいだ。いや、印象に残る出来事は確かにあったはずなのに、それらはまるでくすんでしまったかのように色あせて古ぼけた。あまりにも強い織斑夏織という存在によって、それらが一気に浸食されてしまったのだ。

彼女の魅力を語るにはまず一日では足るまい。それを真剣に考えている。何しろ『こっそり迷惑をかけないように織斑夏織様を見守り害虫を排除する会』の会長を任せられているその名は伊達ではない。ちなみに創立者は弾ではなく友人の御手洗数馬である。故に会長であるはずなのに会員ナンバーが二番ということもあるが、至極どうでもいい。

「初めまして。織斑夏織、つていいます」

丁寧で且つ妙な距離感を感じさせない絶妙な挨拶が、教室の奥まで走り抜けた。その鈴を思わせる透き通った声は、いったいどれだけの人間を驚頭紙にしたのだろうか？ 五反田弾にはまったくもってわからなかった。

だが、そんな彼にも一つだけわかることがあった。

『彼女は、織斑夏織はその存在自体が美しい』という事実である。すつきりとした目鼻立ち。シミという誰にでもありそうな傷一つなく磨き上げられた色白の肌がそれらに拍車をかけるように際立たせている。まるでそこに魔法がかかっているかのように絶妙なバランスで配置・整えられている眉毛を主とした体毛は、彼女の魅力を損

なわせることはない。喋っているときに少しだけうかがうことができた歯は純白というしかないくらいによどみがない。そしてそれら顔の造形をまとめ上げるのは、輝く青色の繊維。滑らかに彼女の動きな合わせて躍動するそれらからは下品な香水とは違う、上品なおいを発散させている。

そして織斑夏織の魅力は顔の造形だけにとどまらない。弾と同年代であるはずなのに大きく張り出した胸部を前に、近くに座っているクラスメートたちはすでに直視できないようでうづくまっている。そこからまるでいらぬものをすべて輩出してしまったかのようにして細くなつてくびれを形成しているウエスト。そしてその細さからは考えられないほどの曲線を描き、豊かな腰元へと着地する。そしてそれに飽きたらず、悪意をもってすれば簡単に折れてしまいそうな細身の足が腰に付属している。モデルですら勝負になるかどうかの、見たこともない完璧な容姿だ。

これほどの脅威を誇る武器を持った彼女に、いったいどれほどの人間を魅了されずにいられるか？ 残念ながら五反田弾も、魅了されてしまった一人であったのは言うまでもない。

「趣味って言えるのかどうかは分かりませんが、料理。特にお菓子作りをよくします。あまりほめられた腕前ではないんですけど、よかつたら今度持つてくるので、食べていただけたらなってます」

手作りの、それも特上の美少女（残念ながら五反田弾の語彙力が不足しているためにこのような表現しかできない）が自ら苦労して作ったもの。それがどんな出来栄であろうとおいしくないなどと宣告する奴は男ではない、いや、そんなことをするものはたとえ女性でも国民として認められない。弾を含めた男たちはその意見で満場一致の可決を果たした。教室が熱気に包まれる。

だが、ここで織斑夏織の挨拶が終了、とはならなかった。

彼女はいったん顔を伏せて、両手をスカートの前で組み替えた。ガタン、とどこかで何かが倒れる音がした。

「あとは裁縫なんかが得意だったりします。ああ、あと」

急にもじもじし始めた。落ち着きなく視線を走らせて、一度上げた顔をまたうつむかせる。

「気軽に話しかけてくれると、うれしいです」

そういつて顔をほんの少し赤く染めて、織斑夏織の自己紹介は終わった。

熱気は霧散するどころか、さらに高まっていた。

こんな中で次の人間は自己紹介をしなければならぬのだ。地獄以外の何物でもない。心中で合唱しながら、弾は先ほど目に焼き付けた織斑夏織の姿を脳裏に映し出した。

彼がひとりで鼻を押さえてしばらくうつむいていた理由を知るものは、同じくそれ挑戦したクラスのほとんどの男子生徒（一部女子も含む）だけだった。

番外編（後書き）

お疲れ様でした。

何かありましたら、作者まで。

そしてタイトル詐欺だったという（笑）

弾と夏織の出会いの物語のはずが、つつい調子に乗り過ぎて夏織の容姿説明になってしまいました^^;

第二十四話（前書き）

本編再開！ のはずなのに空気は昨日のまま…… ^^ ;

そして今までまったく言っていないほど役に立たなかったR15タ
グを使用。

昨日の流れを継承しているせいでなぜか出来損ないのコメディ空気
が…… ^^ ;

そしてとどめといわんばかりに、短い ^^ ;

ホント、期待されてた方には申し訳ない ^^ ;

こんな作品でお気に入り300突破。喜んでいいのかわかりません。
いや、普通にうれしいんですけどね…… ^^ ;

2011/07/07 誤字訂正

第二十四話

何せ篠ノ之束とのこれまでの関係があれである。(一度殺されかけた)それに付け加えてこいつにはしつかりとした『篠ノ之法師』との間で家族の絆というものがあるはずだ。中身がたとえ変わるうねじ曲がろうと思いつい出というものには消えるものではないし、体はそのまま一緒なのだ。これで正気を疑わない方がどうかしている。

「……………んっ。……………」

おまけに舌までからめようとしてきた。というかホントに口を割って侵入してきた。俺の舌を捕まえようと歯茎をなぞり、何度もこじ開けようとなぞる。舌を複雑に動かいて少しだけ開けた歯の間をこじ開けて侵入。俺の舌は簡単にかからめ捕られた。むろん、ただでやられるわけにはいかない。そして何より、篠ノ之束が突発的に始めたこの行為自体にいったい何の意味があるのか、少しだけ興味があった。しばらく堪能することにする。

篠ノ之束の舌は強引に割って入ってきたのはいいものの、どこか遠慮が混じったかのように歯と舌の間を往復するだけ。その動きはどこか拙い。慎重に、というよりはどうしていいのかわからないといったように舌と歯茎とを行き来を淡々と繰り返す。もどかしい。本当にこの人間がしたい行為はこんなものではないはずだ。仕方なしに、こちらで協力してやることにする。

「……………うん！ ま、待ってほーきゅ……………んっ。……………うっ」

舌をからませる。逃げようとする篠ノ之束に視線を送り、頭をつかんで固定させ、その行為を継続させる。

何度も。何度もいたぶる。だんだんに動きを激しいものにする苦

しくなってきたのか、顔に紅潮が見られた。

やめてやる？ そんなはずはない。羞恥心（あるかどうかは分からないが）や限界というものを乗り越えてこそ、この女のしたいことがわかる。そんな確信を持っているから、いくら篠ノ之束が酸素不足で喘ごうともがごとくと、やめてやるわけにはいかない。やがて酸素が本格的に不足し始めたのか、鼻でとりあえず酸素を吸入。熱い吐息が顔にかかるが無視。行為を継続。

「んやあ……ほーきゅ、ん。はあ……」

動きがあった。一体どこに隠し持っていたかは知れないが、何かの異物（毒物ではないことは確認したが、いったいこれがなんなのかはまったくもって不明）が侵入してきた。とりあえずもう少し様子を見ようとしたところで強引に舌を絡ませられ、なし崩し的に飲まされた。

……まあ、良しとしよう。死ぬものではないのことは確認しているのだから。

……はて、何か忘れているような気がするのだが……？

「ねえねえ千冬お姉ちゃん。東お姉ちゃんたちは何をしているの？」

「……はっ！」

ああ、思い出した。一応個室であるこの空間（当然四人いると狭い）にはまだあと二人ほど、人間が残っていた。俺と篠ノ之束よりは常識を持っていそうな人間（うち一人は子供だが）が、だ。なぜ今まで言っただけだったかという点、単にあまりの光景に意識を彼方に飛ばしてただけであろう。そうでなければ、篠ノ之束が接吻という強引な手段に訴えたところで力づくで止めるはずだ。こういう行為に慣れていないのだろうか？

接吻中の篠ノ之束と同じくらいに顔を赤く染めている織斑千冬が、

病院ということを配慮した最大限の怒鳴り声をあげた。……どうでもいいが、なぜそのところだけそんなに細かいのだろうか？

「何をしている、束！　じ、実の弟に、せ、接吻などっ！」

「んふふっ、うらやましい？　ちーちゃん？」

「そんなわけあるか！　いい加減法師を離せっ！」

ここにきてようやく、詰まっていた篠ノ之束との距離は離れた。残念そうに、今の行為を惜しむかのように篠ノ之束は喉を鳴らした。唇から先ほどの行為を物語る銀の糸が引いていた。

「ねえねえ？　あれにはどんな意味があるの？　教えて束お姉ちゃん？」

「んふふっ。それはね夏織ちゃん」

「だああああ！　余計な事を教えるんじゃない！　束、それからまだ説教は終わっていない！　大体お前は」

「固いこと言いつこなしだよちーちゃん。それにほーくんだってちやんと答えてくれたよ？　最初は私から一方的で強引なキスだったけ」

「お前は！　実の弟に！　いったい何をしているんだ！」

「だからキスだっつて痛い痛い痛い！　痛いよちーちゃん！　愛がこもっていても痛みは超越できないんだよ！」

なおもほざこうとする篠ノ之束に、天誅の代わりとばかりにアイアンクローが下された。

「この間と言っていることが違う！」

「ただただただだ！」

「楽しそうだね」

「まあ、平和ではあるな」

どうしてこうなったのだろうか？

そんなもの、十中八九以上俺のせいじゃ決まっているだろう？

そして、俺が問題解決をこいつらには期待していないということがよくわかっただろう？

第二十四話（後書き）

お疲れ様でした。

何かありましたら、作者まで。

篠ノ之篤誕生日記念小説（前書き）

タイトルのまんま、番外編二回目です。

再開したと思っただ瞬間にこの始末。本当に、本当に期待されていた方には申し訳ない！

七夕という日が悪いのです。（言い訳）

そしてまたこのシリーズの最長記録を更新。

&総合点数800点を突破。皆さんの期待と声援が、私の原動力です！

2011/07/08 誤字訂正

篠ノ之篤誕生日記念小説

「前回に引き続いてまた担当することになった、篠ノ之法師だ。まあ、しばらくの間は辛抱だな」

「……待て！ なぜこんなことになっているんだ！ おかしいだろう！」

「本当に前回といい、今回といい学ばない奴らだな。初めに登場する時にはキチンと名乗ってからにしろとこの間言っただろう？」

「……んん！ 篠ノ之篤だ。……これでいいのだろう？ さあしつかりと説明してもらおうぞ！」

「説明も何も見ればわかると思うのだが？」

「なぜ私がこんなところに呼ばれているかだ！ まったくもって関係ないだろう！ 作者の陰謀によって舞台を追いやられたんだぞ！ それをなぜ今になってこんな恥さらしのような真似をしなければいけないんだ！ ふざけるな！」

「まあ、見ても分かる通りにおかしな現象が発生している。勘のいい奴は気が付いたのだろうな」

「無視するな！」

「……。はあ、短気だな。少しは辛抱というものを覚えたらどうだ？」

「これが冷静でいられるか！ 大体」

一時間後。

「気は済んだか？ そろそろ再開しようと思うのだが」

「ああ、理解した。叩いても叩いても響かない奴だということがよくわかった」

「やっと話を進めることができるな、まったく。」

今回は言うまでもない。篠ノ之篤の誕生日祝いの企画だ」

「待て」

「なんだ？ 何か不満でもあるのか？ それならば筆者に直接言うのが正しいぞ？」

「そもそもなんでこちらなんだ！ こっちには箒のかけらもないんだぞ！ 法師なんだぞ！ イタリアでやるのが常識というものだろう！」

「教えてやろう」

「……なんだ？」

「作者の力不足だ。大体書き始めたのが今日だというのにイタリアシリーズの分量に行きつくはずがない」

「……なん、だと……」

「キャラが壊れているな。まあ、どうでもいいが。」

大体あつちは五千字程度を目指しているのだからどう考えても間に合わないだろう。作者はキーボードで打つのに四苦八苦している人間だからな。それに付け加える形でパソコンの故障。……新調すればいいだけの話なんだがな」

「アナログ人間だな。私ですら少しくらいはいじれるぞ？」

「自慢にならん。そして分かりづらいな。前回は良くも悪くも方向性の違うキャラが濃い人間？ だったから区別するのはそこまでは難しくなかったが、今回は口調が似ているからな。まあ、どちらかの発言が分かったらあとは交代交代で発言している。その点を参考にしてほしい。」

まあ、こちらに来てしまうのは確定事項だったというわけだ。残念だったな、織斑一夏との惚気話ではなくて」

「だ、誰がっ！ ばばは馬鹿なことを言うんじゃない！ 大体私と

一夏は幼馴染であって

「（全く話を聞いていない）」

さて、あまりグダグダやるのも性

に合わない。幕引きとするか」

「だからわたっ

はあ？

これで終わりなのか！

私の誕生日企

画は！」

「もともとお前、存在しないからな！（唇を歪めて嘲笑）」

「……くっ、なんということだ！」

「ちなみに作者の提案では俺かもしくは夏織の誕生日を七夕の日に合わせてしまえ！ というのもあったらしい」

「……私の存在って、いつたい……」

「安心しろ。原作でもそんなものだ」

「……そう、だな……（だんだん小さくなっていく）」

「というわけでこれは幕引き。この後に続いているとんでもなくどうでもいい短い思い付きの話でも読んで行ってくれれば、俺としては助かる、か？」

「……なぜ疑問なんだ。そして一応話がくっついていいるならきちんと言え！ 紛らわしいだろうか！」

「ないとは一言も言っていないが？ 勝手に勘違いしたうえで怒るとは、やれやれ……」

「本当に性格が悪いな、おい！」

自分の姉と双子の兄はどこかおかしい。小さいころから篠ノ之箒はそれを理解していた。

いや、兄の方はおかしいといってもまだ理解できる範疇にはいた。大抵の行動が自分の欲求を満たすために他人を傷付けるだけだったのだから。しかしそれは姉には該当しなかった。まったく理解できない姉と、理解をしたくない兄に囲まれた篠ノ之箒の唯一の味方は、幼馴染で親友の織斑夏織だけだった。

「がんばろうね？」

「うん。負けないから」

思えば、いつも自分が励まされていたのだ。嫌がらせを受けていた

のは夏織だったはずであるのにもかかわらず、だ。いつもここにこ
して自分の傷を覆い隠していた。それをまったくもって箒は見つけ
られなかった。

家では休まるどころがなかった。そんな生活にも、やはり転機とい
うものはあるらしい。

篠ノ之法師がけがを負った。はつきり言ってしまうえば、浅はかなこ
とに、当時の箒は大変喜んだ。何せ自分の周りにいるうつつうしい
人間のうちの一人がいなくなったのだ。

それを夏織に意のままに伝えて、夏織を傷つけてしまった。

何と浅はかだったのだろう、と今でも箒は後悔している。織斑夏織
という少女は誰よりも優しい、自分が傷ついても他人のために笑っ
ている心優しい少女であることは十分に理解していたというのに。

家族を、親友を傷つけたことを理解した時には、何もかもが遅かつ
た。篠ノ之法師はもう二度と目を覚まさない置物と化していた。家
族の表情は常に暗く、織斑千冬・夏織に至ってもまったくもって顔
色がさえなかった。

それは今の篠ノ之法師が目覚めてから、急激に変わっていった。
まずひどく自分勝手な発言をした箒を憎んでいたはずの両親が、急
に優しくなった。思わず気味が悪い、と思ってしまうほどに。それ
は篠ノ之東も同様。織斑千冬に変化はなかったが、親友と話す回数
は減ってしまった。いや、ほとんど会話などなくなっていた。
そしてそのまま、彼と面会を果たした。

「お前が、篠ノ之箒か？」

飲み込んだつばが、重力に反抗して逆流しそうになった。

それほどまでに驚いたのだ、篠ノ之箒は。目の前にいる人物を見て。
骨と皮で構成されている、まったくもって健康という字すらちらつ
かない、まともとはほど遠い体つきは、正直見ていてとても痛々し
い。まだ十分に起き上がれないようで、彼はベッドを起こしてここ

らを向いていた。

だがそんなことよりも、篠ノ之箒には気になることがあった。

誰だ、いつたい？

いや、顔付きを見ていれば確かに双子の兄の痕跡は残っている。というよりも肉が付いていないだけでそっくりだ。まあ本人なので当たり前なのだが、目の前にいる彼がそうはとも思えなかったのだ。背負っている雰囲気、まるで別人のものだったのだ。

焦りとは対極の位置に存在する、落ち着いた風格。そしてそれからにじみ出ているオーラのような物体。到底自分の兄だという認識が
できなかつたのだ。

そしてさらに驚くべきものを発見する。

「……………すう……………」

そこには一面の空が広がっていた。なだらかに癖なく流れるその青くサラサラな糸はその表現がこれ以上ないほど似合うものだった。

織斑夏織が、かつてないほど安らかな表情をして彼に頭を預けて睡眠をとっていた。

たったそれだけ。それだけなのに、篠ノ之箒の視界は歪んだ。

よかつた。心の底からそう思えたのだ。自分が極度の疲労状態に追い込んでしまい、笑顔ひとつ見せなかつた夏織がこんなにも安心して顔で眠れているのだ。これ以上に喜ばしいことなどなかつた。

それを思えば、『篠ノ之法師』という双子の兄なことなどどうでもよくなってしまった。

この人はまったくもって別人だということは、目の前の人物が一番それを体現しているんだ。以前までの法師だったら、まず間違いない彼女は近寄らない。千冬に勧められても断るほど、それは徹底されていたのだ。

「篝ちゃん？」

そしてじつと見つめすぎていたせいなのか、閉ざされていた夏織の瞳が開いた。そのまま二三度閉じたり開いたりを繰り返して、織斑夏織は跳ね起きた。

「篝ちゃん！ ごめんね、篝ちゃんは何も悪くなかったのに。私が悪かっただけなのに！ 八つ当たりみたいになっちゃって、本当にごめんなさい！」

「ううん。気にしてないよ」

本当は夏織は悪くなどない。こちらが一方的に悪かった、本当に悪いことをした、謝罪をしたい。言いたいことは山ほどあるはずなのに、それらは喉に引っかかってそのまま戻って行ってしまふ。口下手な自分のことが死ぬほど疎ましいとこれほどまでに強く思ったのは、これが初めてのことだった。

そのまま時は過ぎていった。結局夏織はまた以前のように明るくなり、そして以前よりもかなり大人っぽくなった。

そしてその視界の先には、血縁上の双子の兄がいた。彼がいたからこそ、織斑夏織という人物はもう一度立ち上がることができ、こうして今も親友として篝がふるまうことができている。彼がいなかったことを思うと、今でも背筋が寒くなる。

夏織は、篠ノ之法師が近くにいると妙にしぐさが色っぽくなる。同性で至ってこれといった偏った嗜好を持っていないはずの篝ですらたまに顔を染めるほどに。

きつと恋をしているのだらう、兄である篠ノ之法師が好きでたまらないのだらう。その意味が分からなくても、直感的にそう悟った。

辞書を引いてその感じたものを言葉にしたら安っぽくなってしまいくわからぬものになり果ててしまった。

その意味というものは分からないが、親友である夏織には幸せになつてほしい。昔掛けた迷惑の分まで、箒はそれを思う。

「どうした？」

「いや、なんでもないんだ」

それでも。兄と夏織がいるところを思うと、篠ノ之箒の心臓付近は急激な圧縮を見せ、彼女を苦しめた。

これがどういったものであるかは、まったくもって箒の理解の外側だ。わからないのだが、それを見ていたくないと思う。

作業に集中している兄の背中に自分の体を押し付けた。力を入れて抱き、顔を大きな背中にこすり付ける。

「……………」

何も言わない彼をいいことに、篠ノ之箒はそのような状態でしばし時を過ごした。

高鳴る己の心臓に気が付かないふりをして。頭に浮かぶ親友の笑顔を見ないようにして。

篠ノ之篤誕生日記念小説（後書き）

お疲れ様でした。

何かありましたら、作者まで。

そして記念小説なのに甘々なものには仕上がらず、割とダークな感じに。

設定としては中学時代、篠ノ之篤は法師の双子の妹、そしてなぜか転校していない。

……急ごしらえとだけあって、滅茶苦茶ですね（笑）

原作ブレイクタグ大活躍（笑）

第二十五話（前書き）

本編です。更新です。

ホント、なんでしょうかねこの小説が好評な理由（笑）

そして怒られるの覚悟で書いた記念小説がなぜ反響がいいのか、篇幅がないのが特徴だったはずだったのにそちらの方が人気あるとか

…… ^^ ;

というか全然空気じゃない！　なんだそれ！　ホントに不評なキャラなのかお前！　と声を大にして言いたかった作者からでした。……ファースト党、増えるといいですね……。

箒ちゃん、あらためておめでとう！

2011/07/08 誤字訂正

第二十五話

病院の中というものは退屈だと以前話に聞いたことがあった。まったくもって関係がないとその話を鼻で笑っていた俺であったのだが、実際に体験してみるとそれはよくわかった。

寝ているだけ、ただ一日なにもしないという生活は何とも味気のないものだ。というよりもはっきり言って苦痛というほかない。それを考えた俺はトレーニングとともに、病院内の散策を開始した。本音を言えば閉ざされた病院という空間よりも外のほうが断然いいのだが、あいにくと外出用の装備を持っていない。またくいつて何も知らない未知の世界で何があるかもわからないのに、装備でなしで行くのは愚の骨頂だ。いや、もはやそんな奴は頭がどうかしていると言えない。

病院の中を、ひたすら自分の足で歩きまわる。看護師というものに出会えば連れ戻されるということも理解してからは人気のある場所をなるべく避けるようにした。意外と病院服というものは目立つらしい。……一度まだ割と若い女の看護師（こっぴうらしい。看護師というものは男だけ、と聞いていた俺にとっては情報を修正しなければならなかった）見つかった時に顔を真っ赤にして怒鳴られて学習した。二度も同じを失敗を繰り返すほど、阿呆になったつもりはない。

そうして、その場所にたどり着いた。

目指していたわけではない。ほとんどの部屋を回ってしまったというだけだ。その場所は病室からは遠く、意外と不便だった故に散策は後回しになっていたのだ。

「……ほう」

一面に見えるのは見覚えのない機材と紙の山。その紙の山はほとんどが姿をファイルの中へと隠している。その先に、あったのだ。

「……これは、使えるかもしれないな」

視界いっぱい広がる、本。本、本の山。その場所一杯におかれている本棚にすら入りきらなくらいで、なんと床まで進出している。驚くべき量だ。これほど多くの紙媒体のものは目にしたここは過去一度すらない。何となく、図書館という場所を思い浮かべてしまう。単語は知っていても、未知の場所には変わりないのだが、そんな印象だった。

本は情報の宝庫である。紙媒体にまとめ上げられたそれらは、膨大な情報を提供していくれる。中には誤ったもの、解釈が違っているもの、書かれた時代背景が今とは違うもの等たくさん齟齬があるのかもしれない、それらの問題はしかし、大量に知識を蓄積することでたいていは解消されてしまう。

先駆者のたどった道の文字を通して体験する。そういう観点でみると、本を読むという行為は一つの冒険であり、勉強であり、また娯楽でもある。

この世界の常識というものが存在しない俺にとっては丁度良いものだった。ざっと確認して二千はくだらない。よくもまあこれだけ集めたものだと思う。本というものは古来より貴重であるにもかかわらず。

さっそく手にとって、俺は情報収集を開始した。

そこで、いろんな知識を得た。この世界では基本的に十五歳を超えないと就職行動ができないこと。また学生なる社会人見習いの立場というものが存在し、そこに金をかけて学びに行くこと。情報管理に優れて、とても文明が発達している等々。……まあ文明等々に関しては、残念ながら俺の目から見てそんなに発達しているという印

象は得られなかったが。

これらの情報収集を経て、自分の立場というものがいかに危ういかを思い知らされた。基本的に子供は親のものという意識が果たらしているらしい。ということは一回もあれ以来来ていない存在に行動を縛られるということだ。それ自体はいくらでも回避方法があるからいいものの、問題は山済みだった。

まず、金を稼がねばならんに働けない。開幕直後にいきなり致命傷である。

金がなければ、まずまともな生活は保障されないとみていいだろう。金というものは時として使う側の人間を簡単に支配してみせる、人間が生み出した魔物であるという認識も忘れてはならない。これのせいで一体どれだけの人間が歴史の中で葬られてきたことか。

金がないとなると、もう奪うしかない。それは窃盗行為だ。法律という日本国民であれば必ず守らなければならないもので禁止されているらしい。いったいだからどうしたといたくなるのだが、法律を犯すと警官なる国家の犬が飛んでくるらしい。なかなか徹底した方針の中で暗殺者を利用していいらしい、と納得した。後にこの考えは一掃されることになるのだが……。

そんなこんなでこの場所に入りびたり、時間になれば本を無断拝借して戻っていた俺なのだが、一度も見つからなかったというわけではない。というよりも、この部屋が私室であるということをお忘れかれていますくらいだ。

「はあ、診療は疲れるなあ……。ちよつと一休みしよっ！」

体格から見て、四十代だろう。脂ぎった体はしかし、そこまで老化しているとは思えない。明らかにここ最近運動していない体は脂肪にまみれていた。

見つかった、というよりも本を見ながら寝ていたために気が付くのが若干遅くなったのだが。まあ、それでももちろん来るのは分かっ

ていた。扉を開けた瞬間に襲撃を仕掛けた。

突然飛び出して相手の予想もしないうちに懐に潜り込み、視界に映ってから叫び声をあげるまでのわずかなタイムラグを生じさせる。それをもらったら、逃すはずなどない。声帯にダメージを与えるように軽く握り拳を加える。

そのうえでよろけて倒れかけたそいつの首筋に、手加減をせずに手刀を加える。本来ならば加減しなければそのまま首の骨を粉碎し中枢神経を切断、人を殺すほどの威力になってしまっただが、この体ではそんな心配もない。故に安心して叩き込むことができた。

「……」

物言わぬ物体（ただ寝ているだけ）になったそいつを無視して、俺は目当ての本を大量に手に入れる。威力から見て、たぶん一時間程度で目が覚めるだろう。誤差はあって一分ほどと見た。

面倒なのでその辺の椅子に座らせて、寝ていたという事実を創作してやろう。突然記憶が飛んだりしてパニックになられてこの部屋が使えなくなるのは惜しい故にな。

これだけ大きなことをしてかしておきながら、俺が問題を起こしたという話はまったくもって聞かない。逮捕もされなければ、注意も受けない。犯罪というものは結局のところ発覚しなければ成立し得ない。それを認識している俺に死角などない。注意しなければ指紋、DNA等情報などいくらかでも漏れるのだ。逆に言えば何からそれが得られるのかを理解しておけば、それが防げるということ。頭からつま先まで、全身を隙間なく覆っている俺には関係がない。寝具には精巧な身代わりをおいて対応している。そんな風にして、今日もまた過ごしている。

……ちなみに、その医師、というより院長は自室で寝ていたところをベテラン看護師にたたき起こされたらしい。その記録は結局五十

五分だった。……人が来ることまでは、計算に入っていなかったな、
さすがの俺でも。

第二十五話（後書き）

お疲れ様でした。

何かありましたら、作者まで。

引き続き、誕生日記念の続編はあった方がいいかいらないかの意見を募集しております。……面倒ですが、ご協力をいただけると筆者は大変喜びます！

幕ちゃんの幕ちゃんによる幕ちゃんのための物語（番外編・誕生日記念の続編）

タイトル通り、なのになぜでしょうこのやっちなった感は……。
どう考えても時間不足で急ぎよ書き上げたものです本当にごめんな
さい。

何とか更新ですが、はぁ……。

2011/07/10 誤字訂正

2011/07/11 誤字訂正

こんな作者でも見捨てないで頂けると助かります^^;

篠ノ之箒に、友人は少ない。というよりも、ほぼいない。

いったい何を話せばいいのかまったくもってわからないのだ。剣道をやっている女子などほとんどいないだろう。それも道場まで使って真剣にやっているのだから、生半可なことでは話が合わない。

あと趣味らしい趣味、というものが存在しない箒にとって、彼らと話題を共にするということは不可能なことだった。

学校ではただ淡々と一人机に向かって坐り、面白くもなんともない教師の話聞き流しながら必要事項をメモする。そんな繰り返しだ。ただ、まあそれだけしか箒は学校生活でしていない、というのは間違いである。

「篝ちゃん、また勉強しているの？」

「……何度言ったらわかるんだ……。……篝ちゃんはやめてくれといつも言っているだろう……」

「えー、なんで？ 篝ちゃんは可愛いよ？」

可愛い。その言葉に一度心臓は反応するが、それだけだ。

言われ慣れてない言葉を言われると動揺する癖が、箒にはある。それもほめる言葉だと、いつその感じが強い。かわいいなどといわれたのは、自分を溺愛する両親と姉を除けばこれが初めてかもしれない。なかった。

だが、この親友の言葉であるのだ。嘘ではないことは分かっている。それでも自分をはるかに優れる容姿の人間に言われても、何も感じるところはないのである。

それが自分の容姿を誇つての嫌がらせであるならば反発するなり、無視するなりといった行動に出るのだが、夏織に関してはまったくそれが無い。心からそれを思い、素直に口にはしているだけなのだ。

だから箒は諦めているのだが。

「夏織にそれを言われたところでうれしくない」

「えー。それは酷いよ」

これが普段のやり取りだ。いや、かわいい云々の話はともかくとして、何の意味もないことでも夏織とは全く遠慮なく話すことができる。箒唯一の友人だ。

学校で話せる人間と言ったらほかには……。

「どうした？」

「いえ、何でも」

含みを持って視線を送っていたのを感じ取られたのか、双子の兄である篠ノ之法師が振り返った。双子であるはずなのにもかかわらず、顔立ちはほとんど似ていない。

「ちょっと硬いよね、箒ちゃんって」

いきなり横から夏織が飛び出してきた。法師と話ができるということとで迷うことなく飛び込んできたのだろう。その顔に穏やかな微笑を載せて、うれしいという感情を可能な限り表に放出している。幻覚で尻尾が見えるほどに。

素直な感情表現は。篠ノ之箒の最も苦手とする分野のうちのひとつだ。というよりもできない。何度も何度も試みたのだが、結局のところ今までで一度すら成功したためしがない。これも友人ができない一つの原因なのであろうと自己分析をしている。

うらやましい、と箒は思う。そう、それが自分にもできたなら。

できたなら？ とそこで箒の思考は停止する。できたならなん

だというのだ。いったい自分は何を考えようとしたのか？ 親友の顔がちらつき、一瞬だけ兄の顔が浮かんだような気がした。箒は即座にその考えを断ち切った。何か致命的のような事実に至りそうだと、考えなくとも箒の本能が悟り警告を発したのだ。

「そう、か？」

ぐるぐるとまわる思考の渦にもまれている箒はそんな返答しかできなかった。そしてこれが固いといわれる原因か、と一人納得した。

「そうだな。確かに私の態度は硬いのだろう。すまん夏織、迷惑をいつもかけて」

「ふえ？ わ、私じゃなくて！ というか迷惑と思っていないよ！
それが箒ちゃんの魅力だよ！

私に、じゃなくて。ほつくんに、だよ？ なんか敬語使っちゃってさ、兄妹なのに他人みたいだみていて少しさみしいよ……」

夏織は顔を伏せて、そこで言葉を創作するのをやめた。何か言い過ぎたらしい、と後悔するような感じが箒にも伝わってきた。

本当に、自分にはもつたいないくらいの友人だ。その事実を改めて確認した箒はなるべく笑顔になるように顔を成形した。

「確かに、少しよそよそしいかもしれない。でも、なぜか以前のあの人のように思えなくて……。気を付けた方がいいですか、兄さん？」

「どうでもいい。すきに呼べ。呼名名称とか話し言葉などその人間のセンスだろう」

にべもなく切り捨てられた、というよりも勝手にしろという聞く方にしてみれば最も残酷な言葉にも思えるそれを簡単に言っただけ

彼は、やはり『篠ノ之法師』ではない。明らかな、他人そのものだ。それが悪いとは言わない。というよりも以前よりは格段にいい兄だと断言できる。だけれども……。

「他人のように思えるからこそ、敬意をもって話す。それではだめか？」

「……そんなこと言われたら、反論できないよ。余計なこと言っただけで、本当にごめんなさい」

それを口にしながら、夏織は背中が地面と平行になるように頭を下げる。

本当に悪いと思うときには、夏織はこのようにして誠意を見せる。気味が悪いほど出来過ぎた人間だ。

「いや、いいんだ。よそよそしいのは事実だし」

そういつて、箒は双子の兄を盗み見る。

顔付は中性的といえなくもない。目元と肌を少しいじれば十分に女として通用しそうなきれいな顔だ。人によつては弱弱しいと受け取られるかもしれないが、その眼光に充てられれば誰でもその意見を撤回するだろう。野獣、いやぎらついた本能むき出しの瞳が、濁ったような色で覆い隠されている。

体つきは贅肉を徹底的に絞り込んだ細身。ただし細く見える体にはとんでもないほどの質の筋肉が付属していることを知っている。握力計測器が力をかけすぎて簡単に故障するほどの実力はだてではない。

「俺に何か用か？」

「いえ、本当に何もありません。……済みません」

無感情の奥に隠されたぎらついた瞳に充てられて、箒の心臓は飛び跳ねた。

それが怖いと思う。そんな瞳の人間は、まったくもって知らない。あの織斑千冬ですらここまで鋭い眼光を放つことはないのだ。

だからこうしてみてもしまうのは武人である自分は仕方ないことなのだ。そう言い訳をして、篠ノ之箒は今日もまた本心を偽り続ける。

それは日常を守る、一種の防衛行動だった。

幕ちゃんの幕ちゃんによる幕ちゃんのための物語（番外編・誕生日記念の続編）

お疲れ様でした。

何かありましたら、作者まで。

幕ちゃんの幕ちゃんによる幕ちゃんのための物語2（前書き）

まさかのシリーズ化。感想をいただけただけた人の声を受けての番外編シリーズとなりました！ 本編更新は…… ^^ ；

それといい忘れてましたが、この世界には二代目様がいません。なぜならセカンド幼馴染は法師の称号になったからだ！

誰かを復活させれば、誰かが犠牲になる。全員ハッピーエンドなどありえんのだよふはははあっ！ ……げほっげほ（作者は生まれつき喉が弱いんです（笑））

あ、内容に関しては相変わらずです。本当に、進歩がない^^ ；

箒ちゃんの箒ちゃんによる箒ちゃんのための物語2

篠ノ之箒の剣技の初めの師匠は父親である。なぜと疑問に思うまでもなく叩き込まれたから、これは間違いでないはずだ。箒はまったくもってそんなことを記憶してはいないのだが。

そんなこんなで始めた剣道ではあったが、もはやそれが生活の一部なくてはならない日常行動までしみこんだ時に、それは起こった。

「もうお前は十分に鍛えられた。教えられることなど何もない」

突然の免許皆伝である。初めはまったくもって行っていることの意味が分からなかった。なぜなら、箒は一度とて父親に自身の竹刀を入れたことがなかったから、ある種当然といえた。

しかし決定は覆らず、箒の師匠はその日を持っていなくなってしまう。これからは自分で実力を磨いて行かなければならないということのだが、あいにくそれはとても難しいことである。実力を維持するでも大変であるはずなのに、傍観者の視線に立って自己分析を繰り返し、修正点を洗い出しながら成長していかなければならないのだ。まだまだ発展途中の箒には厳しすぎる試練だった。

そこで箒は考えた。だったら身近にいる一番強そうな人似た延べばいいのではないだろうか？ と。

「事情は分かった。しかし、あいにくと私も忙しい。あまり時間は取れないが、それでもいいのか？」

「はい。よろしく願います、千冬さん」

そうして今度は師範を織斑千冬として鍛錬を再開した。しかし時期が悪かった。このころの織斑千冬は生活費を稼ぐためにほとんど毎日のように仕事を入れていたために、まったくと言っていいほど鍛

錬につきあう時間が存在しなかったのだ。その間も一人黙々と、ただ文句を言わずに基礎の習得に打ち込んだ。

「毎日毎日精が出るな。無駄ということも理解せずに、な」

汗を大量にしたたらせて、基本の型を繰り返していたある日の、突然彼は現れた。いったいいつからそこにいたのかを感じ取らせないひっそりとした登場だった。手には何やら小難しげな本を抱えており、視線は一切こちらを向いていない。

その言葉に、箒の堪忍袋の緒は簡単に切断された。毎日毎日懸命に繰り返していることを全部無駄だと言い張る彼が気に食わなかったというのは確かにあるが、問題はそれだけではなかったのだ。

いつも、何かを悟ったような視線しかよこさなかった。以前の彼とは明らかに違う、異物。それが存在することが、何よりも親友の話に嫌というほど出現することが許せなかったのだ。簡単に言えば最近自分のことよりも法師のことにお熱を上げているという事実嫉妬していたのだ。親友である自分を放っておいていたい何を見ているんだ、と思わず口に出したくなかったことは一度や二度では済まない。

「無駄じゃない」

気が付けば否定していた。いつもなら口下手でまったくもって言い返すこともできずに退散することなのだが、この日に限ってはなぜか口が潤滑に回ったのだ。あとから言わせてもらえば滑らせたという方が正しいと箒は思っているのだが。

「無駄だな。そんなことをしていったい何になる？ お遊戯でもするのか？ それともただ単に嫌な奴を叩きのめしたいのか？ それか自分を誇りに思いたいのか？」

「……そんなことじゃない。私は守るんだ」

夏織を、という言葉はぐつとのどに残留させた。口にははいけないとつさに考えが頭に浮かんだのだ。

箒のそんな態度を一切気にすることなく兄という人物は箒に一度だけ視線をよこした。その瞳をまつすぐ見ても、何一つとして感想を抱けなかった。

「それならば見せてもらおう。お前の剣技とやらを」

本を閉じた、と思った瞬間に、彼は動いた。その動きに合わせて箒は戦闘態勢に入った。……のだが、彼はそばにあった本と入れ替えただけで、また本を読み始めた。まったく箒に目もくれず読書にふけている。

相手にされてすらいない。それを悟った箒の頭には血が大量に供給された。

「やあああああああああああ！」

腹部に力を入れ、気合の鯨波とともに箒は一目散に駆け抜ける。彼はそれを確認してすらいない。その事実を知った箒はそのまま上段から一撃をかました。

よけるのか、それとも反撃をしているのか。そのどちらかの行動をしてくると思っていた箒は目を見張った。

上段から繰り出された竹刀が、弧を描きながら一寸も違うことなく軌道を描いて動かぬ彫像と化している法師に直撃したのだ。

全力の一撃が当たってしまったことに驚いている箒だが、ここで我に返った。無事ではすんでいないかもしれないという事実を思い出したのだ。そして急いで彼の体の状態を確認しようとして、再び驚愕することになった。

「軽いな、まさか丸腰だからと手を抜いてはいないだろうな？」

無傷。打たれた部分ですら何もなっていない。どこからどう見ても攻撃をもらったようには思えなかった。躲してもいない、でもあたってもない。……ならばまさか外したのか？ と先ほどの事実をかみ砕こうとしている筈に、残酷な真実が告げられた。

「お前の剣技は軽すぎる。重みも何もないのに、なぜけがをすると考えているのか？ まったくもって理解できないな。そんなに己の一撃に自信があつたのか？ だとしたら滑稽だぞ？ 本当に学んでいたのか？」

ここまで馬鹿にされて黙っていられるほど、平和な性格ではない。目に涙を浮かべながらも、必死になって竹刀を振り回す。

自分の行ってきた鍛錬が否定された。黙々と自分で苦痛に感じるほどのメニューをこなしてきたものを、すべて否定された。父親との訓練がすべてなかったことにされた。それが筈には悔しくて悔しくてたまらなかつた。

感情をむき出し手にして滅茶苦茶な軌道をとる筈の竹刀を、法師はただ黙って受け取り続ける。何度も何度も繰り返すが、法師の顔色はまったくもって変わることはなかつた。

「……はあ、はあ、はあっ……」

結局筈のスタミナが先に尽きて、竹刀はだらりと下がった。法師の涼しい顔は変わらない。

「残念だったな。しかし才能がない、と言っているわけではないぞ？ ただ、学び方が悪い。鍛錬を自分で行えるほど実力がないなら

良い師のもとで学べばいい。たとえば千冬のような、な」

「……いった、けど千冬さんは忙しいから……」

「ふむ。そうか」

そういうと彼は本を閉じて、初めて箒のことをしつかりと視界に収めた。

「構えろ。けがをしたくなかったら本気で打ち込んで来い。人に教えるというのは向いているとはいえんが、やらないよりはましだろう」

返事を返す余裕もなく、ただ黙って箒は竹刀を構えた。いつもはそんな重みも感じないはずのものが、なぜか鉛を持っている錯覚に陥るほどずっしりと腕にのしかかってきた。

疲れを振り切り一步踏み込もうとして、世界が反転した。声さえも出せず、なすすべさえもなくそれをただ受け入れることしか許されずに箒はそれを甘んる運びとなった。

永遠とも思える自由にならない時間にも、確実に終わりというものは来るのだ。身体にとってもない衝撃を受けて、ようやく箒は自身が倒されたという事実を認識した。

何が起こったのかはまったくもってわからない。だがしかし、確実にわかることがあった。

自分の兄という人物は、篠ノ之法師という人間は、確実に自分よりも実力を持っているという事実である。

その日、箒は自分の意志で彼に弟子入りすることに決めた。悔しさよりも、情けなさよりもプライドよりも強くなることを望んだのだ。上級生によく思われておらず、たびたび不利益を被っている親友を助けるために。

「どうした。ぼけっとして」

「いえ。ただ昔の、弟子入りした時のことを思い出しまして」

「弟子など認めていないのだが。……お前が稽古をつけると言ってきたのだろう……。織斑千冬までけしかけて」

「そうでしたっけ？」

「ああ。まったく、余計なことをしたものだ」

そういつて、箒の兄、篠ノ之法師は嘆息した。その手にはあの日とは違い、本ではなく真剣が握られている。刃はつぶしてあるといえ、一歩間違えればあの世逝きは免れない代物だ。

結局のところ、箒はあの日からめきめき剣の腕を上達させた。それは人類の理不尽の象徴、織斑千冬とまともに打ち合えるほどに。（真剣で辛うじて何度か打ち合いに耐えられるだけ。ちなみに竹刀だろうがなんだろうが普通の人間なら打ち合った瞬間にあの世逝きチケットを手渡される）正直に言えば中学の世界大会でまったく苦戦することなく、逆に申し訳なく思うほどに打ちのめして優勝して見せるほどに成長したのだ。

それでも、この師匠にかつて一度も一撃を入れられたことはない。というよりも全力で向かってこられてたことなど一度もない。彼と打ち合えるのは本当に織斑千冬だけだ、と箒は信じて疑わない。

かつての思惑通り、夏織に悪意を持って接そうとする不逞な輩はすべて制圧するほどの力は手に入れた。それでもまだ、彼女は強くなりたいと願う。自身の誕生日である七夕の短冊に強くなりたいと書くほづい。

「さっさと始めるぞ」

「はいー」

いつか憧れの兄と同じ立ち位置に立てるように。それを考える
筈はまだ、自身の破たんした恋心には気が付いていない。

尊ちゃんの尊ちゃんによる尊ちゃんのための物語2（後書き）

お疲れ様でした。

何かありましたら、作者まで。

第二十六話？（前書き）

番外編を期待していた皆様、残念でございましたね、今日は本編です（笑）

……なのになんででしょう、番外編書くために本編書いている気がするのは……

2011/07/12 誤字修正

第二十六話？

招かれざる客というのは唐突に訪れるものらしい。心の準備も無しに、それはやってきた。まあ心の準備があるのかと聞かれればいらないと答えるのだが。それらの訪問自体は俺の予想もしない事態だった。

「……………」

「……………」

どちらも喋ろうとせず真つすぐ俺の座っている寝具の隣に設置されている椅子に腰掛けた。ちなみにこの寝具は俺が用意したものでない。気がつけば置いてあった、というよりは篠ノ之束が設置した。あると便利だからといっていたが、俺は本人が座っているところを全く持つて見かけたことはない。普段なぜかは知らないが俺の坐っている寝具に直接腰を落ち着けるのだ。狭いだろうとつても頑として譲らないのだ。訳が分からない。……………まあ、至極どうでもいい話ではあるが。

「……………」

「……………」

受付にはおそらく面会にやって来たといって押しかけてきたのだろうが、わざわざ睨み付けるためにやって来たのか、と苦言を呈したくなるほどしゃべらない。どうやらそちらからは一切話しかけないようだ。仕方なく、第一声を発する。

「……………。貴様らは置物か？ それ物物言わぬ植物か？ 動物でも言語を発しているんだぞ？ 貴様らが喋らんでどうする？」

「……ふざけるなよ」

ようやく、篠ノ之法師の父親だつて男が呻くようにして言葉を放出した。あからさまな挑発にも乗つてきた。俺かなのかよほど自信があるのか、。見極めが難しいので経過待ち。

そんな視界に移る男の腹の底から出てきたのは、憎しみと怨念がこれでもかというくらいに詰め込まれた声だった。

「……何故。何故お前が篠ノ之法師なのだ……！ 私たちの大切なものを殺しておいて、よくも貴様はそんなに平然と出来るな！ 申し訳ないとか思つたりはせんのか！」

「……。はつきり言つてやる。寝言は寝ていえ凡夫」

全く予想だにしない一撃を浴びて、男の目が一度大きく開かれる。それが普通のサイズに戻るのとはほ時を同じくして、酒に酔つ払つたかのように顔を朱に染めた。

「……言つ事欠いてそれか！ 人の心の籠つていない悪魔め！ 貴様のような奴がいるから世界から犯罪がなくならんのだ！ だから法師のような犠牲者が出るっ！」

「俺も法師だが？」

「っ！ このっ！」

怒りで我を忘れたのか、男が拳をにぎりしめてこちらに振るわんと振りかぶる。というより完全な八つ当たりである。俺のいないところでやれといたい。

こぶしをこちらに振るうその動きは素人ではない。明らかに訓練を繰り返し繰り返し行ってきた武人のそれだ。そう、無駄な訓練を繰り返しを。

「なあっ！」

「所詮その程度か。器が知れるな。そんなものでよく師範代を名乗れたものだ。恥ずかしくないのか？」

大分面食らっているらしく、反応がない。絶句しているのと同時に精神的ダメージを受けているらしい。というかひどく。

メンタル面が弱すぎて話にならない。普通なら訝しるところだが、まるで初めからこうなることが決まっていたかのように結末がこちらに転がって来ているのに、それを拾わない手はない。……相手の演技だとしてもあからさま過ぎるのだ。

「教えてやろう。拳は極力使わんほうがいいぞ？ 直接ダメージを与える部位にしては脆いというのと、鍛えても対して強くなるん」

言葉を発しながら、突き出された拳を掌でいなし、がら空きになった喉元に平手を加減して加える。元々話をしに来たのに気絶していは意味がないからあくまでも手を抜いて。攻撃を受けて悲鳴を上げることなく地面で暴れているが、時間が無駄なのでこちらで勝手に話を進める。

それにしても、短気に加えてこれほどまでに弱いとは……。本当に師範代を名乗る資格があるように思えない。それでもこうしているのは何故だろうか？

「呻いても憎んでも貴様の勝手だ、好きにしろ。話を進めると今日はほかでもない、俺のこの先の話をしに来たのだろうか？」

「……ええ」

全く使い物にならない男に話し掛けるなどという無駄はしない。というよりもする必要が見いだせないことには動かないのが俺なの

だが。

顔いた篠ノ之雪野の顔色は暗い。こめかみが引き攣っているのをみるとどうやら夫と一緒に今すぐにも殴り掛かりたいらしい。どうやら先程の自体を冷静に眺めて自分を納得させているようだ。

「どうするのか？ 俺を殺すか？ 一番楽だぞ、金もかからないことだしな」

「馬鹿なことを言わないで。そんなもの不可能に決まっているじゃない。それにあなただを殺して一体何になるの？ 私の息子が帰ってくるわけじゃない。それを理解できないほど、頭に血が上ってはいないわ」

「……そうか、それは何よりだ」

どうやら妻のほうで、この場合書類上俺の母親にあたる人間だが、のほうでまともな話ができるらしい。さっさと済ませてしまおう。先ほどからせわしなく拳を震わせている。我慢も限界らしい。

「ならば話は早い。俺のこれから、病院を担任した音の生活についてといったところだろう？」

「……」

何も語りはしないが、俺の言葉を聞いた瞬間顔がかすかに歪んでいた。どうやらビンゴらしい。大方勝手に生きていけ、とかお前なんぞ知ったことではないといわれると思っただい俺にとって、雪野の言った言葉は理解の範疇を超えたものだった。

「あなたには、庭で暮らしてもらいます」

篠ノ之一家というのはそろいもそろって頭がおかしいらしい。俺はその事実を目の当たりにして、崩れ落ちそうになった。

第二十六話？（後書き）

お疲れ様でした。

何かありましたら、作者まで。

第二十七話？（前書き）

今日も本編です！

はっはっはそしてたるんでいるぞどつしたんだ！ ……スランプか
もしくは単なる寝不足です^^；

2011/07/13 誤字訂正

第二十七話？

「なんといったんだ？」

流石にこれは聞き返さないわけにはいかない。庭で住め、の意味が掴み取れない。文字通り庭を使って雨風しのぐ場さえなく過ごすのか、それとも簡易テントのような応急的な場で過ごすのか、はたまた庭には何か建物が存在するのか。まったくもってわからない。こちらを見る雪野の目は真剣そのものだった。

「冗談じゃない。ちなみに何も無いところだけど」

どうやら三番目の線は消えたらしい。するとなんだ、食糧に関してもサバイバルの真似事をしなければならないのか。

「するとなんだ……。主食はその辺をうろついている猫や犬か……。いやしかし、火がおこせんか。晴れた日にはまだしも、雨の中で火を起こせるとは思えんが……。するとなんだ、生で食うのか、犬猫を。まあ、決して不可能ではないが、本気が、お前？」

流石に生で食うのは抵抗感がある、というわけではもちろんない。別に胃袋の心配をしているわけでも、俺がそれを嫌がっているわけでもない。すべては相手の動作を見るためのブラフだ。思いがけない行動をとられると大体次の行動というのは決まっている。行動をやめ硬直するか。避けるか。

「……まさか本当にあたりとは……。俺が言うものなんだが、本当に頭の回線が切れてるんじゃないのか？ ちなみに犬猫が切れた場合その辺の首輪をつけているのに手を出し始めるぞ？」

「ふざけないで！」

「ふざけてなどいない。大真面目だ。どちらかというふうふざけているのは貴様だろう？ 庭に住め？ サバイバルしろ？ 寝言は寝ていえといわなかったのか？ 大体なぜお前の言うことなどを聞かねばならんのだ？ おかしいと思わんか？ こちらとてそんな義務などありはせんのだよ。……たとえば」

いきなり激昂し始めた人間の背後に回り込み、強引に首をこちらに回す。喉仏に該当する

であろう部分を二本の指でつまむ。

それだけで、苦しそうに、何かから必死で逃れるように雪野は暴れ始める。

「苦しいか？ だが、それは俺の知ったことではない。酸素不足になるうが、勝手に死のうが俺の認知にない。理解したか？ 所詮貴様らでは俺をコントロールすることはできんよ」

「……あぐっ……」

そろそろ顔色もレッドゾーンになってきた、限界であるし、何より理解しただろう。俺が少々厄介でとても首輪程度でくっつけておけるものではないということが。

締めつけていた指を解放。それと同時にその指を使って雪野を投げ飛ばす。

大して飛びはしない。少々よろけさせた程度だ。転んだのはおれのせいではなく、完全に雪野の事情だろう。

目に涙を浮かべて、酸素不足で青くなつた顔を隠そうともせず俺をまっすぐに睨みつけてきた。

「なにをするかと思えば……本当に悪魔ね」

「別にほめたところで何も出んぞ？ ばれなければ犯罪というもの

は成立しない。当然だろう？ 何よりも裁判に持ち込むだけの証拠がないのだからな。目撃者と証拠をすべて消せばいいだけ、簡単だな。面倒であるからやるうとは思わんが」

先ほどよりも表情を厳しくして、俺をにらみ付けた。……ふむ、何かを間違えたらしい。まあ、反省もしなければ記憶もしないのだが。

「で、結局何を言いたかったのだ？ 何もただ庭に住めと言いたかったわけではないのだろうか？ それくらいは理解しているぞ？」

そこで一度沈黙して、こちらの目をまっすぐ見つめてきた。そういえば、一度織斑千冬もそんなことしていたな。俺から情報を読み取るうなんて、無理に決まっているというのに。……ご苦労なことだ。

「……。ダメ。全然わからない」

当然だろう、という言葉を読み込んで、耳を澄ませる。来客の予定などまったくもって聞いていないのだが……。

「まあ、いいでしょう。何も庭に直接住み込んでいるってわけじゃない。それにこちらから資金を提供しないとっているわけでもない。本当は視界にもいれたくないけれど、こうするしかないの。今日のあなたを見て確信した。放っておいたらろくなことにならない。だから私たちは決めたの。あなたは、庭に建設予定のプレハブ小屋に住みなさい。こちらの生活に干渉しないという条件付きでね。あなたを世の中に置き放つたら私たちに罪が飛び火するわ」

「面倒だな、家族というものは。縁が簡単には切れないから苦渋の選択をのまなければならぬということか……。まったく、理解できんよ」

本当に意味不明だ。法律というものは思ったよりも厄介らしい。慎重に行動を重ねる必要がある、と認識を改めている間に、それは来た。

ドアが乱暴に蹴破られた。……というか、この光景に見覚えがある。そしてうつむいて入ってきたその人物は雪野の存在をまるでいないものとして、俺に接近し……。

「……んう……。やっぱりほーくんだあ……。えへへ、ほーくん」

あるうことか、実の親がいる前で接吻をかましてきた。ベッドにいる俺をわざわざ押し倒して、満面の笑みを浮かべて、である。いや、俺にとっては別にどうでもいいのだが。

娘の思いもよらない行動に目を大きく瞬かせている雪野を見て思う。

この家、本当の本当にまともな人間はいないものか？ と。

答えは無常。誰に聞いたところで沈黙しか返ってこないだろう。：

…まあ、はたしてまともな定義とはなんだ、といわれると困るのだが。

第二十七話？（後書き）

お疲れ様でした。

何かありましたら、作者まで。

ゲテモノを読んでくれる皆様、本日もお疲れ様でした。

……ああ、別に何か意図があるというわけではありませんのでご安心を（笑）

日ごろお世話になっていることへの素直な感謝です（笑） ……自

分で言つてて寒気してきた^^;

第二十八話？（前書き）

篠ノ之両親訪問完結編。

ようやく終わります。ゴミとこの回でおさらばできる、はずです！
皆様、大変長らくお待たせいたしました。次からは登場しませんの
で。……たぶん^^；

……というか次の更新は番外編になるかも^^；

そんなに簿が好きなら、これでもくえらえという後半な仕上がり（笑）

2011/07/14 誤字訂正

……完結編とだけあって、少し長めです^^；

第二十八話？

「……一体何なの、あなたたち……」

「うざい喋るな邪魔をするな消えろゴミわざわざ存在を許してやってるんだからそれだけで我慢して自重しろ！」

「……うるさいぞ、束。とりあえず喚くな喜々として看護師が飛んでくる」

いくら頭に血が上っていても俺の言葉は無視しないようで、無言ながらに首筋に顔を埋めた。どうやら了解といたいらしい。正確に言えば首に顔を埋めているだけではなく首筋を舌先でなぞっているのだが。……本格的に意味が分からない。

「……ほーくんから女の二オイがする」

そういうことに全く詳しくなさそうな篠ノ之束であると考えていたのだが、どうやら検討違いだったらしい。というよりは嗅覚よりも味覚味覚が発達しているようだ。検診に看護師の指が一度軽くなぞった程度の部分を嗅ぎ取っているのだから、その能力は案外侮れなものかもしれない。少し認識を改める必要があるようだ。

「で、結局のところ何をしに来たのだ？ 特にアポイントメントをとっているという訳でもないのだろうか？」

俺の言葉に凶星をつかれたのか、一度身体が軽く跳ねた。首筋に目と思しき部位が押し付けられた。

「……心配だったんだよ？ だってほーくんのことなんか何とも思っていないようなゴミ共だよ？ 心配しない訳無いよ……。だから、

ね？」

「……そうか」

感想を求められても困る。後ろにいるため姿が確認できないのだが、多分人差し指を立てて首を少しだけ傾げているのだろう。見ていなくとも簡単に想像することが出来た。

やれやれ、面倒な事態になった。

「……束、何故お前までこんなところにいる？」

先程まで全く喋れずに半ば置物化していた男がとうとう喋れる程度まで回復してしまったのだ。

多分束との相性は母親とのそれ以上に最悪だろう。この場の空気がおかしくなるのは簡単に察知することが出来た。

「こんなところ？ 束さん耳がおかしくなっちゃったかな？ こんなに素敵な場所なのにね、ほーくん？」

俺に振るなというべきところなのだろうが振られようと振られまいと結局反応しないということには代わりない。無視を決め込む。

そんな俺と束の態度に苛立ったのか、舌打ち。飛び掛かるのは自重したらしい。

我慢できない猪突猛進な猪野郎かと思っただらそうでもないらしい。

まあ、多分中身はそれほど違いはないのだろうが。

「……はん。流石、頭がおかしい同士はよく気が合うらしいな、おめ下さいことだ」

仮にも自分の娘に暴言をはけるのだからたいしたものだ。……俺？

息子とは別個と考えているに違いない。

「ふふふ。面白いね？ ギャグセンスはなかなかあったようであさ
ん安心したよ。まあ、脳みそのほうは残念ながらツルツルみただ
けど。あ、意味わからなかったりしちゃう？ つまりはね、考える
ことも出来ないお馬鹿さん ってことだよ。これで一つ頭良くな
れまちたねーツルツルちゃん」

父親が父親なら、娘は娘だった。というか下手をするとただの頭が
おかしい奴の振る舞いとして受け取られ兼ねない行為を平然として
いるのは……そういうえばこいつは他人が見えない人間だったな
ということだ打ち切り。

その娘のあからさま過ぎる挑発行為でも、どうやら頭の血管が常時
切れているような人間には有効打と化しているらしい。

「……あなた押さえて、うまくやられているの！」
「……うるさい！ 黙っている！」

雪野の静止を強引に振り切って、男は篠ノ之束につかみ掛かろうと
する。

「……病院では暴れるな。餓鬼か貴様は」
「うぶあ！」

人間の悲鳴とは思えない類の悲鳴をあげて、その辺りをのたうちま
わった。ごろごろと転がられるのは非常に鬱陶しいが、我慢しよう。
悲鳴をあげている訳でもやかましく騒ぎ立てている訳でもないしな。

「うん、流石ほーくん！ 束お姉ちゃんを立派に守ってくれるナイ
ト様だ！」

阿呆なことを宣わっている奴は当然放置。それらをぬきにして本当に何がしたかったんだこいつは？

「気にするべきではないな。さて、それではプレハブで暮らす、ということでもいいんだな？ 生活に干渉しない、問題を起こさない、これでいいのだな？」

「……いやに物分かりがいいのね……」

少し感心したかのように頷いている雪野。だが、残念ながらこれは俺の本位ではない。というか俺が話を進めないといつまでたっても事態は一行に進行して行かないのだ。こういう風にもなる。

「放っておけ。とりあえずこちらはそれで何の問題もない」

「……怪しいわね……」

なおも訝しがる雪野に、男を放り投げた。

「それを持ってとつとと退散しろ。二度と会うこともない。消え失せろ」

「……言われなくてもそうするわ。本当に清々する」

俺の言葉に気分を害したように語尾を荒げて、病室のドアを破壊せんとばかりに力を込めて開き、そして閉じた。その力のすごさを示すかのように、しばらくはドアがひとりでに一定の規律をとっていた。

「……邪魔物はいなくなつたね、ほーくん。これで束さんと今から病院で――」

「……面会時間はとうに過ぎているぞ？ 見つかってこつてり搾られないようにさっさと退散することをオススメする。肉達磨とのワ

ンツーマンは意外と辛いぞ？ 下手をするとそれが二人三人と増えていくのだから、小さな地獄だ」

想像をしたのか、一瞬束の意識からこちらから剥がれて、直後一気に青ざめた。

どうやら天才も肉達磨とおしくら饅頭は嫌らしい。……この表現であっているのかは知らない。

「……わかった。明日も来るから、ね……」

そういつて離れるかと思いきや、何故か身体を寄せて密着して来る。意外と力を込めている。なぜだか知らないが大事な儀式と見た。

だが、残念ながらその儀式の名は俺の辞書にはない。ないのであれば他から補充するのが人間という生き物だ。それは俺とて変わらない。

「一体何の真似だ？」

「……んう……。いい二オイ。んとね、ほーくん分の補充だよ！

束さんの主なエネルギー、これがないと束さんは活動出来ないのだのだ。ちなみに一時間くっついてると一日分のほーくん分が補充されるのだ！ 何と言う充電効率！」

「……？ 何だそれは？ ……まあいい。どうせ突っ込んだとしてもまともな解答が返ってくるとは思わんしな。それで、いつまでくっついてる気だ？」

「……ほーくん……」

束が艶やかな色香を載せた媚婦のような甘ったるく媚る囁き声を俺の耳に届かせる。そのまま耳を舌でなぞってきた。唾が付着し、水っぽい音が鼓膜を震わせた。

束はその行為を終わらせるとともに俺の顎を持って模様を固定させ、

形のよい唇に動きを付けた。

「……本当に、なんでだろう……もう我慢できないよ。ほーくんを見てると、おかしくなっちゃうよ。……エッチな気分になっちゃう。ふふっ、誰にも許したことないここがね」

そういつて俺の手をある箇所誘おうとしていた。勿論丁寧に断りしておいた。雰囲気飲み込まれるほど自制心がない訳でもないのに加えて、この幼児の身体だ。物理的に不可能なのだ。……何、忘れていただと？ まあ、喋り方がこれだからしかたないかもしれんな。

俺に拒絶された篠ノ之束は少し頬を膨張させて、自分の手を股の間においた。

「……ほーくんを受け入れたくて、エッチなお汁垂らしてじゅくじゅくしちゃってるんだ……。どうしてくれるの？」

「知らん」

にべもなく切り捨てるに決まっている。少しでも迷う振りをすると女というものは押せば何とかかなりそうな脈ありと判断するものだ。いや、人間すべてに言えたことだが、特にその傾向が強いように思える。

余計な希望なんてないほうがいいに決まっている。少しでも甘い汁が存在すると無邪気に飛びつくのが人間というものだ。

俺の返事を予め予期したのか、篠ノ之束の顔色に変化はない。顔色に変化はないが、若干口元の緩みが加わっている。

「本当に面白いよね、ほーくんって。だから束さんは惚れちゃったんだろうけど。ふふっ、大好きだよ、ほーくん」

再び口を耳元に近づけて束はそう言葉にした。

どうやら扉の向こうからやって来た襲撃者に気が付いた様子はない。

「……面会時間はとっくに過ぎていま　　っ！　何してるんですか
！」

「……姉弟の健全なスキンシップだよ？　見て分らないの？　目玉ホントについてる？　節穴なんじゃないの？　それとも老化で劣化でもしたの？」

扉を開いて現れた看護師に驚く事のせず、ケンカを売るかのような暴言を立て続けに浴びせた。

その言葉が看護師にとつて相当耐え兼ねるものであったのか、顔色が赤や青のゾーンを即効で通過して白くなり、そして元に戻った。一応肉親で唯一頼りになりそうな人間であるため合掌ぐらいはしておいてやろう。

ちなみに篠ノ之束はやはりというか俺の想像通り肉達磨部屋（三畳あるかないかの部屋に肉達磨三体。後は想像に任せる）に連行されて、次の日俺を見るなり飛びついてきた。同行していた織斑千冬の制裁を受けてもなお立ち上がり密着して来たというところを見ると、本当に限界だったらしい。

実のところ俺も違う肉達磨部屋に連れていかれた。もちろん肉ダルマ全員寝てもらったのは、言うまでもないことだ。正直者は馬鹿を見る。世界なんてそんなものさ。

第二十八話？（後書き）

お疲れ様でした。

本当に、お疲れ様でした。（今までの下衆っぷりに耐えた皆様をた
たえる意味で天井）

何かありましたら、作者まで。

あなたは篠ノ之箒が好きですか？（機械音声）

幕ちゃんの幕ちゃんによる幕ちゃんのための物語3（前書き）

今日は番外編。

……そして今日こそつば九郎を神宮で退治だ！ 行くぞ神宮！
……ということでも今日も外出で感想返しが…… ^^ ；

そして総合得点1000 お気に入り登録400 突破！
マジか！ 何度も見直したのに結果が変わらなかつたんでマジみ
た
い
です
！
きたああああああ！ みなさんありがとう！ 奇跡が
起きた！

2011/07/15 誤字訂正

箒ちゃんの箒ちゃんによる箒ちゃんのための物語3

篠ノ之箒は、聞こえてきた単語に思わず聞き返した。

「……………何と言ったんだ、夏織？」

「……………いや、ほつくんとか姉さんとかを誘って遊園地にでも行くのかな、って言ったんだけど……………」

どうやら聞き違いではなかったらしい。耳が正常に機能していたのは確認したのだが、イマイチそれが事実とは考えにくかった。

遊園地。それにとってもではないが釣られるような姉や兄ではないのだ。

以前から何かしらのイベントをこなしたいとは思っていたのだ。だがその二人が共通してたのしめるといいうものが全く以って浮かばず、結局廃案になってしまったのだ。

それにもかかわらず、夏織は行こうと誘うのだ。しかも両者ともに全く興味を持ちそうにない遊園地にある。

少しだけはいでいる夏織を前に少し悪い気がしたのだが、結局言わなければいけないだと自分に言い聞かせて夏織に向き直った。誰だっけ楽しんでしている人物に中止とかを告げるのは心苦しいのだ。それは箒として例外ではない。それが悪意のかけらもなく善意の固まりのような友人になら尚更だ。

「いや、……………あの姉と兄だぞ……………？絶対に乗って来ないに決まっている」

「……………そう？　なんで箒ちゃんはそう思ったりするの？」

説得するどころか、純粹な疑問を返された。そこには至極不思議そうな顔で箒を見つめる夏織の顔があった。

その顔が急に寂し気な色を帯びた。その表情を見ているだけで、罪悪感がひとりでに沸々と沸いて来るのを篤は感じた。

「……篤ちゃんは嫌だった？ ごめんね、無理に誘っちゃって」

「……いや、そんなことはない……」

それだけ言うだけで精一杯だった。良心の呵責が篤を断罪せんとひたすら責めてくるのだ。今にも篤は罪悪感に押し潰されて泣いてしまいたかった。

「そんなことはないのだが……むしろ賛成のほうなのだが……。果たして二人が素直に行くと首を縦に振ると思うか？ これを思うと何をしてダメだと思ってしまうって……。何にも誘えなかった」

このままでは罪悪感につぶされてしまいそうだった篤は何とか声を紡ぐ。

その言葉にようやく納得したのか、夏織の表情が持ち直した。そのまま可愛らしく頬に人差し指を当ててしばらく考えてから、名案を思い付いたのか口元を緩めた。

「……あるよ、束さんをけしかける方法は。そして束さんが動けば自動的にほっくんも動いてくれると思うよ。なんだかんだ言って優しいし、きつと私たちがこっそり行動してるのに気が付いてくれるから」

その言葉に余程自信があるのか、夏織は何度も同調するようにしきりに頷いている。他の人がやればただの頭がおかしい行為の仲間入りしてしまうのだが、この篤の幼なじみがやるとそれが様になってしまうのだ。それが篤には羨ましく感じられる。

その内心を覆い隠して、篤は同意の言葉を返した。

「そうだな……。最悪兄さんに協力を頼めば、協力してくれる気がするし、いい案だとは思う。けど夏織、大事なことを忘れてるぞ」
「……？ んと、ごめんね。なんのこと……？」

どうやら幼なじみの頭の中では既に全員が同行することが確定しているらしい。

一番大事な人を抜かしているのにもかかわらず、
大事なところで少し抜けている少女を嗜めるように、少しだけゆっくり言葉を重ねた。

「いいか？ ……私たちはいい。何せ学生だからな、休みなどいくらでも取れる……。兄さんもそれは変わらない。姉さんだってまともな職業に付いていないだろうから簡単に来ることが出来るだろう。だけど、千冬さんは違うだろう？ あの人はもう立派な社会人だぞ？」

その言葉に一瞬虚を付かれたようだったが、すぐにその表情はいつもの穏やかな微笑に代わった。

「大丈夫。姉さんは私とほっくんと篝ちゃんが大好きだから。束さんと一緒に行ってくるね。っていえば有休とってでもついて来そうな人だから。勿論、姉さんのために日にちは考えてあるよ？」

どうやら見積もりが甘かったのは幕のほうらしかった。詰めが甘いなんてことはなく、しっかりとした考えに基づいたものだった。その事実を確認すると、一気に肩の力が抜けた。どうやら自分もなんだかんだ言ったところで、兄と行く遊園地を楽しみにしていたらしい。夏織のことを言えなくなってしまった。思わず苦笑い。

「……完敗だな。最初は一体何をいい始めたかと思っていたが、そこまで考えているとは思

わなかった。両手をあげるか？ それとも白旗を振ればいいか？」

「……じゃあ、白旗で……って最初なんかおかしいこと言ってる風に思ってたの！ 酷いよ！」

箒が冗談を言ったことをわかって言っている。その証拠に、口元が若干ではあるが緩んでいる。見事にかかわれ、からかっているという二つの立場を共有している。

「……残念だ。白旗のストックは切らしているようだ」

「……それじゃあ、追撃をかけてあげなくちゃね？ そしてさっきの話詳しく聞かせてもらおうよ？」

そんな風に冗談を言い合って、しばらく箒は幼なじみとスキンシップを楽しんだ。

ちなみにそれぞれの反応はこうだった。

「……えー遊園地？ 折角の箒ちゃんのお誘いだけど束さんは……。え、ほーくん行くの？ し、仕方ないなあ。しょうがないから、本当にしぶしぶ束さん付いて行ってあげても……。え、やっぱりいい？ ちーちゃんに付いて行ってもらう？ だめだめ、そんなの束さん許しません！ って私が断ったから仕方ないだろうって……。わかったよ、不承不承この束さんが……。お願い、連れていって箒ちゃん。この通り（頭を直角に下げている）」

「……（無機質な瞳でただ眺める）そうか。まあ、いいだろう。予定が決まれば連絡を頼む」

「……ん？ 遊園地か？ ……出来れば行きたいところだが、日程が合うかどうか……。何、夏織と法師が行くのか？ ならば私は行かずとも……。いや待て、束が来るのか？ そうなると護衛は期待できない……。夏織の身を護るには……。背に腹は変えられん。日程が決まったら早急に連絡をくれ。有給をとる。…… そんな簡単に取りれるものなのかだと？ 何、夏織の身になにかあつたらまずいからな。きつと承諾してくれるだろうよ。いや、するに決まってる」

幕ちゃんの幕ちゃんによる幕ちゃんのための物語3（後書き）

お疲れ様でした。

何かありましたら、作者まで。

なんか、昨日の反応を見ているときちんとあとがきまで読んでくださっているようで、うれしいです！

そして昨日反応から見ると、こっちの方が正確？

あなたは織斑夏織が好きですか？（機械音声）

幕ちゃんの幕ちゃんによる幕ちゃんのための物語4（前書き）

インターバルだ……。中身がいつも以上に存在しません^^；
そして皆様の応援で成り立っているこの物語の明日はどっちだ！
という位に迷走中。……日常って、書くのが思ったよりも難しい^
^；

2011/07/15 訂正

2011/07/16 誤字訂正

篝ちゃんの篝ちゃんによる篝ちゃんのための物語4

「……来てしまった……。一体いつ以来だ？」

「……確かに、いろいろあつて忙しかったからね。ここに来るのはそれこそ幼稚園の頃以来じゃないかな？」

そうになると、実に十年近くも来ていないことになる。当時の記憶も曖昧になっていることも相俟つてか、懐かしいというよりもほとんど知らない場所と言うほうが近い。

切符を切つて入場した。総勢五人という身内のオールメンバーで。

「……そうだな。私が来たのがそれこそ中学の時以来か。すると一度も連れて行ってやれなかったのだな。作ろうと思えばいくらでも休暇など作れたはずであつたのに、な。迷惑をかけて済まなかったな、夏織」

「そんなことないよ！ 姉さんが忙しかったのは事実だし！ それに！」

「遊園地というのは辛気臭い話をするものなのか？ 詰め込んだ知識によれば逢い引きの場所であり、家族の団欒の場所であり、また学生達の遊戯の場所でもあると認識していたのだが？」

暗い雰囲気を作り出そうとしていた千冬・夏織姉妹に絶妙なツツコミが入り、危うく出だしから妙な空気になつてしまうのは避けた。ここは法師の機転がうまく場をせいしたと見ていいだろう、と心の中で篝は冷静に評価をした。

「……ほーくんほーくん、あつちにコーヒーカップがあるよ？ メリーゴーランド、ゴーカート、それから」

「……メルヘンなのは恰好だけにしてもらえますか、姉さん。正直

その恰好に文句をいいたいのを我慢しているこちらの身にもなっただけませんか？」

辛辣な口調になってしまったのは仕方がない。周りの決して多いとは言えない人の目が、こちらに集中しているのだ。

勿論、各々の恰好がおかしいせいなのだが。

筆頭やはり誰が何と言おうとも篝の姉、篠ノ之束である。頭に付属した感情の揺らぎにあわせて動きを付けるうさぎの耳（篠ノ之法師作。ちなみに束が作ったウサギの耳の試作品には半径二キロをまると消滅させる自爆機能と、いつでも鮮明な映像を記録することができる超小型のハイテクカメラが付いていた）エプロンドレスを意識したメイド服（最近のお気に入りらしい。裁縫の得意な夏織が作らされていた。そしてやはり事実が発覚した日から数日、篠ノ之束は姿を見せなかった）、という出で立ち。正直何処のコスプレイヤーだと今からでも張り倒したいと言う思いを深呼吸で鎮めている。たくさんの人々の周りで血の惨劇を演じるわけにはいかない。……そして人がいなければまず自分よりも先に小刻みに拳を震わせている親友の姉の拳が火を噴くのは明白だった。束以外の人は奇抜、という意味ではなく単に容姿が優れているために注目を集めている。

何故か黒のスーツに身を包んだ篝の兄、篠ノ之法師は瞳を覆い隠すようにレンズの部分が金色に輝いているサングラスを着用している。普段の雰囲気とカッターを着用しないでそのままスーツを着、さらにその上で太陽の光を反射させているサングラスという過激な恰好に、周りの同性達の目は釘付けた。

対照的に異性から目を向けられているのは織斑姉妹。妹の夏織は清楚さを極力前面に押し出した白いワンピース。上質なシルクの合間から零れ出す肌の白さと露出しているパーツとのコンビネーションが抜群で、やはりモデルでも逃げたしなくなる容姿を表現仕切れている。耳元で燦々と輝く青い多数のパーツが組み合わさったストー

ンが夏織の動きに合わせて揺れ、コルクソールとベロア素材で仕上げた黒のオープントゥのサンダルはワンピースと対比していることで清楚の中にあでやかさも演出。歩くたびにほんの少し鳴る軽い独特のいい音が涼しげな雰囲気醸し出す。

姉の千冬は妹の夏織とは方向性が少しばかり違っている。妹が清楚さを前面に押し出している格好。それに対して姉の方はワードローブの中でも特別な黒のレザーのジャケットを着用している。何年も着込むほどに「自分のもの」になるレザージャケットを、まるで本当に自分のものとしてしまっている。もう一つの肌といてもいいほどに滑らかな上質のラムレザーを使用したそれに合わせているのは七分丈の黒のパンツ。そこからくるぶしまでをカバーしている赤のラインがまぶしいレッグウォーマー。そして終点は黒のパンスト。アクセントに首元にはシンプルな十字架を象ったネックレス。完全に妖艶な大人の格好だ。

まったく対照的な二人ではあるが、共通して容姿が整っている。本当に理不尽な姉妹だ、と篤はあきらめた。いくら努力しようとも、まったくもって追いつける気がしないのだ。容姿に限らず、いろいろと。……周りから漏れてくる荒い息は聞こえないことにした。

この中で普通なのは本当に篤だけだ。平凡すぎて埋没している。それについて別に劣等感を抱くといったことはないが、やはり女の身としては親友ほどでないにしてもきれいでありたいと思っている篤としては複雑だ。

というよりも、明らかに気合が入っていて身内の遊びという感じではない。特に夏織に至ってはこの間購入したばかりの衣服を身に着けていることからその気合がうかがえる。

「……………」

もちろんその努力は、沈黙している目の前の人物に見てもらいたいという感情から由来しているのだが、果たしてそれは一体効果があ

るかどうかは未知数だ。……ほとんど無駄だとは思っているが、こういうイベントをこなしていないためにこういいう言い方になってしまった。

「何に乗ろつか？ 束さんじゃないけど、初めは少し抑え目で行く？ それともあまり人が並んでいないからあれに乗る？」

思考を別の方向へと飛ばしていた篤は突然の夏織の言葉に驚きながら、夏織が指した場所を見た。
そこには、悪魔が存在した。

幕ちゃんの幕ちゃんによる幕ちゃんのための物語4（後書き）

お疲れ様でした。

何かありましたら、作者まで。

さて、こうして番外編で活躍（発言）している夏織。一部のコアなファンの方（笑）から大声援を受けて出番が増えております。

ところで、総合1000&お気に入り400突破記念って何すればいいですかね？ 皆様の意見を募集しております。どしどし応募してください（笑）

第二十九話？（前書き）

中途半端なところで終わったからまた番外編と思ったあなた。残念でした。作者の気まぐれにより本編です。

プロローグも合わせて三十話目であるのに、未だに舞台は最初の場所、病院内。

何この進み具合。どんだけ鈍いんだ^^；

引き続き、お気に入り400&総合1000突破記念の草案募集中。

2011/07/17 誤字訂正

第二十九話？

国家機関というものはたいはいは当てにならない。筆頭は警察をはじめとした治安維持の部隊だ。彼らとて警察官は好きでやっているわけではないというのが大半だろう。仕事だから、生活のための資金が手に入るからという理由でやっているものも多い。もちろんそれがすべてというわけではもちろんないが、中には金儲けのために内部の機密情報を簡単に売却したり、犯罪者の犯罪行為を性的交渉や金銭的扶助等の行為でいとも簡単に買収をされる者までいる。これだから、警察というものは信用できないんだという声は多いだろう。

別にそれ自体について俺は絶対に悪いとかダメだとは言わない。公僕といったところで彼らだって公人である前に人であるのだ。多かれ少なかれ個人の事情というものはあるだろう。人間は金を支給されていかなければ生きてはいけないし、労せず大金が入るならば誰だって心を惹かれるだろう。俺はそれ自体を別に批判したいわけではない。ただ、そういう面が存在するからこそまったくもって役立つたない、とは思うが。

そして今、その国家機関の人間が、目の前にいる。

「どうもどうも。お忙しいところ、大変申し訳ないね。自分は」といって名前と、それらの簡易情報が記された媒体をこちらによこすのは、二十代半ばの男。へこへこと無駄に頭を下げて、こちらの機嫌をうかがっている。

まあ、誰でも警察と効けば不快に感じたり訝しいと感じたりはするものだろう。それを撤廃するための行動ということを読み取るのはたやすかった。個人の機嫌を損なえば、捜査協力どころではないという事実もそれらのことを助長させた。記入されている情報を流し

読みし、確認したふりをして、続きを促す。

「で、その警察様が、何の用でここに来たんだ？　こんなガキ相手の見舞いに食い物を持って来られるほどの余裕を見せつけたいのか？　それともいちいち何かにかこつけてどこかに行ったりしなればならないほど忙しかったりするの？　それとも事件捜査協力の依頼でも幼児相手に頼むのか？」

俺の言葉に心底驚いたように、男は目を大きく瞬かせた。

「おや、これは手厳しい。警戒されてしまったようですね。まあ、大体あつてますよ。うちの部署はたいそう忙しくて、もう全国飛び回りまくり。いつかこのまま絶対やめてやろうと思うほど走りまわされるし。うんざりだよ。個人には金をけちるくせにこういうところでは無駄に奮発するし。……ところで君、すごいね。普通なら一も二もなくこれに飛びつくと思うんだけど」

首をすくめて、両手を天井と平行にさせて揺らした。どうやら参ったということを表現したらしい。そうしてその行為の後に、持参した食べ物らしきものを目の前で揺らす。

男はそこまで話してから、一度口を閉ざした。どうやら本題とやらに入るらしい。先ほど揺らしていたフルーツの盛り合わせ（確かお見舞いの定番だったはずだ）を横において、先ほどとは打って変わって真面目な口調で話し始めた。

「聞いたところによると、確か君は記憶喪失だったかな？」

どこから手に入れたのかは知らないが、そんなことを警察官は言い始めた。身内は口が堅い、かどろかは知らないが、積極的に言うタイプではない。篠ノ之夫妻は俺のことをまるでいないもののように

扱おうとしていたから対象からは除外。織斑千冬・夏織姉妹は簡単に口を割る正確ではないとみているためこれも除外。篠ノ之束は俺を『篠ノ之法師』として認めているため記憶を失ったことを覚えてるかどうかさえも不明。まあ、覚えていたとしても軽々しく口にはしないだろう。というかまず他人と会話することができない社交性がない人間なので安心だったな、ということでもこれも除外する。となると残ったのは、病院関係者ぐらいしかいない。まあ、病人のことを全員把握しているわけではないだろうが、担当くらいは俺のことを覚えていてはいるはず。そこから出回ったとみるのが多分正しい読み方だ。……独自のパイプラインという線もあるが、正直流出した個体情報の出所自体はどうでもいい。

警察官はおれの瞳をじっと見ている。その顔にはわずかな変化も見逃さないという決意がありありと出ていた。まだまだ青い。相手にそんなことを知られているようでは尋問などでは不向きといわざるを得ない。というよりも考えが顔に浮かぶ人間はそういったことに向いていない。ということは操作の邪魔だったからこちらに回されたという線が浮上。……どうでもいい背景について考察するのは、俺の悪い癖だ。気にしないでもらえると助かる。

そしてこの光景、以前にもやはり見覚えがある。感情を読み取ろうと試みられるのはこれが三度目になる。全員違う人間とはいえ、そろそろ学習してほしいものだ。しかも全員その道得ない素人だ。正直なめられている気がしてならない。

「どうやら、そうらしいな。俺自身に全くその感覚がないんで捜査に協力ができないかもしれない。が、それでもいいのか？」

「構わないよ。聞かせてほしい」

男は一度大きくうなづいて、警察手帳のページをめくりペンを執った。どうやらメモをするらしい。

「
」

とりあえず、現状理解していることを簡単にまとめ上げて話して聞かせた。メモを取りながらもこちつらをずつとつかがっていたその精神には関心するが、いったい何なのであるのか？ どうも真剣にメモを取っているようには感じ取れないのだ。

些細過ぎる違和感かも知れないが、俺の感はそう警告を発している。とまあここまでわざとらしくしておけば、少しはこの男が胡散臭いということが理解できるだろう。部屋に入ってきた瞬間に鍵をかけた瞬間に俺はもう警察官ではないと確信していたが。

そして俺の話を聞いてメモを取りながら、今度は目を差し向けずにこう切り出した。

「そつえばさ、君ってお姉さんはいる？」と。

第二十九話？（後書き）

お疲れ様でした。

何かありましたら、作者まで。

以前から聞きたかったことを一つ。

あなたは番外編と本編、どちらがより好きですか？（夏織ボイス。
皆様の好きな声を想像してみてください（笑））

篝ちゃんの篝ちゃんによる篝ちゃんのための物語5（前書き）

わーお。って感じですよ。

誰が得をするんだ？ という発言は禁止です。ゲテモノ作家ですのであきらめてください（笑）

最近篝のための番外編が夏織のための番外編になっている気がする今日のこの頃。がんばれ篝！

あとは、ISを書かなければ……。

2011/07/18 誤字訂正

篝ちゃんの篝ちゃんによる篝ちゃんのための物語5

篠ノ之篝の目の前には、化け物が存在した。

「夏織、まさかいきなりこれに乗るとかは言わないよな？ 頼むから言わないでくれ……」

「うーん。これ人気のアトラクションなんだけどなあ。珍しく今すいているし。パンフレットによれば二時間待ちが普通って書いてあるから今がちょうどいいタイミングだと思ったんだけど……」

そういつてパンフレットを片手に首をかしげる夏織に悪意はまったく感じられない。たぶんこれから先のことも考えての計画なのだろう。それ自体は反対したいとは思わない。いきなり眼前にそびえるものに乗るのではなければ。

ごくりと生唾を飲み込む。いくら剣の道に通じ、胆力を磨いてきた篝にだって、苦手なものや嫌いなもの、耐えられないものは存在する。

たとえば、ジェットコースター。ただただのジェットコースターと侮るなかれ。あれはそんなに優しいものではない。

始まって何十メートルも昇らされた頂上地点から先に、レールが存在していないのだ。だからといってまさかさまに落ちてしまう、なんてことにはならないようにしている。レールが引き出されるようにして連結されるのだ。たつぷり二十秒ほどかけて。それですでに恐怖を煽られるいうの言うのに手加減は一切ない。というよりもこのアトラクションの見どころはそこらなのだ。

落下角度九十度を超える、急激な下り坂を一気にかけ上げるのだ。時速二百キロ以上で。本当かどうかは知らないが、パンフレットにはそう書いてある。

人間が乗る乗り物ではない。考えた人間はどうかしているとしたか思

えない代物だった。

「今からでも遅くない。別の乗り物にしては……？」

「ほかのどこも混んじゃってるみたいなんだよね……。これじゃあどうしようもないよ」

残念そうに顔を俯かせる夏織を確認したところで、篠ノ之箒は悟った。これはもう回避することができない運命なのだ。

「では、乗るか。いつまでもうだうだしては時間がもったいな
いしな。夏織、箒、行くぞ？」

「ああ、そこで放置プレイなんてっ！ 流石ちーちゃん！ 上級者
！ こんなことされたら、束さんは、束さんはもう……っ！」

死刑宣告にも似た発言を千冬が行い、それに追従するように束がすがりついた。

もう完全に避けられなくなってしまった。昼間であるはずなのに、目の前が真っ暗になってしまっただった。

「どうした？ 大丈夫か？ あまりにきついようならば別に無理を
する必要はない。所詮遊戯のために来たのだ。きつい思いをする場
所ではないぞ？」

四面楚歌ともいえそうな状況かと思いきや、一番味方になりそうも
なかった法師がそう進言した。顔に別段変化はないが、何となく心
配そうに歪んでいるような気がした。

そんな兄を安心させるように、ほほの筋肉が引きつらなように注意
しながら無理やり笑顔を作った。それでも、うまく笑えた気はしな
かった。

「そうか。まあ、そういうならば俺からは何も言うことはない。限界だと感じたら、俺か千冬に言うといい」

それだけを言っつて、法師はまた集団に戻っていった。絶対に無理をして笑顔を作っていたことは分かっていたはずだ。わかっていたはずなのに、それを黙認した。篝の意思を尊重してくれたのだ。それを思つと、篝の胸が勝手に熱くなった。

「行こうよ、篝ちゃん！一緒に乗ろうね？」

「そうだな。まあ、所詮アトラクションだからな。楽しもうか、夏織」

そのやり取りの後、一団はコースターを目指した。途中にいた突っ伏している人間たちは、見なかったことにした。

「それではお楽しみください」

係員にそういわれた瞬間に、異変が起こった。それは誰もが考慮しない、突然の事態だった。

「……は？」

「……ほえ？」

「……ん？」

「……あはっ！」

「……」

全員反応が違うが、体験した出来事は同じ。いきなり加速し始めたのだ。

ジェットコースターというのは始めゆるゆると引つ張られるのが普通だ。まだ出発して二秒と経過していない。それにもかかわらず、いきなりとんでもない速度で加速を始めたのだ。体感速度から考えると多分百キロぐらいだろうと冷静に考えているように見えるほど、箒は混乱していた。

加速した怪物はまったく臆することなく突っ込み、一気に重力に逆らう軌道を開始。勢い増させのローリングを見度とに決めて見せる。だがやられている方としてはたまったものではない。始まった速攻で胃の中身がひっくり返され、箒は早くも終わってくれと願った。

「いやあああ。怖いよ箒ちゃん！」

限界なのは何も箒だけではなかった。平気そうな顔をしている法師、千冬、束とは別に夏織は早くも叫んでいる。叫んで顔がゆがんでいるはずなのに、まったくその容貌に乱れはない。

そんな箒たちをあざ笑うかのようにコースターは止まらない。どころかさらに加速していく。一回転、二回転。さらに横にひねりを加えた三回目、四回目と回転。散々箒たちを振り回したコースターは、ようやく屋根のある建物に入った。

やっとこれで終わりか、という考えが一瞬よぎったが、残念なことには箒はその場所に見覚えがない。終わったかと思つて油断していたが、コースターは止まるわけではなく減速しただけで、コースター自体は止まっていない。やがて視界がはれ、そのままずると引つ張られていった。

目指すは外から見た地上数十メートルの地点だった。まだこれまでの回転は前座にすぎなかったのだ。それを思い知らされて、箒は泣きたくなつた。

隣を見れば、すでに夏織は目じりにしずくを浮かべている。半べそ状態だ。一人で挑戦していたならば箒もこうなっていたに違いない。それほどまでに、このコースターは恐怖を煽るのだ。

後ろを瞬振り返ったところ、先ほどまで余裕の表情を見せていた千冬や束までもが表情をゆがませている。平気な顔なのは法師だけだ。

まるで処刑台に誘うように、ゆっくりと箒たちを引きずり出す。

「……もうやめてえ。ごめんなさい。私が悪かったんです。お願い、止まってください……」

「く、これほどまでとは……。やるではないか！」

「あれ、ちよつとこれは束さんも聞いてないかな？　なんでこんなことになっているのかな？　あれ？　あれ？」

「……」

そうして頂上に到達。がりがりという音とともにレールが引き出される。目の前に全く何もないとところから物体が敷かれるというものもまた恐怖を増幅させる。目を離したいのに離せない。そんなジレンマに陥った。

完全にしかれた。それでもコースターは出ない。早く終わらせてくれという心ともう来ないでくれという心がせめぎ合っているときに、急激に落下を開始した。

落ちる、ではない。九十度以上で落ちているのはすでにそれは落下ではない。さらに加速していることから、激突といったほうが正しいか。急激に地面が迫ってくる。

胃の中身がシェイクとかそういう話ではない。得体のしれない何かが起こっていた。

地面に激突するすれすれで急上昇。胃の中身が食道を通じて躍り出ようと反乱を起こした。気合で箒はそれをこらえた。

「……も、もうダメ……」

すでに気絶寸前の夏織に考慮するようにこの機械は設定されている

わけではない。まったく無視して鬼のような追撃をかける。

シェイクされ過ぎた胃を、さらに横回転と縦回転を交えて刺激する。スピードを維持したままで。

何度も地獄を見せられて、ようやく終わりを迎えた。

もうこんなものには二度とのりたくないというのが、幕の偽らざる感想だった。

幕ちゃんの幕ちゃんによる幕ちゃんのための物語5（後書き）

お疲れ様でした。

何かありましたら、作者まで。

…何か言おうと思ったんですけど、気の利いたことが思いつかなか
った^^^；

篝ちゃんの篝ちゃんによる篝ちゃんのための物語6（前書き）

番外編でした。本編を進めてほしいという声があったのですが、都合によりしばらくこちらを進めます。
少々のご辛抱を。

2011/07/19 誤字訂正

箒ちゃんの箒ちゃんによる箒ちゃんのための物語6

コースターを経験したものは、例外を除いて息も絶え絶えだった。特に一番その傾向が顕著なのは夏織だ。いまだに目じりの後の涙が乾ききっていない。それが彼女の表情をいつそのこと神秘的なものへと変化させている。周りの異性の視線が煩わしい。

箒にとって意外だったのは夏織の姉、千冬がそんなに余裕のある表情ではないことだった。いつも至極冷静で落ち着いている（箒の姉の珍事時の制圧行動はもちろん除く）人物で、冷静さを崩さないと思っていたのだが、少々普段よりも顔色が悪い。束も同様。

「こ、怖かったよ箒ちゃん。ホントにもう何度もダメだと思ったよお……」

感覚に捉えられているのか、体を震わせながら夏織は箒にすり寄ってきた。特段香水をつけているわけではないのに、なぜか甘いにおいが鼻をかすめた。

「安心しろ。脱輪等のトラブルを起こして死亡事故が起こらないように安全管理は徹底しているはずだ。一度起こった後のマスコミの報道等の風評被害にさらされたくない手前、金はかけているだろう。もっとも、経営者、アトラクションの安全管理責任者等がまともであるならば、という条件は付属するが」

「余計不安になるようなことは言わないでください。本当に怖かったのですから」

酷く単調な調子で意見を述べた法師に、箒はそう突っ込みを入れる。何人もいる関係者のうち一人でもまともな考えでなかったらと言わ

ればアトラクション関係者には申し訳ないが死亡事故が起こる可能性が高いといわれているようなものである。また、まともな考えでもヒューマンエラーというものは常に起こりうる可能性はある。不安にもなる。

その言葉に対して体をこすりつけながら、夏織は何度もうなずいている。同意の意を示している。それは他の二人も同様だった。

「さ、流石に九十度以上の落下の際にコースターの車輪がギシギシ言っていたのはキモが冷えたね！ まあ、天災東さんはこんなことじゃ死なないけどっ！」

「……その割には騒がしかったがな。やれ死ぬだの、ちーちゃん助けてよだの、もうお願いだから止めてくれたの。私の聞き違いだったか？ 確かに隣から聞こえていたような気がするんだがなあ、東？」

「そ、そんなことないんじゃないかなあ？ そういうちーちゃんだつて、女の子みたいな悲鳴あげちゃってさ！ きゃあああ！ だつて！ 東さんの耳はごまかせないよ！」

「どうやら一度話し合いの場を設ける必要があるそうだな、東え？」「ど、どーしてそんなに凄んでいるのかな？ かな？ ……。ちよつと東さん、お手洗いに……」

「なあにい、すぐに済む、そんなにあわてなくとも、なあ？」

隣の空間がとんでもないことになっているという状況を軽く受け流して、篤は一番余裕を持っている法師に向き直った。途中不安をおおるような東の言葉は当然のことながら聞かなかったこととして記憶を圧縮して追いやった。

「余裕そうですね、兄さんは。怖くなかったんですか？」

「そうだな……。まあ、最高速度を誇っているであろう地点で投げ出されても怪我なく戻れるとわかっていたからな。大して感じはし

なかつたな」

ぶつ飛んでいるコメントである。普通ならばまず間違はなく、助からない。箒とて急激突しそうなあの瞬間で投げ出されれば受け身をとれるかとれないかという瀬戸際だったと振り返る。たとえとれたとしても、まず無事ですむとは思っていない。それを兄は怪我などしない、と言い切ったのだ。相変わらずの規格外ぶりだ、と心中で言葉をとどめた。

「……」

呆然としているのは夏織である。めまぐるしく動いていく状況にいつもならば確実に食らいつけるのだが、いかんせん状態が普通でないたため今回はそうもいかなかったらしい。まったくわけわからずに呆然としているように見えた。

とりあえず、地獄は終わったのだ。精神状態はレッドゾーンに突入していたが、せっかく訪れたのだ。楽しまない手はない。気分を入れ替えて、回れそうなアトラクションを探す。

「……あれ？ 姉さんと東さんは？」

「よるところがあるそうだ。まあ、私たちだけで楽しむとしよう」

実際問題、ああやって少しでも法師と夏織の距離が近くなるようにということとで千冬と東は席を外したのだろう。そうだと信じていたかった。本当に暴れるためだけに行ってしまったのだったら悲しすぎる。

「……呆けていると時間というものは勝手に消費されるぞ？ さっさと行動することを提案する」

「そうですね。……夏織、どれに乗りたい？」

そういつて夏織がつかまっている腕を振り払って、さりげなく法師のころへと吹き飛ばした。夏織はそのままぶつかるとして、ぴたりと法師と体を密着させた。

「う、ごめんなさい……。そ、そんなつもりじゃ……。！」

「気にしていない。好きにしる。俺からいうことは何も無い」

やや冷たい反応ではあるが、一応許可が下りた。そのまま夏織は法師の腕に身体を絡ませた。その大胆な行動の割には顔を合わせるもいったことはしなかった。ただほほを赤く染めて、うつむいた。たぶん不可抗力という言葉が働いているのだらうということは簡単に想像できた。普段ならばできる限り離れようとするからだ。

そんな乙女全開の夏織の姿を見て、周りのギャラリイはにわかになぞわつく。そんな空気を読まずに騒ぎ立てようとしていた男たちに対して、箒は殺気をほとばしらせる。邪魔をするな、殺すぞ？ と。その本気の殺気に充てられて、周りの野次馬は一瞬で姿を消した。お膳立ては完ぺきとはいかなかったが、まずまずの出来ではある。その事実で満足し、箒は一人前に立って夏織から強奪したパンフレットを見、行先を決める。

「さて、私は邪魔をしないようにいく先を決めているとしよう。どこにしたらいいか？」

「邪魔とか、そんなんじゃないよ！ ただほつくくんが私に　っ！」

顔をさらに赤くしている親友を見て、箒は満足した、はずだった。親友の恋が実るようにこうしてお膳立てまでして応援して、結果嬉しそうな表情を見せてくれているのだ。幸せな気分ではいられない方がおかしい。

それなのに、箒の中を満たすのは喜びの感情ではなく、薄暗い悪意

にも似た感情と、どろどろとした得体のしれない何かだった。
それを必死に見ないようにして、無理やり顔に笑みを張り付け／た。
うまく笑えている自信は、まったくなかった。

尊ちゃんの尊ちゃんによる尊ちゃんのための物語6（後書き）

お疲れ様でした。

何かありましたら、作者まで。

感想・評価等々、お待ちしております！

篝ちゃんの篝ちゃんによる篝ちゃんのための物語7（前書き）

十万字を書いていたということが判明。すごく続いてますね、これ。いや、皆さんもつとすごいですけど^^;

四十部でこれですから、平均約2500字。最初の予定より少しだけ多くなっています。

さて、遊園地が終わらないのはどうしてでしょう？

篝ちゃんの篝ちゃんによる篝ちゃんのための物語7

「そういえばだが」

そういつて、法師は篝へと振り返った。顔はやはり変化に乏しい。注意してみても、感情の起伏を読み取るのは困難だ。

「まだいつていない部分があつたな。なんだつたか……？」

そうは言うものの、まったく疑問に思っている節はない。本当に疑問に思っているかはわからない。本当にどうでもいいことのように思っているのではないかと疑いたくなる言動だ。

「此処ですよ、兄さん」

そういつて、篝はそのアトラクションを存在する地点を指示した。隣で法師に張り付いている（顔は赤いまま。時間はかなり経過しているはずなのにまったくもって慣れていない）夏織は顔色を一転させた。赤みが差していたしてほぼが、青白く変化した。

「わ、私はちよつと……。え、遠慮したいかな、なんて……」

「全部を回るとか言っていないかつたか？」

せつかく無難な言葉を選択し、遠慮しようと思っていた夏織に、容赦のない言葉が突きつけられた。

まあ、それは事実だ。夏織は確かに、できるだけ全部まわりたいたい発言を篝にしていたのだ。小声で篝にしか聞こえない音量でつぶやく程度に。それが聞こえていたというのにも驚きだが、それを忘れなかった事実も同様に驚愕すべきものだ。まったくもって興味

を持つているような節を持つているようには見えなかったのに、記憶していたのだから。もしかしたら夏織に対して法師は何か特別な感情を抱いているのかもしれない。そんなかすかな希望が、わずかに透けて見えた。

ほんの少しだけ見えた明るい展望に、篤は一人頷いた。

「行きましようか？ 千冬さんや姉さんは……どうしたらいいと思いますか？」

「心配ないだろう」

妙に自信のある様子で、法師は言った。なぜだか、妙に納得させる響きがあった。

「束ならばどこかに隠しカメラ、盗聴器、等々ものを仕掛けている可能性が高い。もしかしたら人工衛星にクラッキングを仕掛けて動きを追跡しているか、もしくはそれに見せかけたもので俺たちの動きを確認しているだろう。奴ならばそのくらいはする。だから何の心配もない。気にする必要もない」

「……」

何やら流れてきたとんでもない言葉に、夏織と篤は口を閉ざして言葉を反芻するしかできない。本当にその言葉を理解するには、少々時間を要した。

「ということとは。つまり……」

「常に監視の目が付いているということだ。よかったな、身の回りにとんでもないことが起こる可能性は絶対はないぞ？ まあそれが束による提案なのか、それとも千冬による提案なのかは知らんがな。いずれにしても、とんでもなく過保護だな」

「えっと、つまりどういうこと？　もしかして姉さんがこんなことを？」

その夏織の呆然とした言葉を、法師は簡単に受け流した。

「まあおそらくは、束の独断だろう。奴の考えていることは俺にも分かりかねる。今も俺の想像でしかない。あっているかどうかは知らんぞ？」

「姉さんの気まぐれっぷりは今に始まったことじゃありませんよ。気にしたら負けです」

「そうだね……。ねえ、本当に行くの？」

「夏織、お前が言ったことだぞ？」

法師に再度突きつけられて、夏織はがっくりとうなだれた。とりあえず、意外に親友には弱点が多いことが判明した。

真っ暗な空間。先を指し示すのは手元にある頼りない細い電燈のみ。お化け屋敷といわれる場所である。

「ちよっと、ほとんど何も見えないんだけど……。ほつくんちゃんと見えているの？」

「歩く程度には大して問題は見受けられないな。ほとんど見えているわけではないが」

「兄さん……。それがおかしな発言だということに気が付いてください……。」

見えていないといいながらも、その足運びにはまったく迷いが見受けられない。ちなみに箒が電燈を持っていて、その足運びが

見えるだけである。ほとんど真っ暗空間で物が見えるほど等は人間をやめていない。

「まあ、そんなものだろう。目に見えるものだけがすべてじゃない。お前だつてこの程度くらいは簡単だろう？」

できるわけがない。規格外とはわけが違う。等は剣道の世界大会覇者ではあるけれども、それだけだ。人間をやめているわけではないのだ。

それでも大体の気配を探る、ということ是可以する。だから、この空間が怖いものとは思わない。何しろ、

「あああああああ！」

「きゃあああああああああ！」

どこに何がいるかということ、大体わかるのだ。人間の呼吸等を図れば、大体できる。たぶん同門の夏織も落ち着いてさえいれば、わかるはずだ。暗い空間とお化けという漠然とした恐怖の対象が、冷静さを奪っている。

ほとんど終点くらいまで来た。あとはもう仕掛けがなく、ただ歩いていけば終わるはずだ。

「怖かったよ……ほつくん、ホントにごめんね？」

「気にしているのはお前だけだな」

腕にしつかりと体を押し付けていた夏織が法師に謝罪するというほのぼのとしたやり取りの空間の空気が、一変するのを肌で感じた。

「……………」

気配は感じられない。おかしい感覚はない。この場所に人間がいるように感じられない。なのになぜ、おかしいと感じた？ 箒は自分自身に問いかける。気のせいではないのか？ 勘違いではなかったのかと？
そして、それはやってきた。

何かを、それは喋っていた。顔の見えない、長刀を持った、髪の毛の長いか。鎧をまとった人型だが、生命の宿っているような感覚はなかった。人の気配がしない。……まさか、という可能性が、箒の中を駆け巡る。

言葉ではない何か。それをが耳についた瞬間に、箒の体は拒絶反応を示した。係員に手出しは決してしないようにといわれていた言いつけを破り、打撃を直接放つ。

首元に一撃を見舞いする。捉えたはずの感触は、まったくもってなかった。

すり抜けるようにして一撃を回避して、それは迫ってくる。此処の時点で箒はすでに冷静さを保てていなかった。

化け物、怪物、幽霊、怨念。いるはずがないと昨日まであざ笑っていた物体が存在したのだ。

もうだめだという感情が体を駆け巡り、体は勝手に震えだす。隣を確認すればもう腰に力が入らないのか、夏織は床に崩れ落ちていた。

「……」

死ぬのかもしれない。アトラクションではない、その現実感あふれ

る光景に、箒は諦めそうになる。
それでも、ただ一人だけは違った。迫りくる長刀の刃を平手をたたきつけて、押し返した。箒のほほに一滴、液体が飛んできた。

「脱出するぞ？」

夏織を背に背負い、箒も無理やりに抱き起された。箒も自分で立つとするが、腰に力が入らない。そのまま法師に身体を預けるように預けるしかなかった。

寄り添うようになった箒に文句一つ言わず、法師は箒を横抱きにして見えないはずの空間を駆け抜けた。

抱かれた腕から伝わってくる温度には人間としての温かみと、力強さが存在した。あまり肉厚でない胸板に頭を預け、箒はその感触をただ味わった。『兄とのスキンシップ』という言い訳を自信に言い聞かせながら。

そのまま、出口まで法師は駆け抜けた。

幕ちゃんの幕ちゃんによる幕ちゃんのための物語7（後書き）

お疲れ様でした。

何かありましたら、作者まで。

遊園地さえ終われば、ISがよづやく出せるのに……っ！
まだまだ本編では出ませんけど（笑）

幕ちゃんの幕ちゃんによる幕ちゃんのための物語8（前書き）

だから本編がうまくいかないんですってば^^；

微妙なところで打ち切っているのは分かっていますけど、勘弁してもらえません？ という言い訳しかできない作者です。……

いや、事実なんですけどね^^；

まあ、とりあえずちょっと冒険の旅（笑） に行ってきます。昨日の感想は読んでいませけど、返すのは帰ってきてからになりそうですすいません^^；

早ければ今日中に帰ってきます。下手すると零時まわりますけど^^；

箒ちゃんの箒ちゃんによる箒ちゃんのための物語 8

「こんな時間にこんな場所にいて本当にいいの？ 私たちまだ中学生でしかないぞ？ 確か法律では遊戯場には満十五歳以下は午後六時以降の出入りは禁止だったはず……」

「出るのを禁止してどうする？ それに本当にダメであるならば係員が注意するのだろう。それがまったくもって何も言われないのだから問題はないのだろう。今は近くにはいないが一応保護者みたいなものもいることだしな」

「さっきから全く姿が見えないよ。むしろこの状況だとほつくんが保護者と思われているよ……」

呆然とした調子でそれをつぶやいた夏織の背後はすでに闇が差している。時刻はもう六時をとっくの昔に通り過ぎた時間だ。それだけ時間があつたせい、ほとんどすべての遊技場を回り終えている。少し夏織は疲れたような顔をしている。やはり絶叫系を初めに持ってきたことが影響しているようだ。精神的な疲れからか、体のほうも引つ張られているようだ。すでに目が閉じたり開いたりを繰り返している。放っておけば、立ったまま寝てしまえばよかった。

「疲労困憊だな。箒、こいつを起こすいい方法はないのか？」

気が付けば立ったまま、夏織の首は上下に揺れてた。限界が来てしまったらしい。

それをあくまでも寝かせるではなく起こすという法師に、さすがにそれはどうなのかという意思を顔に表そうとして、やめた。感情表現が苦手な箒がやっても人に見せられないような変な顔になるだけだということは簡単に想像することができたからだ。それを身内に

見せるなど、罰ゲームと同等な仕打ちだ。

「まあ、お前がこれに不服なのは理解しているが。あとで恨み言を言われるのが面倒に感じるだけだ。なんで起こさなかったのか、とかな。もちろん、お前がそれを正面から受け付けるのならそれでもいいが？」

そうだった。こう見えて非常に楽しみにしている事項をこなせないということは夏織にとって苦痛な事項となってしまうのだ。あとでプチプチと（それでもかわいものだが）文句を言われるのは、その悲しみを表す様子と重なってなぜか申し訳ない気持ちにさせるのだ。

「そうですね。あとで文句を言われるのは私だって勘弁したいところですよ。下手に怒られるよりもよっぽどたちが悪いですからね、あれは。……。夏織、起きてくれ」

「……………んう？」

寝ぼけ眼を少しだけ開いて、箒は夏織を法師に身体を再び押し付けた。ちなみにお化け屋敷を脱出した後では夏織は箒に寄りかかっていた。背負われたことが本当に恥ずかしかったらしい。横抱きにされたことを恥ずかしがっていた箒と寄り添いあうような形でいたのだ。

「……………」

法師は何も言わない。文句も、喜びもない。ただ黙ってその行為を受け入れる。

あとで死ぬほど顔を染めるのだらう。自分がこの行為をまた要求（正確には箒の差し金）した、というこの事実には夏織が何の感情もあ

わらすことなしにやりすごることなどできやしない、というのは付き合いの長い筈にとっては呼吸するより自然と理解している。

「さて、最後のアトラクションに乗るとするか」

それをまったくもって気が付いていないのか、それとも考慮の範囲にすらないのか、法師の態度に変化はうかがえない。相変わらずそれが自然な出来ことのように受け入れている。

「えへへ。ほつくん……。うん……」

それ以上発言を重ねれば自身の感情を吐き出すとったようなことはありそうだったが、結局それはなかった。顔を法師にこすり付けてにこにこしている。寝ぼけているのか、はたまた酒を飲んで酔っているかのような態度だった。また夏織があとから後悔することが増えたな、ということとは理解したが、助け舟を出す意思はまったくもっていない。これは夏織の法師への思いが実るための応援であるからだ。少なくとも筈はそう考えている。

そんなやり取りがあつた後に、係員に誘導されて、筈たちは地面からの離陸を果たした。

「観覧車だよほつくん。いい眺めだね。ん、あれ、お空飛んでるう？ どうしてえ？」

「視点が移動するのか。観覧車というのは。言葉通りだな」

「まさか、観覧者とか思っていないですよね兄さん？ 本当に考えてないですよね？ そして夏織がおかしくなっていることに気が付いてください……」

あまりといえばあまりな言い方だが、法師ならばありえない話ではない。それほどまでに篠ノ之法師という人間の考えは突発的なものであるのだ。ずれているともいえる。それは夏織が宙に視線をただよわっせてだらしなく表情を緩めていることから理解できる。だらしたんはずであるのに、その表情はやはり麗しいと言わざるを得ないというのがいかにも夏織らしいといえらしい。

観覧車ゆつくりと、されど確実に空へと箒たちを押し上げていく。何も特別なまま空へ打ち上げられていく感覚を楽しみながら過ごし、頂上へと打ち上げた時に、それは起こった。

「ふつつ、ほつくん。大好きだよ？」

夏織が、箒の親友が動いた。自分に与えられていた座席から離れて、法師のもとへと駆けつけて。自分の唇を、法師のそれへと押し付けた。

「……………んうつ……………」

「……………」

「……………」

誰も、喋らなかった。箒の場合は喋れる状況ではなかったということが正しいか。

夏織と、法師が接吻を交わした。そう、それだけだ。親友の声が報われたと思われる瞬間が、とうとう訪れたのだ。

祝福しなければ。それは頭をしきりによぎるのだが、それ自体を考え、箒の内心は拒絶した。

法師と夏織が結ばれた

考えるな。

兄と親友が接吻を交わした

信じるな。

身内と身内がやっと結びついた

認めるな。

それでも、目の前の出来事が嘘だと思うことは、できなかつた。

胸の奥がきしみ、視界がぼけて、箒はようやく、自身の思いが取り返しのつかないところまで来ていることを理解した。

箒の中の何かが、歪んで弾けた。

幕ちゃんの幕ちゃんによる幕ちゃんのための物語8（後書き）

お疲れ様でした。

何かありましたら、作者まで。

本編で勝手にこれ以上ヒロイン増やしたら、ダメですよ？

……いや、わかっているんですけど^^^；

第三十話？（前書き）

ようやく本編が描きあがりました。本当にお待たせして、申し訳ない^^；

予定と違った流れになってしまいました^^；

もっといいキャラだったはずなのに！ どうしてこうなった！（急いで書き上げるからです）

そして今回特にダークではないけれど一応マーク付属。

第三十話？

ゆっくりと男は周りの気配を探った。大丈夫、周囲におかしな気配はない。細工は順調に作動しているようだった。

今回の任務は表向き、目の前の子供から情報を抜き取ることなのだ。いくら簡単なものとは言え、余計は心配はしなくて済むほうがいい。準備は万全だ。

「篠ノ之束を知っているのか？」

目の前の人物はその篠ノ之束の弟、篠ノ之法師ということになっている。奇妙な言い方だが、とある事故により記憶喪失になりそれまでの性格とは打って変わったという話だ。故にこれで正しいらしい。別にどちらでも大差はないが。

男の脅すような響きの言葉にも、これといった反応は示さなかった。ただ黙ってあらぬところに視線を向けている。何処か危機管理能力に鈍い面があるのだろうかとうと勝手に決め付け、男は続けた。

「……………まあ、知らないはずはないな……………。知っていることを話して貰おう」

軽く殺気を込めて、言葉を紡ぐ。そしてその宛てられた際の反応を一切見逃すことがないように注意深く篠ノ之法師の様子を観察した。篠ノ之法師は動かない。ただ視線をそれこそ機械のように無機質に寄越すだけである。鈍いなんてものじゃない。まるで殺気を放っていることが分からないかのように振る舞っている。口調をより強いものにし、男は続けた。

「知っていることを話せといわなかったか？ 聞こえていない振り

をしても聞いていることくらいは知っている」

「……言葉も正しく使えんのか、お前は？」

男が聞いた篠ノ之法師の第一声は、これであつた。但し全く以つて理解することが出来ず、聞き逃していたが。

「……何？」

「言葉を正しく使えといったのだ、よく聞いている。確かに聞こえてはいるが、俺は聞いていはいはしないぞ？ 勝手に勘違いするのは止めてもらいたいものだ？ ……意味はわかっているか？」

ここにきてようやく、全く相手にされていなかったことを悟つた。舐められている、それも完全に、である。

聞いているのと聞こえている。響きが似てはいるが、本質的な意味は全く異なる。ただ単に耳に入れるという行為そのものを指すのが聞こえるということに対して、聞き取つた上できちんと意味を考えて汲み取るのが聞くということだ。聞こえている状態は、それこそ聞き流しているということに当たる。決して褒められた行為ではない。

それを堂々と宣言するあたり、やはり舐め腐つているとしか感じられない。一度深呼吸を計り、頭を落ち着ける。焦つて余計はことをしでかすのを避けなければいけないのだ。冷静さを失っている場合では勿論ない。

「……。まあいい。知っていることを話せばいい。それだけで解放すると約束しよう」

「解放？ 鍵をかけて人払いを済ませておいてなおその言葉を使おうとするあたり、余程の自信家か馬鹿かだな。どちらにしても大勢に影響はないが。それで、一体何時迎えの車とやらは来るんだ？

まさかこのまま客人をろくに向かい入れられないホストの相手をさ

せる訳ではあるまいて、なあ、そうだろう?」

何故そんなことまで知っていると考えて、違和感を感じた。尋問をしていたのは自分であったはずなのに、いつの間にか立場が逆転している。探られているような節さえあった。思わずそこで身震いしてしまった。篠ノ之法師に観察されているという事実を省みずに。

「……」

「……反応がいやに顕著だな。わざとか? それとも余程こういう事態になれていないか、はたまた不向きであるか。どちらにしても、顔が歪んでいるぞ、警官? とんでもなく不向きだな、いつそのこと転職でも考えたらどうなんだ? もう少しまともな職業にありつけれかもしれんぞ?」

見透かされているのかもしれない。段々とその考えが男の中で膨れ上がって行く。だが、その考えは決して容認できるような類いのものではなかった。年がかなり離れたガキ相手に言い負かされたというのは苦痛であるし、何よりも気に食わない。男は自分のプライドを護るために、さらに攻勢をかけることに。

それがまんまとドツボに嵌まっていることも知らずに。

「なかなか骨があるじゃないか。感心したよ。だが、警察官には市民は協力しなければならぬことは知っているかな?」

「この成りからか、どうも知らないと思っっているらしいな。残念ながら、知っているぞ? 警察官に協力しなければならぬことくらい。そう、本物の警察官に協力しなければならぬというくらいはな。くつくつく」

やはり、見透かされている。それ自体を認めるのは屈辱以外の何物でもなかったのだが。結果としてそう言わざるを得ないということ

が理解出来ないほど愚かなつもりはないのだ。

プロの自分を簡単にあしらってしまえるほどの口が上手い餓鬼。悲しいことに、下手にプロ意識があるせいで屈辱とともに認めるしかなかったのだ。それを認めつつも、無駄と知りつつも篠ノ之法師の動向を探ることを忘れない。人間というものは自分が優位な立ち位置につくと油断する性質がある。そう、つい先程までの男のように。

「さて、おじさん困ってしまったな。君が話してくれないと上司に叱られてしまうよ」

「さつきから取り繕ったり地を出したり忙しいやつだな。それとも情緒不安定なのか？ それならここの精神科によることをオススメするが」

呆れ眼でそうはつきりといわれた。馬鹿にしているのもあるが、それ以上に諦められているような気配さえ感じさせた。本当に屈辱以外に感情を指し示すことはなかった。

冷静にならなければ、と男は再度自分にそっくりいい聞かせる。焦って特をすることなど一つもありはしないのだ。既に自分の勝ちが決まっている。何を焦る必要があるのか。

そう考えると、ようやく冷静に立ち返ることが出来た。そう、試合の決まっている出来レースに焦る必要など何処にあるのか。

「……そうか。そうオススメするならば、今度いつてみようかな。

おじさん最近疲れ気味だし」

「……」

突然様子の変わった男に、篠ノ之法師の眉が微かに寄る。

訝しがられたところで、既に勝負は見えている。そう、男の勝利という形で。

窓の外が、一瞬パツト光った。

その瞬間に本来ならば開くはずがない窓が引かれた。そこ目掛けて、篠ノ之法師を放り投げる。

予想に反して、抵抗等の活動は見受けられなかった。スムーズに事は運んだ。篠ノ之法師は外にいた人間によって車へと運びこまれた。カメラ、盗聴器等の媒体がないことはすでに確認済み。この時間外を眺める人間がないことも把握している。外は雨模様だ。見ても全く風情がない。こんなものを眺めるのはぼけた老人くらいだろう。すべて問題は解決された。

用意は万端だ。篠ノ之束という駒の弱点は手に入れた。これからどう扱ってやるうか、あれだけ容姿の整った女だ。使える部分を使って散々楽しむのも悪くない。そうして篠ノ之束のあられもない姿を想像するだけで、男の頭は一杯だった。

第三十話？（後書き）

お疲れ様でした。

何かありましたら、作者まで。

今日の一言。

とらぬ狸の皮算用。

第三十一話？（前書き）

パソコンがまたおかしくなりました。

ホント、篠ノ之シリーズ投稿するので精いっぱいです^^；

直り次第、編集に移らせていただきたいと思っております。申し訳
ない…… ^^；

第三十一話？

肌を刺すような、そんな予感に襲われた。だからだろうか、織斑千冬が珍しく篠ノ之束に真面目に話し掛けたのは。

「……嫌な予感がする。束、お前はなにも感じないのか？」

「……？ 別に何も感じないかな。どうしたの？ 野性の勘でもはたらい」

「……ほう。余程死にたいらしいな、束え？」

「嘘嘘何も言ってますん！ やーこの通り天気は快晴、こういうときにはやっぱり外に出て」

「普段の発言を省みてからすることだな。言い訳すら苦しいぞ？」

頭に減り込むように手に力を込めて、束の頭に叩き込む。めきめきとかみしみしとか束の断末魔とかが聞こえたような錯覚は勿論スル。所詮錯覚なのだ。現実には起こっている出来事ではない。

「……酷いやちーちゃん、束さんがこんなになるまで虐めるなんて……」

そういう言動の割に、頬を染めて嬉しそうにしているのだからこの人間は理解できない。理解したいというふうに考えたことすらないが。

束は無視していた事に不満を感じたのか、半眼で睨みつけている。頬を染めているせいも、もともとの雰囲気やせいも全く違って恐怖の対象とはならないのだが。

それはさておき、今は悪寒の正体を探るべきである。第六感に優れているとまではいわなくとも、多少勘は優れているつもりだ。その勘を完全に無視するという事は出来そうもなかった。

想定するべき事項。それは……。

その考えに至った瞬間、いてもたってもいられなくなり、千冬は得物（真剣。勿論刃を漬すなどという処理はしていない。世の中には法よりも大事な事はあるのだ）を引っつきみ、急ぎ玄関へとかける。その進路を、篠ノ之束が身体を張って妨害した。両腕を限界まで張り詰めさせて、千冬がここを通過しないように守っている。

普段ならば笑って流すところだが、今はそんな事をしている場合ではない。実力行使に出るために、腰を沈める。

その様子に焦った感じも見せず、束は動かない。そこに配置されている置物のように。

頑なな束に、さすがの千冬も声を上げざるをなかった。

「……ええい、邪魔をするな！ いくらお前でも許さんぞ！」

「……別に許してくれなくてもいいよ。ちーちゃんが私の話を聞いてくれるのなら」

「……」

普段の冗談混じりの態度ではない、真剣な感情を読み取ることが出来た。一度瞳を閉じてから、千冬は真つ直ぐに束の瞳を捉えた。その眼はじつと千冬を見つめたままで、逸らされなることはなかった。

「ちーちゃんは、夏織ちゃんを心配してるんだよね？」

「……。ああ、何となくだが、嫌な予感がする」

「流石ちーちゃん！ 束さんには感じ取れないものを簡単に読み取っちゃうんだ！ 凄いつ！ でも残念ながら、ちーちゃんにも分からないことがあるんだね！ 束さんにはわかることでも」

その口ぶりに思わず右腕が唸り声を上げそうになったが、なんとか堪えさせた。

感情の起伏をコントロールし、次の束の言葉を待つことにする。こ

れくらい出来なければ、この天才と付き合うことは出来ないのだ。
フラストレーションはこんなものでは済まないくらいに溜まるのだ。

「ジャジャン！ これこそ東さんの得意分野、盗撮！ これで状況を簡単に知ることが出来るのだ！ さつき確認したけど夏織ちゃんは無事だったよ！ 確認したから間違いないね！」

「……。後で映像をすべて回せ。いいな、絶対にだ。一つも漏らすことは許さん、複製したのもも全てだ。わかったな？」

「ちよつと！ それじゃあ秘密の夏織ちゃんのドキドキ成長日記シリーズがっ！」

「……。ほう。そんなものまであるのか。いいか、例外なく全てだぞ？ それにしても、夏織は無事なのか……。するとなんだ、私を感じたあの感覚は気のせいだったということか？ ……んん、腑に落ちんな」

千冬は話すことを止め、思考に全神経を集中させる。どうやら学校に身をおいている夏織の身は安全らしい。今確認したところ、この家の周りに不穏な気配を持った輩も感じられない。

本当に何事もなくて、ただの勘違いだったのか？ そんな考えが徐々に浸透して行く中で、一つだけ異彩を放つ事項が頭を掠めた。

篠ノ之束の弟、性格にはもどきというべき法師の存在だ。彼は今病院に入院しているため、この場所には存在しない。

彼に悪い事項が降り懸かるといったらせいぜいが容態の悪化だろうか。しかし、もう安定期にはいつており、それも考えがたい事項だった。

気のせいということにして千冬は考えを振り払った。余計な事を考えていていい時ではない。というよりも、今考えはじめると大分時間が経ってしまいそうだった。主に束から押収した盗撮映像集をしっかり与管理することで。

「どしたの？ なにかあったのちーちゃん？」
「いや、なんともない」

人に興味を持たない天才に心配されるほど、どうやら呆けていたらしい。その事実には苦笑した。

そんな千冬の前に、なぜだか不思議な光景が映し出された。

何故か息を荒くして頬を染めている親友が、震える指を必死に動かしてモニターの電源ボタンを押そうとしているのだ。不思議な光景というほかない。それほどまでに緊張することなのだろうか。そんなものが。

先程ちらついた映像が再び脳内に上映された。アンコールを誰かがしたらしい。

犯人は誰かなどとはつきりわかっているが。

「……えへへ、ほーくん。今日も待ちきれなかったよ。ほーくんと会えないと束さん、おかしくなっちゃうんだ……」

完全に横にいる千冬を無視して自分の世界に入り浸る束に呆れつつ、千冬はスイッチを入れることにした。何時までもこの恥態を見せられつつけるのに耐えられなくなったのだ。

その千冬の手に向かって、伸びてくるものがあつた。てつきり呆けているとばかり思っていた束の腕だ。

「駄目だよ、まだ心の準備が」
「知るか」

本当に千冬の知ったことではない。むしろくねくねされている方が腹がたつのだ。従う義理はない。容赦なく、スイッチを押した。

「あああああああああ！」

絶叫しているやかましい物体を当然のように放置して、千冬はモニターを注視した。

全体的に白い。一瞬機器の故障かと思ったが、それらが見覚えのあるものと脳が認識したためにそれ以上疑う事はなかった。

法師がいるはずの病室には、人間の姿が伺えなかった。まさか、という可能性が急激に浮上して来た。

「ほーくん、いないね」

部屋に乱れたところがないかを確認して、千冬は見つけてしまった。絶対に開くことのない窓が開いて病室に風を向かい入れていた事を。流石の千冬でも、しばらくの間何も考えることができなかった。篠ノ之法師が『また』誘拐されたという現実。

第三十一話？（後書き）

お疲れ様でした。

何かありましたら、作者まで。

第三十二話？（前書き）

ようやく一区切り。

とつかいったい何日だったのしょう、これが始まってから^^^；
番外編もはさんでますしね^^；

第三十二話？

一目見たところで、異常はない。足取りはしつかりとしたものだ。それが、余計に千冬を混乱させた。

背中にそつと腕を回し、それに触れる。熱い、燃えるような温度と、なだらかとは言えない感触が、それが普通の出来事ではない事を物語っていた。明らかに異常である。ごく自然に存在するそれも、それを平然と受け入れている法師も。

信じたくはなかった。が、残念ながら全てもやかしでない現実というのをしつかりと肯定している自分がいるのだ。冷静に事態を観察し、一切の感情も込めずにもう一人は、一体これが法師ではなくて夏織だったのならばどうしていただろうと考えて、拳が震えていることに気がついた。全く以って平気でなく、溜められた感情は行き場もなく爆発しそうなほど、千冬の中を巡回していた。どうやら相当腹にすえかねているらしい。

「……当事者はお前ではないだろうに。全く訳の分からないものに激昂して暴れだそうとは……本当に恐れ入る」

そんな調子で返されてしまったのならば、これ以上千冬が言えることとはなにもない。確かに腹立たしいのは事実だが、それを被害者にぶつけて一体なんになるのだろう、という疑問が千冬を押さえ込んでいた。

結局のところ、この場で千冬が出来ることなど何もない。この事後、事実が判明した際には鬱憤を腫らす機会もあるかもしれないが、今はそんなときでもない。

大人しく、彼に回す腕の力を強めた。

なにか非常に高温なものを押し当てられたであろう肌は窪み、出っ張り、骨の露出とおかしくない部分が見受けられない。それらに極

力触れないように気をつけながらの作業である。

これをこうしているのは、千冬は背後に存在するとんでもない化物から目を逸らすためであったのは言うまでもない。

「……ふーん。ほーくんにそんな事するんだ。へー、つまり何、束さんってもしかしてそれほど舐められてるの？ もうこれは抹殺決定だね。ゴミの分際ではーくんを傷付けるなんて……。ふふふ、ふふふふ」

とにかく何か起きていた。そういうしかないほど、普段と全く異なる気配を纏った篠ノ之束という人物は恐ろしげだったのだ。そう、織斑千冬が思わず目を逸らすほどに。

「……残念ながら、実行犯とおぼしき男は死んだも同然だな。何故かジャストタイミングで突然やって来たよく分からない女に穴だらけにされていたからな。おかげで辺り一帯はしばらく血の雨が降っていたぞ」

「……。楽に死んじゃったんだ、許せないね、許しがたいね、本当にこの手で地獄を見せてあげたのに、残念だよ……。まあ、他にも人はいるでしょ？」

何時もの束ではなかった。そこにいる篠ノ之束という仮面を被った何かは、それほどまでに違っていたのだ、普段の篠ノ之束という人物と。

以前、束は堂々とかう宣言した。

「ちーちゃん、私ね。もう一度ほーくんがいなくなっちゃったら、きつと、ううん絶対世界を滅ぼしにかかるよ。確約してもいい。私 はね、束さんはね、ほーくんのいない世界に耐えられないようになっちゃった。あれほど存在感のある存在に引き寄せられるみたいに、

好きになっちゃった」

そういった親友の顔は、酷くすつきりとした、腫れ物が取れたような顔を久しぶりにしていた。その表情に隠されて今の今まで思い出すことはなかったが、とつくのとうに狂っていたのだ。

それを見抜けなかった自分はあの頃、相当混乱していたらしいな、と傍観者のような意見を漏らすだけに留めた。過去にあれこれいったところで、先立つものはなにもない。それをするくらいなら、いつその事夏織の成長日記でも眺めた方がまだ役に立つ。主に千冬の上の精神の話にて。

「さて、本来ならばきつと病院に戻らねばならんのだろうが」

そういつて言葉を打ち切った法師は珍しくそこで言葉を途切れさせた。顎を撫でて、ようやくそれを口にした。

「あの病院には、きつと戻らぬほうがいい」

その言葉は、決して夢の中の発言などではない。それでも千冬の耳にはやはり夢の中の発言のようにはかと思えなかった。病院には行かないと公言しているようなものだったのだ、今は。

見たところによると、ひどく高温のものを押し当てられてきたわけだ。それも一回ではなく、少なくとも浮く数回にわたって行われている。そんな重傷を身に背負っているにもかかわらず、病院で治療しないといっているのだ。夢かとも思うだろう。

「そうだね、やっぱりそっちの方が、東さんは安心できるよ。本当にあのゴミどもには制裁を加えなくちゃね」

先程のゴミとはまた違ったにニュアンスで呟かれた。千冬はそれが先程の法師誘拐暴行事件の実行犯ではない人間に当てられていることを読み取った。それは、誰でもない、篠ノ之法師という人間を完全否定し、自分の名誉のためだけに首輪をつけている夫妻にたいしてだ。

過去に世話を焼いてもらった千冬でさえ眉を潜めなければならぬほど徹底されているそれは、やはり疑う材料には持つてこいのものに見えてしまう。ひそかに実行犯に始末を依頼したのではないのだろうか、病院側に細工を施したのではないか等など。数えはじめればキリがない。それほどまでに、夫妻が法師に対する態度はおかしいのだ。身内のひいき目でみてもこうなのだから、その査定が利かない束の目に好意的に映るはずもない。

いや、と千冬は考え直す。そんな推論ばかりを便りにしなければならぬほど、篠ノ之束という人物は甘くもなければ温くもない。天才と称されるものはそんなものではない。何か確固たる証拠を手に入れてもなんらおかしくない。なぜ篠ノ之法師にあのような態度をとるのか？ なぜこんなことが起こったのか？ 等々。

「さて、どこに行けばいいんだ、俺の家には」

「……。うん、なんとって束さんのお家の隣だからね！ 私についてこれば安心なのだよふはははは！」

「……真面目にやるかふざけるかくらい区別をつけてくれ……。いきなり変わったらいくら私でも読みとれんよ」

法師の言葉を受けて急激に態度を変える親友は、何時も通り弟思いの姉だった。

少なくともこんな光景はしばらく見ていなかったので、柄にもなく懐かしさを覚えた。

そんな千冬に何と思っただのか、束の目が怪しく光った。

「……ちーちゃん！ ぼーっとしてると束さん襲っちゃうぞ？ 束さんはほーくん至上主義だけど、ちーちゃんと夏織ちゃんなら別に同性でも……っ！」

「貴様とうとう目覚めたか。そうか、そして私の大事な大事な大事に夏織に手を付けようとしているのだな？ いい度胸だ。私を出し抜けるとぬかしたその驕り、徹底的に叩き潰してくれ！」

「……あれー？ おかしいな？ みんな仲良くまぐわってハッピーエンドになるはずだったのに？」

「一番始めに処理すべきは口か？ 糸で縫い付ける程度では満足できまい、貴様は変態だからな。さてそれではどうするべきか。鑢で唇から順番に歯が完全に露出するまで削るか？ それともどろどろに熔けた金属を突っ込んで一気に使用不能にするか？ それとも……」

流石にこの言葉には慌てたのか、両手を広げてしきりに頭を振っている。どうやら全身で不許可を体言しているらしい。慌てた調子で口も稼動させる。

「そ、そんな事したらさすがの束さんも死んじゃうんじゃないかな？ かな？ そもそも突っ込むなら熱い棒なら金属じゃなくてほーくんの」

「揚句の果てには下ネタか、墜ちたな、篠ノ之束え？」

「……あれー、失敗？ 失敗なのかな？」

勿論、そんなものに頷く千冬ではない。唇を釣り上げて、あざ笑うような形で歪めて見せる。

「さあ、貴様の出番はここまでだ。年貢の納め時だな？」

そういって、千冬は己の全速力をもってして駆け出す。それに逃げ

るように束も足を動かした。

そうして、見ないふりをしたのだ。千冬自身の中にたまっていく、どす黒いくらい感情を。

親友の瞳に透けて覗くことができた、明確な殺意を。

第三十二話？（後書き）

お疲れ様でした。

何かありましたら、作者まで。

第三十三話（前書き）

前回一話飛んでる？ わざとです。

ホントは書いたんですけど、後々発覚するはずの主人公に関してのネタバレが混入したためカットいたしました。もうしばらく神秘的な存在でいてもらいましょう（笑）

第三十三話

前回までのあらすじ

いきなり法師に電撃訪問した篠ノ之夫妻。あの人たちは法師に生活空間を提供するということを条件に法師を監視するといった。生活費を渡すともいってないのに了承した法師。

そして退院も間近に迫ったある日に、突然訪れた警官（偽）によって誘拐されたの。それを知った東さんと千冬さんは大激怒。急いで向かったと思われる場所を特定して駆け出したんだけど……。その道の途中で法師を発見。病院に連れていこととしたけどそのまま自宅（プレハブ小屋）に帰ることに。傷は深かったけど、命にかかわるものではなかったの。東さんが徹夜で作った薬で時間をかければ傷痕も完全に消えるんだって。

…… ってこんなこと本文に書いてないわよ！ 何してんのよ！
何、お前誰だって？ し、失礼するわね！ 大体口調でわか……。
出てこないはず（笑）、じゃないわよ！ 出てくるわよ！ いないのは番外編よ！

…… まったく失礼しちゃうわね。いい、あたしの名前は鳳 鈴音よ！
ってセカンド（笑）じゃなあああああい！（大激怒。その辺のものをとりあえず投げつけている。語り手 鳳 鈴音）

「痛くはないか？」

そう織斑千冬が話し掛けても、予想通りの反応だった。隙のない、簡素な言葉でそれは伝えられる。

「……問題は特にない」

「……そうか……」

それを言われてしまうと、それ以上の言葉を紡ぎだすのは不可能なことになってしまふ。本人が問題ないというのだから周りが口を出したところでなんの意味もなさないのだ。

平然と澄ましたような表情を見ても、やはり千冬の目には平気なようには見えなかった。

見るからに痛々しい、肌の色が他の部位と明らかに違う背中。クレターのようなものが形成されていて、以前見た滑らかさなど何処にも感じさせない。焼け爛れたそれを見るだけで、千冬の内心にまきがくべられたように勢いよく燃え上がる。それを鎮めながら、千冬は観察を続ける。

「ふむ。いやしかし、あの程度で額に汗が滴つたのは驚きだぞ？
いかなる痛みとて耐え切る自信はあったのだが、どうやら身体が耐えきれなかったらしいな。全く、脆弱にも程があるだろうに」

まるで愕然とした様子もなく、ただ有りのままの事実を述べるその姿にやはり落胆の色は伺えない。言葉と表情が一致していないことはよくあることだが、それでも一言言わざるを得ない。

「お前……これに耐え切るのはどんな人間でも無理だぞ……。もし耐え切る奴がいるのならば、そんなものは人間ではないな」

「……そうだな。だが俺の言っていることはそういったことではないぞ」

「……？」

全くもって意味が分からない。完全にそういった口ぶりだったといふのに、身体が耐えきれないなんてありえないといったのにそれは

まるで見当ハズレだという。どういうことなのだろうか？ それを素直に千冬は言葉にした。彼の傷痕を撫でながら。

「千冬、お前がいう身体の問題とは損壊度の話だろうか？ 確かに、あれだけ高温のものを当てられたのなら人間誰しも耐えられんよ、それこそなんの異常もなかったら、ただの化け物だ。そうではない俺のいう耐えきれなかったは『平然としているように見せ掛けられなかったこと』を言っているのだ。全く、あの程度で汗を掻いているとは、本当に話にならん。鍛えたつもりだったが、まったくもってないってないな」

「いや待て。分かったが、話は分かったがそれでもおかしなことを言っていることに気が付け。だいたい、それだけのものを食らっているのだから声くらいは出してもなんらおかしくないだろう？」

平然とありえないことを言いのけた法師に、脂汗を掻きながら千冬は反論。というよりも先程より重傷度が下がってはいるが、やはりそれも人間を止めていると言わざるを得ないのは間違いなかった。そんな千冬を知ってか知らずか、法師は困惑を顔に滲ませた。何処からか熱っぽい息が聞こえた気がした。

「……………？ 何かおかしなことをいったか？ このくらいは余裕だろうっ？」

出来るはずがない。それがさも当然というように口走った法師に対しての反論に思わず力が入った。

「出来るか！ それとも何か、私はそこまで人の道から外れているように見えるのか？」

そこで、ふと我に帰り冷静な状態に戻った。大火傷に処置を施して

いるはずなのに、その部位に対して力を込めていた。それに文句を言うように、法師の背中は朱の雫を垂らした。

「……す、済まない……っ！　このようにするつもりは……！」

それを咎めるといったことはない。法師はやはり顔色一つ変えない。

「別に大事になっていないだろうに。一体何をそんなに気にしているのだ？」

「……それは！」

千冬は反論するために、法師の瞳を真つ直ぐに見据えた。そこには非難の色はやはりなく、やや不思議そうな色が籠っていた。たいした変化はないのだが、それを読み取ってしまえるほどには、千冬は法師を理解していた。

「それは……」

「気にする必要などない。それと離れておいた方が懸命だな、来るぞ、奴が」

「……！　そうだな」

その言葉にやっと気がついた千冬はその場から自身の身体を浮遊させて離脱を計る。その行動から間をおかず、部屋の扉が勢いよく開かれた。

「ほーくんほーくんほーくん！　ほーくん！」

そう法師のことを呼ぶのは世界に一人しかいない。エプロンドレスにうさぎの耳を頭に装着しているといういかにもメルヘンチックな恰好の天才、篠ノ之束だ。ちなみにあらかじめ法師のことほーくん

と呼ぶのは自分だけの特権だと勝手に宣言をしていた。そして他にもそのように呼ぶ人間がいれば例外なく排除するとも。勿論千冬は大反対して制裁を何度も加えたが、頑として聞き入れなかった。これほどまでに一つのことにこだわるのは珍しいと感心し、発言を撤回させることを諦めたのだった。

「ほーくんほーくんほーくん！　ちーちゃんに意地悪されたんだね！　暴力を振るわれたんだね！　いろいろされちゃったんだね！　分かった、束さんが今から」

「今から、なんだというのだ、束え？　それと私の聞き違いか、貴様の言葉には、私を非難する響きがあったのは？　監視カメラをそこから一体に隙間なく並べ、隈なく一部始終を観察していたというのに、なあ？」

千冬がこれ以上ないような態度で凄むと、束は顔中に液体を滴らせながら、しどろもどろになりながらも反論を開始した。

「な、何を言っているのかな？　意味が分からないよ、束さんには、あはははは。

それにちーちゃんにだって悪いところはあるよ！　ほーくんに怪我をさせたのは誰でもない、ちーちゃんでしょう！」

「うっ……」

盗撮という犯罪行為を侵した自分のことを棚に上げ、一方的に糾弾する。だがしかし、この場合は千冬にも責任はあった。それを理解しているために、束に反論することが出来なかったのだ。それに増長して、束は追い撃ちをかける。

「こんなに大怪我したほーくんにこんな事するなんてっ！　ちーちゃんの鬼、悪魔、人でなし！」

あんまりな言われ方だった。これには流石の千冬とて黙ってはいない。

「……。人の生活を余す事なく盗撮、そのうえ鑑賞用に勝手に編集しニコニコ毎日見ている奴の言えたことか？　なあ、どうなんだ、束え？」

「……。あはっ　　なんの事かな？　　ことかな？　　束さん馬鹿だから分からない」

とりあえず黙って制裁を加えておいた。

束のおかげか、その後、気まずい雰囲気は漂うことはなかった。

何度部屋の中を見ても寝具さえもおいていない新居であるプレハブ小屋の現状を確認して、今度生活必需品を買い足さなければ、と千冬は今後早急に片づけるべき問題の一つに加えた。

第三十三話（後書き）

お疲れ様でした。

何かありましたら、作者まで。

とりあえず鈴登場。というか初登場がダイジェストの語り手って…

… ^^ ;

第三十四話（前書き）

此処からしばらくまったりになります。

文章安定してないですね、これ^^；

第三十四話

「……今日は買い出しに行くぞ、ついて来い。法師との距離を縮める絶好の機会だぞ?」

開口一番、織斑千冬はそんな事を言い出した。全くもって意味不明だったが、そんな夏織にもわかることがあった。

とりあえず、姉についていけば久しぶり、というよりも初めての篠ノ之法師との外出である。額かないはずがなかった。

だが、肝心要の買い出すものを聞いていなかった。せいぜい夕食の食材くらいだろうと見積もっていた夏織は、その認識の甘さをまざまざと見せ付けられた。

「……えっと、何を持っているのかな、姉さん?」

千冬は両手で抱えなければならぬほどの巨大なものを抱え、カートに無理矢理備え付けた。夏織の目がおかしくなっていないのが前提だが、それは布団のように見えた。ちなみに篠ノ之家は基本的にベッドである。好き好んで布団を使うこともなく、なにかあったための客人用に常備しているくらいだ。わざわざ購入しなければならぬ理由がない。

夏織に対しての疑問いかにも不思議そうな顔をして、千冬は答えた。

「法師のものになる予定のものだが? 退院が予定よりもずいぶんと早まったせいでこういったものを用意する暇がなかったんだ。だが何時までも生活費必需品がない環境で過ごすのはどうかと思っとな、この買い物に繋がっているという訳だ」

生活必需品がない、退院が予定よりも随分早まった。おかしい単語

が複数紛れ込んでいたが、姉が気にしている様子が見られなかった。それでそれらを忘れることにした。そういったことを夏織が気にかけてたところで何にもならないということは十分理解している。

「……布団？ 一体そんなもの何に使うんだ？」

そこに、とても不思議そうな声が届けられた。あまりに自然な物言いに、思わず軽く流してしまいそうですらあった。だが、夏織の姉にそれは通用しなかった。

「まさか、使ったことがないのか……？ 一応病室に備え付けられていたベッドと同類の寝具なんだが……。本当に知らないのか？」
「知らんよ。それにしても寝具な」

感慨深そうにビニールの包装に包まれた法師の姿を見て、千冬は愕然としていた。なにか信じられないようなものを見るかのように目を大きく見開いている。

流石にいくらなんでもそれは失礼じゃないかな、法師君に。

とは思うものの、決して口には出さない。夏織には夏織の、法師には法師の、千冬には千冬の。それぞれの考え方の違いだろう。それについて口出しをするのは違うような気がしたのだ。

「……。今まで一体どのようなようにして寝ていたんだ、法師？」

「寝具で死んだように眠っていたらどう？ 昏睡状態だったか？ 起きてから一度だけあれに乗りながら睡眠をとったことがあるが、駄目だな。身体を痛めた。それ以来睡眠時にはあれを使用していない」

あまり堂々と言えないような事を、法師は簡単に言い切った。そのせいか、千冬は完全に固まっている。

買い物に来たのだ、夏織達は。決してよく分からない話をしに来たのではない。

姉の口ぶりから察するに、買わなければならないものは沢山ありそうだった。時間の浪費は出来ないと、何やら不思議な発言をしている法師のせいで硬直している千冬に、夏織は起動を促した。

「お姉ちゃん、お姉ちゃん。時間なくなっちゃうよ？」

「……はっ！ そうだった。済まないな、夏織」

無事再起動を果たした千冬は表情を改めて、法師に向き直った。ことう割り切りの良さは普段の姉そのものだった。取り合えずようすがおかしかった姉が普段に立ち返ったことを安堵し、法師の隣にこっそり移動した。

「それで、結局のところ寝具は必要か？ いくら必要だと私がいったところで、結局使用するかどうか決定するのは本人だ。どうだ？」法師は首を横に振った。必要ないらしい。それを見た千冬は先程の動揺ぶりを露ほど見せずに寝具の詰まった袋を所定の場所へと戻した。

そして一同が向かったのは、何やら調理機具が大量に常備されている空間だ。普段夏織が使用しているものの姿もあった。

千冬は顎に手を当てて、それらをじっと見つめた。

「……。自炊は出来るか？ 出来ないならば、夏織を寄越すことになるのだが」

夏織の預かり知らぬところで、何故か法師の家に通うような計画が発案されていた。許可をとってはいない。それに、夏織は混乱した。

なんで？　と思う気持ちが先行し、頭がそれに追いついて行かない。

別に法師の家にいって料理をするのがいやという訳では勿論ない。ないのだが、いくらなんでも突然に話が上がりすぎた。これからのように法師との関係を構築しようか考えていた夏織には荷が重かったというのもあった。

そしてそれとは別に、少しだけ心が躍ったというのも原因の一つだった。

そんな絶賛混乱中、あたふたしているところに現れた救世主は、やはり篠ノ之法師その人だった。

「問題ない。いざとなれば犬猫を狩って糧とするくらいは覚悟している」

「前から言っていると思うが、絶対にやるなよ？　生活費はこちらできちんと用意するから」

懇願するような態度の千冬がいたおかげで、夏織は我に帰ることが出来た。

どうやら部屋に毎日訪ねられる大義名分は失ってしまったらしい。それは落胆すべき事項であったが、仕方ない。張本人である法師に断られたのだから諦める以外の選択肢は存在しない。

それでも、残念な事だと思った。まだまだ未熟ではあるが、ようやく料理が形になりつつあるのだ。最近は姉も夏織の料理をよく食べてくれるようになっていた。その腕が振るえる機会を失ったのだ。そう思わずにはられない。

そこまで考えて、夏織は首を振った。いつも間にか初めに見られていた思考の混乱はとつくの等に消え去ってしまった。残っているのは勝手に思い込んで沈み込んだ夏織の心だけだった。こんなところを見せるわけにはいかないと、沈んでしまった気分を盛り立てるた

めに夏織は自分を奮い立てた。

「最低限は買い揃えなければならんか、面倒な」

「面倒がるな、必要なものだろう」

「そうか？」

「そうだ」

やや納得のいつていない顔で、法師は顎に手を当てた。どうやら癖らしい。また一つ法師のことが知ることができた。その事実には、少しだけ嬉しくなった。

そばにあつた包丁をなでる。刃の部分に顔がくつきりと映し出されていた。

「調理なんぞしなくとも、食事など済ませられる。生肉だろうが、魚まるごとだろうが、生えていた葉っぱそのままだろうが」

野生児や原始人のような口ぶりに、さすがの香りも固まった。普通に考えればわかることだが、人間は処理を済ませていない生肉を口にするのも、ツラサ穴をそのまま口に入れることも、ましてや野菜をとつてすぐ食べるなどということはいない。まれに魚や野菜等でする人がいるかもしれないが、そんな食生活を普通の人間は行わない。

「腹を下すぞ？」

「胃腸が弱すぎるだろう」

「……」

もはや絶句するしかない。生の肉を食べなければ胃腸が弱いらしい。今は肉食のはずだった犬でさえも生肉を食べると腹を下すというのに。

そんな風に意識を飛ばしていたからだろうか。夏織ががそれに見られているように感じる事ができたのは。

「あれ？ 今誰かに見られていたような」

その跡を継ぐ世に、千冬。心なしか、眉にしわが寄っている。

「気のせい、であってほしいな。出来るならば」

「勘違いではないが、放っておいても問題はない。どうやら少し挨拶をしに来たといったところらしい。気配を断った、つもりらしい。段々離れている」

「……距離にして六百程度か。それにしてもよくわかるな？」

「この程度、造作もない。隠れる気がない人間を見つけるのはたやすいのさ。果

たして奴が人間であるかどうかは知らんが」

「……？」

もはやまったくもってついていけない話題を耳にしながら、夏織は逃げて行ったと思われる人間を想像した。

はつきりとした姿が確認できてはいないが、なぜかその人物のイメージは金色だった。

第三十四話（後書き）

お疲れ様でした。

何かありましたら、作者まで。

第三十五話（前書き）

中途半端なところで終了。そして内容も…… ^^ ;

第三十五話

「ねえねえ」

此処にいるはずがない人間がの聲がこだました。隣の千冬は放心状態だ。そんな姉を見て『私は冷静になっているのかな？』なんて考えている織斑夏織もまた冷静には程音い状態だった。夏織の視界には、ウサギの耳が映っている。ふさふさで手触りがよさそうなそれは、元氣よく上を向いて立っている。

「一体なんの用だ？」

この場で唯一、冷静な状態であろう篠ノ之法師は、夏織たちが来訪したことを受けて市支援をこちらによこして、用件をうかがった。これだけならば何の問題もない。そう、視界に移るものがなければ。

「……………というかお前、昨日ここに泊まっていたのか……………？」

夏織よりも先に冷静さを取り戻した千冬が、か細い声を出した。それも聞き取っていたのか、ウサギの耳は答えて見せた。

「うん。何を当然な事を。弟と一緒に暮らして、寝て　　する。

これが世の中のお姉ちゃんだよ！」

この言動で、ようやくウサギの耳が娑婆っているわけではないことを理解した。そもそも、ものが娑婆るわけがない。考えてみれば当然……………と思ったところで、思い出した。このウサギの耳を装着している人物は史上まれにみる天災だということを。というよりも、この間法師への見舞品に喋る壺を用意していたのだ。もちろん千冬と

全力で持参させなかった。ひとりでに喋る壺など、悪夢以外になりえない。

「待て。お前は地球上に存在する弟を持つ姉に謝れ。それは絶対に違う。そもそもにして姉弟で濡れ場を作成するな」

一番の突っ込みどころを放置して、千冬は低い声でうなった。怒っているのが見て取れた。普段はめったに聞かないその声に、夏織は少しだけ萎縮してしまう。自分へ向けられたものでもないのに。そんな千冬を意に介せず、ウサギの耳の持ち主、正確にはどこから持ち出したのか真ん中あたりにハートが描かれたピンク色の布団からウサギの耳だけを露出させた篠ノ之束が掛布団をけりだして中からさっそうと登場した。

「これはいなことを。何をおっしゃいますかな？」

「雰囲気だけ古風にしてごまかそうとしても無駄だ。今は残念な事に現代だ。通用せんよ、近親相姦理論なんぞ」

頭を押さえている千冬と束のすぐそばには、先に起きだしていたのか、篠ノ之法師が腕立て伏せをしていた。親指一本で。

ふと、聞きなれない単語が頭上をかすめた。何も考えることなしに、とんでもない行為を継続して行っている法師から目を離さずに、夏織は呟いた。

「……………近親相姦？」

別に意味を尋ねる意図などなかった独り言だったのだが、意外に大きな声になってしまったらしい。ばつちりと聞いていた束に肩をつかまれてしまった。心なしが強く捕まえられて、夏織は痛みのみあまり目じりに熱い雫が溜まるのを感じた。いくら剣道で体を鍛えている

といつても本格的に鍛えているわけではないのだ。せいぜい体力をつけることと護身術を兼ねる程度に行っていることである。最近はおっぱら家事に時間を費やしている事のほづが多いくらいなのだ。そんな程度で痛みに慣れられるわけがない。

「それはね、夏織ちゃん」

「絶対に教えるな、夏織を汚すことは世界が許そうとも私が許さん。そして貴様何をしている夏織を泣かしただと良い度胸だそんなに死にたいのか？ そうか死にたいのかいつでも送ってやるぞ今からやるか？」

「……発言が横暴だよ、ちーちゃん。ああでもっ、無垢な夏織ちゃんに手取り足取りいちいち教えるというのはそれはそれで……。じゆるり。はあはあはあ」

いつもの通りに変態発言の代償として浴びせられるアイアンクローで空中からつりさげられながらも、それ以上の何かによってまったく束は悲鳴を上げたりしない。さすがに不気味に感じたのか、千冬が束を解放した。両手をまじまじと見つめている。

「発言的に五十歩百歩だな。少なくともお前らが発している言葉ではないはず」

そこに横やりを入れる形で、法師。しかし夏織から見れば、法師の十分すぎるほど不思議な人間だ。未だに親指腕立て伏せを継続しているのに、遺体には汗一つ見られない。とても涼しげな顔で言葉を発しているのだ。

そしてそれはやはりほかの視点から見てもそうだったようで、夏織のほかにも異議を唱える人物が現れた。（ちなみに夏織は公言しておらず）

「それをお前が言うのか？」

千冬だった。何か信じられないものを見る目で、法師を観察している。まるで珍生物を見るその視線に、そこまでしなくてもという思いがふつふつとわきあがるが、言葉にして不快にとられるのを嫌い、結局飲み込んだ。

隣からは援護射撃が加えられた。先ほどまでいがみ合っていたはずの束である。その行動力はまるで第二次世界大戦時で三国同盟を結んでおきながらも早々に無条件降伏し、先陣を切ってドイツの地に踏み込んだイタリア並みの身軽さだった。

「それをほーくんが言うっちゃうの？ ダメだよ！ ほーくんはちーちゃんと一緒に人外なんだから！」

さらりと追加され情報でも、流したりはしない。しっかりと言葉を取っていた千冬が束を締め上げるが、先ほどと同様効果が見受けられない。まるで何事もなかったかのような表情を維持している。そう、今もなお腕立て伏せを行っている（さすがに腕は入れ替えていた）法師と同様に。こんなところで、姉弟らしい一面が観察された。

「……。いつの間に耐性を獲得したんだ？ もうアイアンクローが利かなくなっているぞ？」

呆然と呟いている千冬に対して言葉をかけるものはいない。法師ならば話しかけるメリットがない、なんて言うのだろうかと考えながら、夏織はなおも法師を見つめる。

こちらの視線に気が付いたのか、法師がまっすぐに見つめてきた。その視線に、夏織は思わず目をそらしてしまう。

「いって何が悪い？ 世界の理不尽代表格共？」

心なしか、法師が顔を緩めてそう語っていた。夏織をを除く二人に
対して。

やはり、ここは千冬と束の好感度維持のためには立ち上がらなければならなかった。打ちのめされている姉の擁護しないわけにはいかないのだ。いい子であるために、やりたくもない反論を夏織は強い
られた。

「…………。よく、分からないけど、それは法師君が言うべき事じゃないんじゃないかな

…………?」

「…………そうか」

心臓が飛び跳ねてしまいそうなのを押さえて勇気を出したところ、
特に不快にさせるといふことはなかった。その事実には、とりあえず
夏織は安堵のため息を漏らした。

第三十五話（後書き）

お疲れ様でした。

何かありましたら、作者まで。

とりあえず、パソコンが…… ^^ ;

起動するのに三時間半かかったとか ^^ ;

第三十六話（前書き）

更新です。

また今日もPCの不調でこの時間^^；

第三十六話

「つまり、束さんとほーくとちーちゃんは同列なんだね！ やったね！ それじゃあ三人で」

安どのため息をついた夏織だったが、安心してばかりもいらなかった。爆弾を頼るのは、何も一人だけではなかったのだ。穴を一つ直すたびに二つ開いていたのでは、さすがの夏織とて修理しきれない。

穴の開けた張本人は、何の悪気も感じさせない笑顔で言ったのけた。

「やはり貴様の脳は一度破壊しておかねばならんものらしいな。安心しろ、痛みもなく、一瞬で終わる事を約束しよう」

一番心配していた影が、ここにきてようやく動く。そうして唇を歪めながら、こぶしを鳴らした。先ほどまでの陰はまったくいいほど感じられなかった。どうやら完全復活したらしい。ようやく、夏織は本当に安心することができた。それは束ねにとって安心できることではなかったようだが。

「安心できる要素が一つもないよ！ そんな事されたら流石の束さんも壊れちゃうよ！ ……あれ？ もしかしてちーちゃん、照れているんじゃない」

「祈る時間もないようだな、いい心掛けだ」

必死に弁解（途中でからかいも混ざる）をして、結果更に油を注ぐことに。千冬が怪しく笑った。

「あー、束さん終了のお知らせだね、流石に」

虚空を眺めて束はそう宣言した。目の光は失せている。天を仰ぐ姿は実にらしくない姿だった。これは危ないと、その光景を見ていた夏織は駆け出そうとする。

「流石に止めなくちゃっ！」

しかし、横から腕が伸びてきてしまい、結局届くことはなかった。そのままいつもの追いかけっこになってしまった。

その原因である法師を生きよよく振り返る。つかまれていた腕はそんなに力が込められていなかったのか、簡単にほどけてしまった。振り払った。誰であろう、法師の腕を、乱暴に。その行為をしでかした自分を、誰よりも夏織は嫌悪した。

嫌われてしまったらどうしよう？ 迷惑がられてしまったら？ 憎まれてしまったら？ そのような考えがふつふつと浮き上がるごとに、夏織は恐怖に身をすくませた。

そのようなことになってしまえば、何もかもがおしまいだ。今まで構築してきた姉の千冬の信頼度も、東・法師との関係も終わってしまう。それが夏織の身をすくませた。隣で、小さな笑いが漏れた。

「何をそんなに気にしているのだ？ 放っておけばいいだろう。それがあいつらなりのコミュニケーションなのだろう。これをするこゝとで意思の疎通を計っているのだから、余計な介入は控えたほうがいい」

「そうかな……？ 大分お姉ちゃんが本気のように見えるんだけど……？」

「手加減くらいはするだろう、問題ない」

そうしているうちに、束が捕まった。頭をつかまわつた。頭をつかまれて、まるで断末魔のような悲鳴を上げている。どうやら先ほど千冬の一撃を破つた束の耐久力をさらに上回る一撃を放つたらしい。バタバタと手足を暴れさせてもがいている。

そんな束の姿を確認して、法師は鼻を鳴らした。

「そしてよくよく考えてもみる。あれくらいの仕打ちは何時も受けているだろう。そして今日までなんともなく過ごしているのだから、早々問題も起こるまい。ここで問題が起こるようなら、過去にもうそうなっている」

「そうだね」

そこまで相槌を打つてから、夏織は顔を伏せた。流されただけで、問題がまったく解決していないことを思い出したのだ。

法師は感情を隠すのが非常に巧妙だ。こうしている間にも内心は夏織を罵倒しているかもしれない。大変失礼な考え方だが、以前の彼がこうであったという夏織の経験はそう簡単に払拭されるものではない。

その夏織の考え方は、しかし次の一言によつて払拭された。

「腕を振り払つた程度だぞ？ 何をそんなに気にしている？ そんなに怖いのか？ 嫌われるのが。いい子でないと認識されるのが」

「それは つー！」

気づかれていた。何よりもその事実、夏織の心臓は止まりそうになつた。

それは夏織にとっては絶対に知られてはいけない事態だつた。

自分がどんなに汚い人間かということ突き付けられた。それをまざまざと現実として押し付けられるも同義なのだ。

そんな夏織を見透かしたかのように、法師は夏織に話しかけた。い

つもとは違つ、低く、身体に響く声だった。

「汚くない人間なんぞいない。人である限り、きれいではいられない。残念だが、人間なんてものはそんなものだ。あまり気にしすぎるのは感心せんな」

「……でも、私はそれでも……」

それでもなお食い下がろうとする夏織を、法師は押しとどめた。顎を持ち上げられて、強制的に視線を合わせることを強制される。その強引さに、夏織は目をつぶることもできずに見返すしかなかった。

「……っ！」

「背負うのは勝手だ。好きにするといい。だが、それでつぶれてもらつては困る。俺も束も、そして千冬もな。飛び火してみる、俺は最悪、千冬に殺されるぞ？」

そんなことはない、と言おうとしたが、法師の瞳の真剣さに押されて、押し黙った。

沈黙して、つばを飲み込んだ。心臓が夏織の意思と離れたところで、跳ねている。

「それに、勝手につぶれてしまつたら面白くはないな。

周りをよく見てみる。俺はお前が言うような、清廉潔白な人間に見えるか？ 篠ノ之束は穏当に良心的な人間か？ 織斑千冬は人の言葉に全く嫌な顔をしてないか？ 篠ノ之夫妻は本当にただ優しいだけの人間か？」

「それは……」

「違つたろう？ 人間というのは一面で構成されているわけではもちろんない。二面性、もしくはそれ以上の顔を保持している人間だつて珍しくもない」

。それが人間なんだ。なんらおかしくない。其れであつて、何が悪い？」

「……」

「結局のところ、俺はお前がどうしたいのかは知らんよ。ただ、周りの人間が頼りなく見えているようにも見られるぞ、自分を押し殺すというのは」

「……そんなこと」

ない、と言おうとしたところで、夏織は口を開いた。言葉が出ない。身体が勝手に震えて、歯を力チ力チとならすだけだった。それでも口を動かさそうとして、ため息をつかれた。

「もういいだろう。お前はよく耐えた方だ。たまには人に寄りかかるということも覚えておかないと、な？」

「……」

優しくそう諭されては、もう夏織は冷静などではいられなかった。寂しかった。悲しかった。そして何よりも、怖かった。人に嫌われ、てしまいそうで。

ただただ、織斑夏織には安らげる場所がなかったのだ。自分の周りといえども、そこは安息地ではなかったのだ。

今までの自分を忘れて、夏織は法師の懐に潜り込み、その瞳を涙で濡らした。

第三十六話（後書き）

お疲れ様でした。

何かありましたら、作者まで。

第三十七話（前書き）

本当は一話で完結するはずの物語が……未だに継続中。

もうこうなったら、ヒロイン昇格をかけて成長をしてもらいましょ

う！ って流れに…… ^^ ;

第三十七話

「それにしても、もの壊しすぎじゃない？ この間かったばかりのテレビの画面に……刀刺さってるよ？」

ようやく冷静な状態に立ち返った夏織は目を赤くして顔を伏せた。そんな夏織を、不思議そうな視線で法師が射抜いた。心なしか、珍しくその瞳には焦りのようなものがうかがえた気がした。

「俺は残念なことに置いたあつたとしても使わないのだから問題はない。使うのは主にお前と千冬、それに何時もなんの脈絡もなくやって来る束くらいだろう。というかいい加減に泣き止んでくれ。……そろそろ後ろからのプレッシャーがとんでもないものになっている。襲い掛かられるのも時間の問題かもしれない」

平淡な口調そのまま、法師は告げた。その言葉を受けれ夏織は急いで目元を袖で擦る。

「……ごめんなさい。そんなつもりじゃなかったんだけど」
「知っている」

その口調には迷いが無い。ただ事実のみを的確に告げてくる。それは人によってはかなり嫌う人がいるかもしれない。それでも、夏織には関係ない。甘い顔で嘘をつかれるよりよっぽど信用できる。

その瞬間、視界が急に揺れた。頭が傾いて、姿勢を維持できない。結局体まで傾いて、倒れそうになる。

地面とは違う、温かい感覚に包まれる。目の前にはやや大きく法師が映し出された。

「わわわあ！」

突然の事態に、夏織は混乱をきたす。そうしているうちに体勢を整えられて、腕が離された。

「慌て過ぎだ。少しは落ち着いたらどうだ？」

出来の悪い子供と接するかのよう諭されて、恥ずかしく思ったが口には出さない。それではただの子供だ。

「まあ、俺から見たら子供以外の何物でもないがな」

法師には完全にばれていたようだが。

一度咳払いをしてその空気の払しょくを心がけ、自然な感じで法師に話しかけた。

「やっぱり問題あると思うよ。みんなで団欒できないよ？」

それに対して法師はその糸を読んだのか、先制攻撃とも呼べる言葉を放った。

「そもそも本家でやればそれで済むのだろう？ 余計な気を回しているようだが、別にしなくてかまわんぞ？ 特に、あれらの機嫌が悪くなるのは自然な摂理だろう。……見ず知らずの他人にかわいがっている娘同然の人間をとられているようで、な」

あまりに正確過ぎる言葉に、夏織は詰まらざるを得なかった。実際問題、織斑姉妹、とりわけ夏織がこの簡素なつくりのプレハブ小屋へ向かうのを、篠ノ之夫妻はあまりいい顔はしない。どこるか遠回

しな言い方ながら、行くのをやめてくれとまで言われている。

それでも、その言葉に従うわけにはいかなかった。たとえ篠ノ之夫妻にいいように思われなくても、夏織にとってその行為は意味のあることだったのだ。何にも代えがたい恩人に、与えてもらったものの少しも返せるように、足繁く通っているのだ。……通えば通うほど借りが増えていくという悪循環に陥っているのだが。

「構うよ！　だって法師君、一人なんだよ？　誰にも理解してもらえないんだよ？　一人で長い時間過ごさなくちゃいけないなんて、そんな寂しいことないよ……。私はそんなの、嫌だよ！　……もう、寂しい思いなんてしたくない、してほしくないよ……。」

第三十七話（後書き）

お疲れ様でした。

何かありましたら、作者まで。

第三十八話（前書き）

まだ、終わらないのか……。こんなはずでは^^；
予想以上に夏織が主人公。……得している人、います？

第三十八話

勇気を振り絞って発言した夏織に対しても、法師の態度は軟化する
ことはなかった。普段通りの無機質な視線で、ただ夏織をじつと見
据えている。

目をそらしてはいけない。夏織だって変らなければいけないのだ。
いつまでも一人でぐずっている、助けてと言葉を出さずにただ望む
子供であってはいけないのだ。

法師の唇から、吐息が漏れた。

「……。物好きだな、お前は本当に。普通は不気味過ぎて近寄らな
いだろうに、やれやれ。篠ノ之夫妻のようなのが本当は正しいぞ？
一般人は、俺を嫌悪したところでなんの罪もない。半ば人殺しの
ようなものというのは正しいしな」

自分を卑下するような物言いに、夏織はたまらず声を張り上げる。
嫌悪されるとかそんな考えを払しょくするほどに、内心が煮え立っ
た。

「違うよ！ 法師君はそんなのじゃない！ そんな事聞きたくない
よ！」

一度加熱した感情はなかなか収まりを見せない。止まらなければな
らないと理解しているにもかかわらず、一向にやむことはない。劇
場に駆られたまま、夏織はなおも言葉を続ける。

「……どうしてそんな事言つの……？ 法師君は法師君だよ？ 何
もしてないよ……」

感極まって、視界がぼやける。

泣いてはいけない。この行為は法師を困らせるだけだ。認識しつつも、やはり怒りと同様に止まらない。ぐつぐつと煮え立つ憤怒と、じくじくと継続的に締め付ける悲しみが夏織の中を共存している。例背にならなければ。それを思うほどに、それらの感情が肥大化する。

法師の姿をまともに見れないまま、なんとか視線だけは逸らさないように顔を固定する。

「……そうか。お前がそう言うのなら、それでいい。大して困りはしない」

そう言い切って、法師は目線を夏織から降ろした。

気には障らなかつたらしい。そのことに何よりも安心した夏織は、法師に近づいた。

無性に、温もりがほしかったのだ。なぜかは分からない。恥ずかしいやら嫌われるやらという感情よりも、なぜか意識のない執着が勝った。

ダメなんてことはないよね？ 周りに頼ったらどうだ？ って言ったのは法師君だもんね。

心の中でそう言い訳をしつつ、なぜか震える腕を伸ばした。拒絶は、されなかった。

「……あっ」

腕を通して伝わってきたのは、温もりと鼓動。

生きている。法師はきちんと血が通った、人間だった。そんな

当たり前なことになぜか感動する自身を訝しげに思いながら、夏織は腕を背中に回す。

手元に、服越しにでもわかるざらついた感覚が広がった。

「……………え？」

気のせいか、はたまた自身の手が異常をきたしたか。そう考えた夏織は一度手を放してから、もう一度法師の背中をなぞる。

間違いではない。明らかにその背中のごてごてしている。この間はそんなことはなかったというのにも関わらず。

「……………？」

法師が眉をひそめているが、そんなものを確認できるほどの余裕はなかった。信じられない思いで、それを言葉にした。

「……………なに、これ……………？」

何度も背中をなぞりながら、やっとの思いでそれだけしか言えなかった。前にはこんなことはなかった。それは確認しているのだが、いったいいつできたのだろうか？　そしてなぜこんなことになっているのだろうか？

疑問が顔中を駆け巡っている夏織に、法師は眉をひそめたまま目をさらに細めた。

「……………。説明されていないのか？　てつきり説明されたとばかり思っていたのだが。……………まあ、これがあつたから、今俺がここにいるとも言えるものだ。あまり悪いことばかりというわけではないな」

「……………知らないよ。姉さんは何も教えてくれなかったから……………」

夏織を注意深く観察しながら、法師は夏織の顎を持ち上げた。つい先ほども見た、何も感情を移していない透明な瞳が広がった。

「この間いろいろあったのだが……。簡単に言うと、拷問された、というのが正しいか。意味がわからなければ、暴行を加えられたという風に解釈してくれ。故に、背中がこんなクレーターになっている」

「……そんな、酷い！」

その事実にも、夏織は凍り付いて……。それ以上何も考えることができなかつた。

悲しみ、憤り、苛立ち、混乱。さまざまな感情が体中w駆け巡り、処理できる許容量を超えた。処理しきれなくなつた感情は涙となつて零れ落ちた。

もうばやけてしまった法師の顔どころか、何も見えなかつた。立っていることさえも奇跡で、夏織自身どのようにして直立状態を維持しているのかさえも分からなかつた。

「よくもそこまで憤れるな？ 実際にその現場を見た訳でもないだろうに。本当に、お前の姉といい、俺の自称姉といい、阿呆ばかりだな。ここまで来ると呆れるどころか拝みたくもなる」

口元に穏やかな微笑を口元に浮かべた法師は、強く夏織を抱え込んだ。

その落ち着き過ぎた法師に包まれて、ようやく本当に冷静な状況に立ち返ることができた。

謝罪の言葉を口にしながらも、夏織は疑問を法師にたたきつけた。

「……なんでそんなに落ち着いているの？ ねえ、どうしてそんなに落ち着いていられるの？ また誘拐されたのに、どうしてそんな

にへいきそつなの？」

何度目かわからないため息を聞きながらも、法師は質問に真剣に取り合ってくれた。こういうところが彼らしい。かなり接近した状態で、夏織はその声に耳を傾けた。

「……落ち着け。お前が取り乱したところでどうしようもないぞ？
そして誘拐の件は、千冬から聞いたのか？」

「うん。いろいろおかしなところが見えたから、それを聞いたんだ。結構根気よく聞いたら、お姉ちゃんが折れて教えてくれたんだ。今回のことじゃなくて、前の法師君が記憶喪失になった原因のもの、
なんだけど」

その言葉がおかしかったのか、法師はめったに見せない、穏やかな微笑を見せた。というよりも、夏織にとっては初めて見るものだった。

落ち着いたはずの心臓が勝手にまた暴れ出し、顔が勝手に種を帯びているのが自分でもわかった。が、これといって対策をとることもできず、どうしようもなかった。

「以前の俺、といわれてのピンと来んよ。何しろ『篠ノ之法師』は記憶喪失になどなっていないのだからな。まったく、どいつもこいつの好き勝手に言ってくれる。別人だと何度言わせれば気が済むんだ？」

第三十八話（後書き）

お疲れ様でした。

何かありましたら、作者まで。

さて、五十部まで来ているのにまだISまったく出る気配なし……

^^;

.....やばい>

^ ;

第三十九話（前書き）

今日はきりぎりし>>、

そしてようやく夏織さんのターン終了>>>、

第三十九話

細めに息を出してから、法師は夏織を見た。

「……やれやれ。あいつも全く甘いな。」

いいか、その事項に関しては、一切の他言を厳禁する」

他言、厳禁。まったくもって聞きなれないことが場法師からよこされた。たげん、げんきんと『口でつぶやいてみても、さっぱりとイメージがわかなかった。

結局、法師に尋ねることになった。

「……他言を……、厳禁する？」

結局、聞いたところで意味は分からないかもしれない。それでも話す機会が増えることは夏織にとって喜ばしいことには変わりがない。そんな夏織の態度を見て、法師は苦笑いを作った。

「……そういえばお前はまだ小学生の低学年だったのだな。あまりの聞き分けの良さと聡明さで忘れるところだった」

何でもないような表情あら、なぜかほめ言葉が飛び出した。突然それを言われた夏織になすべなどなく、顔を赤面させる。ひとりでに赤くなる顔を煩わしく思った。

「……そんな事ないよ……」

しどろもどろに作成された言葉で、夏織は法師の言葉を何とか否定する。否定するのだが、嘘のない法師の言葉に、うれしくなってい

る自分がいるのも確認する。

どうしたんだろう、私？

褒められてうれしいのはあるのかもしれない。しかし、それだけではない気がするのだ。自身の変化に、夏織は戸惑う。

殺気みたいに、抱きしめてほしいなあ、なんて。

とんでもないことを考え始めた頭に、夏織は頭を振ってその考えを追い出す。なかったことにしようとしているらしい。

その様子を見ているのかいないのか、法師の態度は変わることはなかった。ただ淡々と、感情を込めずに言葉を紡ぎあげる。その淡々とした様子が法師らしいというバラ石のだが、夏織の目にはそれが法師の余裕に見えた。

「……まあ、本人がそう発言するならば俺から言えることはないな。簡単に言ってしまうえば、誰であろうと絶対にこの発言をしてはならないということだ。知らぬ人、知っている人間、身内問わず、だ。いくら事情を知っているだろう千冬に関してもだな」

法師の言葉に、夏織は首をかしげた。そして余計なことンを考え始めた頭を酷使してその言葉の意味を読み取ろうと働かせる。

が、まったくもって意図が読み込めなかった。小学二年生にそれを要求するのはあまりにも酷というものだった。この場合悪いのは夏織ではなく説明不足の法師だろう。

夏織が理解していないことを感じ取ったのか、法師が的確に補足した。

「そういう情報を盗み聞きしている輩がいるかもしれない、と言うことだ。そういう連中はどこにいてどのようにならざるを得て行っている、というのを隠すのが専門だからな。いくら俺でも、距離が空いていればそれが認識出来ないかもしれないからな。万が一にそなえて、ということだ」

ピンとくるような、それでもよくわからないような話である。そもそもいったい情報を盗み出して何の意味があるのか、それ自体夏織はあまりよくわかっていない。情報を抜き取られるのは政府高官か、またそれに近い人物。利益を生み出す人、というイメージが存在するからだ。一般人である法師のことを監視していったい何になるのだろうか？

よくわからないまま、とりあえず夏織は納得することにした。どうせ考えても分からない気がしたのだ。

「……。よく分からないけど、お姉ちゃんも含めて誰にも話さなければいいの？」

夏織が法師にそう尋ねると、無言で法師は頷いた。

「……ああ」

そしてその眼を、夏織がいる方向をはまったく別な方向へとよこした。今までにない、鋭い視線だ。その眼光の鋭さは、夏織にとって恐怖を抱かせるもの以外の何物でもなかった。

怖い。心の底から湧きあがってきた感情は、それだった。

まるで何かを威圧するかのような気配を放つそれに、夏織はただ体を震わせることしかできない。早く終わって、と祈ることしかでき

なかった。

そして沿俺は、唐突に終わりを見せた。法師が目を閉じた瞬間、鋭い気配はまるで何もなかったかのように消滅した。そのあまりの変わりように、夏織の目が点になった。

「ほへ？ ……どうしたの？」

とんでもない声を出した口をふさぎ、空気を換気する咳払いを敢行。その涙ぐましい成果かどうかは知らないが、法師からそれについて追及を受けることはなかった。

「……。いや、どうやら勘違いだったらしいというだけだ。気が付かないとばかり思っていたのだが、鋭いな？」

「……？ 一応、お姉ちゃんに稽古つけてもらったことあるから……かな？ よくわからないけど、さっきの法師君は怖かったよ」

法師はもう一度目を横にやってから、夏織に向き直った。先ほどの威圧感は、もうなかった。

「すまなかったな。気づくとは思わなかった。

勘が鋭いのは千冬譲りか……。やれやれ、お前ら姉妹は本当に……」

呆れたようにつぶやく法師を見て、夏織は久しぶりにきれいに笑うことができた。

いつも冷静さをにじませている法師の頭をかくしぐさを作る様子が、本当におかしかったのだ。

第三十九話（後書き）

お疲れ様でした。

何かありましたら、作者まで。

わけありで感想返しが遅くなります^^；
すみせん^^；

第四十話（前書き）

久々に法師に視点が来たのですが。
……違和感があるのは、私だけ？

第四十話

起床時に、これといった感想はない。そもそもにしてほとんど眠っている感覚などないのだから。半分以上、起きている。そもそもにして言葉にして言う、眠るという感覚は、残念ながら俺にはまったくもって理解できない。というよりも、ほかの人間がそのような感覚を持つていたということがすでに驚きだった。

ねむて散るときには、人間の感覚はこれ以上ないほどにゆるみ、周りのことを警戒しなくなる。注意力が霧散しているような状態らしい。らしい、というのも俺がその感覚を知らないせいで、ただの想像でしかない。そんなものをむさぼれるほど生易しい場所に身を置いていたわけではない。そんなことになっていれば、まず俺はここにはいなかっただろう。

脱線したが、俺の場合は単に目を閉じているという感覚だ。頭の稼働率を少しだけ下げ、記憶の整理をしつつも周りの警戒は怠らない。それでも通常よりも感覚はやはり鈍くなってしまふのは仕方がない。人間ゆえの宿命だろうと解釈してる。ちなみにだが、警戒率は半分以下になる。敵意を持ったもの、不穏な気配を放つものは普段ならば十キロ、その気にさえなれば数十キロ単位で行うことができるが、せいぜい五キロが一杯一杯だ。精度を落とすならば限界は三キロとあったところ。これだと長距離から狙われた場合助からないため、寢床と睡眠時間は常に不規則にしていた。それで足りないところをカバーしていたのだ。

だが、なぜかは知らないが、この身体はそれを受け付けはしない。困ったことに一日の稼働時間が二十時間を超えると急激に集中力が低下するのだ。瞼は互いに接着を果たすかのように重りのごとくのみしかかり、時折何の脈絡もなく身体がぐらつく。一日三時間以上睡眠をとっていて、である。正直、煩わしい。

一瞬で、切り替える。瞼を開いてから、情報把握に努める。周りに

害意を持った人間がないことを確認してから、俺は身体をほぐす。三時間程度（もつと多い時もある）運動していなかった身体をほぐし、なまらないうように鍛えるのだ。現状維持というのがかなり難しいというのは承知している。

「……で、お前はなぜ、ここにいるのだ？」

一通り普通のメニューをこなしてから、先ほどまで俺がいた場所の隣で布団を敷いて、睡眠をとっていたであろう場所に頭をおいてだらしなく顔を緩ませている人間に話しかける。最近、というよりもほぼ二日に一回のペースで束はやってくる。最初のうちは一々目を開けて、身体を起こして警戒していたのだが、そのうちばからしくなつて目を開けることをやめた。まあただ目を閉じたまま身体を起こさないというだけで、起きて警戒はしている。慣れてしまったが最後、警戒を怠り命を落とす人物というのは決して珍しくない。もともとの立場が微妙故に、平穩といえる今の生活にかまけて警戒を怠るわけにはいかない。

「……ううん。おはようほーくん！ 朝からいい天気はどうでもいけどほーくんをこの目に焼き付けることができるなんて！ 最高だよ！ ほーくん、結婚しよう！」

「とりあえず質問に答えろ、束。会話が成立していないぞ……。それとこの国に、しいては世界に真つ向からケンカを売るのは、俺のいないところでしてもらいたいものだ。そんな俺にとって何の得もないどうでもいいこと巻き込むな馬鹿馬鹿しい」

俺の言葉に満足したのか、束は嬉々として俺に抱き着こうと飛びついてきた。顔中に気色を浮かべるのは至極どうでもいいが、そのよだれが散布された口元はいかなものか。俺は身を翻す。其れだけで簡単に束の抱擁から逃れることができた。

俺に飛びつくことで勢いを止めようと考えていたのであるが、その作戦は失敗。勢い余った束はそれを殺すことができずに、結果頭から床に飛び込むことになった。はたから見ていると、床に飛び込む人間のように見て取れる。

「……へぎゅ！　いつはあ、ほーきゅん、つれはいはあ。……んん、束さんの胸に飛び込んでもいいのだよ？　さあ、この豊かなものでほーくんのすべてを受け止めた上げるよ！　何から何まで、余すことなく、例外なく！　おいで！　……ああ小っちゃいほーくんに罵倒されるの良ayo！　ぞくぞくしてくるよお！」

「……その口ぶりから想像できるものは無理だな。外見年齢的に。実年齢がどれくらいかわかったものではないが、物理的に無理そう。簡単に見積もると、このまま順調に行っただといてあと四年はかかるぞ？　あと貴様は何を興奮しているんだ？」

その言葉にショックを受けたのか、装着していたウサギの耳が垂れた。先ほどは見かけられなかったものがいつの間にかに付属しているという珍現象は、束に限った話ではなんらおかしくないらしい。千冬でさえも訝しっていたので、たぶん本当だろう。

「冷たいなあ。」

喜んでるのはほーくんだからだよ！　誰でもいいってわけじゃないよー！」

「……聞いていないぞ」

どうでもいい束の告白を耳に入れながら、俺は身体を鍛えるのをやめない。

一番きつい体勢の維持。それが一番効果的、というよりもそれを繰り返したのでそれをするのが当たり前になっている。

そうして、俺の一日はスタートした。

……さて、誰がこんなのを覗いて得をするのだろうな、本当に。

「東さんは得をするよ?」

「覗くという行為ではないだろう、お前がしていることは」

第四十話（後書き）

お疲れ様でした。

何かありましたら、作者まで。

第四十一話（前書き）

よくぞここまで頑張ってきたと自分をほめてみました。
……そんなことほざいてるってことは、ねえ？

第四十一話

織斑夏織の日常は今日も平常回転だ。朝、気象とともに身なりを整えて、退院した篠ノ之母の朝食作りに参加。起き出してくる姉の千冬と篠ノ之父と食事を囲む。既に束や法師はいなかったものとして扱われている。

法師に関しては完全に住むところさえも別にされている。束の場合は居住自体はしている。ほぼ毎日、家族が食べ終わった時間になると自分の部屋からやってきて、夏織の作ったものだけをきれいに食べる。雪野のものはどんなに巧妙に隠してあつたとしても口に入れようとせず、残したまま生ごみとして処理するのだ。

「料理に対して込められている愛情の違いかな？」

なぜわかるのかを聞いてみたところ、そんな答えが返ってきた。それ自体に納得はできなかったか、とりあえず思考停止して一応の理解を示した。個人の嗜好というものにいちいち他人が口出すのはあまりいい気分がしないだろう、とおぼろげながら夏織は理解している。

血がつながっているはずなのに、近くにいるはずなのに、分かりあうことができない家族。その一人一人が大変いい人だからこそ夏織にとって非常に残念なことであつて、また同時に心を痛める事実でもある。同じ家族なのに、どうしてそこまでしなければならぬのだろうか？ 一度きちんと話し合えば、包み隠さず意見をぶつけ合えば、必ず理解できる。

そのように考えている夏織に対して、法師は言う。

「篠ノ之夫妻にとって俺は存在してはならないものなのだ。もう死んでいるものとして扱う方が楽だろう。事実、事故前と事故後では

全く別人に成り果てているしな。むしろ死んでくれていた方がありがたかったのかもしれないよ。辛いが、きれいな思い出として篠ノ之法師という存在が残るのだからな。俺という存在は、奴らにとつては癌か、あるいはそれ以上に悪い思い出を凌辱する存在なのだろう。そんな存在を許容させてみる、壊れるぞ、奴らは」

一切感情を乱すことなく、その瞳に感情の灯をともすことなくありのままだけを伝えた。その時の態度は、それがすべての事実だといわんばかりの態度にも見えてしまった。其れであつたがために、夏織は反発した。

だからなに？ 家族は家族だよ。束さんにしても法師君にしても、たつた二人の自分の、子供なんだよ……？ と。

夏織の言葉を聞くと、法師は笑つた。いつになく取りつく島のない、人を拒絶する冷たい笑顔だつた。

「同じことを夫妻にも言つてみるといい。発狂するかもな。まあ、手始めとしては束に言つてみるのが妥当か。そこでお前が見た事実を合わせて、もう一度同じことが言えるのかを確かめてくるんだな」

その言葉に従う形で、夏織は祖期ほどの言葉を繰り返してみた。その途端に、束の瞳の色が凍つた。

初めて見る、凄惨な表情に、夏織は呼吸も忘れてただそれを見返す。一度だけ見た法師の眼力ほどではないが、思つてもみなかった夏織は面喰らつた。

「……ねえ、夏織ちゃん、それ、本気で言つてるの？」

感情が凍結してしまつたかのように、抑揚が存在しない、不気味な

声。その声を至近距離でまともに食らった夏織は声の出し方も忘れて、ただ首を縦に振った。感情の凍結した瞳が、燃え上がった。

「……二度といわないで……。いくら夏織ちゃんでも、それは、それだけは許さない」

まあ、手始めとしては束に言ってみるのが妥当か。そこでお前が見た事実を合わせて、もう一度同じことが言えるのかを確かめてくるんだな。

法師の言葉が脳内でリフレインする。冗談でもなんでもなく、夏織はそれを言うことができそうになかった。

同じことを束の前で言えば、今度こそ夏織は無事では済まないだろう。それほどまでに束の両親への感情は、憎しみというもので支配されていた。

それでは両親は？ これと同じでない、という保証は、残念ながらない。むしろ近しい感情を抱いている、という方が納得できてしまいそうだ。

束に向ける両親の瞳。束ねのかつてないほどの怒り。そして嘘ひとつ言わぬ、確信めいた口ぶりの法師。これだけの材料を以ってして法師の前で宣言できるとは思えなかった。

夏織が優しいと感じるみんなが幸せになることができる。それは所詮、夏織の夢物語でしかないらしい。夏織自身が望む、身勝手なものなのだ。それをまざまざと見せつけられたあの日を思い出して、夏織はそう結論付けた。

それを認めてしまうと、心の中に重い何かが沈んでいった。食事中にもかかわらずそんなことを考えていたので、何時ものようにしゃべることも口を動かすこともしていなかった。

様子のおかしい夏織を訝しんだのか、篠ノ之妻の顔が心配そうなものへと変わっている。

「……夏織ちゃん？ どこか具合が悪いの？ それともご飯おいしくなかった？ ねえ、本当に大丈夫？ 心配なようなら私が病院に……」
「いえいえ！ ただ少し考え事をしていただけです。……心配かけて、ごめんなさい」

手を高速で振るといふ非常にあわただしい動作を夏織がして否定すると、食卓の至るところから安堵のため息が漏れていた。

「……体調が悪かったら言いなさい。メニューを減らしたり、休みにしたりするから。いつも頑張るのはいいけれど、それで身体を壊したら元も子もないよ」

篠ノ之父もこちらを伺っていた。やはり夏織を移すその目には親愛の情が宿っている。それが何とも、今の夏織にとってはくすぐったく、そして何よりも重たく感じるものだった。

愛されている。

それはわかる。わかるのだが、納得いかない部分というのは確かに存在する。

このポジションは、法師君や東さんのものであるはずなのに……。

思考から言葉が飛び出しそうになって、慌てて夏織は口に制止を呼びかけた。そのおかげか、鮭をのどに詰まらせてむせることになったのだが、何とかしてその失言だけは何とかとどめることができた。

「た、大変！ 早く吐き出して、夏織ちゃん！」

「夏織っ！ 苦しくはないか？ 大丈夫なのか？」

「無理やり叩いてはいけないよ。どこに詰まったのかな？ ……大丈夫かい？」

周り中から椅子から立ち上がり、駆け寄ってきた人が集まってきて、夏織の様子をうかがっている。それに何とか答えるように、夏織は右手の親指と人差し指で丸を作った。

再び、安どのため息の合唱がなされた。

禁句は、決して口にはださない。これを言ってしまったが最後、一切夫妻は口を効かなくなるのだ。篠ノ之法師の名を出しただけでもアウトなのだ。

「…………ご馳走様でした」

夏織が我に帰れば、もう姉は食事を終えていた。何時も一定のペースを崩さない姉の食事が終わったということは、それはもうすぐ登校時間だということだ。あまり時間に猶予はない。夏織は考えを一旦置いておき、食事に集中した。朝の日課がこなせなくなってしまうのだ。

食べ終わり、食事を流しに置く。片付けを手伝えないことを篠ノ之雪野に伝えると、子

供が気にすることではないとやんわり注意された。そのまま行っきますと伝えて、学校の制服に着替えるなどの身支度を手短に済ませて、彼女は道場へと向かう。

勿論、学校前に汗を流すとかそういったことではない。道場で香りが汗をなぐふあすのは学校から帰ってきた後だ。朝はそれとは全く違う、別の目的でこの場所に訪れるのだ。

玄関で履いた靴を脱ぎ足でばらばらにならないようにきれいにそろ

えて置き、さらに手で整えてから夏織は道場へと上がる。重量があるはずの日本刀で、待っている人物がそこにはいた。千冬曰く、刃はきちんと潰してあるらしい。人は切れないようになってはいるのだが、一歩間違えばやはり命を絶つこともできるらしい。汗が弾けている、という訳ではない。彼の汗をかいたところを、夏織は見たことがないからだ。本当に同じ人間なのかを疑いたくなるほど、彼は暑い中でも平然としているのだ。

今だって全力で動いているはずなのに、苦勞しているようには見られない。夏織には到底出来ないアクロバットな機動を何度も繰り返して見せる。

一通り終わったのか、彼の視線がこちらを居抜いた。

第四十一話（後書き）

お疲れ様でした。

何かありましたら、作者まで。

第四十二話（前書き）

……誰か、スランプの脱し方のご教授を……！

第四十二話

「……たいして面白いものでもないだろうに。千冬に頼めば、もっと面白いものを見せてもらえるぞ?」

言葉の裏には、冗談の色がありありと浮かんでいた。本気で言ったのではないのか

はたまた言ったところで夏織が態度を変えないことを知っているのか判断が付かなかった。

後者だったのなら喜ばしい。そんなことを夏織は思った。

「……お姉ちゃんの邪魔をする訳にはいかないよ。何時も忙しそうにしてるんだから、たまには一人でゆっくりしたいと思うし、ね?」
「……それならば俺は何も言わんよ。そして俺の邪魔ならばいくらでもしていいといわんばかりだな、本当に」

苦笑と微笑の間の複雑な笑みをもらして、彼はかいてもいない汗を拭うようにタオルを顔に押し付ける。

が、そんなことを言われてだまつているわけにはいかなかった。このままでは完全に夏織の立場が悪くなる。

冗談だとしても、訂正せずにはいられなかった。

「そんなことないよ! いくらでも邪魔なんてしていいなんて思っ
てないもん! そんなこと言うなんて、法師君意地悪だよ!」

「拗ねるな、冗談だ」

そういつてその場で彼は身に着けていた衣服を脱ぎ捨てた。警告も何もなかったため、目をそらすことができずにまともに夏織は見てしまつ。

全体的に細身な身体の上に、しなやかな筋肉が乗っかっている。無駄な志望内引き締まった体が、目を覆っていた指越しに見えた。

見ちゃった。法師君の、あの……。

混乱。それ以上考えようとしたりとところで、言葉にならなかった。

そんな夏織に一瞥をよこして、法師は身支度を整えた。来ていた服も店に並んでいるかのような状態にまで畳んで、鞆同様持ち上げた。

「……そろそろ出るとしよう。間に合わなくなるのだろう、学校に」
「……。うん、行く?」

我に返った夏織はほほを紅潮させたまま、法師に手を差し出して、顔は学校へと向ける。何となくだが、一瞬その行為を恥ずかしいと感じたのだ、何故か。

「……そうだな」

法師は差し出された手を見て、夏織の顔をじっと見つめた。紅潮している顔を見られるのが恥ずかしかった夏織はもう一度法師に手を差し出した。

その意図を読んだのか、法師は差し出された夏織の手をしっかりと握って、歩きだした。

唐突に引っ張られる形となった夏織は体勢を崩した。身体を傾かせ、あと少しで地面に接触する、というところで、タイミングよく法師のフォローが入り、また夏織の体勢が元の状態に戻った。

本当に、法師は変わった。それをしみじみと夏織は振り返る。

以前の傲慢な態度はすっかりとなりを潜めて、今は完全に落ち付いてしまっている。その変貌ぶりは、周りの人間を大層困惑させた。夏織もその一人だった。

だからといって、それが悪いということではない。むしろいい変化だと感じる。

握られた手を何かの拍子で離さないように、力を込めてしっかりと握る。その握った掌の間から、ジワリと暖かいものが流れてきた。それを肌でしっかりと感じながら、夏織は法師の手がこんなにも温もりを帯びていたという事実を振り返って驚いた。以前には考えられなかったことだ。自分の殻に閉じこもり、他人に合わせようとせずにただ傷ついた、助けてほしいと泣き叫ばずに誰かが手を差し延べてくれるのを待っているだけの子供。

変わらなければ。そう考えるだけで、人間というのは簡単に変わる事ができるらしい。

法師が変わったのは、言うまでもない。篠ノ之夫妻には申し訳ないが、以前の彼よりは断然接しやすいのだ。気兼ねする事なく自分を受け入れてくれる大人びた彼は両親には理解されないものらしい。現に夏織と同じ認識を、姉の千冬と東が表明している。

そして同じように、自分もいい方向に変わることができたのだろうか？

「……………どうした？」

手を握ったまま動かない夏織に、静かに疑問を投げ掛けた。横暴さも、怒りもない穏やかな声に夏織は自然と笑顔を作ることが出来た。

「ううん、何でもないよ？」

……………。ごめんね、ちよっとだけ、嘘」

そういつて夏織は法師に寄りかかった。ぴったりくっついて花を動かしても、汗のにおいはまったくしなかった。

あれだけ激しい運動をしているにもかかわらず、この平然とした様

子。やはり、普通ではない。

「……………どうした？」

「甘えてもいいって言ったから、甘えてみたんだけど……………、駄目？」

「……………いや、言い出したのは俺だ、文句はない。ないが……………こうなるとは思っていなかったがな」

顎を上げて空に向かって空気を吹き出す法師にしだれかかりながら、
今日も夏織は学校を目指す。

顔をなでる涼しげな風が、妙に心地よかった。

第四十二話（後書き）

お疲れ様でした。

何かありましたら、作者まで。

第四十三話（前書き）

……初、戦闘描写！ ……でもISでない ……（泣）
……そして相変わらずの不調 …… ^^ ;

第四十三話

織斑千冬は現在、竹刀を握っていた。

何故か、といわれれば目の前の人物に請われたからとしか言いようがない。

そう、篠ノ之法師は何の脈絡もなくいきなり言ったのだ。

「勝負してほしい」と。竹刀を突き出して。

初めは一体何の冗談だ、と一蹴しようとした。だが真剣な法師の眼を見て、千冬は考えを改めた。

いつものように透き通っている目が、何かを訴えていた。

それを感じ取った千冬は、とりあえず理由を聞いた。それから判断したとしても遅くないと思ったからだ。

「何故、手合わせをしたいんだ？」

「……一体今自分がどれだけ動けるかを確認しておきたい。それと一体どのくらい鈍っているのかも、な。実戦形式のものを全くしてないから、どれだけ勘が鈍っているか分かったものではない、というわけだ」

法師は目を千冬に向けたまま、口を開いた。

「実戦形式で”全くしてない””どれほど鈍っている、動けるか”

”勘が鈍っている”等々の含みを感じさせる言葉が、千冬の耳に届いた。

どう考えてもおかしい。篠ノ之法師が記憶喪失だということかことが正しいと仮定するならば、だが。

ふと、千冬は医師の言葉を思い出していた。

「私はね、どうしても彼が健康体だと思っているのだよ」

「彼は本当に記憶喪失なのかね？ いや、診断を下したのは私なのだが……。どうもおかしいと思ってね」

「脳の損傷が見られない、が、記憶の混乱が著しい。……やはり、記憶喪失なのだろうか……。？ ……いや、それにしても……」

診断を下した医師が、自信なさそうにそう呻いていたのだ。

意識不明の重症からよみがえった法師。其れからは、前とは全く別人のようになり果てた。

本当に、同じ人物なのか？ 記憶の混乱のせいで変わっただけなのか？

そうして擬人暗鬼になりそうな自分を、千冬は自ら諫めた。考え始めたらきりが無い。それに別人だからなんだというのだ。夏織に対しても前とは違って大切に扱ってくれている。少々目の余ることろはあるが、まあ小学生同士の触れ合いならば許容できる範囲だ。扱いの非常に困る束の発明に関しても時には修正し、時には開発を中止させ危ないものはまったく見ることがなくなった。篠ノ之夫妻との関係は一向に良くなるが、性質上仕方ないことだろう。

気になる言葉を法師は節々に残したが、結局千冬は承諾した。久し振りに軽く相手（今の法師にとっては初めてだということをおぼろげにしている）をしてもいいかもしれないと思ったのだ。あまり身体を動かさないのも鈍る原因になるしな、という理由もくつつけた。

それは果たして正解だったのか？ 少なくとも今の千冬には分からない。

「……本当に防具をつけなくてもいいのか？」

防具もつけずに竹刀を横に置き、体をほぐし始める法師に、さすがに千冬が一言入れた。

いくら手加減するといっても、けがをするという可能性は前年ながらゼロとは言い切れない。スポーツと世間では見られている剣道だが、実質はブドウだ。遊びではない。身体の保護を行う防具は必要であると千冬は思ったのだが……。

法師はストレッチを終えて、一度竹刀を振って見せた。縦に入った一撃は、空気を鋭く切り裂いた。

「わざわざ動きにくいものを付けるのは趣味ではない。それに実戦ではいちいち防具など付けていられないからな、ちょうどいい。軽く汗を流すでしょう」

その言葉とともに、不適な微笑みを寄越してきた。強がりなどではなくどうやら本当に防具は必要ない、というような態度だ。舐めているともとれる。力が入りそうになる身体に、一応力をセーブするように何度も言い聞かせ、竹刀を正眼に構えた。

軽く灸を添える必要がありそうだった。このままでは面倒なことになるだろう。夏織に対してはいいのかもしれないが、それではほかの人間に対してもそれでは困る。社会に適合できない可能性すらある。

そんなことを考えつつ、道場の間取りと法師の立ち位置を比較しながら千冬は流し目で法師の姿を確認した。

法師は動かない。眼を閉じたまま竹刀をだらりと下げ、足をピタリとくっつけている。どう考えても真面目な構えではない。挑んできたのは法師であるはずなのに、やる気のかけらさえ感じ取ることができなかった。

完全になめられている。それを肌で感じ取った千冬は、少々怒気の孕んだ声を腹から送り出した。

流石に、これには千冬自身苛立ちを抑えることができなかつた。自身の打ち込んでいるものを侮辱されているとしか思えないのだ。それも当然といえる。

「……構える。そんな体勢ではまともに撃ち合うことすら叶わんぞ？ それとも何か、その程度余裕だとおごっているのか？ 舐められたものだな？」

「構わん。それならばそれだ。仕掛けるならそっちから仕掛けてくれ。俺が自らの失態でけがをしたところで自己責任、お前に責任はない。……俺のことを買っていると思っていたのだが、気のせいだったか？」

千冬の忠告も、法師はにべもなく切り捨てた。それに付け加えて、唇を斜めに成形して、挑発行為までしてきた。

いいだろう、そちらがその気ならこちらが打って出て圧倒すれば良いだけの話だ。

怒りを覚えそうになる思考を逸らして、千冬は足に力を込めた。ただ真つすぐ、法師に詰め寄った。

第四十三話（後書き）

お疲れ様でした。

何かありましたら、作者まで。

第四十四話（前書き）

予約投稿一回目。

誤字訂正を、よろしくお願いいたします。感想、返せませんが

^^；

……そして短い^^；

第四十四話

三間の間にも入ったのに、法師は目を閉じたまま全く動かない。

千冬はとても落胆した。傲慢ともとれる態度には、何かの裏付けがあると思っていたからだ。それが裏切られて、とても残念だった。千冬自身、どこか期待していたのだった。

内心で失望しながらも、さっさとけりを付けるために竹刀を振るった。こんな出来レースのような戦いに、意味など見いだせなかった。途端に感じた手応えは、浅かった。

その浅い感覚に違和感を覚えながら二太刀目を加えようとして、千冬は目をひんむいた。

法師の足が、千冬の手の手甲を狙い済ましたような機動を描いて迫ってきたのだ。

いったい何が起こった？　なぜ足が迫ってきている？

混乱した千冬は慌てて二太刀目を中止して、横に滑るようにして回避。何とかその一撃をそらすことに成功した。

よけていなければ、コースから考えて鳩尾直撃の軌道だった。その事実には、千冬は驚愕を隠せなかった。まったくもって訳の分からない機動で、全く予想もしない反撃を食らわされそうになったのだ。驚きもしよう。以前の法師にこんな動きのレパトリーはなかったはずであるのに……、とそこまで考えて、自身の愚かさを悟った。

以前と同じ、か。

そう。千冬は法師のことを以前のままの法師としてしか見ていなか

ったのだ。だから始めのやる気のないような構えに失望したのだ。今の彼にとつては、それが戦闘スタイルかもしれないという事実を全く考慮せずに、勝手に決めつけた。

俺のことを買っていると思っていたのだが、気のせいだったか？

その言葉は、法師の驕りなどではなくただ単に疑問の声ではなかったのか？ そのことが頭をかすめて、千冬は思わず笑ってしまった。

「……ははっ。見誤っていた、済まん。そのことについては詫びよう。どこかで私は法師、お前のことを見くびっていたようだ。私自身、お前がただの子供ではないと知っていたはずなのにな」

「……そうか」

ただ一度小さく頷くだけで、そのやり取りは終わった。以前ならばここで癩癩や愚痴を漏らしているくらいだから、やっぱり以前とは別人だ。

そしてその考えは自分で記憶喪失なのではないかと言っておきながら、実は全く信じていなかったという証明でもあった。傑作であるあの天才ですら理解して見せたというのに、言いだしっぺはまったくもって口先だけだったのだ。

そこまで頭を回して、千冬は一度大きく息を吐いた。新たに空気を肺に溜め、気合を入れなおして法師に向き直った。

「悪いが、本気で行かせてもらおう」

「構わん。いつでも、受けて立とう」

手加減はしない。千冬は必中を誓い、竹刀を振るった。先程までとは違い、明らかに加減のなされていない一撃。防具無しでそれを貰

えは怪我、それもただでは済まないものをするの間違い無しのものにも、難無く法師は食いついて見せた。

自身の入れた一撃の衝撃が、手まで跳ね返ってきた。思わぬ感覚に、千冬は顔をしかめた。

法師は千冬の本気の一撃をもるともせずになし、半分以上を逸らしてあわやくば自分も一太刀入れようとす。予想もつかない動きはどこかトリッキーで、目にかかったことのない新鮮な動きだ。それを目に入れながら、次の行動をまつた。いつの間にか、攻勢から受け身に回っていた。

再びの蹴り。その動きは先ほど見たために、今度は慌てない。千冬は身体を半身にすることで避けて上から竹刀を叩き下ろす。法師の動きに合わせる形で一撃を加えたのだ。

避けようがないように思えたそれも、簡単に避けられた。いや、まるでそれを始めから知っていて、待っていたかのように身体を弾けさせて、法師は胴を風ぐような一降りをお見舞いした。

点ではなく、線による攻撃、それも縦ではなく横の広範囲の一撃。流石にこの動きには、千冬も肝が冷えた。身を躍らせるように避けて、一度大きく距離をとるために後退した。追撃をかけられないように注意を払っていたが、予想に反して法師は追撃をかけては来なかった。

第四十四話（後書き）

お疲れ様でした。

何かありましたら、作者まで。

第四十五話（前書き）

前回に引き続いて短い^^；

予約投稿二日目。……いつまでストックが持つのやら^^；

誤字修正のほづを、よろしくお願いいたします！

第四十五話

驚きの連続だ。素直に千冬はそう評した。

何処で覚えたのかは定かではないが、彼の剣は明らかに実践向きで洗練されているものだ。相手の筋力が自分よりもはるかに優れていることを十分考慮して、力が入らないが機動性では圧倒的な優位性を持つすり足を捨てて、禁じ手といわれるべた足であえて苦手花図の力勝負に持ち込む。一見するととんでもない悪手。べた足だともともと地面にすべて足がくっついているために踏み込んでの一撃がしにくく、また移動もままならない。そのあと圧倒的な機動性を犠牲にする代わりに、通常では考えられない粘りを発揮することも出来るのだ。それをしつつ、相手がかかってきた瞬間に動き出す。そうして機動力のなさをごまかしているのだ。

よく考えられている。そして普通の機動ではない変則的なそれは実戦ではどんなに威力を発揮するだろうかと想像と、意識せずとも千冬の唇は釣り上がった。

面白いじゃないか。

始めは渋々だった。全く以って相手になるとは考えていなかった。構えから見て失望するほど、試合になるとは考えてもいなかった。だがその傲慢な考えも今や完全になりを潜めている。

絶対的な強者と認めただからだ。手加減も油断もなく叩き潰す。その決心をした千冬は速かった。自分が先ほど空けた距離を一気に零にして、その勢いが最大に載るように振りかぶるといったことを一切せず、素直に竹刀を突き出す。

「……っ！」

その意味を悟ったのか、法師は竹刀を受けようとはせず身体を躍らせて何とか回避。しかし先程とまでとは違い、体勢が完全崩されているため、反撃に移ることが出来ない。その隙に付け入らない手はない。千冬は腕を振るう。

時に流しながら、時に避けながら何とか食いついてくる。表情は無の一言で片付けられるほど変化なく、目だけは一挙一動も逃すまいと透き通った瞳からは隙を窺うように探っていた。

完全に千冬ペースだと思われていた均衡はしかし、突如崩れた。いや、法師によってまたもや崩された。

「……なっ！ 本当に何処までも面白い男だな、お前は！」

動きを見切ったのか、はたまたモーションを完全に盗んだのか、千冬が攻撃を仕掛けるインターバルに付け込むように、法師の竹刀が滑り込む。隙を突く予想もしない一撃に驚愕しながらも、身を引いて冷静に回避。身体すれすれを竹刀は通過していったのだが、それでも法師は諦めていなかった。

竹刀を下げたそのままの体勢で突っ込んで来たのだ。これにはさすがに目を見開かずにはいられなかった。先程から慎重な構えを崩さなかった法師が、何と自爆覚悟で突っ込んで来たのだから。

何をしているのか、意図を掴むことができなかった。そこで表情を窺いつつ、一つの仮定を打ち立てた。

流石に長時間の戦闘に堪えられるほど、回復している訳ではないんじゃないか？ というものだ。

可能性としては十分考えられる。何せ法師は半年間、何もせずにただ眠っていたのだ。それで多少鍛えなおしたからといって、そこまですごくほど鍛えられているわけではない。あまり持久力に期待できないという可能性は、残念ながら高そうだ。

事態を悟った千冬は、少ない体力を考慮して攻撃をしているであろう法師のそれを存分に利用し、決着をつけることを心に決める。

焦ってはいけない。あくまでも焦っているのは法師のほうだ。自分から不利な形勢に持ち込む意味はない。

額から噴き出した汗を一連の動作の中で拭い、不安材料を払拭する。時には目に入った汗の一滴で、勝負が決まるなんてことも十分にある。

油断なく、心構えをして。

上段からの切り合いをいなし、千冬は法師の下半身を対象に薙ぎ払った。

この攻防で見せなかった技だ。どう対処するのか見てみたいという希望も有るし、法師の体力を削る狙いもあった。

しかし、千冬は覚えておくべきだった。普通ならこの戦法はまず間違いなく効いただろう。そう相手が普通で有るならば、だ。

法師は足に力を入れて、高く跳躍。千冬の薙ぎ払いの範囲を外し空中に身を投げ、自身は空中から投げ出した勢いを利用してもう一度切り下げを実行した。

高い身体の柔軟性と一瞬の隙さえも逃さない高い判断能力、何よりもそれを繰り返して技術ものにするという努力が生み出した結果が、そこにはあった。

第四十五話（後書き）

お疲れ様でした。

何かありましたら、作者まで。

第四十六話（前書き）

予約投稿二日目。

……そろそろ帰宅していないとストックが…… ^^ ;
誤字修正のほうをまた、よろしくお願いいたします ^^ ;

第四十六話

この予想外過ぎる反撃を受けた千冬は迷った。かわすべきか、それともいなすべきかを。さんざん迷ったあげく、いなす方向を固めて切り払いを中断、切り下げに腕を合わせた。

竹刀と竹刀がぶつかったその瞬間、法師はその小さい身体を最大限に生かし身をよじり、千冬の小手に狙い済ました蹴りを放った。

どう考えても通常の剣道の動きではない。あまりにトリッキーで予想もつかないその動きに少しめまいを覚えながら、千冬は冷静に身体をぶつけに行った。

衝撃とともに、法師の身体が飛んだ。

「……………は？」

千冬は呆れたように、口を開いた。

吹き飛ばされたのだ、呆気なく。まるで何かに跳ね飛ばされるがごとくの勢いだった。そんな速度で、千冬の目の前から離脱したのだ。効いたのか、との考えをと千冬は否定して考え直す。その勢いは千冬にお一撃だけではないような気がした。そんな生易しい攻撃はもちろんないが、どのように考えても飛距離が出過ぎなのだ。まるで攻撃が失敗するのを悟って、余計な反撃をもらわないように蹴りから受け身へと転換して、さらに衝撃に加えて自分から吹き飛ぶことでさらなる追撃から身を守ったのではないか。

考えれば考えるほどその考えが正しい気がして、千冬の心は勝手に踊った。期待していなかった法師が、何処までも楽しませてくれる。久しく感じていなかった高揚感を全身に感じつつ、さらに千冬は笑みを深くする。いったいどこまでできるのだろうか、と。

心を躍らせている千冬の目も前で、両手が挙げられた。心なしかひらひらと動いているような気がした。

手の動きを面倒な様子で中断して、法師が呻いた。

「……いや、降参だ。意外すぎる話だが、今の衝撃を逃がしたのが致命傷となつたらしい。自分の身体であるはずなのに、うまく動かん。これ以上は無理だな」

地に伏せたまま、法師がため息を射出した。

終わってしまった。せつかく楽しめると思った矢先に、終了である。完全燃焼とはいかず、当然欲求不満はたまる。やっと自分の動きについてこれる人間が見つかったのだ。そしてこれから本番、ということであろうなつたのだから、千冬がこうなってしまうのも仕方がないことだった。

少しだけ物足りなさを感じた千冬はふ、と違和感を感じた。なにか大切なことを忘れていたような気がする。

そもそもなぜこのようなことを始めたのだったのだろうか？

顎に手を当てながら、解答を導き出す。確か剣道指南をするつもり、だったはずだ。”鈍っている”とあくまでもいう法師の指南役。それは法師に全く身体を動かしておらず、尚且つ剣道をやっていた記憶さえ存在しない可能性があるので、直接教えるつもりで引き受けた、はずだった。

それがどうだ。蓋を開けて見れば予想外にもほどが有る以上に法師が動いたのを良いことに、あまつさえ病み上がりの人間に手加減さえもせずに切り掛かっていたのだ。

どうしてこうなった？ 千冬は天を仰いだ。

そんな自己嫌悪の最中に、法師が地面を手をついて這って移動した。

「……本当に情けない話だが、どうやら限界らしい。…立ち上がらせてもらえないか？ 少し動いただけでこのざまだ。まったく、この体はどれだけポンコツなんだとぼやきたくもなる。脆弱以外に言葉が見つからない」

「……ああ！」

我に帰った千冬は手を引つ張って法師を立ち上がらせる。

特に力を入れたというわけでも兄というのに、法師の身体は随分と簡単に持ち上げることができてしまった。

よくよく考えてみれば、法師はまだ小学三年にもなっていない子供なのだ。それを長年で会えなかった好敵手を見つけたと喜び、手加減のかけらさえ見せずに本気で切り掛かる高校二年。人としているいと駄目過ぎる。千冬は俯いた。

千冬が手を放すと、法師は体をぐらつかせた。しばらくゆらゆらと揺れていたのだが、それもできなくなったのか、大きく傾き始めた。慌てて千冬は身体をもぐりこませて法師の体を支える。

「……負けだな。完敗だ。身体が動かない」

「……すまん。つい熱くなり過ぎた」

その言葉に、法師は特に気にしていないと手を振った。その後、なにかを思案するように顎に手をあてた。しわを寄せて何かを必死に考えている。

その様子が、何故か気になった。

第四十六話（後書き）

お疲れ様でした。

何かありましたら、作者まで。

第四十七話（前書き）

短い！ 知ってます。まだ旅行中なのです。

予約投稿四日目。そろそろ帰ってないとまずい。ストックが切れた

（笑）

誤字修正の方、申し訳ないですけどよろしくお願いいたします！

第四十七話

渋い表情を維持したまま、渋々といった形で法師が口を開いた。

「……いや、何。束がやかましくなりそうだなと思ったただけ。いろいろ考えてみたものの、どう考えても憤慨するな、と。また面倒なことになりそうだ……」

「……」

千冬はまたも天を仰ぎたくなつた。

すっかり忘れていたのだ。悪友と親友の中間のような関係であるところある女のことを。いや、正確には忘れていたかっただけかもしれない。

篠ノ之束。人詠んで希代の大天才。もしくは大天災。自由奔放で、癪癢を起こしては周りに大災害を及ぼす様子は大きく迷惑な子供そのものである。なまじ頭が良い分だけ対応しにくいといういらぬおまけが付いて危険物異常に扱うのが面倒な彼女は、とんでもない身内鼻肩だ。

以前の法師が今の法師になつた時に様々な方法で殺害しようとしたことからわかるように、（これは千冬が後になって法師に聞かされたこと。審議を問い詰めるために四時間ほど精神的苦痛を生じる行為を束に強要した）彼女は身内に対して異常というほかないほどの執着を見せる。その身内ということのも血縁は関係なく、ただ単に束が興味を持った人間のことである。以前の法師しかり、夏織しかり千冬も。実際の血縁であるはずの両親に対しては何とか知っている程度であるから、訳が分からない。

ともかく、束がとても大切にしていた三つの宝のうちの一つが奪われたのだ。そしてその逆鱗に触れたはずの今の法師は、どんなマジ

ツクを使用したのか、身内にカテゴライズされている。

いや、その表現では生温いかもしれない。あれのカテゴライズは千冬や夏織に対して認識している身内と同一ではない。さらに上の特別扱いだ。

いわく、「将来と言わずに今からお嬢さん！ 実の弟で年下、近親婚！ 想像だけで東さんは濡れちゃうよ」「らしい。勿論そのあとで全力で切り捨てたが、あれは反省などしないだろう。頭が痛い。もう一度言おう、どうしてこうなった？ と声を大にして宣言しなくなった。友人のあんまりといえばあんまりな性質に、千冬はずきずきと痛みだす頭を抱え、呻いた。

そして特別扱いの法師を傷付けたと知れば、一体どうなることや。少なくとも大噴火どころではない騒ぎになる。一体何をしようとするのか、それなりに時間を共にした千冬には全く以って想像が付かなかった。

「爆発か、爆発か、爆発のどれかだな。少なくとも俺が思いつくのはこれだけだ」

「……………選択権のない一択という理不尽な選択しか存在しないのか……………いや、先に束の息の根を止めればあるいは……………」

「とりあえず、少し落ち着け。……………もし万が一、篠ノ之束を殺害するならば、証拠一切を残すなよ？ 後処理が面倒だぞ？」

「……………ふふふ。そうだな。……………まずどうすればいいか……………」

「……………とりあえず、火をつけてしまったのか？」

目を見開くという珍しい光景をさらしている法師の言葉によろやく我に返り、千冬はため息をついた。

猛獣を抑えるためのいい手が。まったくといっていいほど思いつかなかったのだ。

このままでは千冬は目の前に置かれる供物（生肉）となってしまう。どうしてもそれは回避しなければならぬ。だが残念なことに、そ

れは暴れ始めると誰にも止められないとんでもなく危険な猛獣だった。

すがりつくような格好で、千冬は法師を見た。

「なあ、何かいい案がないか？」

「ないな。ガス抜きが完了するまで逃げ続けるしか」

わかり切った答えに、千冬は落胆した。法師ならばあるいは……という考えが一瞬脳裏をかすめたのだ。

しかし、千冬が自分で撒いた種だ。責任は自身で取らなければならぬ。

悲壮な覚悟を決めようとしたときに、法師が隣で救いの言葉をつぶやいた。

「まあ、事故ということにしておこう。悪意があったわけではないし、な。それにあれが暴れるとなると……世界が崩壊しかねん」

顔をしかめながら淡々と告げる法師の言葉に、千冬は礼も忘れて苦笑いをするしかなかった。

ただし、その言葉には続きが存在した。

「それにもしもそうなってみる。夏織の身に災害が降った瞬間、お前が化けて出てくるだろう。俺はそんな面倒事はお断りだな。其れならば、多少の手間は惜しまんよ」

その言葉に、ようやく千冬は笑顔を以ってして礼を言うことができた。

第四十七話（後書き）

お疲れ様でした。

何かありましたら、作者まで。

幕ちゃんの幕ちゃんによる幕ちゃんのための物語9（前書き）

久々の番外編。次の話が黒くなり過ぎたため、これを投下。

……昨今の終戦のムードに、出せるものではございませんでした…

… ^ ^ ; ,

篝ちゃんの篝ちゃんによる篝ちゃんのための物語9

「……ほへっ？」

非常に情けない声で、織斑夏織が疑問の声を漏らした。自身の周りから出たあまりに情けない声に呆然としていたが、残念ながらそんな場合ではなかった。今非常に聞き捨てならない台詞が混入していたのを、篠ノ之篝は聞き逃さなかった。

「もうすぐ修学旅行ですね！　そこで今回は静岡のほうにお邪魔したいと思います！」

ここまでは何も問題はない。新任教師である担任がいやに顔面に笑みを貼付けていることは今はどうだっていい。そのあとの台詞が問題だったのだ。教師の表情を確認している所ではない。

担任が一枚の白い大きな紙を黒板に張り出した。そこには三つや四つ箇条書のような点が打つてある。非常に嫌な予感に襲われた。

「そこで、今回は修学旅行の宿泊班を決めたいと思います！　授業を取りやめて。みんな、そっちのほうがいいでしょう？」

よくはない。とてもよくない。この担任が受け持つ公民の授業はただでさえ遅れ気味で進度的にテスト範囲までをカバーできないと他の教師から苦言が寄せられるものなのだ。であるのにもかかわらず、こんなところで時間の浪費をしていては終わる予定のものも終わらなくなる。最悪まったく授業に出てきてないことをテストに問われる可能性すらある。

それを危惧して篝が正論を放つ前に、歓声が至る所で沸き上がった。

面倒な授業がなくなり一年で一番とっていいほど楽しみなビッグイベント、修学旅行についての話し合いに代わるのだ。やる気の無い人間などは特に喜ぶだろうということを考慮すれば、こうなるのは想定内の範囲内だった。

やられたと思っても遅い。授業については諦めて、一番の改善すべきポイントまで発言を控えてただ耳を澄ませる。問題なのはここだけではないのだ。

「……班は男女混合も許可。勿論同性だけでもよし、異性に囲まれるハーレム・逆ハーレム状態でもよし。さあ、三人か四人のペアを作るの！ 早くしないと仲のいい人となれない！ さあさっさと決めろんだ！」

「……ちよつと待つてください！」

明らかにおかしい単語が複数混じっていた。教師が発している具合を越えた単語が飛び交っていたがそれらは無視して簿は担任に詰め寄る。細かいところは無視しなければならぬほど、状況は切迫していた。

「……なんだ篠ノ之妹？ 体調でも悪いのか？」

「……違います！ だからナプキンを堂々とこの場で出し始めないでください！ 問題行動です！ 一部の男子が色めき立っているので一刻も早くその授業となんらかかわりがないものを守ってください！」

そうではなく、普通に考えたらおかしいとっているんです！ なんで異性同士も可なんですか？ 本当に教師として失格の発言ですよ！」

「……固いなあ、篠ノ之妹。普通に私の初体験は中学が」

「それとこれとは関係がないでしょう！ もしものことがあったらどうするんですか！ あなたは責任取れるんですか！ そして何よ

りもあなた自身の告白をこの場でしないでください！」

そこまで箒が畳み掛けると、ようやく担任教師はバツの悪そうな顔をした。

「……まあ細かいところは気にするなよ、折角の修学旅行なんだぜ？ 少しくらいはっちゃけても」

表所で取り繕っているだけで、中身は何の進歩も反省もしていなかった。箒はこめかみがひくつくのを自覚しながら、教師に詰め寄った。

なんとしてもこの発言は撤回させなければならぬからだ。

「それが問題だといっているのが何故分からないんですか！ あなた馬鹿なんじゃないんですか！」

ここまで言い切った箒は一度冷静さを取り戻すために深呼吸を一拍。担任の目を真つすぐ目線で貫いた。

視線に力を点らせて、ただ一点の身をにらみつける。

「……私は反対です。何も起こらないで済む保証がありません。代替案を要求します」

理論が通っている。まずおかしい部分がない頭で高速でシュミレーションし、出た通りの完璧な対応だ。そしてその視線を以ってして、担任の説得に取り掛かる。

「……。やだ」

だが箒の願いも虚しく、結局のところ 意見を返ることはなかった。まるで駄々をこねる子供の用に、顔をしかめて見せた。

「だって面倒じゃん。そんなこといちいちするの。無駄だとは思わない？ そのためだけに新しい紙を用意しなきゃいけないんだから。資源の無駄。環境問題に必死で取り組まなきゃいけないでしょ？ なんだってこんな時代なんだからさ」

いい台詞だった。前半ですべて帳消しにする最悪の台詞さえなければ。そして何よりも阿呆な発言をしていなければ。

結局、無駄だった。理屈が通る人間ならまだしも、どうやらそういう人間とは対極的な人物らしい。こういう人間に説得など不可能。頭に再生されるウサギの耳を振り払い、箒はため息をついた。

箒が言い負かされた（権力に屈さざるをえなかった）のをいいことに、男子達が餓えた獣のように色めき立った。至る所で息を荒くしたり、何故かは知らないが股間を押さえているものさえいた。その行為の意味するものはわからなかったが、危険であると悟らせるのには十分だった。

夏織は絶対に護らなければならない。餓えた獣達から護るため。そして哀れな犠牲者を増やさないために。

大事なのは部屋割だ。これに失敗すれば下手をすると冗談抜きに失われるかも知れない。いや、夏織に手を出した瞬間に処刑は確定するだろう。妹思いが度を通り越している千冬の前では法律など紙屑にも等しい。

本当に困ったことになってしまった。同室のものを同性で選べば万事解決、とは行かないのだ。通常の美少女ならばただその優れたようしを羨まれ、またそれを嫉まれるのだろうが、夏織に関してだけはいえばそれは絶対にありえない。完璧という字を形にしたかの如くの容姿を前にしては些細な嫉妬心さえも寄せ付けない。羨むことさえ出来ず、ほとんど抗う術のないまま心を奪われる。本当に一種

の兵器だ。

そんな夏織だからこそ同性といえでもあてにならないのだ。ミイラ取りがミイラになるなんて状況になってしまるのが簡単に予想できってしまう。それでもこの発言を撤回することも出来ない。完全な八方塞がり、なんて安易な言葉が該当するかもしれない、と心中で小さく笑った。八方塞がり、究極のピンチだからこそ颯爽と救援なんていうものは現れるのだ。

そう、このように。

「……状況が逼迫しているようだ。手を貸したほうがいいか？」

幕ちゃんの幕ちゃんによる幕ちゃんのための物語9（後書き）

お疲れ様でした。

何かありましたら、作者まで。

幕ちゃんの幕ちゃんによる幕ちゃんのための物語10 (前書き)

番外編がまさかの二ケタ。

……なのに(よくわからない)説明会とはこれいかに……

篝ちゃんの篝ちゃんによる篝ちゃんのための物語10

文字通り本当に法師は掌を篝の方へと差し出している。その手を取ろうかどうか、篝は迷った。

心臓が口から飛び出してしまいそうな、そんな感覚があったのだ。もし握った時に顔が紅潮したら？ もし感情の乱れで手汗を異常に掻いたら？ 心拍数が上がって見破られたら？ そうすれば、もう戻れないところまで来てしまう。

この思いは、決して表に出してはいけないのだ。

近親相姦。近代では道徳上の問題が生じるだけで、直接的に禁止されているわけではない。日本の民法では直系の血族と、傍系の血族で三親等以内の人との結婚が禁止されているのだが、近親相姦自体に罰則は設けられていない。

ただし、それはその行為が認められるということと同義というわけではない。

篝は遊園地での一件の後、頭から離れない事項を解決する手段とするために、とあるレポートをまとめていた本を兄の部屋から発掘した。もはや上の建物よりも発達している地下室には、篝・法師の姉である束の研究室や大量に本を読む法師のための超巨大な書庫などがある。そこから何冊か、本を失礼したのだ。

それを簡単にまとめると、以下のようなことらしい。兄弟姉妹の近親姦は、両親あるいは片親の欠如など家庭内における両親の機能が存在していないことが、重要なファクターとして機能している可能性がある。

ただし、世間の目というものは大変に厳しい。周囲の対応として、近親相姦者を忌み嫌う姿勢があるというのはよく考えてみれば普通

なことだろう。異質を嫌い、没個性を良しとする日本人の風潮ならばなおさらである。海外でも、カール・グスタフ・ユングの話として次のようなものがある。

兄に15歳の時に犯され世間から爪弾きにされていた妹を治療したことがあるが、話をさせるだけでも何週間もかかり銃を医者に向けたりなどした後、結局は落ち着き退院したのだが、その際に「あなたが私を見すていたら、私はあなたを撃ち殺していたでしょう」と持っていた銃をユングに手渡して語ったという。

被害者であっても、向けられる視線の冷たさというものはぞっとするものがある。犯罪を犯したものと変わらぬ視線を向けられることさえもあるのだ。こうなってしまうても、仕方がないものはある。

「……」

混乱した頭を振って、一度大きく肺の中の空気を排出する。酸欠状態になって身体がふらついた。その代わりに、頭が急速に冷却された。

今は刑法とか、民法とか、近親相姦が などといている場合ではない。

それを思い出した筈はほどなくして、法師の手をしっかりと握り返した。

今は何よりも夏織の身の危機である。自分の身の舞わることでの五の言っていていられる状況ではない。

覚悟を決めて、筈はまっすぐに眼前の敵を見返した。

それに、ピンチは何時だつて好機の裏返しでもある。それを常々剣の道を指南してもらっているときに聞かされたのだ。目の前の人物に。

諦めるということは、死ぬことと同義だ。そんなものは人間ではない、もがけ、好機をどぶに捨てる真似をするな。

醜くても、どんなに絶望的な状況にも抗って見せる。諦めるな、足掻けば足掻くほど、状況というものは様々な顔を見せる。その中の一つくらいは、自分に都合のいいものが転がっているものだ。それを手繰り寄せろ。

法師はそういつて、徹底的に箒をたたきのめした。一応加減はしてあるものの、毎度のように動けなくなるまで扱っていたのだ。そしていつも最後の言葉はこうだった。

残念だったな、ここで普通なら終わりだ。練習故のリトライがここには存在するのだがな。

この教えが、実に役に立っている。以前にも何度もこの言葉によって救われて来たのだから。

この鍛練のおかげで、箒はどんな逆境も諦める事なく立ち向かい、とうとう同年代の世界で一番の剣の使い手であると認識されたのだ。その言葉を発した本人は、酷く単調な表情で箒に語った。

「……おそらく担任の狙いはまず間違いなく織斑夏織だろう。同年代でないのに加えて人柄もよく知らないせいで今まで夏織の魅力に充てられなかったたのであるう。具合から見ると嫉妬や羨望にも似た眼差しを感じるが……さて、実態はどうであろうな。とにかく、しばらくは警戒しておいたほうがいいかも知れん。何かをやらすか可能性を否定できんからな。……暴発しないことを祈っているが、物事というのは思い描いた通りに行かないことが多々ある」

法師の言っていることはもつともだ。

人の頭の中身は、どんな人間であっても覗き見ることはできない。

その立場に立つてみて想像することはできるかもしれないが、それだけだ。理論を用いた思考法で考えたとしても、相手と同じものを考えているという保証はない。

それが通用するのならば、よくニュースで流れてくる理解不能は事件など起こるはずもない。

結局のところ、問題はまったく解決していない。恋心を抱いている兄の前で冷静ではいられることが唯一の収穫だった。

「それでは兄さん、どうするのでしょうか？ 姉さん達にも言うておいたほうが……」

その提案をしたところで、法師の眉がわずかに寄った。眉間に二本指を当てて、何かを考えているようだった。

口を開いた時には、いつもの無表情に戻っていた。

幕ちゃんの幕ちゃんによる幕ちゃんのための物語10 (後書き)

お疲れ様でした。

何かありましたら、作者まで。

幕ちゃんの幕ちゃんによる幕ちゃんのための物語11(前書き)

いつの間にか文字数十五万突破。よくもこんなに書いたものだ(笑)

篝ちゃんの篝ちゃんによる篝ちゃんのための物語 1 1

微かに考えるそぶりを見せてから、法師は断言した。

「……いや、やめておいた方がいいだろうな」

「なぜですか？ 私にはわかりかねますが」

法師の口ぶりに、篝は即座に反論した。取れるべき手段は取っておく。それが法師の基本的な行動理論だ。それに反することを言っている今の法師に、篝は反論せざるを得なかった。

本当のことを言つと、篝は何も兄と対立したいわけではない。

できることならば永久に共にあり、いつまでも見守っていてほしいと思つている。

法師の言葉はそれほどまでに抗い互い魔力を帯びている。言っていることは常に正確で、少しの隙も見せないほどに洗練されている。

揚げ足を取ろうとすれば罨にはまる形となり、それに抗うことなく従えば、確約された未来が待っている。

そんなものに、反感などおベル物などいないだろう。それを信じているものならばとくに。篝の親友である夏織はその典型例である。絶対服従。言葉は悪いが、法師の手下みたくに思えるときさえある。鋭い眼光に負けじと、篝も睨みかえず。鍛錬時のように本気の殺気が込められていなかった分、目をそらさずに済んだ。

「あくまでも先程の発言は仮定でしかない。万が一ということもあるし、残念ながら裏付けというものが存在しないからな。あまり大きく動くと、面倒な事になりかねん。俺達が篠ノ之の家に連ねている事も、また夏織が世界で一番のISの乗り手である人間の唯一の妹であることも、忘れるべきではないな。いや、世界一の妹思いの姉か……？ いずれにしろ、派手に動くところくなことにならん」

その言葉に少しの間をおいて、箒は反論した。理論に隙があるのに、そこをつかない人間などいない。

「……残念ですが、私にはわかりませんが、兄さんの言いたい事が。結局どうするのでしょうか？ まさか打つ手が無いから何も無い、わずかな可能性が残っているから動くことができないなどという気ですか？ わずかに不確定分子に踊らされるほど、兄さんの行動というものはぶれるのですか？」

「……。いやに噛みつくな、箒？」

「……っ！」

見透かされていた。感情をともしない、透明で透き通っている瞳は、自身の目に映るもののわずかな変化さえ、見逃しはしない。あれこれと考え、結局いい考えが浮かばないまま、箒は俯いて言い訳めいたことを言うのが精いっぱいだった。

「……すいません。でも、まさか兄さんに限って全く手を打たない何て言うことは考えられなかったもので……」

私の感情さえも、見透かされてしまっているのか？

その考えに至った時に、身体の芯が凍った。心臓を中心に否定するように血流を送り出し、否定を試みるが、悪寒は止まらない。ばれているはずがない。わかるはずがない。わかっただけほしくない。

だんだんと弱まる己の自信。鋭すぎる兄を持つが故の恐怖。閉じ込めていなければならぬ思いだから。知られてはならぬ思いだからこそ、箒はそれが発覚するのを恐れる。

悪寒に襲われ、震えそうになる身体を頭の中で一喝して、箒は正面

を向いた。

法師の瞳は、揺らがない。ただまっすぐに篝の姿を映していた。

「ないな。とりあえず、打てるべき手はさっさと打つ。その上でなにかあった時のために水面下で俺が動く。こんなところだろう。本来ならば、動いてもいいところだが、保険はかけてある。様子見だな」

淡泊な口調の法師に、さすがに違和感を覚えた。

確かに、先ほどから夏織の身に危険が迫っているはず。其れなものもかわらず、まったくもって焦りとか不安といったものが感じられない。一つ一つの動作を見逃すことがないように注視している篝の目から見てもそうなのだから、これに関してはおそらく正しいと予想できる。

ではなぜそんなに余裕を保っているのか？法師の言葉通り、夏織の身に何か起こった瞬間に、鬼がやってくる。それにかかわったものの全員の命は保証しきれない。そんな危機的状況を認識していて、その余裕なのだ。

何かとんでもない手を打っているのか。はたまた。気が付けば、自然と篝の口は動いていた。

「いったい、何をしようというのですか？……申し訳ないですけど、残念ながら今回はとても賛成出来そうもありません。その口びりから見るに、今回の件で兄さんにもしもの事があつたらと思うと……」

「……そんなに、信用がないのか？」

篝の言葉から、感情を見透かした法師の発言が飛んできた。

篝自身、今の自分が不安定であることを知っている。それを法師に確信させる言葉を言って強い待ったことに、ようやくながらに気が

付いた。

ようは、話しかけられたその時から、変化があったことに気が付いていたのだ。

自身の兄ながら、箒は驚愕を隠せない。他人の感情をまったくもって読むことのできない血のつながっている姉の束と足して二で割ってようやく平均値が取れるほど鋭いことを、箒自身見誤っていたのだ。

何とかしなければ、致命傷になってしまう。傷は最小限にとどめなければならぬ。一ミリにも満たない程度のかすり傷でさえ細菌が混入し拡大し体に悪影響を及ぼす。何らかの原因で傷口が拡大することもあるかもしれない。広がった傷に流出していく血液、そしてそれに対抗できるほどの免疫力の象徴である白血球の流出に加えてそれである。これだけの原因がそろえば、それはすなわち致命傷となりえるのだ。

それは最悪の場合の仮想でしかない。ただし現実というものは最善に尽くしていくれるのか、はたまた気まぐれで最悪に突き落すのかは気分次第という困った代物である。

そして、その時の現実はどこまでも残酷だった。

「そんな事はっ！　しかしっ！」
「……………」

取り繕うとしたところで、すつと法師の手が伸びてきた。その伸びてきた手は迷うことなく箒の額に狙いを定めて、覆いかぶさってきた。運悪く言い訳を考えるので必死に名ていた箒は法師に対する心構えを解いてしまっていた。

そんな中での突然の事態である。それに対する免疫を持っていない箒の頬は、意思とは関係なく勝手に染まった。

血の気が引く場面であるはずなのに、顔の熱は一向に収まらない。思い通りにならない身体に、箒は泣きたくなった。

「……これは、違ふんです……。これは……」
「……」

沈黙が続く。

取り繕ったように、宣告がなされた。

**尊ちゃん
の尊ちゃん
による尊ちゃん
のための物語
11 (後書き)**

お疲れ様でした。

何かありましたら、作者まで。

幕ちゃんの幕ちゃんによる幕ちゃんのための物語12（前書き）

……す、スランプだ。話進まねえ^^；

……話が進まない大半の原因は、悪乗りかスランプですのでご容赦を^^；

……クオリティ？ 私に対する言葉ではありませんよ（笑）

箒ちゃんのお箒ちゃんによる箒ちゃんのための物語 1 2

「……感情の乱れは、俺の目ではごまかせんよ。そんなことは、分かっていただろう、箒？ それとも俺はそこまでコケにされていたのか？」

そういわれてしまったら、箒は言葉を呑むしかなかった。

見破られたのだ。よりにもよって、絶対に発覚してはならない相手に。よりもよって、兄であり思い人でもある法師に。

ぱたりと、雫が床に落下した。

紅潮していた顔はいつの間にかに冷えており、代わりに背中冷たい雫が大量に存在していた。その一滴が落ちるのが、はっきりと感じられた。

そんな余裕のない箒を見る目は相変わらず、まっすぐ向いたままだ。何かを見透かすように、そして眼球に映すようにそれは絶えず向けられている。

その時間が、とても長く感じる。時間が止まってしまったような感覚さえする。

早く終われと何度箒が祈ったところで、その願いが届くことはない。何も言わずに閉じられていた法師の唇に、わずかな隙間が形成された。

蛇が身体を張ってきたような感覚さえ感じられた。

「……お前は」

法師の目が、その口が、態度が、箒に現実を突き付けようとする。その続きの言葉が、どうか自分の感情を表すのもではありませんよ

うに。どこか無駄だと思いつつも、箒はそう天に祈るしかなかった。その祈りが届いたのか、法師の追及はそこでやんだ。

「……いや。気のせい、ということにしておこう。いま大事な問題でもないしな」

そしてその言葉とともに、法師の手が箒の額から離れていった。すっかり頭の中から抜けていたが、今は夏織の危機的状況のさなかであった。そして同時に、一応授業中でもある。自分のことで精一杯で周りのことを気にする余裕もなかったことを恥じた。

何をやっているんだ、私は。そんな場合でもないだろう！

自身に喝を入れて、箒は自身の感情を一度リセットした。恋煩いで親友w助けられませんでした、では話にならない。

気分を刷新した箒はまっさらな気持ちで法師に向き合った。法師は、特に何かを言うわけではなかった。

……法師の手が離れていったときに飛来した寂寥には、目をそむけた。

「……話を戻すか。確か世の中に絶対ということはない。矛盾であるが、これだけが絶対な事だ。俺がしくじる可能性というのは、確かにお前が言うように零じゃない」

揺らがないはずの法師の言葉に、やはり揺らぎが覗けた。いつも通りではないその言葉だが、箒は先ほどとは違いぐつと言葉を飲み込んだ。

何か考えがあるはずなのだ。それなしに言うはずもないことは分かってもおかしくないはずだった。

おかしいのは、何も法師だけではなかった。箒自身の問題でもあっ

ただ。

「確かに、そうですね……。兄さんだって、人間ですよね」

「その口ぶりから察するに、お前は俺を人間以外の何かに仕立て上げたいらしいな」

そんなことはありません、と言おうとして、やめた。確かに、箒の中でそういった考えがあったのは否定できない。

兄には、何にも負けない強い人でいてほしかった。

兄には、何にもぶれない強い人でいてほしかった。

兄には、何にも曲げない強い人でいてほしかった。

結局箒が求めていたものは、最強、強固、無機質さであった。そんなものを兼ね備えているのは、人間ではない。

どんなに強い人間でも、隙を突かれればあっけない敗北する。遠距

離から放たれたミサイルには手の打ちようがない。

そんなものを、箒は兄に臨んでいたのだ

それに気が付いて、箒は愕然とした。

そんなもの、普通じゃない。と。そしてそれを無意識に求める己自身も、また。

「残念な事にこれが今打つことが出来る最善の手だ。というよりも下手に何かをするべきではない」

「……」

箒は言葉を返すことはできない。自身の間違った願望に気が付いてしまったから。

人間であってほしくないということを望むなんて。それは一種のヒ

「ローを神格化する子供特有の行為にも思えるが、事實は違う。人間としての性質を認めないということ。それはその人に存在の否定でもある。」

それを思い人である法師に求めているということを確認したのだ。何も言えなくなったところで、何もおかしなことはない。それに何を感じ取ったのか、法師は唇の口角を上げた。

「……悩み事か？ どういったものかは予測するしかないのだが、おおよそ顔色から見るに、俺のことか？ まさか任下として未定な方とかくだらないことを言い始めるのではないだろうな？」

「……っ！」

見事にいい当ててきた法師に、頭よりも身体が先に反応した。びくと震え唇をわずかにかみしめた筈を、法師が見逃すなんてことはなかった。

目がわずかに細まった。瞳は相変わらず筈で固定。

「……。当たりか。……というか、俺の一体どこに人間性を見出すのだ？」

そして、法師はとんでもないことを言い放った。

その言葉を聞いた瞬間、筈の目が縦に開いた。

自分の耳がおかしくなってしまうたのかと、それが脳みそが故障したのかではないかと本気で疑った。それほどまでに、信じられない言葉だった。

尊ちゃんの尊ちゃんによる尊ちゃんのための物語12(後書き)

お疲れ様でした。

何かありましたら、作者まで。

幕ちゃんの幕ちゃんによる幕ちゃんのための物語13(前書き)

話が、進まないんだ……。
スランプ、なんです……。

箒ちゃんの箒ちゃんによる箒ちゃんのための物語13

「ずいぶんと思議そうな顔をしているな。そんなに面白いことを言ったつもりはないのだが？」

平然とした顔でとんでもないことを言う法師について今考慮している暇がなかった。

「いったいどこに人間性を見出す？ それではまるで、自らに人間性を否定しているのではないか。」

混乱続く箒を放置して、状況は進展していった。法師が強引に進めたともしう。

「これについてはどうでもいいだろう。お前もつすつす理解していたようだしな。」

「……さて、脱線ばかりで忘れていると思うが、夏織だったな。身の安全の確保、についての話だったか？ 随分と時間を空けすぎていて忘れそうだったが」

この兄に関しては、それはあるまいということとは箒自身よく理解している。一部のことに關してはとんでもなく興味を示す束よりと同等の記憶力を有している、ということをまざまざと見せつけられたことがある。専門用語の羅列が飛んでいたという状況は、二度と経験したくない思い出だ。

そして次々と話を脱線させたのは箒自身である。法師に責任はまったくもってない。

「……いえ、こちらこそ話を無駄に脱線させて申し訳ありませんでした。以後、気を付けます」

箒としてベストは対応の仕方だったのだが、目の前の人物に対してはそうではないらしい。心なしか、一度眉が動いたように見えた。

「気にしていない、というよりも何度もいったが謝罪はいらん。本当に学習してない奴だな。時間の無駄だといっただろう」

確かに、いつも聞いている言葉だった。

篠ノ之法師に謝罪は通用しない。そんなことで気分を害するわけではない、というのが彼の言い分だ。

だが、箒はいつもそのたびに思うのだ。

「……そんな事はありません！ こういうものは気持ちというものが大事なのです。そこを兄さんは理解してないんです」

その言葉にうんざりしたように、顔の前で二度手を振った。ため息を射出して、腕を交差させた。

「……そういう説法は姉にでもしてやれ。喜んで拝聴するだろうよ」

そして言った言葉は、箒にとって許容しかねる言葉だった。兄が悪いということではなく、その言葉があまりにもあれだったのだ。言葉にできないところは理解してくれ……、と箒は嘆きたくなった。

「……。兄さんも知っているでしょう。聞こえているだけですよ、あれは……。全然私の話を聞いてくれませんよ。……最後は結局抱き着かれてごまかされますし……。あれこそ、時間の無駄というものですよ」

今度は箒がうんざりする番になったが、法師の対応は冷たかった。ただ無感動に同意の意を示しただけだった。

「……そういうことだ。時間の無駄だろう?」

こうまで言われてしまったては、同意をする以外に手立てはなかった。

「……確かに、そう認めざるを得ないかも知れません……」

呻くようにして同意した筈に、ふと法師が言った。

「……いつの頃からか、面倒な口調になったものだよな、お前も」

これに関しては筈にだって言い分はある。

そもそもこんな口調になってしまった根本的な原因は、目の前の人物のせいなのだ。それをぼやくようにいられるのは心外というものだ。作業をする原因を作った人間に何をしている? といわれれば誰だって不快な思いをするだろう。……筈の場合、不快、というほどの強い感情ではないが。

「誰のせいですか、誰の……」

言葉に込められた意味をすっかりとくみ取ったのか、法師は苦笑交じりに言葉を空気に乗せた。

「……ふう。別に俺はそういう喋り方をしろと強制している訳ではないぞ? 勝手にお前が真似をしたのだろう? 違ったか?」

確かにそのとおりである。法師の口調の独特さにあこがれて、一生懸命鏡に向かって練習したという涙ぐましい経緯があるのだ。

……それを束に見つかって死ぬほどからかわれたのはできれば思い出したいはなかった。悪夢を筈は振り払った。

「……。確かにそうです。それは私が勝手にやったことでしょう。ですが、もう一度よく考えてみてください。小さい頃というのは身近な相手を参考しながら成長していくものですよ？ 一番身近にいてくれた兄さんの仕草を真似てしまうのも、仕方ないことだとは思いませんか？」

「……。言うようになったな、お前も。本当に面倒な奴になったな。そういえば最近『箒ちゃんがぐれちゃったよう！』といって束が嘆いていたぞ？」

その言葉に、箒は顔に熱がこもるのを感じた。ただし、法師に対する感情とはまた違ったものだ。

「あんなものの話を出さないください！ 今は関係ないでしょう！」

意外と大きな声が出てしまったのか、夏織のほうを向いていたと思われる視線が一瞬箒のほうへと向いた。

一斉に視線を向けられた箒は、ごまかすために本気で男子の一団をにらみつけた。その男子の一団は身体を震わせて視線を逸らした。

「……。ふむ。哀れなことだな、箒に目を付けたばかりに……」

「あの、哀愁を漂わせないでくれますか？ 別に直接害した、とかいうわけではありませんので」

「物騒になったな、本当に」

感慨深く意味のないことをつぶやく法師相手にしていた箒は、またもや本題がそれていたことに気が付いた。

逸れていったものを自分で軌道修正。本題を強引に押し戻す。

「そんな事はどうでもいいんです！　今はこの状況を打破することが先決です！」

「俺の危険云々ということはいいいのか？」

「いいわけがありませんけど、とりあえず一回保留です！　話をそらそうとしないでください！　夏織がピンチです！　そっちの方が大事なのです！」

そう、問題は何も解決していないのだ。夏織のみの危機はいまだに払拭されていないものだ。しかも時間を消費してしまっている。状況はよくなっているどころか、悪化していたのだ。

尊ちゃんの尊ちゃんによる尊ちゃんのための物語13（後書き）

お疲れ様でした。

何かありましたら、作者まで。

幕ちゃんの幕ちゃんによる幕ちゃんのための物語14(前書き)

やっと、進展が見えた……。

そしてようやく奴が登場。前に一回見たと思われた方、別人です(笑)

あれは短編だったんだ!

篝ちゃんの篝ちゃんによる篝ちゃんのための物語 14

「囲まれているな」

篝の顔を眺めたまま、法師は淡々と告げた。それに対して何とも思っていないらしい。さすがの篝でも、くらくらした。危機感がないというか、あまりに淡白すぎるというか。もう何かあれだった。

「なんでそんなに冷静なんですか！」

自然、口調は強いものになる。それに自己嫌悪など催したりしない。悪く言えば八方美人な親友とは違うのだ。

すべての人にやさしくなど、どこか頭の回線が焼き切れているとか思えない。冗談ならともかくとして、あれは本気でそう言っているのだ。

理想ならあきらめ切れる。それがかなわない夢だと理解しているなら笑い飛ばせる。でも、夏織の場合はそうではないのだ。どんな凶悪犯罪者に対しても、それは変わらない。平等、不公平。そんな言葉が当てはまる。

そしてそんな人間を管理できないところで放置していたら、大変なことになってしまうのは想像にたやすい。だからこそ今まで共に行動してきたのだし、目を離さずに監督してきたのだが……。

「どうしてだと思っ？」

その考えがないのか、暢気な調子でそのまま返してきた。

「聞いているのは私です！ 質問を質問で返さないでください！」

「興奮しているな。だから落ち着いたらどうだ、と何度か言っていたと思うが？」

淡泊という言葉がこれ以上に合う仕草を見せた。めらめらとわきあがってくる怒りを抑えつけて、箒は静かに語りかけた。押さえつけたと思い込んでいた怒りは、指先が震えたことで抑えられていないことが証明された。

「兄さんが冷静過ぎるんです！ ……ふう。いいですか、よく聞いてください。このままでは、千冬さんがとても大切にしている夏織に取り替えしの付かないような傷が付きそうな状況なんですよ！これが一体どんな惨状を生み出すことになるのか……。想像できませんよ、私？ 兄さんは、状況をきちんと理解出来てます？ 早く、一刻も早く夏織を助けてあげてください！ 教室が血の海で染まらないうちに」

言い終えたところで、三度大きく息を吐き出した。力がこもらないようにと細心の注意を払っていたはずであったのにこの始末。箒は天を仰ぎたくなった。

変わっていないな、私も。

熱しやすい、という言葉では片づけられない。何かあればすぐに発熱を開始し、冷静さを失う。いつも口酸っぱく言われているものにもかかわらず、理解せずに何度も何度も繰り返す。成長していない。

変わらなければならぬのだ。人間である以上、停滞など許されないのだ。頭に使う刻み込み、法師に向き直った。

「だから落ち着けとっているだろう？ 血管が切れるぞ？ ……」

と、ようやく落ち着いたか。ふう、まったく、変わらないな。お前は昔から。いつも言っていると思うがな。

後冷静なのは、状況が十分に予想出来た範囲内の事で、尚且つ対策もとっているからに決まっているだろう？ まさかそんなことを分らずに騒いでいたのか？」

淡泊な表情から一転、口角を上げて作った笑みを見せた法師に、疑問の声を投げかける以外に筈の選択肢はなかった。

「…………え？」

そしてその間抜けの声の外側から、ひどく能天気で妙に腹立たしい響きの声だった。

「連れて来てやったぞ。人使いが荒過ぎるだろう、お前！ だいたいなんであんな状況で俺に犠牲を強いるんだ。おかしいと思わないか？ なあおかしいと思いませんか？」

その声に対して、法師の調子はやはり淡泊。一本調子で簡単に突っぱねて見せた。

「思うと思っっているのか？ 随分とお前の頭の中の俺は平和で阿呆な性格をしているらしいな。使えるものはどんどん酷使用する。当然だとは思わないか？ なあ、便利で使いやすい道具？」

それとお前の勘違いを訂正する意味でいっておくが、俺は一切「やれ」と言った覚えはないぞ？ やると千冬・夏織からの印象も、そして何よりも夏織との触れ合いをする時間も増えるかもしれないな、といったただだぞ。勝手に捏造するのは、感心しないなあ、弾丸？」

意地悪く背中の声に答えて見せた。顔も見ずに。

「バババババカ ツ！信じられねえ！ 言わねえっていう約束
だったろ！ なんてこんな注目が集まっている時にわざわざ言っ
たりするんだよ！ おかしいだろお前！ それと俺は弾丸じゃねえ！」

そしてその口ぶりで箒に確信させるには十分だった。妙に聞き覚え
があると思っていたらクラスメートだった。捨て台詞のようなもの
を吐く人間、弾丸と呼ばれる扱いやすい人間。わからない方がおか
しかった。

兄にならない箒も顔を向けなくてその人物に言葉をかけることにした。
特に意味はない。

「……つまりなんだ、お前はまんまと乗せられたのか、兄さんに……
。なんと哀れな。同情してやるう、弾丸……」

するとその人物は箒の予想通りに、まんまと乗せられていた。もの
すごく単純な奴だった。

「なんでそんなにお前が偉そうなんだよ！ ってか仕方ないからや
ってやるうとかいう感じを出すな！ そして哀れむんじゃねえ！
哀れることなんて一つもねえ！ 分かったか！ 乗せられもいねえ
からな、勘違いをするんじゃあないぞ、篠ノ之妹！」

抗議、をしているらしい。残念ながら姿を見ていないので耳で判断
するしかないのだが。

篠ノ之妹、というのは確かに正しい。基本的に教師に対しての呼ば
れ方はこうであるから、何の疑問も持たない。持たないのだが、そ
の物体に言われるのはなぜか許せない。

そこでようやく、箒はその人物に向き合うことに決めた。

高速で禁止されているにもかかわらずバンダナを装着した、燃える

よ
う
な
頭
が
視
界
に
広
が
っ
た
。

幕ちゃんの幕ちゃんによる幕ちゃんのための物語14(後書き)

お疲れ様でした。

何かありましたら、作者まで。

幕ちゃんの幕ちゃんによる幕ちゃんのための物語15(前書き)

……またすすんでない

そして短い……、ホント、助けてください！

すみません、感想返しは後でします。少々お待ちを

篝ちゃんの篝ちゃんによる篝ちゃんのための物語 15

「……私は篠ノ之箒だといつも言っているだろう。お前の脳みそにはシワがないのか、五反田弾丸？」

やれやれ、とため息交じりに、ついでに天秤のように左右にぶらす動きを加えて軽くおちよくる。冗談交じりのたわいのないものなはずなのだが、どうやらそれさえも見逃せないらしい。ずいぶんと器の小さい人間だな、と此処でもう一度ため息。

その様子を確認したのか、髪を逆立て五反田弾は反論した。

「誰が弾丸だ！ 弾だ弾！ 何時も言っているのは何もお前だけじゃねえ篠ノ之妹！ あと聞こえているんだからな！ 俺の器は小さくない！ 海のように広いんだ！」

「……何か新手のギャグなのか？ にしては随分とひねりがなく、面白みに欠ける粗末な出来だが……」

そこに速攻で法師がケチをつけた。別に拾わなくともいいところでは、と箒は思っていたのだが、法師の考えは違うらしかった。

こういう人間というのはいじられているうちが花で、対応が無視に変わると途端に慌て、調子を狂わすのだ。嫌よ嫌よも……と口にかけて、やめた。脳内におぞましい単語がよぎったためだ。汚らわしすぎるために、即刻メモリーから排除を敢行。

「……ネタ切れでは？ さすがに早々思いつくものとも思いませんし、何せ弾丸ですよ……？」

「そう、だったな」

たがいに耳を近づけあい、内緒話をするかのように音量を下げた話

し合う。結論が出てところで、解散。再び弾へと向き直る。怪訝そうな顔つきのそれに、投げかける言葉はとつくに決まっていた。

「悪かったな、弾丸……。お前にそんな高尚なものを求めて。浅はかだった、反省している」

「……話の前後が意味不明すぎて俺の理解の幅を超えていいるんだが……。一ついいか？　なんでそんなにお前らに追われんだ視線を向けられなくちゃならん！　おかしいだろ！　そして同じタイミンで示し合わせたように同じこと言っつてんじゃねえ！　本当に兄妹そっくりだな！　お前らの家族はみんなそうなのかよ！」

ほんの冗談の掛け合いの中の言葉だ。そう、それは理解している。それでも、決して言っつてはならない言葉が混入しているのは、筭が見逃せはしなかった。

冷静でいると、何度も言いくるめられていたが、本当に今回ばかりは守れそうもない。絶対に強雨擁してはいけないものが、そこにはあった。

お前ら家族はみんなそうなのかよ？

この言葉だけは、この言葉だけは、何を譲ったとしても、言わせてはならないのだ。

血液の色が青色の人間を、人間とは呼ばない。血も涙もない人間は、人間と定義すべきではない。

人である前に、自らの子供としての養育の義務を放棄して、あまつさえも命を付け狙った人間と、一緒にされては困るのだ。

あの無邪気そうな顔を見るたびに、血液が沸騰して襲い掛かりそうになる。

あの偽善者ぶつた声を聴くたびに、あいつを殺せ殺せと頭によぎってくる。
あの人を装った態度を見るたびに、手がガタガタと勝手に震えだしてくる。

あれだけは絶対に、許容できるものではないのだ。たとえ箒という人格が壊れようとも、その考えだけは刻み込まれているだろうと自信を持って言える。

私は、あれだけは、私の両親と名乗る物体だけは許さない。

状況は、箒だけを特別扱いはしない。参加しないものは、容赦なく置き去りにしていく。

「……………。一つと前置きしておきながら三つも言うとは……………。弾丸、お前は俺の理解していたお前よりも進化していたのだな」

「……………あの、いいつすか？　なんでごく自然と俺を罵倒するニユアンスが混入しているんですか？」

「お前が阿呆だから以外に理由があるのか？」

「ちょ！　ちよつと待て！　それはいろいろとおかしいぞ！　いったん落ち着け！　深呼吸だ！　吸って、吸って、吸って！」

そんなやり取りも、箒の耳に入るのが精いっぱい。

きつく拳を握りしめていないと、今にでも殴りかかってしまいそうだった。

今すぐ叩きのめしたい。冷静でいなければいけない。相反する思いが箒の中で暴れあつ。

「……………五反田」

結局箒の喉を通過して出たのは、どすの利いた声だった。自身ではつきりとわかるくらいには、箒は頭が冷えてはいた。

しかし、一度走り出したものは止まらない。盆に返らぬ水のごとく。

「……なんだよ？」

「……そのへんで止めておけ。わざわざ眠っている獅子をたたき起こすのが本望」

なのか？」

そして決定的な言葉を排出しようとしたところで邪魔が入った。やはりまたしても、兄だった。

尊ちゃんの尊ちゃんによる尊ちゃんのための物語15（後書き）

お疲れ様でした。

何かありましたら、作者まで。

篝ちゃんの篝ちゃんによる篝ちゃんのための物語16(前書き)

……終戦の日で次から本編と行きたいところですが終わらない……。
……というよりも、進行しないことの方が問題ですね…… ^^ ;

篝ちゃんの篝ちゃんによる篝ちゃんのための物語 16

その絶妙な割り込みに、弾はまったく訳が分からないといった感じで顔を崩した。

「……はあ？ お前何言ってるんだ？ 頭おかしいのか？」

失礼極まりない言葉。気の短い人間なら激昂してもおかしくない心のない言葉だが、法師の気はとんでもなく長かった。全く気にしたそぶりは見せない。無感動な調子で言葉を作り出す。

「……鈍いのな。空気を読むということが全く出来ていない。野原に放り出されてもしたら生き残れないぞ？ よくて餓死、最悪は拷問死か。哀れだな」

「だから、さつきからいうけどなんで仮定がそんなに訳の分からない設定なんだよ！ もうちょっとマシなものがあるのだから！ 絶対にありえない状況での場合を考えるなよこの妄想野郎！ そしててめえに哀れまれるいわれはねえ！」

唾を飛ばしながら捲くり上げる弾に掴まれながらも言葉・調子とも決して乱さない。メトロノーム同様、ただ一定間隔に音をたたき出す。

「……まさに状況がそれだが？ まさか、状況判断さえもできないのか？」

「……はあ？ お前、本当に大丈夫か？」

こちらに目は向いていなくともわかっているのだろう。篝が何とか自制しているのを。現に頭こそ弾のほうを向いているが、だらりと

下げられた手は横滑りを繰り返している

落ち着けということだろう。さらに夏織に対しても何か指示を出しているあたり、何事も簡単にこなす法師らしい。使えるものは何でも使う、これがそう言ったスタイルだ。

「……言語力がないのな。その辺でもう少しまともな語彙くらいは出てくるものだぞ？」

この言葉に、弾の口がぼかんとだらしなく開いた。見ているものは阿呆
という印象しか与えないそれを見てみると、怒りを持続しているのも馬鹿馬鹿しく思えた。

声にならない音を口から漏らしていた様子だったのが、突然何かに取りつかれたかのように目が坐った。そのまま罵声を打ち放った。

「……喧嘩売っているのかそうか分かった少し表に出やがれ鉄仮面？ ああ？」

全く理解した様子がない弾に、流石の法師も呆れるしか道は残されていなかった。

何度放射したかわからない肺からの空気をもう一度排出した。

「……はあ。だから、空気を読めとっているんだ。その猥小な脳みそにも叩き込めるように考慮して言葉にしているつもりなのだが、まさかこれでもわからないか？ そうすると……言語が通用していない可能性を考慮しなければならぬが……。……そうか。それではいくら言葉にしてもどうしようもないのに納得は出来るな。手の施しようがない、打つ手なしだな」

「何勝手に納得してんだよ！ 俺に反論の余地も残しておけよ！
なんで頭がくそ悪い人間から人間以外の生き物に格下げされるんだ

よ！ しかも散々罵倒されてからだし！ 本当はお前俺のことが嫌いだろう！ なあどうなんだよ！ そうなんだろう！ どうせそうだっていうんだろう！」

首根っこを掴んで何度も法師をゆするその様子に、鎮静しかけた炎に再び油がくべられようとしていた。

炎のもとに水をかけて鎮火するように、地震に言い聞かせてそれを黙認した。一々こんな言葉に踊らされるようでは、法師の境地にはたどり着けるはずもない。

（なおここで言う法師の境地とは感情面ではないのは言うまでもない）

そんな葛藤の中、状況は進行していく。

「……面倒な奴だよな、お前」

もう対応するのも面倒になったのか、投げやりに法師が一言投げた。その態度が気に食わないのか、弾が飽きもせずにかみついた。この様子を見るに、法師の言った『相手にされてこそこのやつ』ということとは適当に見えた。

「反応無し！ ねえ少しくらいさっきの余韻程度のものをしてくれていてもいい

だろ！ 自己完結とかひどすぎるだろう！ 差が激し過ぎるんだよ！」

先ほどからとんでもない音量で弾は話しかけている。つまり、周りの視線を一手に浴びているのだ、夏織連れ出した件も含めて。向けられる視線は、決して好意的なものばかりではない。

それで筈はようやくこの意味のないやり取りに見える意味に気が付いた。

この意味のない弾が一方的にやられる寸劇を見せることで周りのギヤラリーの注目を夏織から弾へと切り替えさせたのだ。そうして一度弾を夏織を連れ去った悪者に仕立て上げる。そうして仕立て上げた弾を糾弾し、ぼろぼろにしたうえで笑いを取る。憎しみの感情を霧散させ、害なく夏織を救い出したのだ。

すっかりとした視点で見なければ、気が付かないその事実に至った筈は深く関心をした。決して他人に気が付かせることなく着々と事を進めるその手腕には舌を巻くほかなかった。

「……煩いぞ、五反田」

だから、筈もその考えに乗っかることにした。決して今までの恨みを晴らすうだとか、この際に叩きのめしてやろうとかいう考えではない。決して。

哀れ狙われた弾に、救いの手は差し伸べられない。

「だから俺は弾丸じゃなくて弾なんだよ！ ってなんでそんなに期限が悪そうなんですか篠ノ之妹様？ ものすごく、ものすごく凶悪そう……。えっと、私めがなにか粗相を犯しましたでしょうか？ 私めにはなんら落ち度はなかったように……ひっ！」

クラスメートが一瞬で顔色を悪くする殺気を纏い、顔を意識的に歪めて声を音程を下げた。

脅し以外の何物でもないそれを受けて、クラスメード同様、弾の顔色が一気に青色のゾーンに突入した。

法師がポツリと漏らした。

「……ほんの冗談のつもりだったんだが、本当に言語が通じているどうかは怪しいな。だから後ろにそれがいるから黙っておけと言っていただろう。耳が付いていなかったとかいいうなよ？」

本当に小さな音量で漏らしたそれにも、敏感に反応した。どうやらかなり追いつめられているらしい。窮鼠猫を噛む、勢いで自分のピンチを脱しようともがいている。びくびくと顔の筋肉が動いているあたり、その必死さが伝わってくる。

「……聞いてねえよ！一言もそんなこと言ってなかったじゃねえか！そして助けてくれ俺このままじゃ殺される！無理無理無理なんだあれ！人間の出す空気じゃねえよ！死ぬわ！ってか殺される！」

「……ほう？誰が、誰を殺すって？」

ドスの利いた声を出すと、面白いように弾は怯えた。身体を震わせている様子を見るだけで気が晴れるような気がした。

尊ちゃんの尊ちゃんによる尊ちゃんのための物語16(後書き)

お疲れ様でした。

何かありましたら、作者まで。

尊ちゃんの尊ちゃんによる尊ちゃんのための物語17(前書き)

……だから話が……。

箒ちゃんの箒ちゃんによる箒ちゃんのための物語17

「そうか？ まあ、いいか。確かに、これ以上放っておけば面倒なことを引き起こし兼ねんな。」

箒、少し落ち着け。どうでもいい一言に感情を乱すなど言っていただろう？ 気が付いていないかもしれないが、あまり怒気を発するのは感心しない」

自分は落ち着いています、とそういおうとしたのだが、どうやら自分が考えているよりも怒りの感情が滲み出しているらしい。自分で自制しているつもりだったのだが、息を大きく吐き出して、肺の中の空気を換気した。

「……ええわかっていきます。しかし、今の五反田の発言は許容し兼ねます」

そして湧き出してきた感情を素直に吐露した。

それがいけなかったのだろうか、次の瞬間、箒は久しく感じていなかった地獄を味わうことになった。

身体から汗が噴き出した。寒いはずもないのに勝手に体が震え始め、歯は上下に小刻みにぶつかり合う。

怖気が走る。視界はぐるぐるとまわりだす。

これを体験するのは久しぶりだった。

「人の話を聞けと言っただろう。落ち着け」

「……っ！」

そう命令されて、ようやく箒は気づいた。命令されている。普段めったにそんなことをしないのにもかかわらず。

周りに害を及ぼすと考えたのか？ そのところは理解の範疇ではないが、とりあえず怒りの感情はどこかに吹き飛んだ。そんな場合ではなくったというのが正解なのだ。

恐るべきなのは、それだけのものを発しておきながら周りに何一つ害を及ぼさないということだ。それが箒との違い。まだまだ修行が足りないな、と気を引き締める必要がありそうだった。

そう納得すると、唐突にそれがやんだ。冷静になったという確認がなされたらしい。

そんなことを確認し合ったのだが、周りの人間にはわからないらしい。弾はまったく訳が分からないといった感じで周りを見渡していた。

「……えっ、えっ？ 一体何があったの？ なんで篠ノ之妹はそんなに汗をかいているんだ？」

「お前が気にするべき問題じゃない。突っ込んでくるな」

一太刀の元で切り捨て、箒は周りの状況の確認をした。

「……」

さりげなくいるのが夏織。割り込むタイミングを逸しているのか、周りの多少気にしているそぶりがあるのが何とも言えない。そしてその夏織を周りから守る形で法師が警戒網を張っている。見えない防護壁に囲まれて、周囲に配置されている男たちはそれを超えることができないでいる。……さりげなくを装って周りの警戒しているふりをしている弾が道化のようになってるのが哀愁を漂わせている。

うようよと漂って張った警戒網から外れようとする夏織を、法師は窘めた。

「あまりうるうるするなよ？ 夏織。五反田に軽く説明してやれ。そうすれば理解できるだろう」

「……うん、ありがとう。ゴメンね、迷惑かけちゃって。ううん、違うね、助けてくれてありがとう、ほっくん」

やり取りがおかしい。おかしいが、何とか理解はできる。

とりあえず、夏織は今のやり取りを全く見ていなかったことが判明した。なかったことにした、という感じではなかった。聞いていなかったという感じであることは、反応を見て一目瞭然だ。

それに対して全く文句も言わず、法師は帆息の方向へと向き直った。

「箒。確か部屋は四人だったよな？」

「……ええ。私の耳が正常に働いておらず、尚且つ視力もおかしくなっていないければ、ですけれど。できれば間違いであってほしいと今でもそう望んでいます」

そうなのだ。目先の問題はとりあえず解決したが、まだ根本的なところで改善はなされていない。今のままでは同室のものがどんな不審者になるのか分かったものではない。

箒の願望交じりの言葉を受けた法師は頷いた。

「……そうか、ではほぼ間違いはないな。俺の耳もそうとらえたかならな。」

さて、ここまで来れば俺の言いたいことも理解出来よう。とんでもなく脱線したかな、やれやれ」

法師の言いたいことは分かった。わかったのだが、どうしてもそれを納得することができない。

「申し訳ありません。しかしこれだけは言わせてください。兄さん

の案には賛成出来ません」

「……？ どうしてだ？ なんら問題あるまいて」

問題がないわけがない。いや、筭や法師にではない。もちろん夏織でもない。その他の要因が問題なのだ。

「……夏織の身に何かがあるか分からないじゃないですか！ 五反田が信用に足るとはとも思えません！ あの夏織の手を引いていた時の緩み切った顔を見ましたか？ そこら辺にいる発情した猿と一緒にではないですか！ 違いますか！」

そう。それは同室を弾も含めた構成だ。信用ができない相手をはらんだそれは、やはり納得のいくものではない。だが法師はそうではないらしい。

「……ギクツ」

そして心当たりがあるのか、古典的な驚き方をした弾を放置して、法師が答えた。

「そうだな。確かに、下心は持っているのだろうよ。だがあいつの容姿に劣情を持たない男が一体何人いると思う？ 同性愛者くらいだろう、あれに欲望を抱かないのは」

その口ぶりから見ると、自分のことは例外な存在ということをお忘れしているかのような口ぶりだった。

「……兄さん、貴方もその一人に入っていることを忘れないください……。言いたいことはすごく、すごく理解出来ますが」

篝ちゃんの篝ちゃんによる篝ちゃんのための物語17（後書き）

お疲れ様でした。

何かありましたら、作者まで。

幕ちゃんの幕ちゃんによる幕ちゃんのための物語18(前書き)

とんでもなくのほほんとしているこの空間。

そして終わらない日常編……。もつとつしよつもない^^；

箒ちゃんの箒ちゃんによる箒ちゃんのための物語 18

「…………ガツクリ…………」

凶星だったのか、それとも無視されたことが答えたのか、弾がだれにもみとられることなく沈んだ。

誰にもみとられることなく沈んだ弾を横目においておく。別にかまってやる必要性を感じなかった。それは法師も同じらしい。弾にまつたく目もくれなかった。

「まあ、五反田が信用ならんということは考慮のうちにしつかり入っている。こいつの性癖ぐらい頭に入っている。だがそれでも奴でなければならん。絶対に、だ。それはどうしてだと思っ？」

その芯がこもった口に、箒は答えられない。それに該当する理由がどうしても思い浮かばないからだ。

「…………。わかりません」

「…………しつかり考えればわかると思うが。さっきのやり取りからわかるように、あれは多少手荒に扱ったところで耐久性があるからびくともしないんだよ。つまり信用ならないのなら逃げ出せないように縛って外にでも放り出しておけばいいということだ。部屋の方で椅子に括り付けたままでもいいかもしれないな。そんなこと、普通の人間には出来ないだろう？ 耐久力が保障されている、弾丸にしかさせることができない芸当だ」

その考えはなかった。信用できない中身はともかくとして、その体の保証があったというのを忘れていた。

これならば、いいのかもしれない。箒はそんな考えに方針転換した。

自由を奪っておけば万が一という可能性も減る。逃げ出そうと暴れだせば簿か法師、どちらかは必ず気づくだろうということとは明白だ。それに強固に括り付けてほどけないようにしておけばなお安心だ。

「……。確かに、それは盲点でした……」

「つておい！ 何納得しているんだよ！ 明らかにおかしいだろ！ いろいろと考慮しなくちゃいけないものがありますよ！ 俺の人権とか人権とか人権とか！ そんなことされたら死ぬわ！」

横から、何かが聞こえてきた。明らかに何かおかしい単語が混じっていた。あまりに不穏なので振り返ると、そこには弾丸が存在した。

「……弾丸、それは本気で言っているのか……」

唾を飛ばしながら懸命に迫ってくる弾に辟易しながら、何とか言葉を紡ぎだす。口に出すのも億劫なことであつたが、言わずにはいられなかつた。

弾の目元がゆがんだ。眼球が潤い始めた。

「……あの、本当に信じられないものを見るような視線を向けるのは止めてもらえませんかね、篠ノ之簿さん。きちんと呼びますからお願いですから人間扱いをしてください。人外扱いとか、無理です。人間でいたいっす」

そのあまりにも気持ち悪い態度に法師が少し嫌悪感をにじませた。靴を一度大きく踏み鳴らし、目元をひくつかせた。

「そもそもにして、言語を理解出来ないような生物が人間として認められるということを知らないぞ、俺は。その辺、どうなのだ……？」

「……さあ、私も知りませんが……」

「なんでそこで蒸し返すんですか！　ねえ、そんなに俺が憎いですか？」

すがりつくようにして床から這ってくる弾を目に入れないようにして、横を向く。

向いた先に、法師の目があった。そこで同時に頷きあう。何かを分かりあえたような気がした。

「……別に……」

同時に言葉を発した。それが気に食わなかったのか、弾ははいつくばっている状態からいきなり立ち上がった。

「息ピッタリだなお前ら！　もう結婚しちまえよ！」

そしてとんでもない発言を始めた。空気の読まない発言をした弾に、思わず舌打ちが漏れそうになった。

「兄妹で結婚なんて出来る訳がないだろう！　出来たのなら……」

其れだったならばこんな苦労はしていない！　こんなに悩むこともないと声に出しそうになったので慌てて自重。ただ急いで止めたために、願望が漏れそうになった。

注意しようとしたところでこれだ。自分自身のことながら、頭が痛かった。

そして弾のこの発言に反応したのは筭だけではなかった。

「……そうだよ！　そんなことが出来るのは血縁とかの知識につい

て全く詳しくなかった古代だけだよ！」

なぜかはまったくわからないが、今までまったく会話に参加しなかった夏織が食いついた。

そしてその影響か、周りの人間たちがどよめいた。十中八九夏織から発せられた声に反応しているのだろうか。

そしてそのどよめきによって自分が無視されているという事実が浮き彫りになり、それが許せないのか怒りを抑えながらもいらした調子を抑えきれずに担任が割り込んできた。

「…………あの、いま授業中なんだけど…………。先生の話の間ごとか言う気、ない？」

それでも、そんな調子では法師という人間を打ち負かすのは足りない。足りな過ぎる。そもそもにして打ち負けるという姿が想像できない。

そしてその想像通り、淡々と、吐き捨てるように、言葉を投げつけた。

「あると思っているのならば、人間をやめるべきだと思っぞ？　そしてそもそも授業を崩壊させたのは思えではなかったか？」

尊ちゃんの尊ちゃんによる尊ちゃんのための物語18（後書き）

お疲れ様でした。

何かありましたら、作者まで。

幕ちゃんの幕ちゃんによる幕ちゃんのための物語19 (前書き)

……ようやく、区切りがついた。

終戦モードも薄れたし、次からようやく本編かな？

箒ちゃんの箒ちゃんによる箒ちゃんのための物語 19

流石のこれは言い方に問題はあがあるが、しかし同時に箒もその意見に同意だ。こんな状況を生み出したのは担任である。箒は一度止めようとしたのに、それを強行したのだ。こんな事態になるとわかっていたのに。

そもそも中学生に正確なものごとの判断を期待する方が間違っている。そして仕掛け人が言うべきことでもないのも確かである。発言に正統性はあつたとしても、それを破らせたのは本人であるから自業自得というべきだろう。かばう意味もない。箒は簡単に担任を見捨てた。

「……あるように見えたなら……、重傷ですよ？」

「……本当にごめんなさい！ でもほつくん達を止めないと……。本当にすみません！」

そして唯一味方に思われていた夏織にさえこれである。いや、夏織の場合はこれっぽっちも悪意はなく、純粹に法師を止めなければこの流れが払拭されないという思いからのこの発言ではあるが、残念ながら担任はそうは受け取らないだろう。『クラス一番の優等生に裏切られた』そう思うに違いなかった。受け取る人間によって、発言の意味など変わってしまうのである。いくら含蓄のある重たい言葉でも身なりのだらしない人間に言われるとその言葉の重みを喪失してしまうように、受け取る側、発する側の人間の立場の両方で言葉なんてものは様変わりしてしまう。

そしてやっぱりというかなんというか。クラスの人間たちはその発言の耳にも入っていないものが大半だった。携帯電話片手に力内蔵されたカメラで夏織を撮影しようと試みている人間がかなりの数を占めることから想像できよう。後のことを考えると、そんな行為

を千冬が許容するわけもないのだが。

「兄さん？」

「わかっている。いつも通りにすればいいのだろう？」

横を向いて声をかけるだけで、その意は伝わった。

そのまま映像がカメラに残っていたらどんな悪用されるかもわからない。…… 箒は高々中学生がそんな悪用できるはずもないと思っているのだが、千冬に関してはそうは思わないらしい。そんな奴は立派な誅殺対象である。一面のニュースで取り上げられるような事件は起こしてほしくはない。まあ、証拠を残すとも思わないのだが、箒だって少し関わり合いのある人間に死んでほしくないと思うくらいに思いやりはある。そのあたりは、一般人と変わりがない。そんな考察を済ませている間に、立ち上がって人間がいた。

「悪いな先生！ そんな余裕は今ない！ 否！ そんなつまらないことは今どうだっていい！」

三年過ぎる発言をする、五反田弾その人である。上履きを履いたまま机の上に足を乗せ、大きな音を立てて自己アピール。そのどうでもいい行為によって、載せられた机の上に埃が舞った。名前も覚えていないクラスメートであったが、ひどい仕打ちには変わりがない。胸をそらして己の存在を誇っている弾に歩み寄って、跳躍。頭を平手で軽くしばく。

「阿呆。机が汚れているぞ。自分の持ち物でないものをみだりに汚したりするな」

箒としたら至極まっとうなことを言ったつもりだったが、どうやら担任にとってその言葉は自分を無視していると認識するものだ

つたらしい。苛立たしい様子を隠すこともなく足を踏み鳴らした。ハイヒールと床が奏でる甲高い音が響いた。

「……。貴方達、そんなに私のことが嫌いかしら……？」

ぐるぐるとまるで敵を威嚇する忍苦食動物のように吠えている。担任がそれでいいの顔とも思うが、残念ながら学校運営側の意思でこの教師を雇い、担任をさせているのだからそこに関して箒が口を出すべきではない。もっとも担任の能力も、それを見定めている学校運営側の査定能力も疑ってしかるべきだとは思っているのだが。

そしてそんな現状を、
法師がまとめて見せた。

「……ふむ、案外恨まれているのはこのせいだったりしてな」

「……止めてください。冗談に聞こえませんかよ」

本当に冗談に聞こえない発言だった。実感のようなものがこもっているため尚更だった。そしてこういうやり取りが多いということがあるだけに、あながち冗談ともいえない事実でもある。

そして話に絡みたいのか、意味のない言葉を弾が横から登場しながら法師と箒にぶつけた。どうでもいいがやたらと顔が緩んでいるのが分かるためとても腹立たしい。そんなに夏織といられるのがうれしいのか、と思ったところで一つの事実にぶち当たった。

そういえばこの男、何やら怪しい会の会長ではなかったか？ と。

「……え？ 今の冗談だったのか？ 俺にはちっともわからなかったか？」

そして意味のない絡みにも丁寧言葉返すのが法師である。返済能力としてみれば大したものであろう。

「流石、単細胞生物だな」

ただし、見方によっては喧嘩の売り言葉にしか見えないが。

「なんだと、やるのかこらあ！」

そしてそれを曲解し、買言葉として受け取るのが五反田弾の残念な部分である。

この男のいいところといえば耐久力が弥陀に高いところしかないのか？ という残念な事実にぶつかつた。しかもそれも状況によつてはまったくうれしくないものだ。

五反田弾は残念な生き物であるという事実を、再び押し付けられた。

「……学習しない生物だな、お前も」

「……兄さん、その馬鹿を挑発してやらないでください。自分の実力を認識出来ず、無

謀にも兄さんに突っ掛かろうとしている世界でも稀にしか見られない馬鹿なのですから。少しは手加減というものが必要なのです……」

そしてこの筈の発言が気に入らなかつたのか、顔を赤くして弾がどなつた。近くにいと耳をふさぎなくなるほどの結構な音量だつた。遠くにいたクラスメートが顔をしかめるほどだつたのでこの考えは間違つていないはずだ、とどこか客観的に判断している自分がいた。

「……もう目茶苦茶な言われようだな！ ……俺が、この俺が、ここまでこき下ろされるとは……。許すまじ！ 篠ノ之兄妹！ いいだろう、その喧嘩、五反田弾丸自らが買ってやろう！ しっかりと実力を思い知らせてやる！」

あ、それと、馬鹿つている方が馬鹿なんだぞ、この馬鹿篠ノ之妹！

「この馬鹿！」

とんでもなく低レベルで、残念な奴だった。いや元々こんな奴だったか？ と記憶の奥から取り出し作業をする羽目になった。そしてそんな等を、窘める声が配達された。

「……………。だから単純なのだから挑発してやるなよ。余計めんどくさいだろうか」

呆れた調子で、法師がそう締めた。

これに関しては、等はぐうの音も出すことができなかった。事実法師の言葉通りであったのだから。

まだまだ自分も未熟である、というのが今日の等の総括であった。

尊ちゃんの尊ちゃんによる尊ちゃんのための物語19（後書き）

お疲れ様でした。

何かありましたら、作者まで。

第四十八話（前書き）

本編。 会話がなしの地の分オンリーという初めての試み（笑）

……結論、読みにくい。

第四十八話

気配を断つ、なんて言葉はそもそも何故生まれたのか理解できない。俺が暇な時によく読んできた本の中でだけで通用する世界、いわゆるフィクション世界というやつで他用される表現だが、果たしてこれはどんなことを狙ったのだろうか？ まったくもって理解できない。一般人にとっては気配を消せる方が稀である、ということを作作者なりに表現したかったのだろうか？ 疑問はまったく尽きる気配を見せない。

まあ、どうでもいい。今関係ある話ではないので、隅にでも置いておこう。それが適す綱判断だろう。

俺が言いたいのは、結局のところ一流の暗殺者にしる護衛にしる、気配を殺すなんてことは出来て当たり前だということだ。むしろできない方がどうかしている。それでいてできるというのは別に、気配を殺すなんてそんな真似はしないのだ。むしろしている奴に会ってみたいと思う。

何故か？ もう寿司頭を使って考えても見てほしい。もし仮に写真を眺めてみたりする。集中して、という条件を付属して指定してもいいだろう。そしてその写真の中に不自然な空洞があった。この場合、まったく気が付かないなんて状態でいられるだろうか？ 少しでも怪しいと思わないでいられるだろうか？ 多分大多数の間がおかしいと疑い、やがては政界にたどり着くのではないだろうか、と考えている。

気配を殺すということはつまり、その空間を空洞にすると同じことなのだ。写真の例をとった場合と同じ。気配を殺すということは空洞を作り出すことで、簡単に気が付くということは理解できよう。これでいかに気配を殺すことが愚かしいのかは理解してもらえたとと思う。これをしている暗殺者はまず三流以下の実力か、もしくは暗殺者ではないという可能性があるともていい。

では一流の暗殺者が使う技能とはなにか？ 自分を周りに同調させることか？ といえればこれも違う。人間がいかに物体に同調しようとしても、やはり若干のズレが生じる。それはさっきの話と似ていて、今度は空間が消えるのではなく歪むのだ。人間のしている呼吸を始めとした生存活動がこれらを疎外する。これも写真の話と同様、普通に気が付く。鈍感な人間の場合を持ってしたら違う尾かもしれないが、それはあくまで例外だ。関係がない。

一流の人間というものは、そもそも気配をどうこうしようという考えを持った区と違っていいほどもってはいない。そんなことをすればまず相手方の、自分と同じようなプロにはれるからだ。

ではいったいどうすればいいのか？ 何、簡単な話だ。ばれないように任務を遂行するには自分から相手側が意識する空間から自分という存在の意識を外してやればいい。意外にシンプルだが、これがなかなか難しい。

写真の背景になるのではなく、写真の背景に思い込ませる技術。これが暗殺者として必要とされる技能だ。

では何故いきなりこんな話を始めたのか？ 簡単な話、俺の家、プレハブ小屋故に俺の家という名称が本当に正しいのかはわからないが、の近辺にろくに気配を隠そうともしないネズミがうるうると何をしに来たのか舞い込んで来たのだ。こんなことでは近所の人間にも気づかれ通報されるのではないかという考えも首をもたげるのだが、どうもそううまくはいかないらしい。というか通報された時点でどうかしているというのが普通か。

そしてそのネズミどもは一体何を考えているのか、俺のではなく本宅、つまり篠ノ之本家の動向をしきりに疑っている。

気配を隠そうともしない愚か者共、大方俺の姉のしていることに気がついた政府の人間が送り込んだ刺客だろう。なんともまあ舐められたことかと苦笑いしか出来ない。というよりはいたいたいどのようルートでこの事実が漏れだしたかというkとに非常に興味を覚えるのだが、はてはて。まったくしていることがちぐはぐといわざる

を得ない。落第点だと採点を終了。正直に言えば人間に関しては至極どうでもいい。千冬が普通に気が付くだろう。

とっていらればいいのだが、これ以上何か情報を抜き取られるもは正直に言っつてよろしくない、本宅を覗いている時点で論外ということは勿論のこと理解はしているが、不確定要素を抱え込むなんて真似はできればしたくはない。

そうするとおのずと答えは一つにまとめられる。そう、ゴミは掃除するのが一番なのだ。

で、その簿身掃除を行いにあたっての問題が一つ。此処でするにはとんでもなく場所が悪い。家から生活必需品を買い足しに来ている俺の立ち位置は現在、街中のだ真ん中といえる場所だ。当然小売店なのが敷き詰めあっている場所、それに付け加え夕時の時間ということもあつてか買ひ物客で賑わっている。いまここでことを起こせばこの場にいる人間すべてが証人だ。

これがどういふことかは、理解できるだろう。証人と証拠さえなければ、事件なんて埋もれて消える。まあ俺一人が勝手にひっそりと唱えているの持論だ。だが、割と当たっている自信はある。何故か。それは警察というものの組織上の管理体制にある。というのは基本的に奴らは遺留品と目撃者からの聞き込みという作業を通して事件の全貌を推理するというのが仕事だ。つまりは証言と証拠、事件解決のためには早い話どちらもかけては事件が成立しないのだ。者さえなければ仕事にならない可能性というのは非常に高いのだ。これに漬け込まない手はない。

だからこそ、事件を起こす際には必ず目撃者と証拠だけは何かあつても隠さなければならぬ。発覚させてはならないのだ。そこにどんな無理があつたとしてもそれだけは変わらない。そのためならば無関係な一般人が死のうが知つたことじゃない。が、ここでは駄目だ。全部消す前に確実に警察が来る。現行犯となれば推理の使用率はがくと減る。動かぬ証拠が既にあるからだ。奴らがそれをいいことに強気になるのは想像にたやすい。

どうしたものか。そこまで考えた振りをして後ろを一度大きく振り返り、細い路地裏へと身を滑り込ませた。いつもはとんでもなく強い勝手が悪い小さな身体でもこういうときには腹が立つことに役に立つのだ。……いや、別に本当に腹正しいわけではもちろんないのだが……。

今回の目的はなにも見を隠すことではない。其れゆえに姿を消してそのまま逃亡、なんて真似はせずに適当に姿を見せながら目的地へと足を運ぶ。

さて、ここからが本番だ。

第四十八話（後書き）

お疲れ様でした。

何かありましたら、作者まで。

第四十九話？（前書き）

……中途半端、地の分オンリー。もう慣れたよね、皆さん？
……未だに作者は迷走中ですけど（笑）

そして懐かしのマーク登場（笑）

第四十九話？

足音が俺の後からついてきている。というよりも離れていたら作戦失敗なので、今回の場合はつけられているこの状態こそが正解。正解なのだが、なぜか納得がいかない感はある。素人くさい人間にわざととはいえつけられていて、そして気づいていないふりをするのだから。作戦遂行上の不満はある。が、一番確実な手段故に文句は言えない。であるから、そんなプライドは捨てる。邪魔もの以外の何物でもない。

きちんとして来ていることを確認しながら時々後ろを振り返ることも忘れない。設定としては好奇心で路地裏に侵入した子供、ということにしてある。背丈的にこれが最もしっくりくる。

まあ世間を少しでも知っているならば、今の子供は絶対に路地裏へは行かないようにということは徹底されている。テレビという名の人間が映像で映し出される機会でもしきりに警告している。ということは保護者となる人間がその情報を取得し、子供に徹底させるのが目的だろうということが簡単に予測できる。わざわざこの議題に『特集』なる普通とは異なる特殊な記号を付けて時間の酌を長めにとっているのだから、間違いなはずだ。

そして最終的な関門となるいくつかの地点には侵入者を阻害する大きな門と屈強な警備員が配備されていて近づくだけで警告を受ける。実際に試していたのだが問答無用で事前に止められるのだ。そのままでし徹底して隠したい何かがある。そう、それはジャーナリストや一般人に決して知られてはならない何かだ。発覚した瞬間に国家の威信を揺るがしかねない爆弾がその先に眠っている。そういう風に受け取った。

あれは人とはなにかが違う。

そういつたのは果たして誰であつたか、新聞のジャーナリストだったか？ その記事を書いた時から見かけていないということは、おそらく消されたのであろう。国家の威信を揺るがす謀反人として、秘密裏に。

俺の創造しているものとそれというものが合致しているという条件ものと言つならば、だいたいのところ正しい。

都市。それは誰にもが見て取れる繁栄の象徴だ。それが発展していけば行くほど警官は豪華なものとなり、人々にその壮麗さを訴えるだろう。

そして都市というものが発展の象徴である一方で、また別の面をのぞかせるのも事実。その年という生き物が華やかになればなるほど、そこに生活する人間の格差というものは加速度的に広がって行く。

貧富の差がいつそのこと広がりを見せ、豪壮な部屋に金で並べてた異性をはべらしたりする人間が生まれる一方で、家もなく明日食べるものにも見当がつかないといった貧困者まで現れる。

俺はそれが悪いとは思わないし批判をするつもりはまったくもっていない。が、それがあつた日一つの現実を生み出したのは認めなければならぬと思う。

消えた、いや消された記者によれば魔層。そこはそのように呼ばれるらしい。

発展した都市部には仕事が多い。その年の体質上、たくさん役割を担うために仕事が大量に生まれるのだ。それはそれを飯の種にしようとする人間の莫大な増加をもたらす。結果としてそれは浮浪者が大漁に蔓延するということになった。簡単な話、富裕層が放棄したものにあまりたいとか、そんな理由だろうと考えている。

さてそんな彼らであるが、その身なりはお世辞にも綺麗とは言えない。飯の種が確保できたとしても、結局のところ金銭の収入を得ることが難しい。得たとしてもほんのわずかなものだろう。そうする

と、まず体を清潔に保つことが難しい。選択ができずに垢やシミが溜まった服。十分に頭を清潔に保つことができずにシリミが浮いた髪の毛。そこらじゅうに放縦に伸びた体毛。それらを見るだけで人は言うだろう。彼等是不潔である、と。そしてこうも言うのではないだろうか。あんな身なりも整わない彼等は我々とは違う。

そんなことを高額納税者が言いはじめた結果として彼の処遇を話し合いによって決められた。見たくないものは見えなくしてしまえばいい。そういう風潮が広がって、汚いものは闇に葬られた。

都市部には必ずといっていいほど発生するスラム街の完成だ。

勿論、公にはなっていない。なっていれば人権問題で保護団体が騒ぎ始めるのは赤子でも分かるだろう。そもそも平等という観点で見るとこれ以上に不合理なものはないだろう。いくらプログラム規定といわれて憲法でも、見逃されるものではない。

秘密裏に彼等は人の目のある地上を追いやられた。

そんなからの居住区として当てられたのが、じめじめとしたかび臭い空間。太陽の光が一切指さないまっくたで湿っぽい地下こそ、彼等の新しい居住地だ。

魔層というネーミングはおそらくその空間の性質上からきている。地下という空間故に光が差さないというのもあるが、基本的にその空間は日本として認められている空間ではないのだ。むしろ国家が一貫して否定しているため、国とは認められないというのが現状ということから推測できるようにそこはあらゆる法が通用しない場所である。日本でないのだから日本の法律など適応されるわけもない。警察等がたまたま踏み込みに入るため大々的にはなっていないがそこでの殺人なんて日常茶飯事。あまりに手に負えないため外の人間を対象としないことで成り立ちを許されている、そんな場所。とんでもなく説明話が長くなったが、俺はそこに相手を誘い込もうとしているのだ。

故小野作戦が吉と出るのか、それとも凶と出るのかは誰にもわからない。事前に下調べをして発見しておいた抜け道を、後ろからくつついてきている人間以外に人の目がないことを確認しながら慎重に潜り抜け、その空間に到達した。

蔓延する土の匂いに混じったカビのにおい。そして鼻を刺すような人間の生活臭が突き刺さる。何よりも俺の花に鮮明に残ったのが、そこらじゅうにこびりついている血の匂いだ。

一般人の踏み入れることのない場所に、とうとう俺は足を踏み込ませたというわけだ。

するつもりもないが、退路はすでに立たれたといってもいい。

第四十九話？（後書き）

お疲れ様でした。

何かありましたら、作者まで。

第五十話？（前書き）

……誰もISが出したくないわけじゃないんだ……。

……ただ話の関係上まだ出せないだけで。伏線投げたら回収しなければ……。

……そしてまた、進まないのか、短いのか……

第五十話？

視界は先ほどからまったくといっていいほど使い物にならない。明かりというものがどこにも存在していおらず、太陽の光もここまで到達することができないから当然といえば当然なのだが。光がないのだから、目が慣れて突然見え始めるということもない。真正正銘、ここでの視界はゼロだ。

後ろから足音が追いついてきた。迷いないその足取りを見るに、暗視対策用のないかをつけているのだろう。そうでなければ駆け足などというふるまいはできるはずもない。

「……止まれ、ガキ」

ようやく後ろからついて来た黒装束のうちの一人が俺に話し掛けてきた。俺ががんばって演技をしてつけさせていたのにうまく付けることができていたと勘違いをしていたのか、それともちょうどいいと感じたのか。声がわずかにはずんでいた。どちらにしてもその声には喜色ばんだものが隠しきれずに漏れていた。

感情の起伏さえも調節出来ないらしい。本当にプロなのかと疑いたくなる。……いや、もうその時点で答えは出ているのだが。無駄な問いかけだった。

何も見えないのでわざわざ振り返る必要もない。足だけを止めて、後ろにも通るように調節をして背中から通す。……意外とめんどくさい。手間を惜しまずに振り返ればよかったかもしれない。

「……なんだ？ 散策の途中なんだが？ まさかどうでもいいガキの散歩を止めるほど、お前らは暇なのか？」

「……ずいぶんと生意気な口をきく小僧だな。親に口のきき方も教えてもらわなかったのか？」

結局口調にまでにじみ出ている。どうしようもない。もう少し何とかならなかったとも思わないでもいいが、所詮他人事。関係がない見えないが呼吸から大体の人数は計ることができる。踏み鳴らしていた足の数も考慮して、三人か。一人いつの間にかに脱落していたらしい。まったく気が付かなかった。

そしてそんなことにも気が付いていないのか、強気の姿勢は崩れない。俺が何も言わずにただ黙っているというものあるかもしれない。黙っていつれば勝手に調子づく。まさに小物というほかない。

「どうした？ 暗いのが怖いのかお子様？ ここには誰もお前の仲間はいないからな？ 誰もいないんだぞ？」

「そうだぞ？ ……おや、足が震えているぞ？」

ちなみにそんなものは幻想だと断言しておこう。こんなものにビビっているのはあほだけだ。そんなそぶりもしてやる必要もない。

もうこの場所まで来たら、演技などする必要もないのだ。

なぜか。それは俺の周囲が証明している。

「さて、坊やも黙っていることだ」

「どうでもいいが、お前ら何者だ？ 今までの行動から見ても、ただの一般人とは思えないが。一般人が人の家をこそそ覗き見して、交代で人間の出入りを監視するほどのひまはないだろうからな。むしろ千冬が見た目だけはいい束の追っかけかと疑ったこともあったぞ？」

俺の言葉が気に食わなかったのか、舌打ちが聞こえてきた。……根性を隠しきれないといったが、ここまでひどいのか。本当にどうしようもない。

そのいら立ちを俺に対してぶつけてどうするんだ、まったく。

「気に食わねえガキだな。ぶっ殺すぞ！ 調子乗ってんじゃねえ！」
「とんでもない捨て台詞だな。そんなものどぶにでも捨ててきてしまえ」

「なんだとてめえ！」

どうやら口に出していたらしい。口に出していた俺も俺だが、反応も反応だと思う。

まあいい。つまらない、退屈で仕方がなかった三文芝居もここで終わりだ。

視界がゼロ。相手は十分視界が確保することができるものを持っている。

文字にして並べてみると、俺が圧倒的不利に見えてしまうから不思議だ。実際のところ、そうでもないんだがな。

肺の空気を吐き出して、余計な思考を払拭する。いらぬものをいくらため込んでいても仕方がない。

目指すべきは虚無。其れの実現のために、ぎりぎりまで肺の酸素を絞り込む。

準備は、整った。もうするべきことは一つだ。

「おい。この餓鬼急に黙りだしたんだが？」

「ビビってんだろ。放っておけよ」

「ちびるんじゃないか、そのうち？」

外野が何か言っている気がするが、どうでもいい。

目的のために、ただまっすぐに足を踏み出す。

加減も何もない。そもそもする意味もない。出せる力の全力を以ってして、それにあたるだけだ。

「……ん？」

舐めていたその罪は、己の身をもって知ってもらおう。世の中には知らなくてもいい世界がある。それを嫌というほど見せつけてやる。加速を付けた身体には、振りかぶる意味もない。勢いに身を任せ、最小限の動きで腕を前に打ち出す。

地獄を見せてやる。

第五十話？（後書き）

お疲れ様でした。

何かありましたら、作者まで。

第五十一話？（前書き）

……IS、出てきませんね……。
そして今回ちょっとグロめ。閲覧注意ってことで。大したことないけど。

第五十一話？

振りかぶる意味などない。身体の加速を最大限に生かした一撃をただ見舞うのみ。

まったくもって予期していなかった一番近い人間のから空きのみぞおちに一発叩き込む。姿勢が崩れたところを狙って首を腕で確保。しっかりと抱え込んでから腕を回転させる。

ごきり、という非常に縁起の悪い音が密閉されているこの空間に響いた。絶叫など上げる暇さえ与えず、保険として地面にたたきつけてから靴で踏み鳴らす。頭蓋骨が砕け、茶色のゲル状の物体とひどく匂うカーキ色の物体が散乱。空間に鼻の曲がるようなにおいを発生させつつ、俺の脚物からその範囲を徐々に拡大させていく。

頭がつぶれた人間の出来上がり、というわけだ。たわいのない。次なる獲物を求めて、俺は左右の確認を開始する。どちらか簡単な方から仕留めた方が手間が省ける。

まあ、正確に言うとも左右は見えていないが。人間の姿を正確な状態で脳裏に浮かべることぐらいはたやすい。

「……この餓鬼、ただものじゃないな。一瞬だったぞ」

「……ああ。見くびっていたな。だが、それもここまでだ」

プロと名乗る人間の意地なのか、一瞬で見識を改めた。当然だろう。此処でパニックになっているようならさっさと土の中に帰った方が身のためだ。結局返される羽目になるのだからな。

さてその自称プロたちは仲間の死を何とも思わないのか、死体を全く見ずに俺の方だけを確認している。それ自体に驚きはない。ただ、少々手間が増えた。殺す順番を間違えたように思えたならないのだ。とりあえずリーダー格と思われる男からやるべきだったか。

まあいい。どうせいまさら言ったところで現在は代えられない。そ

れに多少の手間が増えた程度、どつってことはない。驕りと思える
だろうが、違つと一応言つておこう。

戦力差から考えて、負ける気がしない。

俺の大体の査定が終わつたのか、男たちはにやにやとしながら見下
している。どうやら結局まぐれ判定だと見たらしい。どうでもいい
けどな。

「さて小僧、お祈りはもう済ませたか？　もしかしたら無事に生き
残れるかもしれないぞ？」

「祈っている時点で終わっている。自分の実力を適切に判断してい
るならば、別段慌てることなどない。その言葉、丸々投げ返してや
ろう。」

さて、辞世の句はきちんと書き残したか？　まあ、最も書いていな
いと言おうが時間はやらんがな。今ここで、葬つてやる。感謝しろ、
どちらか一方だけ、簡単に殺してやる。最高のプレゼントだろう？」

舌なめずりを加えてやると、明らかに気配が変わつた。やはりこの
降雨間でも相手は視界が有効であるらしい。

作戦は決まつた。失敗はしない。

「舐めんなよ小僧おおおおおおおおおおおおお！」

封鎖された空間で爆音を流しながら、こちらに近づいてきた。頭が
ない。それほどの音量で叫べば、誰だつて接近していることに気が
付くだろうに。

鯨波のつもりなのだろうが、脳みそが致命的に足りない。何よりも
この音量は何かと都合が悪い。始末するのはこつちに決定。

残念なことに、この身体は圧倒的な筋力とかさういつた何か突き抜
けているとつた言葉とは無縁である。鍛えてはいるが、いかんせん
成長が悪い。未だに人ひとりをなぐり殺せないくらいの威力しか出

せない。

それについて文句を言っても仕方がない。ないものね狩りは愚の骨頂。ないのならば、ほかで補えばいいのだ。思考停止でねだっている場合ではない。

力がない。そうであるならば、相手のそれをそのまま利用してやればいいだけだ。ないのならば別のところから持つてくればいい。これで解決。

鼻息荒く意気揚々と突っ込んでくる人間との距離を慎重にはかる。身体の動きを予測し、そこからはじき出された予想をもとに動き出す。一度でも別に正確なビジョンさえ描ければ、視覚も聴覚も嗅覚も触覚も味覚もすべてが必要ない。それらがなくとも、来ることぐらい、行動の内容ぐらいは『分かる』

そうして読み取った動き通りに行動する相手の首を軽く掴み、地面にたたきつける。バランスを崩したかのように、ほとんど力を込めずとも勝手に倒れていた。

簡単に倒された男の顔を殴打。何度も何度もしつこく殴り、顔面部にある装置を外す。

何度かしてようやくその物体は外れた。暗視装置、だろうか。そしてそれが外れると、急に慌てだした。やはり視界を確保して何とかしていいらしい。何かを探すように手が徘徊し、宙をさまよっている。無力化が完了とみていいだろう。すでに何かを起こせるという段階ではない。

すると早くも戦力としては現状、目の前の男だけということになる。それでも自信があるのか、男の表情は揺るがなかった。

「さて、残るはお前だけだが？」

「何、お前を倒すからな。死んでいった奴らの分まで働いてやる。俺たちの仕事はこれが本題ではないからな。さっさとけりを付けさせてもらうぞ、小僧」

やはり俺の抹殺が任務ではなかったらしい。ではいったい何なのか。一応聞いてみる必要がある。

のたうちまわって悲鳴を上げている人間を目の前でこぶしを握っている人間。どちらがより多く情報を吐き出すか。慎重にそれを見定めなければならなかった。

俺の場合はあくまでも原因究明。これらの抹消はむしろおまけ事項だからな。春昼だけで零し、放たれた右腕を回避するために身体をひねった。

第五十一話？（後書き）

お疲れ様でした。

何かありましたら、作者まで。

第五十二話？（前書き）

いつもよりもグロ多め。時間がないため感想は明日返信します。

第五十二話？

人を殺すなんてことに抵抗感を覚える訳がない。そんな程度で踏み止まれたのなら、俺は今この場所に存在していない。

倒した男の顔を素手で掴む。抵抗しようとして暴れているのでやや面倒。そんな気さえ起きないように叩きのめす。

これは暗闇の中見えない恐怖を味合わせることには目的がある。何故かよく分からないが、仲間の苦悶の絶叫を延々と聞かされるという状況にたたき落とされるのだ。目が見えていない人間に、これ以上の恐怖体験はそうそうない。

行動指針が決まったのなら、後はそれに合わせて実行するのみ。たたき付けられた原因でへこみ、既に用をなさなくなっていた暗視装置を足で蹴り飛ばす。

「
！」

男の悲鳴を無視して、もう一度顔を掴み上げる。ここで注意しなければいけないのが、決して中枢器官に傷を付けるような真似をしてはならないということだ。

傷つけたが最後、それが致命的ダメージとして生命活動に影響を及ぼすのは容易に想像出来よう。

あくまで痛め付けるといのが目的であるので、これは却下。生かさず殺さずが最適。徐々にいたぶるか。

まず手始めとして、手づかみで眼球をえぐり出す。間違っても奥に指を突っ込んではいならない。この奥には脳がある。殺す場合には此処から指で掻き回せばいいのだが、今回は目的違いであるからだ。

一つえぐり出したところで、既に大絶叫を上げ始めている。これはこれで効果絶大なのだが、少々煩いというのが頂けない。喉を潰したら声も出なくなっって意味をなさなくなるから我慢するしかないの

だが、やはり不快なことには変わりがない。さつさと済ませるとしよう。

ほとんどダメージがないのにも関わらず虫の息と化している男が、床を這いながらこちらにやってきた。ズボンの裾を掴み、なにか必死に訴えたいらしい。煩わしい。

「悪かった、頼む、だから」

助けてくれなんてほざく人間もどきを手加減なく蹴り飛ばす。別に腹立たしいとは思えないが、やはり不快であるの一言で吐き捨てたくなる。そもそもこの場面で助かると見込んでいるその脳みそがまず狂っている。どう考えてももうどうしようもないところまで来ているというというのに。付け加えるならば、この程度の痛みに堪えられないというのが不思議でならない。訓練されていないのかと勘繰りたくもなる。

こいつは情報を抜き出す予定はなかったが、気が変わった。元々情報は多いに越したことはない。というかこの程度のレベルだったのならば始めに死んだ奴も一緒に問い詰めてやればよかったのかもしれない。ある種過大評価している面があった。それは認めなければならぬだろう。

まあ、いい。それは本題とは関係ない。頭には弱点が多いが、その中の典型的な部分を引っつかむ。面積が広く比較的攻撃を加えやすい、頭部に生えた体毛の集団、髪の毛だ。

筋肉ではないこれらは頭と直接繋がっている。鍛えられない部分であるはずなのに面積はとんでもなく広い。血管が近くに比較的多く存在する、典型的な弱点だ。

その髪の毛を情け容赦なく掴み上げ、地面に叩き下ろしながら何度も付加を加えて行く。そうしているうちに硬い物体が何個も床に撒き散らされた。形状からして破損した歯だろう、と推測。

「ぐがつ、ふぐつ、ぐえつ」

悲鳴を撒き散らしながら汚らしい液体を飛ばし、今にも死にそうな様子で叫ぶそれに付加をかける一連の動作を中止して、俺の口まで顔を持ち上げて聞き取りやすいようにする。ダメージは毛根を掴み上げているだけだというのにそれでも悲鳴を上げつつけるこの物体にため息を付かずにはいられない。もっとマシなものを寄越そうとは思わなかったのだろうか。俺達をひそかに付け狙う連中は。本当にとんでもなく舐められていると言わざるを得なかった。

「……聞きたいことは山ほどあるが、一つだけにしてやろう。これが終われば解放してやる、だから嘘偽りなくとつと吐くことだ。余計苦しい目に会うことになるぞ」

というよりも聞きたいことがいくつもある訳じゃない。いや聞いたところで答えられる訳がないと知っているからこそ、聞きたいことは一つなのだ。そもそもこの程度の人間がどこぞの組織の中枢にいたりする訳などないだろう。中枢にいないのならば詳しい中の内情など知りようがない。そんなものを聞いたところで知らないというしかない。時間の無駄だ。

嘘を言わぬように言葉で制しておきながら、相手の動向を探りつつけることを忘れない。騙される訳にはいかないのだ。

「問おう。どこの組織の人間で、なぜ俺の姉、篠ノ之束の家を必要に付け狙い徘徊していたのかを」

「……一つじゃなかったのかよ……」

「そうだな、気が変わった。そして発言権をいつ俺がお前に与えた？ 無駄口を叩けるほど暇があるらしいな」

ポケットと呼ばれている主にズボンに物を収容するための袋に詰め込んでいた物を取り出す。

見ようによってはとんでもない凶器に見えるかもしれない。ただし、

その大きさを考慮してみるとまがまがしさには欠ける節があると言
える。

刃渡りが五、六センチほどの、小さな刃物である。その先に俺の手にジャストフィットするように計算され尽くした柄がある。束、というほうが制作者がわかるだろう。実の姉がいつの間にか護身用と製作し、渡してきた。サイズが計算され尽くしているところを見ると、少し感ぐらざるを得ないのが欠点か、本当にどうでもいいが。そうした経緯で作製され、今現在手元にあるそれを俺は手に纏わせ、振り下ろした。調度鼻の出っ張りに沿うように。そして篠ノ之束特製ナイフは俺の期待を裏切らない活躍を見せてくれた。断面がきつとどこから見てもなだらかになるように、鼻だけを狙って削ぎ落とした。嫌に手に馴染む感覚が、俺の元に去来した。

第五十二話？（後書き）

お疲れ様でした。

何かありましたら、作者まで。

第五十三話？（前書き）

話がちょっとあれなまま継続中。 IS、 ISが……

第五十三話？

「とつと喋って貰おうか。いくら鼻があるうとなかろうと、言語を消失した訳ではあるまい。まさか喋れないなどという御託を並べるつもりはないだろうな？」

目に、いや顔中に赤やら透明やらの液体を大量に塗布したような感じの顔が歪み、二度ほど首が縦に振られた。鼻を削がれてようやく取り替えしが付かないところまで来ているのに気がついたらしい。論外なほどの遅さだが、もうこれに関して何を言っただとしても無駄だろう。そういうものだという解答で不合理な思考を避ける。

「！　！　！」

なにかを必死に伝えようと必死に口を動かしているのではあるが、いかんせん鼻を削いでしまった影響か、詰まったような濁ったような音が聞こえるだけだ。とても声とか言葉という体を成しているとは言えない。

仕方ないので言葉として聞き取ることを諦める。そうであったとしても事情を聞き取れない訳ではない。口の動き、口周りの筋肉の動かし方、目の動き等々推測するのにたやすい条件はいくつもある。そこから読み取りこちらからもう一度聞き、相手を頷かせることが出来ればそれが正しい、いや相手が知り得ていること同一となる。二度手間ではあるが、こうしてしまった故に仕方がない。諦めてとつと片付けるとしよう。

「！　！　！」

「……俺は何も知らない？　それは違うな。ある程度の説明は受けているはずだ。そもそも何故そんな普通の小娘の監視に当たる必要

がある？ 一般人だとすると実におかしな話だとは思わないか？
そしてお前らのことだから言ったのではないか、何故こんなことを
依頼したのか、とかな。おそらくお前らもその根っこの部分までは
知りえまい。そもそもそんな物始めから期待していない。知ってい
ることだけを言っただけで貰おうか。余計なことは喋らなくていい」

脅しをかけたような俺の発言に、ぴくりと身体が震えた。本当にわ
かりやすい。

騙すにしてももう少しマシな演技というものがなかったものか。俺
がこんな発言をするのは至極変な話ではあるが。

何時までたつても話しはじめの気配を見せないその人間の首根っこ
を掴み、もう一度顔の前に持つてくる。痛みと恐怖で顔がぐちゃぐ
ちゃになっていっているような、そんな気配があった。

「貴様が勘違いしているようだから言っておこう。別に発言を得る
のはお前でなくとも構わない。今すぐ死んでしまっても俺としては
なんの痛手にもなり得ない。なんなら今すぐに殺してやろうか？」

その言葉とともにえぐっていない眼球を取り出す。直接繋がってい
る血管を強引に引っ張り引きちぎるその感覚は、やはり特殊な物だ。
他に例えの代用が効かないというのも珍しい。

勘違いしているようだから言っておくが、別にこいつから情報を抜
き取れなくともいつころにこちらとしても構わないのだ。

そもそもの話として敵のほうから情報を抜き取るときに、どうして
拷問をかけてまで頂戴するというのは、その情報をまるで真実と扱
うことが出来るのだろうか。不思議でならない。あいつがとっさに
ついた嘘である可能性はどこまで行っても捨て切れないし、そもそ
もとしてその人間の立場によって味方が組織の物と異なるといった
ことが全く考慮されていない。相手が情報を吐き出したイコールそ
れは真実で今すぐ使うべきだという認識は今すぐ捨てるべきである。

それは情報の新旧も考慮されていない証拠でもないだろうか。捕まえてから、いや単独行動を始めてからの経過時間は相当の物である可能性、そして吐き立たせるまでの時間のロスというものを考えると、相手側の発言というものはせいぜい参考程度になれば儲け物というのが正しい価値ではないのか？

長くなったが、ようは相手からもたらされた情報でも、それは俺を無性に駆り立てる要素になり得ないということだ。突っ込むことならどんな馬鹿にでも出来るのだ。

「！」

潰れた蛙のように、声にならない悲鳴を上げる。断末魔のような音量で叫ぶそれもちまち闇に引き取られて喪失する。

萎縮仕切っている人間に対して収める矛など持ち得ない。ただひたすらにつき、攻める。

「今すぐに殺してもらえと思うなよ？ 出血量や貴様のバイタル等の状態はすべてこちらで計っている。万が一ぽっかり死なないように、一応の加減はしているという訳だ。どうすれば殺さずに生かさずにいられるか、貴様の精神の喪失を代価にかけてみるか？ 地獄を見たくなかったら、さっさと吐き出すことをオススメしておく。次の予約も埋まるほど盛況なのでな、余計なことをしないのならばさっさと済ませる。」

さあ、俺の譲歩は済ませたぞ？」

そんな一方的な押し付けに、やはりその男は拒否する手段を持たない。眼球をえぐり出されて視界は完全に消えている。代わりに占めるのは眼球を失った喪失感とそれに伴う鈍い痛み。相手が一方的に押し付けてくるといふ絶望感だ。俺ならば丁重にお断りしたいものが見事に揃っている。いや、虚言だが。

がたがたと相変わらず身体を震わせながら、なんとかして口を動かした。

名前も知らない男だ。自分のことを政府高官といていた。が、気配からして俺達と同乗者の二オイがした。目的は知らない。篠ノ之束を監視しろといわれただけだ。邪魔するものは消しても構わないとも言っていた。後は知らない。任務の容易さと報酬の高さで決めた仕事だ。他は何も知らない！

どうやら知っていることはこれだけのようだ。その延命措置を求めようにこびるような態度に、虚言が混じっているとは思わない。客観的に見てもメリットはない。正しいという保証はないのに付け加え、それが正しいとも思わないが。間違っではないが、正解では決してない。まあこれだけわかれば、次第点と言ったところか。

「……そうか」

嘘は言っていない！ 言えるものか！ 本当にこれ以上は何も知らないんだ！

俺の肯定をどう受け取ったのか、突然男が取り乱した。意味もなく手足をばたつかせて必死にもがいている。正直なところ、見にくいという言葉以外にその動作を示すものがない。

「知っている。虚言を吐いたとは思っていない」

だったらっ！

それ以上の発言は、男には許されていなかった。というよりも、俺

がそうさせなかった。眼球があつたくぼみにナイフが突き刺さるように、腕を突き入れたからだ。

ぐちよぐちよと粘着質な物を混ぜている感覚の後、ナイフを引き抜いた。茶色のゲル状と言うべき物体が刃先に付属していた。

一瞬で横に振り払ってそれらの残骸を辺りに撒き散らした。一度消えかけた不快なニオイが、再び鼻を掠めた。

第五十三話？（後書き）

お疲れ様でした。

何かありましたら、作者まで。

第五十四話？（前書き）

いつもながらに注意マークがついていますが。今回は控えめ。

第五十四話？

そうしてもう一人の命を絶った時に、奥から気配が近づいてきた。前から気がついてはいたが全く来る気配がなかったので無視していたのだが、耐え切れずにとつとつこちらに赴いたらしい。わざわざご苦労なことである。

それはいい。近づいている相手は唯一生き残っている相手に差し向けられている。

どうするべきか。普通ならば生き残っている証人を失うのは損失だ。だが先ほどの奴の言葉ぶりから考えて大した情報を保持していない可能性が非常に高い。わざわざ発生するリスクを抱え込んでまですべきことかと言われれば、正直それほどの価値は見出だせない。それよりも相手の動向を伺うほうが有益だろうと考えを改めて防寒に徹することに決めた。

気配を絶っているという感じではない。寧ろ堂々と歩いて来ている。そんなことは無駄だと言わんばかりの態度だ。足音をうまく殺してくるのがなおさらそれを引き立てている。

暗視装置を始めとした暗器も含めた装備を持っている節はない。裸一貫といたいで立ち、おそらく、己の身体を武器としているのだろう。地形的に考えてそれは妥当に思えた。

元々地下を強引に開拓したという噂もあるように、天井はお世辞にも高いとは言えない。両手を伸ばしてつくことから、二メートルは切っているだろう。それに床には至る所クレーターが存在している足を取られやすく、無理矢理基盤を支えている乱立した柱のせいで十分な横のスペースも確保仕切れていない。銃器や刀剣類は非常に不利な地形というのが見たところの感想。正確に物をいえば探ったところの感想というのが正解か。何度も言うが、全く眼球は機能していない。無駄だと知っているので常に目は閉じている。

短いナイフや格闘型なら柱の影に身を潜め奇襲というのもしやすそ

うだ。おそらくこういうのを得意とする人間は多いのだろう。少し先にいる人間も含めて。

その人間はこちらに一切の見向きもせず、倒れていた男の頭を持ち上げた。何も言わず、ただ黙ってその顔を殴打した。

「何をする……っ！」

いや、殴打という表現では生ぬるい。重い一撃を、顔面にたたきこんだ。

まるで強いもので押しつぶされたように、一瞬が顔の形成が崩壊した。爆発するかのようにその中身をぶちまける。

遠くからでもその生々しい音が聞こえてくる。その行為を演出した人間に、何の感慨も浮いていなかった。

どうやら殺すことに楽しみを覚える人間ではないらしい。そしてその身体が有する力はかなりのものだ。普通の人間が早々容易く人間の頭を砕けるとは思えない。

その人間の足取りが、こちらに向いた。ゆらゆらとまるで幽霊のように存在感を漂わせ、足音なくやってくる。そうして俺の五メートル先で止まった。

「何をしに来た？ この空間がどんなものか、知っているのか？」

「魔層、と呼ばれているらしいな。真偽のほどが確かでないから、わざわざ現地まで来たのだが」

「……」

俺の口ぶりに違和感でも覚えたのか、何かを考えるように押し黙った。そうして唐突に、声を出した。

その声には、怒りのようなものが混じっているような感覚さえあった。

「……遊びに来たというのか、表の人間が。親に来てはならないといわれなかったのか？ それほどにお前の親は怠慢なのか？」

淡々と告げているようで、やはり感情がこもっている。それが人間らしさを浮き彫りにさせていた。

「……どうだろうな。あれを親と呼ぶならば、そうなのかもしれない。まあ、まったくもってそのようには感じないが。それに表の人間表の人間と、図文と口うるさい人間だな？」

「何も知らない人間だからそんなことを言えるんだ。世の中にはお前の予想もできない人間が多数いるのにな」

「表、裏。ふう、下らんな、ひっくり返せば同じコインだろう。いったい何が違うというんだ？」

俺の言葉を受けて再びしばらくの時間を使って考えをまとめ上げたその男は、わずかに膝を落とした。拳を一度鳴らしているのか警告なのだろうか？

「そうか。考えを改める気はないのだな？ 今なら引き返せるぞ？」

この男は多分、目が見えているのだろう。暗視装置がなくても、眼球は俺の一挙一動をとらえて離さない。視線で身体を舐められているのをしっかりと感じられる。

いったいどういう仕組みなのか、それは分からない。が、関係ない。どっちにしたところでもどれはしないのだ。人間の死体を二体生産したのは俺なのだ。

この身体での話限定だが。

「もう戻れんよ。その人間を始末したのは俺だからな。お前の言う表では人間を殺すことは罰せられる事項なんだぞ？」

そうなのか、とどこか納得していない口ぶりの男は口を閉ざした。目を細めた男は身体をもう一度眺め、気を引き締めた。今までのとは全く異なる殺気を空間に大量に放出した。

「それならば、お前には消えてもらわねばならない。生かしておく意味もない」

「意味不明だが、理解しやすくしていいだろう。さっさと済ませるとする」

第五十四話？（後書き）

お疲れ様でした。

何かありましたら、作者まで。

第五十五話（前書き）

注意　今回は非常に胸糞悪くなる可能性があります。特に特定の宗派を信仰している方は、くれぐれもご注意を。

……安西先生、文才がほしいです……。

第五十五話

警告すらなかった。懐を目指し飛び込んできた男はその勢いを利用して拳を打ち付けてきた。やや高め、おそらく頭部に狙いを定めたであろうその攻撃をギリギリになるまで待つてから、身を屈めた。頭上すれすれを通過して行ったその攻撃の余波で風が発生。数本離脱した髪の毛が宙を舞った。威力はなかなか。それでいて攻撃も洗練されている。あくまでそれなりレベルの話ではあるが。

「危なかったな、少しでも動作が遅れていたらお前は今そこに立っていないぞ？ まあ、次があるかどうかは知らんが。せいぜい神にでも祈っておけ」

俺の挙動をどのように読み取ったのか、そいつは嘲笑うようにして言った。そもそも神に祈るといふ行為の意味自体よくわかっていないのだが、それでもしりと強要するのだろうか？ 神様助けてくださいお願いします、とか？ 下らん。わざわざほかの人間の想像で作り出され命を与えられて消滅することを逃れている物体に一体どんな御利益があるというのだろうか？ そんな宛てにならないものに縋るよりも自分に信仰するほうが余程マシといえる。

「祈るのは俺なのか？」

「……ああ？」

俺の言葉にもまともな反応を見せなかった。よくいるそこら辺の自称不良と性質は同一なのだろう。語彙が貧相で思考が短絡的、おまけに事故分析すら出来ないで己の力量に過信し、あまつさえそれに慢心し油断する。愚か者以外に該当する言葉があるだろうか？ あ

あ、脳筋があつたな。

そんなどうでもいい思考に引きずられるような鍛え方は流石にしていない。

「フン、ハア、セイツ、ダアアアア！」

はつきり言おう。耳障りだ。いちいち攻撃を繰り返す度に気合を入れるな。鬱陶しくて仕方がない。本当に叩き潰したくなる。その言葉で脳みそが腐らせるような気さえする。

まあだが、決して弱いという訳ではない。力自体は千冬と同一といえるほど存在する。素手で戦闘していた時間が長いのか、脳みその容量にしては攻撃の仕方は悪くない。またその暗がりと障害物を利用しての地の利を生かす攻撃も織り交ぜている。いちいち騒ぎ立てさえしなければ相手として認めてもいいかもしれない。

「どうした、声も出なくなつたか？」

一方的に攻勢をかけていることをいいことに、声を弾ませながら俺に問い掛ける。そもそも限界だつたら声をだす暇などというものが存在する訳無いのだが、発言はしない。脳筋が理解するとも思えないから。

しかし、いい加減しゃがんだり飛んだりを繰り返すという単純作業も飽きてきた。準備運動には調度いいかもしれないが、済ませた後ではただの蛇足だ。意味がない。

そろそろパターンを変えて観客を楽しませるとしよう。

それとは別に俺のほうもわかりかねていたのだ。一体自分の身体はどれくらいの動きをすることが出来るのかを。

普段の鍛練は欠かすことなくしているが、やはり実践ではない。空気の違いかいろいろ条件が異なるために、それを目安とすることは出来ない。だから力をセーブしながらどれだけ出来るかを確かめ

ていたのだ。身体が変わってからというもの、不便なことばかりで困る。まあ、愚痴を言ったところでどうしようもないのが現実なのだが。

また拳が迫り来る。俺の身体を押し潰さんとばかりにうねりを上げながら。

それを俺はよけようとはしない。ただ真つすぐに睨み付けるだけだ。男は勝利を確信したのか、顔に笑みを貼付けながらも拳を振るうのをやめようとはしない。結果などやってみなければ分からないのにも関わらず勝利を確信するというその慢心は、付け込む好きとなる。勿論、一撃に俺の身体が耐えられればというのが前提条件で関わってくるのだが。

「……ハッ！」

一撃が見舞われる。身体の真ん中、鳩尾に放たれたそれは真つすぐと俺の身体に直撃し、内蔵にダメージを与えんと奮闘する。

だがそんな程度で屈してやる義理もなければ人情だつて存在しない。計測は終了。身体にダメージは残らなかった。それなりには鍛えられたらしい。

ダメージを受けなかった訳ではないので正直まだまだといえれば全然足りないのだが。

「……うまく入らなかったのか？」

俺に対したそぶりが無いのを訝しった男が、同じ場所にもう一度先ほどの行為を

続けた。もうパターンも知れているしダメージが残らないことも計測している、

ただ黙つてそれを受け入れ続けることにした。

何度も何度も繰り返し、一度後ろに飛びのいた。顎に手をあてて考

え出している。始めに考えるのが長いと思ったら脳筋なのだったことを思い出す。仕方ないといえばそれでかたがついた。

「まさか、弁慶のように立っただま死を受け入れているのか？」

自分に酔いしれたもののごくまでも愚かしい発言をする輩に、天罰を下すとしよう。

神などというものはいないのだということに分からせなければいけないらしいからな。

第五十五話（後書き）

お疲れ様でした。

何かありましたら、作者まで。

第五十六話？（前書き）

全然時間が取れていません。かけているのが奇跡な状態です^^；

……そして手直ししている時間も。あ、感想の返信が……。

そしてやっぱりついたマーク（笑）

第五十六話？

「現実逃避は一向に構わんが、一体何時まで続けるつもりだ？」

俺の挑発にしか取れない言葉に感情を乱したのか、何を言うでもなく無言で飛び掛かってきた。

「……………」

登場した時のように、何も言わない。本当に気配が揺らいでいることから考えて、心霊現象ととる人間もいるかもしれない。こちらとしてはパターンが読みやすく大変楽な作業であるが。

「とうとう物も言わなくなったか。部隊上の人間としては失格だぞ？ まあその議論よりも前に貴様が本当に人間なのかを疑うことが必要だろうが」

「……………貴様！」

挑発に簡単に乗ってくる。手玉に取るのが楽で楽で仕方がないな。此処まで考え無しの脳筋だと、手玉に取るのが当たり前だが。

怒りのせいで力が増強されているが、そんな物は関係ない。掌を使って弾き返し、体勢を崩させる。膝の関節を狙い撃ち。二三度蹴りをかます。

「はっ、きかねえよ。そんなもんじゃな。俺を倒したいならば、そこ百万倍は持ってこい！」

「……………数字が増えれば恰好がつくと考えているのだろうが、効果がないぞ？ 寧ろ考え無し、おつむが足りない子供アピールしているのかと疑ったぞ？ ……ああ、本気でしているならば止めはしない、

勝手にしてくれ。俺は全く以って無関係だ」

「お前は、どこまで人を馬鹿にすれば気が済むんだ！ 死ね！」

勝手に怒りの炎にまきを焼べて日を肥大化させている。このまま続けてもいいのだが、やはり退屈という事実が存在するだけだ。惰性で続けることはたいいてい意味のない事項だ。……相手の男の言葉の前後がおかしい？ 何度も言っているだろう。言語を作る才能に恵まれなかった、ただそれだけだ。残念ながら弱点であるはずの関節部を壊すには俺の力は足りない。ハンマー類といった道具を使えばまた別なのだが、やはりそれも考え物だ。わざわざ苦労して使う必要性を感じられない。結局のところ、中枢器官を壊せばいいわけであるしな。

目標部分を変更。相手の力、地形、気象条件、重力等の環境条項まで含めて相手の行動を予測。

膝を沈めての右ストレート。それを受け止めるための力を最低限を見極め、己のとるべき行動を決めて行く。

「……………らあ！」

始めは予想通り。右ストレートが打ち込まれた。通用しないということを理解していないのは、この際プラスに考えられる。

頭が致命的に足りないという特徴も考慮し、それを掌で包み込むようにして拳を包囲。

「……………ああ？」

あいつが呆けている致命的な時間も計算のうち。力が緩んでいるそれに一気に身体に溜め込んでいた力を発散させる。一点集中、足りない力をかき集めて膨大な物にし、相手の油断に付け込み最大の好機を演出する。一見とんでもないことに見えるが対したことはない。

そもそもこの身体でなければやる必要性がない作業である。たられなどはとありもしない反実過程という思考に捕われのは愚か者の証拠だ。やめるとしよう。

いくら足りない力でも、一点に集中するならば途方もないことになることがある。針はなにかを支えることは出来ないが、なにかを貫くことは出来る。ドリルに置き換えるとなおわかりやすいだろう。

「ぐわあああああああああ！」

そしてやはり予想通りに悲鳴を上げた男を視界の端に留めておきながら先ほど効果のなかった膝に、今度は爪先の蹴りを献上する。先を鉄板で補強を施してある故に、多少の威力の底上げに繋がるだろうと考えていたが、想像以上の効果を上げていた。相手が混乱状態で無防備なのが最大の要因か。

一度も倒れる様相を見せなかった巨体が、ここにきてとうとう傾いた。ぐらりと地面に着地。そこを中心にして小規模ではあるが揺れが発生した。地震というものを初めて体感した。特にこれといった感想はない。

これでようやく頭部を掴むことが出来る。此処まで来るのに異常なほど時間を要したのは間違いない。半分以上が俺の怠慢であるが。余裕をこいている暇があったという裏返しでもあるが、やはり望ましい傾向ではない。試験という段階を踏まなければならぬというのもあったな。

まあいい。此処まで来れば後は単純作業だ。眼球か耳殻覚を通して脳まで侵入するか、新たに呼吸穴を気道のどこかに開設するか、はたまた口元から大きな風穴をぶちあけるか。現実的には最初が簡単なのだがな。イマイチパフォーマンズ的な物に欠ける節があるのは否めない。

「…………ぐがあ」

「黙っている。貴様に発言権を与えは覚えはない」

いろいろ面倒だ。ぐちぐち悩むのはらしくない。とりあえずどんな方法だろうが始末すれば終わりなのだ。とりあえず警告の面も含めて、指を使い眼球をえぐり出す。

そんな平和な空間に、突如として侵入者が現れた。人間が作り上げた地を這う中で最速の乗り物に匹敵しそうな速度で、そいつはやってきた。

障害物として、手に持っていたものをかざした。

何かが、破裂する音がした。

第五十六話？（後書き）

お疲れ様でした。

何かありましたら、作者まで。

第五十七話？（前書き）

ぎりぎり間に合いました、か？

…… 本当に最近いろいろやばいです

時間ねー！

第五十七話？

手に持っていた物が爆散した。中身をそこらじゅう一帯にまんべんなく撒き散らし、汚して行く。勿論俺も例外ではない。手に持っていた訳だから、当然とんでもなく被害を被っている。

まるで汚れたシャワーを浴びた後のようにそこらじゅうに物体をくつつけた俺に、再び物体が迫る。余程俺を殺したいらしい。勿論只で従ってやる義理など当然なく、避ける。頭皮から脱却を果たした髪の毛が数本、その身を焼かれた。

物騒になった物だ。

「観客は端からしか物語を見ることが出来ない、いわば枠外の間人だ。そんな奴が今になって何故部隊に上がってくる？ もうフィナーレだということを知らない訳ではあるまいて」

「……そうね。とつても面白いものを見せてもらったわ。子供に卸される自称プロ。八百長試合を見ている気分だったわ。いったいいくら積んだの？」

「……別に金でなくとも釣るものはいくつもあるだろう、頭が固いな」

「……これは失礼したわ。ふふっ、面白い人ね、あなた。まあいいわ。結局のところ八百長舞台を否定しないのね」

「観客が一带どのように思おうが、役者は指定された役を淡々と熟すだけだ。観客一個人の感情など全く以って関係がない事項だな」

「……回りくどい喋り方ね。でも確かに、いいたいことは理解できるわ」

それはどうも、と返して挨拶を済ませる。どうやら観客は観客でいる気は始めからなかったらしい。紛れ込んでくるふざけた人間か、それとも元々サプライズ出演として枠が確保されており、驚かせる

ために一切の通知がなかったか。どちらにしても、ろくでもないことには代わりがない。

「あなた、目が見えていないんでしょう？ それなのにそこまで完璧に動けるなんて、感心するわ。本当にあの馬鹿どもに見習ってほしいわ」

そういつて見つめる先に先ほどの肉片がある訳だから、この女は多分関係者側の人間なのだろう。これといって顔を歪ませて渋々指差すその姿は、どう読み取っても仲間同士であるという等号を打つことが出来なかった。

それにしても油断ならない女だ。こちらの視界が効いていないことに気がついてしている。それに完璧な軌道とは一帯どのような皮肉であろうか。

ただ立っているだけでもわかる。この女はどこがおかしいと。いや、どこかではない。身体のスペックが明らかに見た目のそれに対して逸脱している。外見上は全く普通の女であるはずなのに。気配は立つでもなく紛れ込ませるでもなく、ただ外させている。おそらく俺でなかったら気がつくのが遅れていただろう。そして意識を常に一部に於いていたからこそ反応出来たのだ。そもそもかなりの意識を置いていなかったら狙撃銃で狙われた時点で命など簡単に吹き飛んでいただろう。

常に冷静でなければならぬ。怒り、混乱等で意識を乱せば確実に死という現実が突き付けられるのを俺は知っている。油断などという言葉は本来はあってはならないのだ。今回に限っては完全に俺の失態だ。致しかに意識を外すことはなかったが、まさか突然舞台上に乱入して来るという考慮をしていなかったのだ、これは油断といわず何と言おう。

まあいい。非常によくはないが、今はそんなことに思考を割いている暇などどこにもありはしないのだ。

どのように行動するべきなのか。否、どのように行動すればこの化け物から逃げ切ることが出来るかを必死にシュミレートしていく。生き残らなければならないのだ。というかこんなところで死んではやれない。死ぬなどということがありえてはいけないのだ、俺は。

「……にしても、げせんな」

「何が、と聞いてもいいかしら？」

「そもそもしてお前がいるならば、俺の始末などたやすいだろう。貴様を待機させてまでこいつらが任務を果たす可能性が高かった、というならば全く以って不思議ではないのだが、そうではないのだらう？」

「……本当によく見ているわね。いったい私が何時からつけていたのに気がついていたの？」

「ずっといたのは知っている。雑魚に紛れてとんでもない奴が紛れていたことは。ただ一切何をする訳でもないため、監視というふうに受け取ったのだが」

「……監視ね、本当にそれだけだったら、今ここに立っているとと思う？」

「……全く以って思わないな。だから言っただらう、そういうふう
に受け取っていたと」

「そうね。」

組織にもいろいろと面倒な事情があるの、ね、坊ちゃん？」

「面倒な物だな、人が集まるといふことはやはり。人間固体固体でばらばら、好き勝手に生きているから苦労するのはある意味でいえば当たり前だといふことか」

「そうよ。いやに物分かりがいいのね。いいわ、そういうものごとのすつきり考えられる人に会えたのはうれしいわ。最近愚か者ばかりだから、ホントに嫌になるわ」

そんなことを言っているが、どうやら女は手を緩める様子はなさ

そっだ。

絶体絶命、この状況を示すにはこれ以上ないほどの確かな言葉だろう。そういう状況を乗り越えることで生存という証拠が記録される。その積み重ねで俺という存在は組み立てられたのだ。

「……残念よ、見所があつたがだけにね。成長すれば先ず間違いなく私なんかでは敵わないでしょうね」

残念だと口でいいつつも、その顔はやはり歪んでいる。気が違えた、狂人の顔付きそのものだ。先ほどと違うのはその狂っている度合いだろうか。先ほどが蟻ならばこちらは象だろう。実力差は桁違い。それでもみすみす死んではやれない。生きる理由がなくとも、それが死ぬ理由とはなりえない。

思考を排除。その瞬間、目の前に突然光が焚かれた。

第五十七話？（後書き）

お疲れ、様……でした。

何か、ありましたら……、作者まで。

第五十八話（前書き）

……忙しすぎて泣きそうです。

……人間には、限界があるのです……

第五十八話

閃光玉と誤認しかけたが、明らかな悪意を含有した金属片が迫ってきた瞬間にその考えを破棄した。

そんなものが飛んでくるわけがない。せいぜい発生した地点で爆散して終わりだ。追尾性能などあるはずがない。単に俺の常識が追いついていない可能性もあるが、束の研究所で確認することのできなかった物体である。度外視で問題ない。

携帯性から考えてあまり大型のものという考えはない。せいぜいが携帯できるサイズのものと、此処までくれば拳銃という答えが見えてきた。

光景によって速度がばらばらだが、銃口初速計算で大体秒速三百から三百六十くらいだろう。空気抵抗等の条件下におけば、実際はその数値よりも遅くなる。

後の条件は重工とその重心の向いている角度。以上の条件から考えて、適切な弾丸の通過ルートを描き出す。

其れさえわかっていたら、ある種あとは自分がその経路を避けて動くだけだ。その弾丸よりも早く身体をそらさねばならないのだから、わり面倒な作業といえる。実際問題としてそこに反動の観念が加わるのだが、目の前にいる女に関してはそれが通用するとは思えない。常識外の生き物を無理やり常識に当てはめようとしてもうまくいかないのだ。それを世間一般にいる人間は理解すべきである。……話がそれたか。

軽々しくよけられるように準備をして、回避体勢に入る。初見で相手の方から何が出てくるか分らない状態でのぎりぎりの勝負という価格地理的に見ても危険すぎる。そのような配慮をしなかったせいで命を落としたなんて話は腐るほど聞いてきたのだ。

そしてその判断は、間違いではなかった。

俺の予想していた時間よりも早い時間で射出された弾丸が迫ってきた。

た。予測通りとはいかず、幾分早いタイミングで体からそれていった。もしぎりぎり避けようなどと考えていたのなら、こんな思考をすることはできなかつただろう。

「あら、避けたの？ てつきりあなたみたいなタイプは慢心して銃を侮蔑しているのかと思っていたのだけれど。避けるのって別に難しいことじゃないじゃない？」

「その通りだ。だが、慢心などすればいつだって命が刈り取られてもおかしくない。生き残るのは強いやつじゃない。必要以上に臆病な人間だ。だからこそ自分の限界を理解し、対策を立てたうえで慢心なく物事にあたる。一件とても面倒だが、結局は自分のその行いこそが自分を生かす道具となる」

「才能に頼るだけじゃなくてそれをさらに磨き上げる人間。いいわ、とつても面白い。殺し甲斐があるわ」

等々本音を漏らした女は舌なめずりを開始。手に持っていた拳銃を捨てて、吐息を吐き出した。

どうやら格闘戦をするようだ。何も手に持っていない。仕込みぶきも確認できないことから考えて妥当だろう。

「すごい思考能力の高さなのかしら？ それとも本能で生きる獣かしら？ 私を止めること、できる？」

「舞踊のお誘いは遠慮したいところなのだが。かみ殺されるのが落ちと知っては、誰もお前の誘いにはのってこないだろう」

「そうね、あなたの言うとおり」

くすくすと笑いを漏らしながらこちらの様子を探っている。尋常になく、くるっっている。その性質も、身体能力も。

久々の化け物の登場に、額から汗が落下した。

「楽しませてもらうわ。あなたとなら、どこまでも踊れそうだから溜まっていたのよ、最近。しましよう？」

捉え方によってはとんでもないもののように聞こえる。というよりはどちらの意味でもとらえてもろくでもないことか。

ゆらゆらと不安定な形で忍び寄ってきた。速度を感じさせない独特な足運びは、まるで人間の断りが通用されない死神を連想させる。あつという間に射程圏に到達した。そこから手を伸ばす。その手を方向を変えるために、手のひらを使い叩き、ベクトルを変えさせる。言葉にするとなんでもないこの一連の動きだが、実際に体験してみるとその尋常のなさがよくわかる。明らかに先ほどのお琴よりも鍛えられていないが、その込められた一撃はそんなに生易しいものではない。一トンを軽く上回るその一撃に、払うだけで精いっぱいだ。まるで反撃を返す余裕がない。おまけに、その一部の損害を受けただけであるはずの左の掌が痺れた。時間にしてはたった数秒のことでもわかったこと。それはどんなに状況が好転しようが、今日の前にいる化け物にはどうやっても勝つことができないということだ。実力差だけではない。体力の差もここにきて大いにそれを高める要因になっている。

「……………はあ、はあ……………」

鍛えたららない身体の体力はもともとそこまで多くはない。いいところ持久走四十キロ程度が限界だ。先ほどの男たちとの戦闘もあつてか、疲労がたまっているという事実はある。それを抜きにしても、この女の力のせいで体力を奪われるのだ。対応策を考えるのにも体力を使用する。おまけに常にある程度集中した状態で臨まなければならぬはずなのに、この身体ゆえ、集中力も持続しない。年貢の納め時、という言葉がかすめた。

悪運だろうがなんだろうが、ここを乗り切る。自分の持てるすべてを以ってして。
起死回生となるチャンスを含有了たものを、ポケットに突っ込んだ手で確かめた。

第五十八話（後書き）

お疲れ様でした。

何かありましたら、作者まで。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9432t/>

姓は篠ノ之 名は.....

2011年8月29日22時09分発行